
微生物を愛でたいのだよ！

まいまい？

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

微生物を愛でたいのだよ！

【Nコード】

N7609P

【作者名】

まいまい？

【あらすじ】

三度の飯よりも観察好きな院生は、電子顕微鏡を覗き込んだ。ふと気がついた時、見知らぬ空間にいた。

魔法や魔物や獣人やらが存在する異世界にやってきたが、今はそんな事象は全く興味ない。そんなことよりも、この美しいフォルムの微生物をみてごらんよ。異世界の微生物たちも、地球となら変わりなく神秘的な造形をしている。なんと美しい繊毛なのだろう。これはまるで、ゾウr……

「……ああ、もう。観察の邪魔するな!!」

微生物好きは、異世界でも微生物を愛でたいと思う。

1・電子顕微鏡の白黒世界

宵闇の研究室から白緑色の光が漏れている。

小さな画面には点のような文字がつづられ、洪水のように流れている。待つこと数十秒。画面の中央に立体映像が現れた。美しい楕円の球体がいくつも鎖のように連なっていた。

この映像を見た白衣姿の者は、思わず笑みを浮かべた。数時間ぶりに見るその生物の姿に惚れ惚れとしていたのだ。

電子顕微鏡、その巨大な機械はその精密さゆえにメンテナンスが欠かせない。今回のメンテナンスでは、古くなった電子銃を交換したのである。電子顕微鏡は小学校にあるような光学顕微鏡とは異なり、可視光線ではなくさらに短い波長を持つ電子線を使用する。対象物をより美しく見るために必要なその電子線を発生させる電子銃と言う装置を今回交換したのだ。

数時間かけて行われた電子顕微鏡の点検後、動作確認のために机の上にあつた適当な物を台に載せ覗き込んだのだ。

電子顕微鏡の色の無い白黒の世界は、時間が止まったようにその対象のすべてを映し出す。

その生物が持つ美しい生命の形は、神が作り上げた芸術品であるう。

ふと何か変なものが写りこんだ。

それはナノの世界には不釣り合いな形をしていた。顕微鏡を覗き込む黒い瞳には、もはやその不思議な形をした物質しか移っていないかった。

「……人型……？」

そして、そうつぶやいた次の瞬間、その部屋から……いやその宇

宙の世界から一人の院生が消えた。

2・神は微生物だった。

己の体が浮かぶこの場所は見知らぬ場所。その眼に映る景色は無彩色で何も無い虚であった。

あたりはゆらゆらと揺らめく霧に包まれた白亜のような無機質の暗闇。いくつもの光の粒子がその空間に落ちていく。

あまりに何も存在しないので、自分の目がおかしくなってしまったのかもしれないと、手のひらを裏に表にひらひらさせて確認してみるが、いつもと変わらぬ5本の指が見えた。目が見えなくなったわけではないようだ。

変わってしまったのは風景の方である。

「もしかすると、ここは顕微鏡の世界なのか？」

そのまま無意識に左の人差し指は、眼鏡をくつとあげた。

この何もない空間は、まるで顕微鏡を覗きこんだ時の世界に似ているのだ。

「仮にここが顕微鏡の中だとして、なぜ自分はこの中で生きてられる？　そもそも、なんでここにいるんだ？」

電子顕微鏡の中と言うのは、真空であり生身の人間が生きていられるような所ではないのだ。

疑問は次から次にわいてくるが、顕微鏡の中らしき場所にいるのだ。院生とはいえ研究者の端くれ、することはひとつである。

それはこのナノの世界を見て回ることに。

そうと決まれば行動しなくては。この空間で何かを見ることができるのならば、それだけで喜びとなるのだ。それ以外の事象は些細なことに過ぎない。

無重力空間に浮かんでいるように、上下方向の感覚がまったくわからない。浮かんでいるのか、沈んでいるのか、そこに留まっているのかさえわからない。手足を動かしても触れるものは何も無かった。

白衣をまとっているの、体の大部分がこの白い世界によくなじんでいる。

早く何か見つけなければ、自分自身も意識も全てこの世界に融けてしまいそうだった。とにかく何かあるところまで移動したい。不安が押し寄せる。ここには何も無い。無彩色の虚無だけなのだ。

「そういえば……ここにくる前に何か人型のようなものを見たような気がしたけれども、あれはいつたい何だったのだろう。もしかして、何らかの理由で自分の一部が分裂し、そしてこの顕微鏡の世界に入り込み顕現した。僕があの人型を見つけた段階では顕微鏡の外と意識は繋がっていた、だけれども分裂が終わったので今まで繋がっていた記憶・意識が独立し新たな自己としてここに確立したのか？　ならばこの世界の外に己の本体がいて分裂後の自分を今も観察し続けているのか？　手を振れば外にいる自分はここに居るのは僕だと分かるだろうか」

息継ぎもせず一気に考えを述べる。誰に聞かせるものでも無い独り言なので、大半は言葉としての音は成しておらず「しゅりしゅりと口から漏れ出すだけの侏離しゆりの声になっていた。

「面白い考えじゃが、それははずれじゃ。人の精神や魂はそう簡単に分裂したり複製されたりはせぬよ」

頭の中に直接語りかけるような声が突然響いたので、驚いて思わず視線を巡らした。世界は変わらず白いままであるが、先ほどとは異なり、そこには白くゆったりとした服を身につけた老人がいた。

その老人は髭も頭髮も着ている服さえも白いので、肌に見える手

の部分や顔の辺りにしか色のあるところはなかった。

ついさっき辺りを見回しても確かにそこには何もなかったはずである。いつの間に、こんなに近くまでやってきたのだろ。まるでこの白の空間から染みだしてきたかのようだ。

「驚いておるな。おぬしが見た人型はわしじゃよ」

急にわいて現れたような老人に警戒を抱きながらも、ここには彼しかないなので、疑問は尋ねるしかない。

「お爺さん、ここはどこですか？」

「おや、案外落ち着いておるな。ここはわしの家じゃ。ちなみにわしの家は、消滅^無と生成^有がゆく場所、つまり神の世界にあるのじゃよ」

神の世界。にわかに信じられない単語が出てきたが、仮にこの世界が本当に神の世界というのならば、その世界にいる住人というのは、まさか。

「……と言うことは、お爺さんは神なのですね？」

窺うように、その言葉を発した。神の存在など信じたことも深く考えたこともなかったのだが、不思議なことにそれが真実であると言う確信があった。

「そうじゃ。わしは神じゃ。しかし、おぬしたちの住んでいる宇宙とは別の次元にある宇宙の世界じゃがな」

あごから生えた長い白いひげを、なでながら神は大切な事実を伝えた。

「神……」

小さくそつつぶやき、額にかかる前髪をそつと横にかきあげると、少し首を傾けた。電子顕微鏡に写りこんだ人型は神だった。これから導き出せる仮説とは？

「……そうか神は微生物^{マイクロブ}だったのか！ 道理で人類が気がつかないわけだ、こんなにも小さいのだからな。ああ、そういえば米粒には7人の神様が宿っていると聞いたことがあるが、あれはあながち間

違っていないと言うことなのか、そういうことだったのか」

神をそっちのけで思考に入る。気がつけば、急に早口になり仮説を論じていた。こうなったらなかなか自制が聞かなくなる。相手が呆然としてもお構いなし、話は勝手に暴走していくのだ。

「何か会話がかみ合っていない上に、壮大な勘違いをしているようじゃが……落ち着いているように見えたのだが、案外混乱しておったのかのう？」

神と名乗った老人は話が一段樂するまで待っていた。話す内容自体は興味深くなかなか面白い考察なのだが、いかんせん、そもそもの前提が間違っている。しかし、己の力で間違いに気がつくことができることも神にはわかっていた。それは、もうまもなくであろう。

「……あれ、それはちがうのか？」

ここは神の世界で神の家で顕微鏡の中、いや違う。顕微鏡の中だと思い込んでいるのは自分の仮説の中だけだ。そうだ、ここは、顕微鏡の中ではなく、神の世界。

(……落ち着こう、落ち着こう)

息を深くはき、深くすう。それを数回繰り返し、照れを隠すように眼鏡の位置を直して神を見た。

「落ち着いたかの？」

「はい、すいません。初対面の……しかも神様に対して暴走列車並みの」

自覚はあるのだが、一度軌道に乗ってしまうと、なかなか自制がきかなくなってしまうのだ。

「気にしておらぬよ。落ち着いたところで……聞きたいことがあったら答えよう」

この地に誰かが訪れるのは、本当に久しぶりのことである。神は

迷いこんだ者に、救いの手をさしのべる。

「ええと、では……どうして僕はここにいるのでしょうか？」

まず一番に聞きたい最大の疑問はこれである。

「おぬしの記憶から読み解くと、おそらくあの電子顕微鏡と呼ばれるもののせいじゃな。あれの電子銃から発せられるのは電子線だけではなく、人には観測できぬかも知れぬが、ほんの少しの、いわゆる『無のゆらぎ』を生じさせることが稀にある」

「『無のゆらぎ』……あの宇宙の始まりのときに、無から有を作り上げたと言つ現象の？」

物理や宇宙の成り立ちについてはあまり詳しくないが、その現象の名前はきいたことがあった。電子顕微鏡の真空間内で何かが起き、まるで宇宙誕生のときのような働いてしまったのだろうか？

「不確定性原理（たけいしち）は、どこにでも在り、いつでも有りつづける神の創造の力。大抵は在った瞬間、世界に消滅してしまい影響は無いが、先ほど偶然に生まれたその『無のゆらぎ』は、ほんの少し世界に留まり有りつづけたようじゃな。そして、近くにいたおぬしに対して微少に作用したようじゃ」

「……というത്？」

「神の力に触れたことになる。天文学的な低確率ではあるが、自然界で普通に暮らしていたとしても、全く起こりえぬことではないのじゃ。この宇宙に物質が生まれてから今まで、たくさんのモノが『無のゆらぎ』のいたづらで、人生が変わってしまった」

「人生が、変わる？」

「人に作用すれば、ある者は力に目覚め、ある者は変異する。場所に作用すれば、ある所は奇跡を起こす場になり、ある所では次元や時間を超える扉が開き、異なる場所、異なる時間を垣間見ることができる」

「次元の扉が開く？ では、さっき顕微鏡越しに見たあなたの姿は」

「顕微鏡内に偶然開いた次元の扉の向こうを見たのじゃな。それを観測したのと同時に、『無のゆらぎ』もおぬしを認識し、その結果おぬしの存在がまるごとこの次元に迷いこみ……つまり神隠しと言うやつに遭ったのじゃ」

科学によってまだ説明されていない力が現れ、それが原因で引き起こされた現象に巻き込まれ、ここに迷い込んだ。そう頭の中で簡単に整理する。現実離れた事象に、戸惑いを感じながらも、神の話聞き続ける。

「そして微弱じゃが神力も得たようじゃな……しかし奇跡を起こすにはちと弱いかの。せいぜい神や精霊を認知し、会話くらいしかできぬじゃろっ」

「まあ、別に好んで他の神様に会いたいとは思わないし……それに会話とか得意じゃないから、持ち腐れだなあ」

特に何かに熱中している時は、会話するという行動の優先順位は低く、その会話に対しての答えを導き出すのに時間がかかってしまう。時間は有限で世界はせわしく進んでいるので、わざわざ反応が返ってくるまで待つと言う人は稀なのである。

「わしは一応神じゃからな。おぬしが向こうの世界でどういう風に生きてきたかは分かっておるよ。神は話を聞くぞ、それこそ時間の概念をすっ飛ばした会話だとしても。言葉になっていないくとも」

その神の言葉は純粹に嬉しかった。常に疑問が浮かぶのは、その話題が終わった後なのだ。今更その話題をぶり返すわけにもいかず、諦めることが多かったのだ。

「お言葉に甘えて。その、本当に今さら聞くのもアレだけでも、僕は元の世界、地球に戻るのでしょうか？」

ここは自分の住んでいる宇宙とは別の宇宙の世界と言っていたような記憶がかすかに残っていた。自力でもとの場所へ戻るのは、ま

ず無理だろう。

「残念ながら、わしは他次元を知ることとはできても渡るようなことはできぬ。他のモノと共に次元を渡れるような神は数えられるほどしかおらぬし、今この次元にいるとも限らない。出会えるとも限らない。人の生は短い。あきらめたほうが良いじやろう」

最悪の事態は考えて心構えはしていたものの、実際に現実を突きつけられると動揺は隠せなかった。言葉が継げず黙り込んでしまった。

「わしの作った世界^{にわ}でよければ招待するが？ 次元は超えられぬが、わしの作った世界ならばある程度は融通がきくのじゃ」

地球とまったく同じというわけにはいかないが、それに近い生物圏^{んきよう}、類似した文明・文化^{しやかい}、ほぼ同様の価値観のある星が存在すると神は言った。

「本当ですか？ これから、この何もない空間でどうやって暮らそうか、悩んでいました」

いくら静かでも、これも微生物も存在しなさそうな何もない所で生きていけるものと心配していたので、ひとまず安堵した。

「おぬしは神力が弱いからの。ここは何もない空間に感じるかも知れぬな」

「……？」

神の言っている意味がわからず、首を傾げてしまう。

「ここには、すべて有り、まったく無い。どこにでも在るし、どこにも無い。在って在り存在しない、そういう場所なのじゃ」

「有と無のゆらいでいる……そういうことですか。でも僕には使いこなせそうにないですね、その概念。全くもって理解できません」
「概念と言いつけるか……まあ、それもひとつの捕らえ方じゃな」

それから二人は同時にくすくすと笑い出した。

「さて、いきなり知らぬ世界に放り出されてはいろいろ不便で困るじゃろ。そうじゃな、わしのできる範囲でじゃが願いを3つ叶えよう……たとえば、欲しい能力や欲しい物があれば、言ってごらんさい」

神の提案に考える体制に入る。

真っ先に思い浮かんだのは、もしも適うのならば、自分にとっては夢のような能力でこれ以外にはないだろう。

「一つ目は、顕微鏡みたいな眼がほしい。しかも光学顕微鏡のような色鮮やかな自然のままの姿で、電子顕微鏡のように細かいところまで見ることができる能力」

これさえあれば、面倒な試料のコートや、輝度やコントラストの調整とかしなくても良い。そしてあのやたら大きい機材など無くとも、生物をありのままの姿で、いつでもどこでも観察ができるのだ！
「顕微鏡の目じゃな。らしいといえば、らしい能力じゃな」

「あと2つか」

ひとつ目はすぐに頭に思い浮び勢いで言ってしまったが、いざ何がほしいかと問われると分からなくなってしまう。欲が無いと言うわけではないが、いざ欲問われると、欲しいと思うものが思い浮かばないのも事実なのだ。

「ゆっくり悩むといい、時間はたっぷりあるからの」

「ありがとうございます」

「ちなみに向こうは魔法が存在しておるし魔物もいる。それから獣人も……って、聞いておるか？」

「はい、聞いていますよ。魔法と魔物と獣人がいるんですよ……今から行こうとしている世界には、もちろん微生物いますよね？動き回る原生生物と言う感じの生物が」

「安心せい、ちゃんとおるぞ。……思いのほか、魔法とか魔物には、あまり反応がなかったな」

神は願いが決まるまで待つことにした。

「うん、決まった!」

「言うてみなさい」

「人間にとって苛酷な環境でも耐えられる体がほしい。極限環境に生きる古細菌アーキアのように! 顕微鏡並みの眼を持っていて、どこにでも行ける体だったら、すばらしい。海底火山にも生身でいける!」

それに今から行く世界がいくら地球と似ていると言っても、まったく同じではないだろう。地球人で進化した人間に耐えうる環境とも限らない。ささいな環境の違いで体調を崩してしまうかもしれない。いいし、得体の知れない病原菌にやられてしまうかもしれない。そう考えたときに、どうせならばどんな環境でも耐えられるような体になっってしまうえば、何も面倒なことはないと思っただのだ。

「ふむふむ……して、最後は?」

「飲み食い不要というのか、光合成とか化学合成とか、独立栄養生物的な能力がほしい。そして仮に食べても、どんなものでも全部エネルギーになって消費される体がほしい。何も食べなくてもいいし、何食べてもいいと言う感じ。それこそ分解者である真正細菌バクテリアのように、分解しつくす。余分なのは熱エネルギーで排出と言うような、取り込みも排出も体内で循環する代謝機能……なんと言うのか、つまり食欲と排泄欲の排除だ!」

環境もそうだが、食べ物を構成する物質が消化吸収できる保障も無いのだ。何でも食べることができれば、興味本位興味本位で毒々しい色をしたキノコを食べてしまうことだってできる。

それに何よりも食事や排泄に費やす時間がもつたいない。それらによって作業を中断しなくてはいけないのは、ほんの少しの時間なのになぜかとても煩わしいのだ。

特に食事なんて、気が向いた時に、気が向いたものだけ摂れば十分。日常的・定期的に摂らねばならないのは、面倒くさいのである。耐えられるのであれば、それはどんなにすばらしいことか。

「睡眠も不要にもできるが？」

「睡眠も邪魔だけれど……代謝系とは違って、熱中していれば放っておけるし、夢は時々考えをまとめてくれる。不要と言うよりも、眠気に耐えられればいいよ。それにほら、神だって6日間働いても7日目には休んだらう？」

それに休息のひと時に微生物の夢を見るのは好きなのだ。

「その神はおぬしの世界の神だな。希望通り睡眠が不必要な体にはしないが、一応何日も眠らなくても体調壊さないようにはしておくぞ。睡眠不足は苛酷な環境のひとつということだ」

「分かった、ありがとう」

「それにしても、本当にそれでいいのかい？」

願いを全て聞いて神は苦笑いをしていた。「魔法の属性全部ほし」とか、「最強の剣と最強の盾がほしい」とか、強力な力や知識を欲しても与えるつもりでいたのだが。地球人にとってファンタジーでロマンであると思われる部分についてはどうやら興味が薄いようだ。

「たとえば動物……いや、微生物たちの声が聞けるようにならなくともいいのか？」

生物を研究するものにとってその対象と会話ができると言うことは、彼らを知る大きな手助けになると考えたのだ。

「彼らはしゃべらないからいいんだ。それに、しゃべったら観察するのにいちいちうるさくて邪魔ではないだろうか？」

時に過酷な環境での実験も行うのだ。その苦しみや嘆きの声を聞いて、落ち着いて観察できるとは思えなかった。そう、あくまでただただ一方的な観察が好きなのである。

「そういうもののなのかう」

「ああいうのがしゃべるのは、漫画だけでいい。それにうるさいのはあんまり得意ではないんだ」

多少の音ならば無視できるが、あんまりしつこく騒がしいといらいらしてくるのだ。

「じゃが、向こうのいわゆる人間と意思疎通ができるようにしておくからな？ いや、いくらおぬしが人と関わるのが好きではないと言っても、これくらいはサービスさせてくれ」

いくら近い文化を持っているようにも、たった一つの川を挟むだけで言葉が多少異なっていることがある。ましてや、住む次元が異なるのだ。到底通じるとは思えない。

「おお！ そのことは全く思い浮かばなかった！ 神様ありがとう！」

「どちらにしろ、この言語翻訳の能力は与える予定じゃったし」

望めば動物や草木、微生物の声も分かるようにしたのだが、あまりそれは望んでいないようなので、付加はしないことにした。

「それでは、それらの能力をおぬしに与えるぞ」

神の指先が光り、その閃光が体を貫く。

一瞬何が起ったか分からず、光の貫通していったあたりを見つめる。特に何も変わったことは起こらないと思っていると、光が体を侵食し始めた。そして体全てが包まれ、温かな光の粒子は白の世

界に散っていった。

「ん〜。ちよつとくらくらする……かな」

光が四散した後、すぐに体に変化が現れた。激しい雨の流れ落ちる窓硝子のように世界が、ぼんやりと白くゆがんで焦点が合わないのだ。

「眼をいじったからな、ついでに眼鏡がなくなるとも生活できるような視力にしておいた」

「なんと！ だから、なんとなく眼鏡が合っていない感じの気持ち悪さが……」

そう言って眼鏡をはずし白衣のポケットにしまった。

「本当だ、自分の手もばやけないで見える」

目の前に差し出した手の爪まではつきりと確認できた。いつもは眼鏡の外にあり、ぼやけている視界の端もはつきりと見える。なんだか少しだけ違和感を感じるが、そのうち慣れるだろう。

「今から意識して『見た』ものは顕微鏡で覗いた時のように見ることができぞ」

神は与えた能力について説明をしはじめた。

「海底火山、毒ガス地帯、高圧・低圧下は、もちろん空気がないような過酷な所でも生きていけるようになったぞ。ただ耐えられるが、その現象は感じる。熱いものは熱く感じるし、眠い時はやっぱり眠い。痛みと言った感覚も感じられる。最初は奇妙な感覚に戸惑うかも知れぬが、慣れればさほど気にする程度ではなくなっていくだろう」

「なんだか、ちよつと想像もつかない感覚だ」

「次に代謝系じゃな。簡単に言つと毒であろうと菌であろうと有機物だろうと無機物だろうと異物は喰らい尽くして全てエネルギーに

変換するのじゃ。何も食べていなくても、エネルギーが必要な時は大気中の物質を使って勝手に合成するぞ」

「おお、なんだか光合成や窒素固定でもしていそうな感じだなあ」

「問題があるとすれば、即効性の毒などは分解が間に合わず多少効いてしまうこともあるかもしれないことじゃ。その毒が致死量だったとしても分解されればすぐに平時に戻るが、毒には耐えられるだけで毒の効果は感じてしまうのじゃ。意識して耐えればなんてことはないが、慣れるまでは体が今までの常識に照らし合わせて無意識で反応してしまうことがあるかもしれないな」

「病は気から、のようなものかあ」

「そうじゃな。それから饑別じゃ」

そこには本のようなものが1冊浮かんでいた。本は開くと肩幅と同じくらいの大きさで、辞書のように厚くで重そうに見える。

「本？」

「おぬしには記録するものが必要じゃろ？　ちなみにこれは、おぬしにしか扱えぬし、どこかに置き忘れても呼べば目の前に現れる。

魔法の道具なので電気も必要ない、容量も気にしなくてもいい。乱暴に扱っても故障の心配もない永久的に使える代物じゃ」

神は機能について説明を始めた。簡単に言うとディスプレイにそのまま書き込めるペンタブレット型PCのような印象を受けた。記録する以外にも、色々と機能がついた多機能な本のようなのだ。

「おお！　これすごい、そして軽い！　しかも手を離しても浮かんだままだ！」

本を受け取り、それを掲げながら跳ね回る。

「必要であろう道具を創造したのだが、ずいぶんと喜んでいるのう。もし何か困ったことがあって、わしに用がある時は念じればわしに届く。わしはいつでも見守っておるからな」

「ありがとうございます。でも苦しいときの神頼みになってしまいますね」

今まで神を信仰などしていなかった。そして神の存在を知ったからといって、信仰心が芽生えるわけでもないのだ。

「それでも、一向にかまわぬよ。わしはそういう信仰によってどうこうなる存在ではないし、ここを訪れる者のは珍しいからの。お主に色々するのも、訪れた旅人に食事をふるまうようなものじゃ」

食事にしては豪華すぎるような気もしたが、実家が田舎であるので、日常的にそのような行為が行われているのを見てきたこともあり、そういう好意は嫌いではなかった。

「それじゃあ、おぬしが好みそうな地方に送り出すぞ？」

「分かりました」

「そう簡単には死なない体になったとは言え、無理は禁物じゃぞ？」

「はい、本当に何から何までありがとうございます」

本を大事に抱えながらそう言った。

こうして地球から、異なる世界に迷い込んだ一人の院生は新たな場所へと旅立った。

3・顕微鏡の眼で見てみよう。

豊かな草の湿ったような、開かれた大地の香りがする。

気がついて最初に目に入った景色は、青い空、黄色に輝く太陽、そして深い色をした緑の草原と地平線であった。

最近まで雨が降っていたのだろうか、土の地面はだいぶ乾いていたが、ところどころに大きな水たまりが残っており、雲の流る空を映していた。

「おお！ 雰囲気は地球の草原と似ているけれど、日本では見たこともない世界が広がっている。どこまでも草原だ！ 地平線だ、地平線があるぞ、初めての地平線だ！ おおっと、地平線に感動している場合じゃない、とにかく早速調査開始だ！」

そう空に向かって叫び、左手の人差し指で鼻の辺りに触れた。それは長年眼鏡をかけていたものの宿命。眼鏡をかけていた者がそれを外した時、もれなく訪れると言うその動作をしてしまったのだ。

「って、眼鏡の幻影をあげてしまったああああ！」

テンションがおかしいが仕方のないことだろう、欲しかった能力を手に入れ異なる世界へきたのだ、そこで出会えうだろう生物―（主に微生物）たちに心が踊らないはずはないのだ！

「……ひとまず落ち着こうか、自分。ああ、周りに人がいなくて良かった」

あたりを見回して人影がないことを確認する。もし誰かいたら通報モノの奇声である。怪しい薬やっているだろうと、連れて行かれかねない言動である。

「さっそく水溜りでも、のぞきこんでみよう」

数歩先にある水たまりのぞきこむ。空に浮かぶ雲が揺れ、自分の

影が映る。水は透き通り水底までよく見えた。しかし、一見きれいに見えるこの水たまりには、必ず何かいるものなのだ。

「早速、意識して『見て』みよう。愛しの微生物ちゃんが待っている！」

頭の中で『見たい』と強く思う。

すると視野が狭まっていくのと同時に視点が迫ってくる。一瞬にして動き回る微生物らしきものの一端を捉え、そしてあつという間に水溜りを構成している水分子の構造の世界にまで到達した。規則正しくたくさんくつついて、まるで微生物の群れがひしめくように、結合した水の分子たちがゆらゆらと不思議な挙動を起こしている。

「うわわ！」

水の中に吸い込まれてしまうのではないかと言う感覚に、思わず仰け反った。集中が切れたのだらう、あつという間にいつもの見慣れた視界に戻った。

「ふええ、びつくりした……」

急に見える範囲が変わっていくのは、思っていた以上に混乱するようだ。慣れれば平気になっていくと思われるが、まだ使い始めたばかり、加減や調節は使い慣れていくしかない。

白衣が土まみれになるのもお構い無しに、再びじつと水たまりを見つめ始めた。

「ああ、今は水の構造といったまで細かいところ見なくてもいいの、微生物、微生物、水棲微生物。微生物が見える程度で……おおっとこのくらいがちょうど良いか。ちょうど良いね」

傍から見れば本当に奇行以外の何物でもない。単なる水たまりを覗き込んでなにやらぶつぶつと言葉を発し、時に狂熱を上げているのだ。それこそ怪しい薬を飲んだ疑いで連行されかねない行動をしていた。しかし、そんなことはもはや頭の中にはなかった。

「そういえば、なぜ原子の形があんなにはつきり捕らえられたんだろっ？」

この眼は電子を使っていないから原子が持つ電子に影響を与えずに、その構造まで見えたのだろうか？

物理学に関しては専門外なので、これがどんなにすごいことかはあまり理解できないが、原子を苦も無く観測できるというのは、実は最新の電子顕微鏡よりも高性能ではなからうか。

しかし自分の持っている知識では、これ以上考えても分からないものは分からない。それによくよく考えてみれば、見たいものが見れば、それがどんな原理で働いているのかはあんまり興味が無いのである。

思考を切り替えようと、左手の人差し指で眼鏡を上げる動作をして気がつく。

「また、幻影の眼鏡をあげようとしてしまった！」

眼鏡をかけていた時の無意識で行っていた癖は思っていた以上に根深かった。

「そうだ、折角だからこれらの微生物スケッチしよう」

せっかく神に記録用の本を頂いたのだ。使ってみようと思い早速本を開いた。

ページをめくったときのさわり心地も、紙質も何の変哲も無い普通の本のようだった。

「左目だけ顕微鏡化つてできるのかな。やってみよう」

左目だけ集中し『見よう』とする。思ったとおり左目だけが顕微鏡の視界になる。

「これならアレができるぞ、できるぞ、できるぞ！」

早速ペンを握る。

「必殺っ！ 顕微鏡写生！」

なんてことは無い、顕微鏡でスケッチするときに行う片目で対象物を見つつ、もう片目で見ながら絵を描くだけの単なるひとつの技法である。

思い通りに観察できストレス無く描ける、これはすばらしいものである。顕微鏡で見える範囲外へ出てしまった生物を追うのは、慣れていても難しい。ほんの少し動かしただけでも、動かし過ぎてしまふことがあり、時には見失ってしまうことさえあるのだ。

「ああ、繊毛がびっしりと」

そうして異世界に來た院生は、時間も忘れて初めて目にした微生物たちを観察しまくっているのだった。

マクロな視点で見れば地球と大差ない景色でも、ミクロな視点で見ればこの星を構成している物質や環境は異なっているのだろう。ほんの些細なことが違^{たが}う、それだけで生物の起源や性質は大きく隔たるものになるのだ。

たとえば、この世界の植物のもつ色素分子は、海松色^{みるいろ}に近い黒味がかつた黄緑色をしていた。葉緑素と言うよりは、葉灰素と言った方がしっくりくるような色をしていた。

そういう少しくすんだ色素を持っているので、草原に生えている野草たちの色は、地球のそれと比べると少し深い緑色をしているように見えるのである。

「灰色、と言うことは、満遍なく光を吸収しつつも反射しているのか？」

空を見上げ太陽を確認する。直接見ると目を痛めるので、直視はしていないが、太陽はまぶしいくらい輝いている。

明るく見える太陽だが、地球の太陽よりもずっと弱く暗いのかも

しれない。地上に降り注ぐ光の性質が地球と異なっているのか、生物を構成している物質の違いか、それとも大気中の成分の違いか。

とにかく、恒星から放たれる光のエネルギーを最大限に効率よく吸収するために、光を使つて栄養を合成する植物たちは黒っぽくなっている可能性もあるのだ。それでも緑が強いということは、地球の植物が行う光化学反応と基本は同じで、青と赤が光合成の効率がよいのかもしれない。

「大気の成分と言えば、彼ら植物が光化学反応で栄養を合成するときに使うのが二酸化炭素で、その反応の副産物が酸素とは限らないな」

それら確かめる手段は今無いが、いずれにせよ、この星の大気の成分が地球と同じ割合である可能性は低い。

地球人は地球の大気の性質上、窒素には比較的耐性があり中毒症状も他の物に比べると軽いものだが、その窒素も限度を超えれば呼吸ができなくなり死んでしまう。そして生きていくのに必要な酸素でさえ高濃度の中にあればやはり中毒を起こし死に至る。

他にも、二酸化炭素やヘリウム等のように濃度が濃くなれば単純に窒息してしまう気体や、一酸化炭素やシアン化水素のような呼吸色素等と化学的に結びついて呼吸を阻害してしまう気体、塩素や二酸化硫黄と言った呼吸器系を刺激する気体の割合が一定以上の星だったら、あつという間に中毒症状が出て最悪そのまま死んでしまうだろう。

環境循環系が地球と異なっていると仮定するとやはり『苛酷な環境でも耐えられる体』を願っておいてよかったのかもしれない。言葉のときと同じように、願わなくとも適度な環境適応くらいは既定値に設定されていてもおかしくはないが。

自分の耐性うんぬんのはさておき、少なくともこの星のこの環境が地球と同じように、豊かな生命を生むのに適していたということだけは確かなのである。

地球のそれとこのそれを比べることができれば、もしかすると生物とは何か、生命とは何か、その手がかりがわかるかもしれない。しかし地球に戻れない今、自分の知っているほんの少しの知識だけでは到底足りず、ひとつひとつ検証していくのは不可能に近い。

せつかく比較の対象ができたのに、それができないのは残念である。あるいはその部分は永遠の謎^{テーマ}としてロマンを含ませたままにしておくのも、いいのかもしれない。

そう思うことで惜しい気持ちをだいぶやわらげる事に成功した。

顕微の世界では視線を移すたびに、見たことがない生物に遭遇する。

観察で気がついたことを次々と走り書いていく。きちんとした形にまとめるのは、落ち着いてからでもいいのだ。今はただひたすらに微生物たちを描き、思いつくままに書きなぐる作業をするのだ。

「僕は微生物^{マイクローブ}と呼ばれる生物の中でも、真核生物^{ユカリオート}が好きで、細胞核を持たない原核生物^{プロカリオート}や、生物かどうか怪しい生命体の非細胞性生物^{ウイルス}はあんまり詳しくは無いのだけれど……」

原核生物の真正細菌^{バクテリア}や古細菌^{アーキア}は、ぱっと見、見分けつかないの多い。大きさはとにかくウイルスも見た目は似たようなものだらけだ。いくら微生物が好きだといっても、あまりにも単純な構造^{がいけん}の微生物は、ずっと観察し続けるには辛いものがあつて得意ではなかった。

「しかし、地球では通用するこの大雑把な生物分類でさえ、果たし

てあてはまるのかどうか怪しいところだよな……」

地球の分類学の形式も様々な説があるが、おおむね『動物』『植物』『菌類』『真正細菌』『古細菌』『原生生物』、そして厳密には生物ではない生命体の『非細胞性生物』というように分けられる。見えるものが単なる物質や、物質と生命のハザマにある非生物系ウィルス統のものが多くなるのは仕方ないにしても、動物か植物か菌類か判別が難しい生物も多いように感じた。

やはり異世界の生物は、地球とは全く異なつた生物界を持っているのかもしれない。

「……それにしても、だ。まさか細胞核のない多細胞生物がいるとは思わなかった」

核を染める染色液か何かがあれば、ただ見えにくいだけなのかがわかるが、そのような薬品は手元にない。仮に核として分かる形を成していないとしても、生殖の様子を見れば何が遺伝情報を持っているのかということが、突き止められるだろう。

「まさか、繁殖しないなどと言うことはさすがに無いだろうし。本当にまだ観察できた数が足りない」

今は実験もできない環境なので、調べられないことだらけなのは仕方がない。それを補うためにも、もっと観察して、それぞれの共通点、何かの器官、行動、成長過程、ありとあらゆる状態を『見て』検証していかないといけない。

そう時間だけは、たっぷりとある。思うような実験のできないその不便さを差し引いても、いつでもどこでも微生物が見ることができるのはうれしい限りなのだ。

それに本音を言えば実験よりもずっと眺めていたり、描いているほうが好きなのだ！

こんなすばらしい能力を得て、レポート提出も試験も何も無い、

何のしがらみもなく好きなことをして幸せだった。

地球とはまったく違う造形の微生物に感動しっぱなしだった。
「ああ、神様。ありがとう！ 大好きだ！」

何もかもから開放され、ますます晴れやかに意気揚々に草原にあふれる生命たちを観察していた。

3・顕微鏡の眼で見よう。（後書き）

どうでもいい、雑学

ウィルスというやつは、代謝をせず、繁殖しかしないので生物の定義からはずれている生命らしい。
生命って不思議。

4・オキシジェンとは、酸素のことである。

魔法や魔物や獣人やらが存在する異世界にやってきたが、それは自分にはまったく興味ない事象だった。そんなことよりも、この美しいフォルムの微生物をみてごらんよ。異世界の微生物たちも、地球となんら変わりなく神秘的な造形をしている。ああ、なんと美しい繊毛なのだろう。これはまるで、ゾウr……

「こんなところで何をしているんだ？」

背後から声がしたが、気にしないことにした

キセノンは依頼を達成し町へ帰るところだった。町へ続く道から少しはなれたその場所に、人がうずくまっている事に気がついた。緑の草原の中にあるその白い衣装はなかなか目立ったのだ。

歳は分らないがその小柄な人物はどうやら水溜りを覗き込んでいるようだった。キセノンはどうして覗き込んでいるのか不思議に思い、その人物に話しかけたのだ。

しかし熱中している人物は、反応する様子はまったく感じられなかった。もしかすると聞こえなかったのだろうかと思い、再び同じ質問を投げかけた。すると今度は反応があつた。少し面倒くさそうに、顔も上げず口を開いた。

「ああ、邪魔しないで（この至福のときを）」

キセノンの方を見ようとはせず、水面を見つめ傍らに浮かぶ魔法具らしい本に何か絵のようなものを夢中になって描き込んでいるようだ。

「ん、ああ、すまない」

絵を描いているということは、芸術家か何かだろうか。彼らの中

にはイメージがわいたら所かまわず構想を書き付ける者もいると言
うし、何かこの水溜りに感じたのだろうか。

キセノンは何をそんなに夢中に描いているのか気になり、こっそ
り覗き込んだ。そこには歪で不気味な図形のような物が描かれてい
た。それはうごめきそうな形をした奇妙な絵だった。それだけが心
に焼きついていた。どうして地面にはいつくばって水たまりを凝視
してこんな絵を？

「絵……う、上手いんだな」

「ありがとう、だから邪魔しないで（できれば、もう話しかけない
で）」

何の感情もこもっていない回答が返ってきた。

「ここら辺では見かけない顔だな？」

「うん、ここには……来たばかりだから（あっちへ行けよお）」
心に芽生えている小さな奇立ちをのせて話してはいるのだが、基
本的には感情を上手く表に出すのが苦手な性質なので、爆発するま
で気づいてもらえないことも多い。それでも精一杯の抗議をしてい
た。

「名前は何だ？」

そう名前を尋ねられたが、決して顔を上げようとせず、水たまり
を覗いている体勢のまま、あまつさえため息をつき少しめんどくさ
そうに口を開いた。

「……僕の、名前は……おきし沖石、じゅん??」

「そうか、お前はオキシジェンと言うのか」

「……」

（……って最後まで名前言わせてよ。オキシジェンOxygenってなんだよ。

どうして「じゅ」が「じえ」になるんだ？ なまっているのか、そ
うかきつとなまっているに違いない。しかし、自分は断じてそんな

酸素みたいな名前じゃないぞ。本当にもう……観察の邪魔だなあ」

名前は最後まで言わせてもらえなかったことや、何回も邪魔をされたことで、切れやすい堪忍袋の緒が切れた。

「だから邪魔するなと言っているだろう？ 観察の邪魔だ、あっちへ行けよ哺乳る、い？」

そう声を荒げて、邪魔をしてきた人物を睨み付けた。視界に入ってきたのは、長年使い良い感じの色合いになった鎧で武装した野郎だった。

一見すると人間と変わらないような直立二足歩行の姿をしているが、葉緑素を水に溶かしたような淡い緑色をした髪で、その下からのぞく黄色い虹彩ひときには猫のような細い切れ目が入っていた。

顔をよく見れば真珠のように美しい細かな鱗で覆にじわれていた。部分的に青に輝く鱗も見えた。その青は光を映し構造色に映えているのが印象的であった。

そういえば神は獣人がいると言っていたことを思い出した。ということとは、ほかにも様々な形態をしたヒトがいるのだ。実際に動いて異世界のヒトを目にし、ここは本当に異世界なのだと実感してしまう。

異世界の見たこともない人型の生命体なのだが、それにもかかわらず彼が成人男性であるということわかった。少し不思議な感覚ではあったが、言葉が理解できるのと同様、何かそういう基本的な識別能力も付加されているのだろう。そう思うことにした。

「いや、すまない。君は爬虫類だったか」

この世界では、爬虫類も知的生命体に進化したのだろう。爬虫類にまったく苦手意識はないが、服をまとい背筋を伸ばして二足歩行をし、言葉を話す爬虫類と言うのは、どこか不気味に感じてしまう。「僕は哺乳類だけが話しかけてくる、そんな環境に住んでいたから、君のような爬虫類に話し掛けられるのは、初めてなんだ……」って、何を言っているんだ僕は」

自分の前に現れたこの異質な存在に多少慌ててしまったのかもしれない。彼にこんなことをカミングアウトしてどうするというのが、「ええと……爬虫類の人類と言うことは、君は爬虫人類なのか？」

「爬虫、人類？」

キセノンには、そんな堅苦しい言い回しは聞いたことがなかった。

「君たちのような鱗の生えた人類を、僕は初めて見たんだ。正しい呼び名があるならそれに従うよ」

「俺たちは爬虫族レプティリアンと言われているな」

「レプティリアンか。そうか、ありがとう。ちなみに、僕はこの常識と言うものが皆無だから、あんまり関わらないほうが良いぞ、親切なレプティリアンのお方よ」

こう言っておけば、面倒くさそうだからとこれ以上関わろうとしないだろう。と言うよりも、自分から関わりを絶つように、再び水溜りを覗きはじめる。

「し、しかしな？」

もうその人間の耳には言葉は届いていない……ぶつぶつ言いながら手元の本になにやら書き始めていた。明らかに無視しているようだった。

「やれやれ」

キセノンはその者を観察した。

耳が少し覗く程度の短い黒髪を持ち、顔立ちは中性的でまだ幼い雰囲気を持っている。声色からも性別ははっきりとは分からなかったが、まだ子供であろう。

人懐っこそうに輝く黒目や、ほんのり微笑んでいる唇が対峙している人の警戒心を解くような安心感を与えている、本来なら話しかけやすそうな雰囲気を持つ外見であった。

しかし、羽織っている変わったデザインの白い外套は泥だらけである。それだけではなく、頬にも髪にも少し泥が付着している。おそらく泥のついた手で触ったのだろうが、汚れても全く気にしてい

るようすはない。

容姿は愛でたくなるような小動物的でかわいらしいのに、今は捨てられた子猫のような薄汚れた感じなのが、なんだかとても残念に思えた。

「子供が一人でこんなところにいるのは、あんまり感心することではないが……」

今はまだ昼で、ここは町からも近い。この辺は人を襲うような魔物もあまり現れないので、放っておいても大丈夫だろう。物騒な奴が出るのは大抵夜なのだ。

キセノンはとりあえずは放置しておくことにし、町への道を急ぐことにした。

5・時間を忘れるにも程がある。

まだほんのり暁の色が残る澄んだ空には、雲ひとつない。今日も一日晴れるであろう。そんな清々しい朝の野原の下で、泥だらけになりながら、草花をじっと見ている者がいた。

「あれは……」

キセノンは視界に入ったそれを見て、走る速度を緩めた。彼は軽く朝食をとった後に走り込みをするのが日課であった。この町に来た時はたいてい外壁の周りを1周している。

町の周りは見通しのよい草原で地平線までよく見える。さらにキセノンの視力はこの世界の平均値の倍があるので、本当に遠くまでよく見えるのだ。

半周ほど走っただろうか、それが目に付いたのだ。彼は走る経路を変更しそちらのほうへ向かった。

キセノンが背後に立つても、気がつく様子は無かった。

今は水溜りではなく草の方に興味がいつているようで、目の前に生えている草を熱心に描いているようだった。それはもう夢中になつて絵を描いているようだった。

キセノンは今度はどんなおぞましい絵が描いてあるのかと、そつと絵を覗き込んだ。

そこには普通の草木の絵が描いてあった。色はついていないが、本物と見間違えそうなほど、繊細で写実的な本当にごく普通の絵であった。

しかし今回気になったのはその絵ではなく、描かれた草の絵のまわりに文字らしきものをびっしりと書き込んでいることである。見たことが無い文字だが、おそらく故郷の文字なのだろう。知らない国のその文字は芸術的に見えた。

(……ああ、またあの絵だ)

異国の文字を一通り書き終えたかと思うと、次はその描かれた植物の根元から線を延ばしその先に四角の枠を書いたかと思うと、その中に例の気色の悪い図形を書き始めたのだ。「根っこにいました微生物。根粒こんりゅう、菌根きんこん、菌根菌きんこんきん！」と、意味の分からない呪文のような歌も歌っている。

「ビセーヴェツ？ キンコンキン？」

キセノンの発したその言葉に反応し、今まで止まることの無かった作業が止まっている。耳が動く種族ならば、その耳はおそらくキセノンの方に向けられていたことだろう。

「大丈夫か？」

急に動きが止まったので、キセノンは思わず声をかける。

「君はさっきの。ええと、レプティリアンな人？ まだそこにいたの？」

今度は顔を上げて、黒い瞳はキセノンの方をしっかりと見て話している。

「お前はいつもここにいるのか？」

「いつも？ ここに来たのは今日が初めてだよ。ちょっと前にここに来たばかり」

その発言にキセノンは、めまいがした。まさか昨日からずっとここにいたのだろうか。もしかすると日付が変わったことに気がついていないのかもしれない。

そういえば昨日見かけた時よりも、さらに泥だらけになっているようにも見えた。一端家に帰り朝早くここに来た、というような様子も見られなかった。

「お前は昨日から何をしているんだ」

ため息まじりにキセノンは言葉を吐き出した。

「昨日？ え、昨日？」

黒い瞳が、ますます黒く見開かれる。キセノンは予想通りの反応を返してきたのでため息をついた。

「やっぱり気がついていなかったのか。なあ、オキシジエンはここ
で……」

「自分は断じて酸素オキシジェンではない！ 僕のことは……ええと、オキイシと呼べ」

いまさらフルネームを名乗りなおす気もないし、そして何よりも「ジュ」を「ジエ」と言うのは嫌がらせか何かか。オキシは心からそう思う。

「オキシ？」

キセノンは何をそんなに苛立っているのか分からずに戸惑いながらもそう言った。

「そうそう、よろしい、よろしい。それでいい」

多少発音がおかしいが、許容できる範囲である。もともと大学では下の名前ではなく、名字で呼ばれていたこともあり、やはりそちらで呼ばれた方が落ち着く。

「お前は何か食ったのか？」

少なくとも昨日からこの場所にいるのだ。オキシの荷物は本以外に大きなものは見当たらない。何か食糧を用意しているようには見えなかった。

「昼に少し、何か食べたなあ。確か学食で……いや、まだ食べてなかったかもしれない。でも、いつものことだから大丈夫。今はそんな腹が膨れることよりも、好奇心でいっぱいになっている方がいいんだ。ご飯はあとで適当に食べる」

今は時間的には朝である。今日の昼はまだ訪れていない。それは、いつの昼のことを言っているのだろう。しかも、その昼飯でさえ取ったかどうかあやふやだと言うのだ。そう考えるとキセノンは頭が

痛くなった。

「ところで日付変わったのって本当？」

食べた食べないはとにかく、オキシは気になった疑問を投げかけた。

「そうだ」

キセノンはうなずいて肯定する。

「ああ、また徹夜しちゃったな」

帰ってきた反応は、のどかなものである。もう少し驚くのかと思いきや、予想外の反応が返ってきたのでキセノンは返す言葉が無かった。

オキシは晴れた空を見上げて背伸びをする。空気は青く澄んで、草が風に揺れてささやくさまは心地よくいい香りもする。

「区切りもいいし、いい天気だし、せつかくだから僕は今から少し寝ようと思う。おやすみ、親切なレプティリアンの人」

そういうとオキシは、さわめく草原に仰向けになった。目をつぶってすぐ、定期的な寝息が聞こえ始めた。あっという間の事だった。

「……こいつ、本当に寝やがった」

オキシの周囲の状況を考えて自分勝手に気ままな性格を、キセノンは垣間見たような気がした。

「本当に、本当に。本当に眠っているのか？」

キセノンは何度も確認するように寝顔を覗き込む。オキシは変わらず満ち足りた表情を浮かべ眠りの世界に浸っている。

「本当に熟睡していやがる」

いくら今は昼だと言ってもここは野外。この辺は平和とはいえ、まったく安全であるとは限らない。何が出るか分からないのだ。なのに、まるでここが自身の部屋であるかのような、なんとも危機感の無い寝顔で眠っている。

「泥遊びに疲れて眠っている子供みたいだな」

キセノンは年の離れた兄弟たちを思い出す。思い返して自分の兄弟たちの方がまだましだったと気がついた。

「ちっ……このまま、放っておくわけにはいかないだろうなあ」

兄弟が多い家庭に兄として生まれたキセノンは、知らず知らずのうちに面倒見のよさを発揮してしまうのだった。

しかし改めて見てみると、見かけない色を持つ人間である。キセノンはあちらこちら旅をしてきたが、黒と言う色は珍しかった。

華奢で小柄で……まだ子供だからなのか、種族としての特徴なのか……いや、ただ単に食べていないせいなのかかもしれない。まだ会って間もないのだが、先ほどの会話からも食に対しての意欲があまり感じられず、普段から食事を抜くことも多かったのではないだろうかと推測できた。

しかし、だからと言って飢えているようにも見えず、血色もよく不健康な感じはしないので、決して全く食べられない環境にいたのではないことは感じられた。

少しはねた黒髪を直すように、キセノンは眠っているオキシの頭をなでてみた。オキシは眉にしわを寄せて嫌がる様に「うゝ」と低い声で唸り、頭に載せたキセノンの手をはねのけた。どうやらお気に召さなかったらしい。

はねのけると表現は語弊があるかもしれない。思いつきりこぶしで殴られたのだ。1発ぶち込まれても全く痛くは無かったが、反撃を食らうとは思っていなかったのでキセノンは驚いた。まさか起きたのではないかと思っただが、そうではなく未だすっかり熟睡しているようだ。

キセノンはもう一度触れてみる。オキシは再び同じような反応を返してくる。

「眠りをも、邪魔されるのを嫌うか……まるで動物みたいだな」
キセノンはすこし頬が緩むのを感じた。

「しかし、こんなところで何をしているんだ？ 本当に絵を描いていただけなのか」

少なくとも1日近くここにいたことは確かだ。気になることはたくさんある、聞きたいことは山ほどある、問い質そうにも答える者は夢の中、キセノンがいくら考えても答えは出てくるはずが無い。

仕方が無いので、彼はオキシの隣に寝転がり空を見た。何も考えずただ眠っているオキシを見ると、なんだか少し落ちつくような気がした。

キセノンは最近魔物討伐や護衛の依頼をこなす日々を送っていた。殺伐とした油断のならない生活で凝り固まり淀んだ塊を解すような感覚に、こうしているだけでいいような気分になってきた。

「たまに、こういう日があってもいいな」

小動物と触れ合ったかのように、なんだかんだで癒されてるキセノンなのであった。

6・眠りを妨げるものは……容赦なく、繰り出すよ。

青白い太陽は変わらず高い空にあり、草原にまたたく光の波を起こし、地平線へ揺れて消えていく。時間的に見ればキセノンが最初にオキシを見かけてから、もうすぐ一昼夜が経とうとしていた。

朝の色から昼の色へと移り変わる空をただ眺めているのにも飽き、キセノンはオキシの方を見た。依然として静かな寝息を立てており目覚める気配が無い。

オキシの傍らにはあの本が無造作に開かれている。先ほどまでオキシが描き込んでいたページが開いたまま、ただそこに置いてあった。

この本の持ち主は泥だらけだったが、本自体は全く汚れていない。やはりこの本は魔道具、しかもかなり高度な魔法が施してであるとキセノンは感じた。

視界の端にあの本がちらりと入るたびに、キセノンはその本がどうしても気になってしまう。本が目につくたび本から目をそらし、何度か草花を抜いては投げたり、眠っているオキシにちよっかいを出して遊んだりして気を紛らわせていた。しかし遠目に少ししか見えない、あの奇妙な絵が頭から離れないのだ。

勝手に内容をじっくりと見るのは失礼とは思ったが、開いたまま放置しているのが悪い、とキセノンはその本を覗き見た。

奇妙な図形、整然と並んだ混沌とした文字。

花の絵、整然と並んだ混沌とした文字。

昆虫の絵、整然と並んだ混沌とした文字。

小動物の絵、整然と並んだ混沌とした文字。

「……絵画と言うより、図鑑を見ているような気分だな」

それでも充分に絵を描く才は素晴らしいものがあると言うことは分かった。

「この不気味な絵さえなければ、だが」

一体、この奇怪なものは何なのだろうか、やはり頭を悩ませる。自分の見ている世界と、オキシの见えている世界は違つと言つことだろうか。

キセノンは本から視線をはずし、再びオキシの方に意識を投げる。オキシは最近ここへやって来たようなことを言っていたが、実際にいつからこの草原にいたのかは分からない。もしかすると思つてゐるよりも長い時間この草原にゐるのかもしれない。

「こいつは普段どんな生活をしているんだ？」

このまま放つておいたらこの後も2日でも3日でも、ここにとどまりそうなそんな気配さえする。それどころか栄養不足で死ぬまでここにいるのではないだろうか。

憑かれたようにひたすらに打ち込む姿を目の当たりにしているの、全くありえないことではないと、キセノンは直感で感じていた。「こいつが目覚めたら、町へ引つ張つていこう……」というより、そろそろ叩き起こすか？」

睡眠を邪魔されたオキシの寝起きは悪そうだが、昼下がりを告げる月が顔を出す前にはここを離れたい。日の照らし出しているうちはいいが、夕刻が近くなれば冷え込んでくるのだ。

それにいい加減腹も減つてきた。

「おい、起きろ！ オキシ！」

キセノンは、草原で泥のように眠っているオキシの体を優しく揺さぶった。

「ん……やだ。起きない、寝る！」

一刀両断、即答だった。

しかも寝返りに見せかけて蹴られた。

「……」

全く痛くは無かったが、蹴りが来るとは思わなかった。

「こりゃ、起こすのは苦労しそうだな」

キセノンは諦めず、ささやかな抵抗を受けながらもオキシを目覚めさせようとゆさゆさと揺り動かした。

「何だよう、本当に」

少しかすれた寝起きの声で、まだ少し目覚めきっていないどころなくぼんやりした瞳が、キセノンを攻め立てている。

キセノンを睨みつつも「メガネ、メガネ」とわけの分からない言葉を発しながら、何かを探しているように顔に触れたり、前髪に触れたり、落ち着き無く両手を動かしている。

「あつた」とオキシがポケットに入っていた物に触れそれを取り出そうとした時、「あ、もういらないのか」と何かを思い出したのか、その奇行をやめた。

「……で、何かよう？」

先ほどの行動はオキシにとっては、あまり見られたくないものだったのだろうか、頬を少し赤く染めながらも、それをごまかすようにキセノンに刺すような視線を放っている。何事も無いかのように振舞ってはいるが、かなりふてくされていることが透けて見えた。

不満、動揺、はにかみ、不機嫌、ころころ変わる表情に、ますます小動物を思わせ、愛くるしく、そして見ていて飽きない反応だった。

「お前、昨日から何も食べてないんだろう？ それに眠るにしても、こんなところで眠るよりも、もっと安全な場所で眠ったほうがいいぞ」

キセノンは町へ行くとうと説得をし始めた。オキシは煩わしそうに

しているが、時折何か考えるように頭を斜めにしては、話に耳を傾けている。

オキシは神にもらった能力により『食』は基本的にいらぬ体になったが、それは特別な力である。見ず知らずの人に教える義理は無い。うまくごまかそうとオキシは思案する。

「大丈夫、心配ないよ」

寝起きだが頭は問題なく回転を始めている、食べるものには困っていないことを伝えようと考えをめぐらせ、そして口を開いた。

「適当に野原の草や花や根っこ、それに虫でも食べるよ。寝るときもここで良い。ここで充分。さっきみたいにそこら辺で眠ることに何の不便も感じないよ」

はつきり言ってしまうえば、オキシは天然の部類に入る。どんなに考えをめぐらせたところで、素でとんでもないことを言うのだ。

「こんなところで寝るな！ そんなもの生で食うな！ 腹壊して死んでしまうぞ！ それにこの地域は平和と言っても、魔物とか盗賊が出ないとはいえないんだぞ。特に夜は危険だ」

キセノンはそう訴えた。もしも人を襲うようなものが現れた場合、武器も持たないこんな小さな人間が無防備に眠っていたら、格好の餌でしかない。

「魔物に盗賊かあ。そいつらがいるのか、邪魔されるのは確かに嫌だな」

夜でも比較的平和な日本で生まれ育ったオキシにとって、それらに対する危険の意識はとても低い。むしろ危険と言う認識よりも、それらが現れて邪魔される方が不愉快極まりないように感じるのだ。

「邪魔って、そういう問題じゃないんだが。……そうだな、オキシは作業を邪魔されたら怒るだろう？ 部屋のひとつでも借りれば、誰にも邪魔されないで絵でも睡眠でも好きなだけして過ごせるぞ。」

なんなら俺が泊まっている格安の場所を紹介するが」

キセノンは町へ行くことを強く勧める。

「部屋かぁ。誰にも邪魔されない部屋を借りる。魅力的ではあるけれど……でも、僕はここで使えるお金を持っていない。仕方ないから節約するよ」

自分は何も持っていないことを思い出し、そして好きなこと以外は面倒になる傾向のあるオキシは早々に部屋を諦めた。

「そこを節約してどうする！ 稼げば良いだろう？」

「いやだ、興味が無い。それに、まともに働けるとも思えない」

オキシは異世界の常識を知らないのだ。むしろ日本にいた時も常識的であつたかさえ怪しいところなのだ。

「だから働くくらいなら、それなら部屋はいらない。僕は何よりも好奇心を優先する」

オキシはためらい無くはつきりとそう言い放つ。

異世界に来て何か吹っ切れたのか、地球にいた頃はいつも抑えていた枷が外れて、ますます遣りたい放題、言いたい放題になってしまったようだ。

「ああ、もう。強制的に連れて行くぞ」

埒が明かないと、オキシの腕をつかむ。

「ちょ、待って。僕はここを離れたくない！」

オキシはつかむ腕を振り払おうとしたが、びくともしなかった。

「おい、こら、おとなしくしろ」

キセノンがつかんでいる腕は華奢で細く、ちょっと力を入れたら折れてしまいそうな印象があつた。だから下手をして怪我をさせやしないか冷や冷やしていた。そんなキセノンの気がかりも知らず、オキシは動揺して暴れていた。

「はなせ！ この！」

オキシは足蹴りをしたり、空いているほうの手で殴りつけたり、たまに引つかきの攻撃も入れたりしているが、鱗は固くまったく効

いていないようだった。

「ぬう、やけに硬い鱗だな」

オキシはすぐに持久力が切れ、おとなしくなった。

「もう、息が上がったのか？ …… 食べていないからだぞ」

「もともと、あんまり運動はしない方なんだよ。本、当、に、硬い鱗だな。鱗って言うのか亀の甲羅を叩いている感じがするよ。もしかして、この鱗は皮骨とか骨と融合しているのかな？ 爬虫類だものな、充分にありうる。もう、亀野郎って呼んでしまおうか？ いや、それじゃあ亀の方がかわいそうだな」

意味不明な暴言を吐きつつも、オキシはキセノンの鱗をぐりぐりと押しまわして、未だになけなしの抵抗が続けている。

「俺は竜種だからな。鱗はもちろん全体的に、そこら辺の爬虫類人よりも頑丈にできているが……」

タトルシー
レフティリアン
「亀種は同じ爬虫族という括りに入るとはいえ、亀呼ばわりされたのは初めてだった。」

「竜種、竜なのか！ その鱗は、そうなのか竜なのか！」

キセノンが「竜」と言った瞬間、オキシはつかまれている方の手でキセノンの腕をつかんだ。

竜なんて向こうにはいなかった。しかも、彼が持っている鱗は光の具合で色合いが変わる構造色を持っている。そんな特性を持つ鱗を観察できる、これはチャンスなのだ。

「このありえなく硬い鱗の構造がどうなっているのか見てやる。叩いても引つかいても傷ひとつつかない丈夫さがありながら、モルフォ蝶の翅にも似た輝きを持つこの輝きの秘密を『見て』やろう、『見て』やるぞ、そしていつか勝つ！」

そう早口に言って、オキシはじつとキセノンの手の甲を『見つめ』はじめた。

「竜がそんなに珍しいのか？ お前はどんな場所から来たんだ？」

しかし、その問に答えることはなかった。オキシの興味の対象は鱗に移り、意識から他人の存在が消えたのだ。こうなっては、何を聞いてもまともな反応は返ってこない。

「白い方も青い方も鱗自体は透明にみえるんだね。爬虫類なのに透明鱗持ちとは珍しい。白い鱗は体表の表面色がそのまま表に出ているだけで、見た感じ普通の鱗と変わらないね。青の方はこの細かな格子状の溝と、溝の側面にあるいくつもの板状の襞が光の波に干渉して青を強めて反射しているのだろうね。だから、あの不思議で幻想的な色を出せるのかな、たぶんそうだね。もうちょっと拡大、あなんてきめ細かに並んでいる構造なんだろう、この規則正しい配置にきつと硬さの秘密もあるんだろう……おっと、これは常在菌かな、異世界でも微生物は動物と共生しているんだね、素晴らしい」
何かにとり憑かれた様に、早い調子でしゃべりだしている。

鱗を見ていることは確かなのだが、その口から出る表現は明らかにどこかおかしい。

「今度は俺の鱗に興味を持ったのか？」

つかまれている腕を引っ張ってみる。離そうとしない。

キセノンはゆっくり歩いてみた。オキシはおとなしくその動きに合わせてついてくる。

「このまま町まで連れて行くか」

キセノンはオキシの本を閉じ拾いあげる。それを小脇に抱え、「すごい綺麗」を連発しているオキシを引っ張りながら町へと向かって歩きだした。

「にしても、俺の鱗そんなに綺麗なのだろうか？」

あまり悪い気はしないのだが、こんなにも凝視されるとそこはかとなく恥ずかしい。

「オキシのその宵闇のような瞳のほぅが、俺は素敵だと思うのだが」
無論、オキシは聞いてはいない。

「はあ、何を言っているんだ、俺は」
一人大きく息を吐くキセノンであった。

6・眠りを妨げるものは……容赦なく、繰り出すよ。（後書き）

…… 亀呼ばわりされても怒らないキセノンって大人だな〜と、書き終わってから思った。

オキシの暴言なんて子供の戯言程度にしか思っていないんだろうなあ。

簡単に本文中出てきた用語説明を！

構造色とはどんな色か。

たとえば、シャボン玉やCDの表面、タマムシ、モルフォ蝶、孔雀の羽、サンマ、イワシ、オパール等のように、見る方向によって色が変わるのが特徴。

それ自身には色がついていないけれど光が干渉して発色して見える性質を持つ。

7・虎豹（コハク）亭の目撃者たち

「少なくともこの泥だらけを何とかしなくては」

ちよこちよこと歩いている泥だらけのオキシを引っ張って歩いている図は、傍から見れば奇妙だろう。

キセノンはこの町の地図を思い浮かべ、ここからも近い町のはずれにある馴染みの宿まで行くことにした。そこへ行くまでの人通りの少ない道も知っている、誰にも会わず行くことができるだろう。

オキシは危なっかしい足取りでひよこひよこ器用に歩いている。

たまにつまずくが、転ぶところまではいかない。

時々は一っぱるようにつかんで支えてはいるが、そういった助けがあまり必要無いほどには平衡感覚はいいのかもしれない。

「それにしてもすごい集中力だな」

つまりいても凝視だけはやめないのだ。

集中力が切れにくいと言うことは危険に対する反応が遅くなるということだが、外部からの刺激を遮断できるほどの集中力は魔法を扱う時には強みになる。

魔法を生成する時、強力なものほど集中力がものをいう、騒然とした周囲の状況にも惑わされず魔法を生成できるのだ。ここまでの集中力を持つのは熟練した魔術師の中でもそうそういないだろう。

キセノンは、オキシの魔力を探った。慣れた者ならば肌に触れている状態にあると魔力を感じ取ることなど容易である。今はキセノンとオキシは手をつないでいるような状態なので、オキシの中にある魔力を認識することができた。

一応魔力は持っているが、人並みしかないようだ。それじゃあ、その集中力は宝の持ち腐れである。

「おおっと、そこに階段があるから気をつける」

聞いているのかないかは分からないが、キセノンは一応声をかける。オキシは「ん」とだけ短く言い、一瞬だけ段差のほうは見ることがすぐに視線は鱗のほうへ戻る。階段があることは認識したらしい。熱中してしまうと、それ以外のことは半自動にこなしているだけのようだ、とキセノンはそう分析した。

その石段をのぼり町を囲んでいる街門をくぐり抜ける。この町には常駐の門衛というものはいない。人の出入りは多いがこの町壁の専らの役割は、時たま現れる魔物から町を守るといった程度のもので、人の出入りを制限するものではない。木製の重々しい扉は常に開かれている。

町に入り2番目の通りを右に曲がる、そして4軒目に建つ木造の建物が、キセノンがこの町での拠点にしている『虎狛亭』である。1階が食堂兼酒場で2階より上が宿泊施設になっており、裏手には衣服などを洗うための用水路がある。そこでオキシの泥を落とそうとキセノンは考えていた。

「女将！ ちょっと裏の洗い場借りるぞ」
少し立て付けの悪い裏口を開け、店の者に声をかけると「あいよ！」と威勢のよい返事が返ってきた。

「あ、キセノンが帰ってきたんだね」
女将の息子タンタルは仕事をさぼって客舎の裏にある木陰で休憩をしていた。そこにキセノンの声が聞こえたのだ。すぐに起き上がり木の陰から伺うと、キセノンが小さな哺乳族系マンマリアンの子供を連れてきたのが目に入ったのだ。

「あれは誰だろう？」
好奇心に満ちたタンタルの耳がぴくぴくと動く。タンタルはキセノンに手を引かれてやってくる人間に興味津々だった。

オキシの身長は日本では平均的だったのだが、この世界では子供くらいの背丈しかない。しかもキセノンは長身なので、オキシがおそらく小さく見えてしまう。

「あの子、泥だらけだね」

これは面白そうなことが起きそうだ。タンタルは唇の端を少し上げ、もっと近くでこっそりと様子を見るため窓から家の中に入った。

「おう、タンタル。またサボっていたのかい」

入ってすぐに見つかってしまった。

タンタルによく似た容姿の中年は作業を中断し、首にかけた布で汗をぬぐう。

「ああつと、父ちゃん。そんなことよりも。今日はキセノンが子供を連れてきてるよ」

タンタルは父親のバナジウムにそう報告する。キセノンが何かを拾ってくるのは、日常的にありふれた風景なのだ。

「またか。キセノンも本当に面倒見がいい。見に行くか」

キセノンが迷子の子を連れてくるのは珍しいことではない。もともと好奇心の強い親子は、何があつたのかと心が惹かれてならないのだ。

「あんまり見かけない感じだね。もしかして、かつさらってきたのかな？」

窓から外の様子を伺いながら、笑顔を浮かべながら冗談交じりにそう言った。

「ははは、キセノンに限ってそれはないよ。大方、迷子の子供でも拾ってきたんだろう」

「だよね。それにしても、キセノンを怖がらない子供がいるんだね。泣く子も怯える眼光なのに」

タンタルは自分の幼い頃を思い出した。もう10年近く昔になるだろうが、始めて会った時は爬虫族が持つ特有の鋭い瞳に、蛇に

らまれたかのようにすくんでしまったのだ。しかし、キセノンは子供の扱いにはとても慣れているようで、すぐに馴染んで仲良くなった記憶がある。

「顔はああだけれど、キセノンは良い人だからな。あの子にもそれが分かったのかもな？　優しいお兄さんだと」

すっかり仕事のことを忘れ、好奇に満ちた目でキセノンとオキシの様子を盗み見ていた。

「さて、さっそく泥を落とすか」

声をかけて汚れた服を脱ぐように言うが、オキシは首を振って「後で」と言うばかりで全く動こうとしない。しっかりと腕をつかまれているので、汚れている服を脱がすにしても、それはとても面倒な作業に思えた。

「水の魔法使えれば、あつという間なのにな」

己が使えない属性の魔法のことを嘆いても仕方がない。キセノンは荷物を地面に下ろすと、用水路の横に積んである桶に水を汲んだ。

「まずは髪からだな」

キセノンは魔力を練りオキシの服に水が落ちないように薄い風の層をまとわせた。

そして、水をオキシの頭からかけ、髪をすくように指を絡ませる。水は髪の毛を落としながら流れ落ち、髪から落ちた水は魔法によって生まれた風の層を伝い服をぬらすことなく地面へと滴り染み込んでいった。濡れた髪の毛の端から垂れる雫が太陽に照らされて輝いている。

「水をかけられても、動じないとは」

それは多少雨が降ったくらいではあの場所を動かないことを意味する。体が冷えれば、それだけで体力が奪われる。そんな状態が長く続けば、本当に弱って死んでしまうかもしれない。

水を汲みながら、キセノンはそう思う。

「……ん、あれ？」

はっとしたように、少し遅れて反応があった。さすがに気がついてらしい。

オキシは辺りを見回している。そして首をかしげ、何かを考えているしぐさを見せた。そして、突然慌て始めた。

「ここはどこだ？ あああああ！ またか、また、やってしまったのか？」

気がついたら見知らぬ場所にいたので、オキシは動揺していた。昔から深く考え事をしながら散歩すると、思っていた以上に遠出してしまふことがあったのだ。

「おちつけ、おちつけ。大丈夫だから」

キセノンは迷子の子供をあやすようにやさしく声をかける。

「あれ、びしょぬれだ。何で濡れているの？ 雨が降ったのか？」

我にかえり、いつの間にかぬれていた髪の毛に気がついた。空を見上げるが空は青く、綿がもつれたような白く薄い巻雲が浮かんでいた。雨が降るような気配はその空からは感じられなかった。

オキシは空を射るように見上げ、不思議そうにしている。

「泥だらけだったからな。水で少しな」

その声にオキシはキセノンのほうを見、そして彼が手に持っている水で満たされた桶を見た。

「……そうか。別に汚れていたままでも、かまわなかったのだけども」

泥だらけになることは、別に苦ではない。微生物を採取するために野山や田畑と言った野外で活動することは多々あったのだ。

「ほら、その白い服を脱げ。洗うぞ」

「いや、もう十分だよ。髪もこんなに濡れているし。汚れは落ちた、落ちた、落ちました」

オキシは両手で、濡れて額にはりついている前髪を真ん中から分ける。髪からしたたる水滴にはまだ砂粒が含まれていた。

「まだ落ちていない、まったく落ちてないぞ」

髪の手はもちろんまだすべて落ちていない、衣服の汚れにいたっては全く手をつけていないのだ。

キシノンは問答無用とばかりに再び水を頭からかけた。髪から砂の混じった水が流れ落ちる。

「わわ、う……じゃりつてした」

口の中に砂が入ったようだ。オキシは口をもごもごと動かして、眉をしかめている。

「泥はまだ落ちていないだろう。お前がおとなしく洗われていれば……ってこら、逃げるな」

オキシは逃亡を図ろうとしたが、失敗に終わった。

「何やっているんだ、あいつらは」

おそらくあの子の泥を落とそうとしているのだろうが、どうも嫌がついてなかなか思うように洗えないようだ。

「あの子さうとう嫌がつているね」

タンタルは、そう感じた。

「そりゃ、あんな乱暴に水をかけられちゃ、誰でも嫌がるさ」

「それにしても、あんな雑なキシノンを見るのは珍しいね」

タンタルはなぜか嬉しそうに、二人の様子を見ていた。二人の会話はよく聞こえないので、何がどうなっているのか分からないが、やっていることがどうみても滑稽なのだ。

「あ、ころんだ」

キセノンの魔の手からのがれようとしたオキシはぬかるんだ地面に足をとられ、用水路に落ちた。とても浅い用水路なのだが、尻をついてしまったために、腰の辺りまで水に漬かっている。ずいぶんと濡れてしまった。

「大丈夫か？」

「うん、大丈夫……ああでも、びしょびしょだ」

キセノンが先ほど使った魔法は少量の水に対してのみ有効で、大量の水の流れに対しては効果がない。しかし、そんな魔法がかかっていることを知らないオキシは、普通に白衣の裾を絞り、用水路から這い上がった。

「ああ、水路に落ちたのなんて、何年ぶりだろう」

田んぼを駆け回っていた小学生時代以来ではないだろうか。

オキシは用水路から出る時に手についた泥を、白衣の裾で拭いた。濡れた白衣に汚れが広がっていく。

「だああ！ そんなところで拭くな。せつかくそこは、綺麗になったのに！」

「つい癖で。でも、白衣なんて、汚れていくものだし、気にしない、気にしない」

「汚すにも、限度があるだろう！！」

キセノンは思わず叫んだ。白は汚れが目立つので、その色を身につける時は汚れに気を使っている者が多いと言うのに、オキシはどうであるうか、逆に気兼ねなく汚しているようにしかみえなかった。

「キセノン。こ、怖ええええ」

声を荒げるキセノンは凄みがあり、何の関係もないはずの人でも、思わずたじろんでしまうほどの迫力である。

「あの子、泣いちゃうかなあ」

「怖いからな、恐ろしさのあまり涙さえ出ないかもな」

しかし彼らの予想とは裏腹に、ほとんど恐れる様子を見せないその子供は、逆に何かキセノンに向かって不満を言っているようにさえ見えた。

「あの子、あんまり怖がつてないね」

「あの子の神経が恐ろしい」

「アタシの目の前で、仕事をサボるあんたらの神経が恐ろしいね」
声のするほうを振り返った2人は視線の先に腕を組んで立ちほだかる女将の姿をとらえ、別の意味で震え上がった。

8・受け答えが曖昧だったので、記憶喪失だと思われた。

オキシはキセノンの大きな声に一瞬体をこわばらせたが、すぐ気を取り直したようだ。

「そんなに大きな声を出さなくても。わかったよ、わかったよ、白衣を渡すよ」

オキシは白衣のボタンに手をかける。

「でも、こうびしょぬれなら……思い切ってこのまま泳いじやつたほうが、汚れも落ちていいかも」

と、手を止めて用水路を流れる水を眺めた。このくらいならいけるかもしれないと思ったのだ。

「服を着たまま泳ぐと、すぐにおぼれるぞ。それに、すぐ向こうは深くても流れも速い」

何を言っているんだとばかりにキセノンはつつこみをいれる。水の力は侮れない。ちょっとした油断が水の事故につながるのだ。用水路の流れは穏やかに見えるが、すぐ向こうに見える本流と合流しているあたりは、思っているよりも流れが早く、特に体の小さな子供などは流されてしまうおそれがある。

「とにかくだ。とにかく、その白衣って言ったか？ 早くそれをよこせ。それから、これを洗っている間に、顔や髪を洗ってきな。ほら、これで顔とか髪とか洗え」

キセノンはさっきまで使っていた桶をオキシに手渡した。

「うん。ありがとう……ああ、待って。ポケットの中の物を出してしまうから」

オキシは白衣のポケットにはいつていた眼鏡や時計、文房具、鏡、ハンカチ等のありとあらゆる小物を取り出しはじめた。

「……これは、いつもらった飴玉だろう？」

糖分が溶けたのか、飴は包み紙にへばりついていてた。しかも、

さつき用水路に落ちたせいで少し湿っていた。無論、飴と同じ場所に入っていたティッシュはもう使い物にならないだろう。

なぜ、こんなものが入っているんだろうという道具も含めて、ゴミ同然の物もいくつか出てきた。何でもポケットに入れてしまう癖があるのだ。

オキシはポケットに入っていた全ての物を、キセノンが持つてきてくれた本の上に置いた。そして軽くなった白衣をキセノンに渡した。

「汚れているのは、その白衣だけのようだな」

キセノンは白衣を受け取りつつ、その下は特に汚れていないことを確認した。

「そうだね、服は汚れてないね」

「お前の場合、汚れていてもそう言うだろう」

「まあ、そうなんだけれど。みんなからも、もう少し気を使おうって言われるけれど、あんまり興味が無いからね」

オキシは濃い紺色の襟元を引っ張りながら言う。オキシの衣服は長年使い込まれ多少よれた感じはするが、古びて穴が開いたり、傷んで破れたりして直したような跡は全くなく、たまたまかもしれないがあまり気を使わないといったわりに、キレイなものを着ているような感じに思えた。

キセノンはオキシから受け取った白衣を洗いはじめる。素材は木綿だろうか、結構丈夫に縫われているように感じた。そういえば白衣の下に着ている服も変わった形をしている。簡素ながらしっかりとしたデザインで、しかも動きやすそうな形状をしている。衣服についてはあまり詳しくは無いが、この周辺諸国のものではないだろう。そう思いながら、キセノンは白衣についた泥を落としていた。

「ほら、洗い終わったぞ」

オキシは濡れた白衣を受け取った。

「ありがとう。ところで何か拭くもの無いの？」

服も髪も肌にくっついてどうも気持ちが悪い。そうそうに乾かしたかった。

「こうすりゃ良いんだよ」

キセノンは指をはじく動作をし、体内に内在する魔力に働きかける。指先から弾き飛ばされた魔力はあたりの大気に働きかけ、触発された魔力の流れが温かな風に転換された。その風がオキシの髪を白衣に渦巻くように包み込む。そうして風が再び元の気流に散る頃には、服も髪も全てがさっぱりと乾いていた。

「おお？」

オキシは手に持った白衣を広げひらひら揺らしたり、髪を触ってみたり、落ち着かない様子を見せている。

「何、その魔法みたいなの。ドライヤー兼乾燥機？」

「ドライヤー、ケン、カン、ソーキ？」

そう聞き返すキセノンだったが、オキシは答えない。オキシは何かを突き合わせるようにしばらく黙っていたが、ひとり納得したのか「そうか、これが魔法か」と言って一人満足そうな顔をした。

「とにかくありがとう！」

「……なんなんだろう、このすっきりしない感じは」

お礼は言われたものの、釈然としない気分のキセノンは苦笑いをもらす。

「しかし魔法ってやつは初めて体験したが、なかなか興味深い現象だなあ。ちょっと不思議、ちょっと楽しかったな」

そう言って、オキシは乾いたばかりの白衣をまとう。そして、まるで新しい服を買ってもらった子供のように軽やかに1回転する。経験の無い現象にすっかり魅了され、完全に乾燥した白衣に触れながら「これは、本当にいいものを体験した」とオキシは自然と笑顔になる。

そのオキシが浮かべたその満面の笑顔を見て、キセノンは鼓動が一瞬弾んだ。

「ちっ……柄でもない」

小さな子供は庇護すべき対象ではあるが、キセノンにとってはそれ以上のものではない。確かにオキシの顔は幾分好みではあったが、こんな男か女かも分からない異種族の、また卵の殻が尻についているような妙ちくりんの子供に特別な何か思いをいだくわけが無い。

（聞き分けのない小動物のようだからだろうか）

沸いてくる機微の芽生えに、なんとも一筋縄ではいかない気分に満たされたキセノンだった。

「さて、泥も落ちたところで、飯でも食いにいくか」

キセノンはその厄介な感情を振り払うかのように、そう提案した。

「でもお金ないよ?」

さきほど取り出した小物を白衣のポケットに戻しながら、オキシは言う。金目のものといえば、複雑な見た目が装飾品のように美しい機械式の懐中時計があるが、これは大学の入学祝にもらった愛着おもいでのあるの品なので、手放すつもりは無い。

それに、この世界では時刻を知るといふ本来の目的としては使えるかどうかさえ怪しい。そうなると残りは微妙なものしか残らないのだ。

「俺のおごりだ」

「……その、ええと、ありがとう」

オキシからは断ろうという気配を感じたが、キセノンに睨まれて素直に受け取ることにしたようだ。

「そうだ、子供は素直が一番だ」

キセノンはうなずいてオキシの頭をなでる。頭をなでられて、漠然とだがオキシは子供扱いというより、なんとなく小動物扱いされ

ているような気分にもなった。

「……子供じゃないのに、なあ」

「子供はみな、そう言うよ」

「まあ、そくだよね」

決して認めたくは無いのだが、今までやってきた好き勝手を思えば、わがままな子供扱いされても仕方が無い。

「じゃあ、行くか」

キセノンの案内に従って表に回り、虎豹亭に入った。

店の壁には色々なチラシが貼ってあり、右手にはカウンター席が数席、テーブル席は6つあった。奥には階段があり、そこを上がつていけば宿泊用の部屋が並んでいるのだろう。

昼ということもあってか酒場というよりは、大衆食堂のような雰囲気漂っている。今の時間帯は昼は過ぎたが、夕方には遠く、そのような中途半端な時刻と言うこともあり、店には客がいなかった。店に入るとすぐに従業員が話しかけてきた。

「キセノンいらっしやい。そして、はじめまして、僕はタンタルと言います」

タンタルは常連のキセノンには軽く挨拶をし、次にオキシのほうを見て自己紹介をした。

「こちらこそ、はじめまして。オキシ沖石です」

オキシはタンタルを見上げる。黄茶色のクセっ毛からのぞく獣の耳が、興味深そうにオキシの方を向いていた。

「オキシちゃんか。よろしくね」

「うん、よろしく」

動物の耳が生えていることへの驚きよりも、自分の名前がやっぱり「オキシ」になってしまうことの方が気になってしまう。

「キセノン、この子どうしたの？」

タンタルはキセノンに話題をふった。

「外の草原で、なんというか拾ったんだよ」

「まったくキセノンは、お人よしなんだから」

タンタルとキセノンの何気ない雑談をしている。

（この人はキセノンというのか。そういえば、彼の名前は聞いていなかったなあ）

「どうした？」

オキシが無言のまま、じつと上目でキセノンを見ている事に気がついて、キセノンはオキシの方に視線を落とす。

「いや、なんでもないよ。こっちの話。気にしないで」

今まで彼の名前を知らなかったなんて言うわけにはいかない。キセノンの名前を知ることができてオキシはにこやかだった。

「……なんなんだろう、このもやもやは」

何もかも、もやもやとした気分のキセノンなのだった。

「ちょっと長話しちゃったね。席はあいているから好きなのところに座ってよ。品書きは壁に張ってあるから」

タンタルが指差した先の壁には、品書きらしき文字×ニユーが書かれた紙が何枚か張られていた。

「ところでキセノンさん」

オキシは知ったばかりの彼の名前を呼ぶ。

「キセノンでいいぞ。どうした改まって？」

「キセノン……文字が読めない」

文字の色や太さやの配置などから、黒く太めの文字で書かれたのが品書きで、赤い文字が売り文句的な何かで、青い文字が値段だろうと推測することしかできなかった。

「でも仮に文字が読めたとしても、きつと何の料理かなんて分からないだろうな。なんとなくだけれど、何とか風なんとかとか、何と

か焼きとか書かれているんだろう？」

「まあ、あながち間違っではないが……字が読めないのか。好きなものとか、嫌いなものはあるか？」

文字が読めない者は、普通に存在するのでキセノンは何の疑問も感じることなくオキシに食べ物の好みについて尋ねた。

「嫌いなものは、たくさんある……ええと、魚と野菜はわりと食べれるよ」

途中キセノンの顔が一瞬怖くなったような気がしたので、食べられるものをオキシは言った。

「じゃあ、魚系のもの頼むぞ」

「そんなにたくさんは食べないから、本当にちよつとでいいよ」

「だめだ。しっかり食べる」

「……善処するよ」

キセノンは品書きを一通り見たところで注文する。

「今日のおすすめの『焼肉定食式』と、『焼魚定食？』をひとつずつ」

「??オキシはなんとなく「弱肉強食」とベタなボケを言いたくなつたが、すんでのところで堪えた。

注文し終え、キセノンはさっそく本題に入った。

「オキシは親とはぐれたのか？ それとも家出か？」

オキシの持つている持ち物からしても、旅をしているという雰囲気はなく、なんとなくそのまま出てきた気配が強く漂っていたのだ。「もう独り立ちはして、親元からは離れて暮らしているから……はぐれてもいないし、家出でもないよ」

大学へ通うことになった時点で一人暮らしは始めていた。

「そうか。一応、巣立ちはしたんだな」

「うん、巣立ったねえ」

「しかしお前の場合、乳離れの方がいいな」

キセノンは唇をくいつとあげる。キセノンのその言葉には大人

になって独り立ちしたという意味合いよりは、どこかまだ子ども扱
いな語感がひしひしとにじみでいた。

「同じような意味なのに、なんか嫌だな、それ……」

オキシはおもしろくなさげに、唇を尖らせた。すっかり機嫌を損
ね左手で頬杖をついて、右手人差し指でテーブルの上に意味もなく
円を描いては、その中心を指先で軽く叩く行動を繰り返している。

「まあ、いいけどさ」

「そうふてくされるな。ところで出身はどこだ？」

「出身？ ええと……遠いところにある小さな国だよ。……本当に

……とても遠いところだよ」

すねているオキシは、キセノンと目を合わせずに言う。その遠さ
は距離ではなく時空をも超えた、この世界に住む人は誰も知らない
本当に遠い場所に故郷はあるのだ。

「ここにはどうやって来たんだ？」

「……どうやって来たか？ なんて言うのかな……徒歩かなあ？」

キセノンはいくつか質問をするが、オキシの回答はどこか要領を
得ていないようにキセノンは感じた。オキシが何かを語るのを隠す
ためと言うよりも、どうやって説明したらいいのか戸惑っているよ
うな、そんな印象をキセノンは受けた。

「もしかして……記憶喪失なのか？」

キセノンはひとつの憶測に行き着いた。

「いや、そんな大それたものじゃないんだけど……」

異世界から来たことはあんまり明言したくないと思いつつも、今
いるこの場所が世界的に見てどのような地域、どのような地形の中
にあるのか、この世界にはどのような移動手段があるのか、そんな
基本的な事が分かっていないので、嘘をつくにしても持っている情
報が少なすぎた。

仮に異世界から来たと言ったとしても、電子顕微鏡を覗いたら、

白い空間に行き神様に会い、そして気がついたらあの場所において、自分でも理解していない現象をどういつふうに説明したらいいのか、よく分からなかった。

異世界から来たことを抜きで説明するにしても、含めて説明するにしても、どちらにしろ、どう答えらいいのか分からないのだ。

「別に記憶が無いから、どうのこうのという感じじゃなくて……本当になんて言うのかな……よく分からないと答えるしかないんだ。本当に実際のところ何が起きたかなんて詳しく分からなくて……記憶の喪失とまでは行かなくても、今現在の状況に混乱することがあるのは事実だし」

地球の日本にいた感覚が残っているからこそ、急に訪れることになった異世界との競合において、いくつかの物事にずれがあり、自分の置かれている境遇に対しての調節がまだできていない部分があるのだ。

（ああ、むしろ本当に記憶喪失でもいいような気がしてきた）

頭の中が本格的に混乱しだしている。何を言いたいのか、何を考えたいのか、よくわからなくなってきた。

「わけが分からなくて、ごめん。とにかく、今はそこらへんの状況の説明がうまくできないんだ」

「記憶の混乱か……」

むしろ、そういうのを記憶喪失と言うのではないのだろうか。

オキシがよくわからない不思議な現象によって異なる世界から来たことをうまく表現できないだけという事を知らないキセノンは、記憶を失ったためにあやふやだから説明できないのだと勘違いした。

オキシの今までの奇怪な行動や不安定な精神状態が、失った記憶と現在おかれている状況の記憶の不一致から来るものだとしたら？そう思えば、時々口にする「そうか、そうだった」とか「こつち

の話」とか、自分で納得するような言動の意味も納得がいく。

あまり深く尋ねるのは良くないのかもしれないと、キセノンはそういう誤解を抱いて、そう納得してしまった。

「何があつたのかわからないが、苦勞しているんだな」

「キセノンのほうが、苦勞してそうだけれど？」

見ず知らずの人間に対しても、こんなに面倒見がいいのだ。いらぬ氣苦勞も多いように思えるのだ。

「分からないことがあつたら俺に聞け」

「……ありがとう。でも、それは本当にキセノンが苦勞しそうだよ？」

オキシはこの世界のことはまったく言っていないほど何も知らないのだ。この世界の人間から見たら、記憶喪失だといっていいほどに。分からないことにいちいち丁寧に答えていたら、それこそ心勞ものである。

「まあ、俺のことは氣にするな」

「氣にするよ……その、今まで、いろいろ迷惑かけっぱなしだったし……、ええと、その、ごめんなさい、ありがとう」

異世界に来て、見たことも無い微生物に触れて異常なくらい高ぶりすぎていた感情は、冷たい水で顔を洗ったり、普通にキセノンと会話しているうちに、だいぶ落ち着いてきたと言っていいだろう。

正氣に戻りつつあると言つてもいい。今更ながら、かなりキセノンに迷惑や心配をかけていたことも認識し始めていた。

「まあ氣にするな。しかし、その自覚はあつたんだな」

「一応ね。しよっ……たまに、ああゆうふうになって、よく後悔しているよ」

「……そうか」

オキシが「しよっちゆう」と言いかけていたのをキセノンは見逃していなかった。

もしかすると記憶喪失ではなくて、寢食を忘れるほどに没頭した

ために最近の行動について、わけが分からなくなった可能性も出てきたと、キセノンは推察しだした。

それは、全くありえないことではないだろう。本人が混乱しているだけで記憶喪失ではないといっている以上、もう少し様子を見ないことには本当のところは分からない、とキセノンは思いなおす。

「はい、どうぞ。今はお客さんがいないから、もうすぐできるからね」

丁度その時、タンタルが食べるときに使う道具一式を持ってきた。オキシは机に置かれた道具のうちのひとつを、じっと見つめる。タンタルが持ってきた食器の中に見慣れない道具があったのだ。

「ねえ、これ何に使うの？」

平べったい小さなへらのような、細長い二等辺三角形に似た道具をつまみあげ、オキシはキセノンに尋ねた。

「それは、魚を食べるのに使う道具だ。ちなみに、そこは持つ所はそこじゃないぞ。こうだ」

キセノンは手本を見せた。

「こうか」

オキシはそう言っただけでその道具を持ち替える。その持ち方もどこか違和感があり、それこそ慣れていない子供のようにだとキセノンは思った。

（これは、いよいよ記憶喪失確定じゃないのか？）

この地域、否、この世界で一般的な道具を知らないという事実、早くもキセノンの中で記憶喪失説は限りなく確定に近い事実となり、オキシに対しての所見が「常軌を逸している子供」から「記憶喪失を自覚していない常軌を逸している子供」に変更されつつあった。

9・食物は地球と大差なかった。

「飯を食べたら、オキシはどうするんだ？」

キセノンは鱗に覆われた指を組み机に肘をつくと、オキシの方に視線を向ける。

オキシはその質問に、どう答えようか考える。本音を言えば、この異世界の微生物さえ観察できれば問題は無い。しかし、自分が本当に行きたい場所、たとえばさつきまでいた草原とか、あの用水路の周辺とか、日陰の湿った暗がりの辺りとか、他人に邪魔されないようなあまり人気のない場所へ行きたいと言おうものなら、そんなところに何をしにいくんだとキセノンに止められそうなので、到底言えるわけがない。かと言って微生物を観察すること以外のことは、取りたてて思い浮かばない。

「……特には考えていない」

結局そう答えることにした。

「それじゃあ、町でも案内するよ。初めてなんだろう？ この町は」

「この町は初めてだけれど」

この町は初めてであるというよりも、異世界の町は初めてなのだ。観光にあまり興味がないとはいえ、しばらくこの町にいるだろうか。町並みや雰囲気くらいは知っておいたほうがいいかもしれない。そう思いオキシはキセノンの提案に異存はなかった。

「案内ついでに、ギルド組合にでも寄っていくかな。うん、そのほうがいな」

「ギルド？」

キセノンは、日本ではあまり聞きなれない施設の名前を言う。

「行方不明者や家出人なんかの搜索を取り扱う施設があるんだ。もしかしたら知り合いが誰かが探しているかもしれないし、何か手が

かりが見つかるかもしれないぞ？ 行ってみるか？」

オキシを記憶喪失だと思いこんでいるキセノンはそう提案してくる。

「それに記憶喪失気味な子供と言うことだったら、数日くらいだったら保護してもらえらるだろうし、その間に仕事でも何でも探して金をためればいい」

何か情報があればそれに越したことはないのだが、無かった場合でも訳ありの子供だ、何の問題もなく寝床を貸してもらえらるだろう。

「ん、あ、うん……」

記憶喪失でも、子供でもないのだが、身元不明な者を警察署がどこかに届けるのは普通だろう。オキシはそう思った。

いくら調べても、自分がどこの誰だと言つのは出てこないだろうが、今はお金も全く無いし、少しくらいそこにお世話になるのも悪くないだろう。

「それに、ギルドはちょっとした仕事を紹介してくれるところもある。オキシは今、金を稼ぐ当てがないのだろう？ そこでギルドの登場だ。それこそ家の片付けの手伝いといった雑用から魔物の討伐まで、日雇いから長期の仕事募集まで色々あるぞ」

「仕事の紹介所かあ」

「すぐに見つかるとは限らないが、いってみるだけの価値はあるだろう」

「そうだねえ、行ってみるだけ行ってみようかな……駄目もとで」
ある程度生活するためのお金があると便利だとは思っているが、自分の好きなことをするのに影響が出るくらいなら、いっそのことお金はなくてもいいと思っている。

好きなことをするために必要なものはもうすでに持っているし、生活するうえで一番基本的で一番必要であろつ食料の問題は考えなくてもいいのだから。

「仕事が無かったとしても、野宿でも良いやと思っっているんだろう？」

考えていることはお見通しとばかりに、キセノンは鋭く瞳を光らせる。

「……多少は」

心の内を見透かされ、オキシはうつむき加減に小さく答えた。

「さっきも言ったと思うが、最近は通り魔なんてやつもいて、少し物騒なんだぞ」

オキシの危機管理能力は無いに等しいことを、キセノンは分かっていた。部屋があつたとしても確実に安全というわけではないのだが、無防備にそこら辺で熟睡しているよりは、はるかにましなのだ。「わかつてるよ。通り魔とか魔物抜きにしても、ゆっくり休む場所があることが、すばらしいというのは」

寒い日の布団は何物にも変えられない心地よさを持っているのだから。そのまどろみの中、やりたいことがあるから起きなくちゃいけないけれど、もっと夢見心地の中で寝ていたいという矛盾した気持ちと戦うことは嫌いではないのだ。そういった意味では、部屋があれば生活の質がさらに上がるのは間違いない。

「本当に分かっているのかどうかは、あやしいところだな」

「わかつてるよ、わかつてる。わかつているから、大丈夫」

オキシ自身も、あまり分かっていることを自覚しているが、便宜上そう言っておく。そして、そんな様子のオキシを見て、キセノンはため息をついた。

「ギルドには僕でもできそうな仕事あるかなあ」

オキシは話題の転換を試みる。ギルドへ行ったとしても、それだけが心配なのだ。少しでも興味が持てれば何とかなるのだが、あまり興味がないことはやる前から飽きてしまうのだ。

「まあ、すぐにできそうなのがなかったとしても……それだけ絵がうまいなら、広場かどこかで風景の絵とか人物とか描いて売ればい

いだろう。広場にはそういうことを生業としている者も何人かいるし、オキシの絵は通用すると思うぞ」

あの不気味な絵はどうかと思うが、植物を描いた絵を見る限り問題は無いように思えたのだ。

キセノンはこの町の中央広場で、観光客向けにそういうことをしている者たちがいるのを、日常的に目にしていた。毎回決まった数売れるとは限らないから本業にするのは難しいが、天気が良い日は人も多くいる。うまくいけば数日分のその場しのぎの金は手に入るだろう。

「絵、ねえ」

生き物のスケッチはよくするが、だからといって絵を描く行為事態が好きかどうかといえば、どうなのだろう？ オキシは自問する。

「僕はあんまり、そういうのは得意ではないんだけど」

「いや、充分うまいと思うぞ？」

「そんなわけではない」

キセノンのその言葉を聴いてオキシは、胸のポケットからチラシの裏で作った手作りのメモ帳とペンを取り出した。胸のポケットに入れていたため、用水路に落ちたときに濡れずにすんだ唯一の紙類である。

黄色や橙色と様々な色がある中、オキシが一番上にあつた白い色のチラシを一枚引き抜き、無言のまま何かを描き始めた。

時々顔を上げては、キセノンの顔を観察してる。オキシはどうかキセノンを描いているようだ。

「耳かと思ったら、それ角なんだね」

淡い緑の髪から見えていたのは、少し後ろに反った形の白い小型の角だった。爬虫類に耳介がないのは、異世界でも同じなのだろうか。そんなことを思いながら、オキシは描きあげていく。

待つこと数分。

「本当に大雑把に描いてみたけれど、人物を書くところな感じになるんだぞ？」

オキシはキセノンに紙を手渡した。

「すごいな。これは充分に良いと思うが？」

適当に描いたとオキシが言っていたように、確かに線は荒く輪郭のぶれも多かった。しかし、紙に描かれたそれは特徴が捉えてあつて、誰が見てもキセノンであると答えるであろう。これのどこに問題があるのかキセノンには分からなかった。

たった数分でこれだけのものが描けるのだ、もしもある程度時間をかけて描いたのなら、たとえば、そうオキシの持っている本に書かれた草花のように丁寧に描かれたのなら、どんな秀逸なものが出来上がるというのだろう。

「でも、その絵はどこか不気味だろう？ その表情がその感情が。植物や建物の時はまだいいかもしれないが、生き物の場合はその構図ではなくその表情を見る。ただ記す観察のための写生や、スケッチ図鑑にするのならばいいが……人に贈る、その人のための絵となると、いくらそれっぽくきれいに描いても……自分の絵に足りないものはそれなんだ」

見た目は似せることができて、自分の絵には心がない。それを写し取ることが、自分にはできないのだから。

「よくわからないが……」

言われてみればそのような気はするが、それは取るに足りない些細なことのように思えた。

「僕にもよく分からないよ。とにかく……特に人物画は得意ではないし、それに自分が納得しないものを売るなんてもつてのほかだ」

まじめな日本人の性だからなのか、職人気質だからなのかは分からないが、納得のいかないものはあんまり販売したくは無いのだ。

「まったく問題ないと思うのだが」

キセノンは紙をオキシに返そうとする。

「ん、それはあげるよ。せっかくだし」

描いたはいいものの持つていても仕方がない。それに、絵を褒められて悪い気はしなかったのだ。

「あ、ああ。ありがとう」

キセノンはそう言われしばらく描かれた絵を見ていたが、ふとなんとなくチラシの裏を見た。

真っ黒なインクで、先ほどオキシの本を覗いた時に見たような文字がそこに書かれていた。

あの本にオキシ自身が書きこんだと思われる文字は癖が強く混沌としていたが、この紙にある文字はそれとは異なり美しい直線や曲線を描いていた。型にはまった無機物のように、紙の上に整然と並んでいる印象を受けた。

精霊たちが使う文字にも匹敵するほど複雑な形を持つこの文字が、オキシの国で使われている文字なのだろうか。オキシはこの国の文字が読めないと言ったが、なるほどまったく違う文字を使う国で生まれ育ったのだらう。

「そこには『日頃のご愛顧に感謝して新春感謝祭、第2弾です!』って書いてあるんだよ。半分切れちゃってるけれど、開催期間とか目玉商品とか、書いてあるね」

キセノンがチラシの裏を見ているのに気がついて、オキシはチラシに書いてあることを読み上げた。

「イベントを知らせるチラシか。これは、ありがたく貰っておくよ」
偶然にもオキシの故郷についての情報を手に入れた。調べてみれば何か手がかりが分かるかもしれないと、キセノンは大切にその紙をしまった。

「おまたせ」

タンタルが、焼肉定食と焼魚定食を運んできた。木製の角盆に陶磁器の食器が並んでいる。見た目の配置などは地球のそれと変わらず見慣れたものだ。奇抜な色の食材や盛り付けで出てきたらどうしようと思っていたので、そこは安心した。

「これ、なんて言う魚？」

シーラカンスを思わせる原始的な尾ヒレを持っていて、なんとなく目が密集して複数あるような気がするが、地球の魚と大差ない造形の小型魚が2匹出てきた。

「スマニクだな」

「すまにく？」

「なんか少し発音が違うような気もするが、そんな感じだ」

「ふむふむ、これはすまにくという魚」

化粧塩のまぶされてぴんと張っている白いヒレと、焦げるとまではないかないう適度な加減の黄褐色の美しい焼き色が、見た目の不気味さを取り除き美しさを引き立てている。

一人暮らしを始めてから魚を焼く機会はありませんだったので、香ばしい香りは懐かしく、久しぶりに食べる焼きたての魚だった。

「いただきます」

と、言っただけのいいものの握りしめたこの道具の使い方が分からない。魚を食べるのに使うと聞いていたものの、それだけの情報では扱うことはできない。

「これ、どうやって使うの？」

オキシはキセノンに救難信号を出す。キセノンは嫌な顔せず手馴れたように、一つ一つ丁寧に教えてくれた。キセノンは本当に良い人だ。

あっという間に1匹目の魚はきれいに解体された。

「もう1匹のほうは、自分でやってみろ」

「うん、ありがとう」

「とにかくそれを食べてしまえ」

「うん」

キセノンが食べやすくしてくれた魚を片付けないことには、作業ができないのだ。

「あ、おいしいかも」

魚は白身で、身に歯ごたえがあつてなかなか滋味だった。その魚を、米に似ているが少し違う味と歯ごたえの穀物とともにいただいた。

2匹目の魚は自分の力で食べなくてはいけない。キセノンに教えてもらった通りに、なんとか作業をこなした。使ってみて分かったのだが、先端が少し細いので箸と同じような要領で魚の骨と身の下に入れることができるし、全体的にナイフのように平たい形をしているので骨を身から削ぐ時も比較的楽ではある。小骨や内臓もがんばれば除くことができる。

洋食とは異なり、頻繁に頭が付いたような魚の丸焼き食べるような文化があつて、食器はナイフ・フォーク的なものを使っているの
で、魚に対応した形の道具ができたのかなと、オキシは推察した。

（でも、箸のほうが使いやすいな……）

使い慣れない道具での食事は、時々もどかしくなるのだ。

「なかなかうまいじゃないか」

「まあね。僕の国ではこれと似ているようでちょっと違う道具を使って食べていたんだ。だいたいの要領は同じだし、完全に初めてつてわけじゃないからね。使い慣れた道具でだったら、僕だって頭から尾まできれいつながった状態の骨を取れるよ」

ちなみにオキシが解体した魚の背骨は4分割になってしまっている。

「そうか、早く上達すると良いな」

「うん。ところでキセノンのは何の肉を食べているの？」

肉が緑色の野菜と一緒に炒まっている。肉の見た目は地球のものと同じに見えた。しかし、地球にいた頃も肉はあまり食べていないこともあつて肉の種類の判別はあまり得意ではなく、もちろんこの異世界の肉も何の動物の肉つばいのかが分からなかった。

「これはモモーロの肉だ」

「ももろ、かあ」

うん、知らない生き物の肉だ。変な癖とかあるのかな。

オキシは羊肉はもちろんだが、牛や豚でもその日の体調きざんによつては、獣肉特有の癖が気になって食べられないのだ。比較的淡泊な鳥のささみや胸肉が辛うじて食べられると言つたところだろうか。

「それにしても、キセノンは食べるの早いんだね」

オキシは魚に手間取っていたせいもあるが半分ほどしか食べ終わつていなかったのだ。

「ゆっくり食べると良いさ」

「ごちそうさまでした」

なんとか完食した。両の手を合わせて食後の挨拶をする。

「オキシのところは、食後の祈りまであるのか？」

「あるよ。外国だと食前の祈りしかないところも多いと言つのは聞いたことがあるけれど、この国もそうなの？」

「食後の祈りは聞いたことが無いな」

「そうなのか。やっぱり、ここは自分の住んでいた場所と違う所なんだな。そうだ、風習ついでにこころ辺の地域特有のしきたりとかある？ やっちゃいけないこととか、気をつけなくちゃいけないこととか」

「聞いてどうする？」

「郷に入れば郷に従え、って言葉が自分の国にはあつてね。知らない

い土地にいる間は、その土地のしきたりにある程度従っておけば、あんまり面倒は起きないでしょ？」

「まあ、そうだな」

「たまに、きつと、おそらく、すっかり忘れちゃう事もあるけれど、知っているのと知らないのでは、何事も違うからね……」

とにかく目立たないように、いつのまにか溶け込んでいることが、邪魔されない第一歩なのである。

「しかし、オキシが何を知っていて、何を知らないのか分からないことにはなあ」

「ああ、確かにそうだよな」

その都度、聞いていくことにした。

食休みもほどほどにとったので、ころあいを見て席を立つ。

キセノンはタンタルに食事の代金を支払う。この世界の通貨は硬貨のようだ。穴の開いた銅色の硬貨を数枚支払っていた。通貨価値についても全く知らないと言うことに気が付き、それについても聞かなくてはいけないとオキシはそう思った。

「また来てね、オキシちゃん」

キセノンの支払いが済むと、タンタルは笑顔で見送ってくれた。こうして虎狛亭を後にし、オキシとキセノンは町へ繰り出した。

9・食物は地球と大差なかった。（後書き）

どうでもいい由来

モモ一口

（かつてスーパーで「モモ一口」と書かれた肉を見て、「もも一口」という動物に思いをはせてしまったことがある。実は「ももひとくち」だった）

10・水をさす者あり。

いい匂いのする小さな露店には、白い粉をまぶしてあるパンや薄く焼いた菓子があふれんばかり積みれ、赤く磨かれた果物が蜜に浸され星の散るように浮かんでいた。甘党の友人が隣にいたのならば、狂喜乱舞しそうな品ぞろえである。

その隣の露店には、風にふわりと揺れる蒼の羽根やら、ぼうつと光に散る碧の鉱石や、銀の蔦で編まれた御守りや籠や装飾品が目を引いた。

ところ狭しと並ぶ露店を見ると、色々と見慣れないものを見つけ好奇心があふれ出てくる。答えを求めているわけではないのだが、オキシは無意識のうちに「あれはなんだろう」「これはなんだろう」と言葉が表に出てしまう。

その疑問の多さにキセノンははじめ茫然としていたが、オキシのその単純な問いかけは別に答えを求めているわけではなく、「不思議で面白くて興味深いモノをみつけた」という意味合いで使われていると、そこはかとなくではあるが、すぐに感じ取った。

それにオキシが本当に尋ねたいと思っていることがあるときは、袖を引くなりキセノンの名を呼ぶなりして、気を引いてから問うという傾向があったので、「これは」「あれは」とただ言っている時は、適当に相槌をうつて乗り切っていた。もしかすると、相槌さえいらなかったのかもしれないが。

「ねえ、キセノン。そういうえば、ここはなんていう町？ なんていう国？」

向こうの露店の主が、時々「……の名物」と言っているのだが、人の喧騒に流されうまく聞き取れないのだ。

そう言えば、ここがどこなのかまったく把握していないと気がついた。それに先ほどまで観察していた微生物の生息域のデータを書

き込んでおきたかったので、町をぶらついているのを良いことにキセノンに尋ねた。観察場所を記すことも、その生物を知るうえで大切なのだ。

「ここはアクチノという国のフェルミという町だ」

オキシに問われ、キセノンはそう答えた。

「ふむふむ、アクチノ国のフェルミか。ありがとう、キセノン」
オキシは脳内にしっかりと記録した。

フェルミという単語を知ったことにより、向うの露店主が叫んでいた言葉は人のざわめきの中でも「フェルミの名物」と補完されて聞こえるようになった。

「おお？ あれはなんだろう。すごく真っ青な色で、動いている」
そして、例によって興味の対象はすぐに別のものに移るのだ。

南国の海のような色をした透明な石が糸につるされ、規則正しく左右に揺れている。石に何か仕掛けがしてあるのだろうか、その振り子に合わせ、小さな音を奏でている。オルゴールの金属の弾けるやわらかな音と、笛のような澄んだ音がする。音が鳴るたび、そよぐ風が踊るように石をまわりかけていく。

「ああ、なんだかお祭りみたいだ。露店ってあるだけで、ちょっとときどきするよ」

たくさんの露店が所狭しと並んでいるさまは、それだけで非日常的である。少しくすんだ赤や青の布製の日よけが通りに沿って群れをなし、その露店はずっと遠くまで続いていた。オキシはこのように並んだ屋台は、お祭りの時くらいしか見たことがなかった。

「少し栄えた町ならば、大抵どこでもこんな感じだ」

「そうなんだ」

神社を中心として栄えた門前町生まれのオキシにとって、この活気はどこことなく地元のお祭りの時期を思い出してしまい、どうしても心が躍るのだ。

天幕の下に雑多に山積みになっていると言っただけで、普段見かけるものでもどこか違うような、そんな不思議な雰囲気に染まってしまふ非日常的な景色になるように感じるのだ。

しかもここは異世界、積み上げられた物たちはオキシにとっては本当に見たことがない物ばかりで、その妖しい輝きの果物やお菓子や雑貨は、異彩を放ち見ているだけでも満たされる。

「この雰囲気は好きだなあ」

そのうち慣れてしまっただろうが、やはり町はにぎやかな方がいい。

オキシは次から次に目に移る珍しいものを眺めながら、きれいな布や葉で飾られたとりどりの町を通っていく。

「はぐれないように、この手を離すんじゃないぞ」

「うん」

オキシはぶら下がっている干物を見て、その下に並べられている物を見てと言うように、視線は忙しそうにしている。田舎者のようにおおぴろげにきよきよはしていないのだが、目だけはしっかりと忙しそうに辺りを観察していた。

「何か気になるものはあったか？」

「うん」

すれ違う人は鎧だったり不思議な輝きのローブだったり、ちょっとすすけた外套をまとっていたり、剣や弓や杖を携帯していたり、獣耳だったり、しっぽが生えていたり、甲殻だったり、変わった者ばかりだった。オキシにとって見れば全く違和感の無い素晴らしい仮装をしている集団にしか見えなかった。

「そんなにめずらしいのか？」

「うん」

先ほどから返事がワンパターンになってきている。かなり夢見がちな様子だ。はぐれて迷子にならないように自分がしっかり見えないといけない、キセノンは強く強く思った。

「ここが町の中心の広場だ。あの中央にある塔は町のシンボルのよ
うなものだな」

「おお？」

蒼玉のような冴えた青をした塔だった。この町のどこからでも見
ることができのではないかと思ってしまうほどの高さがある。も
しかすると町を出て草原から町を見ても先端が街壁の上に覗いてい
るのが見えるかもしれない。

円錐状の立体が見上げるほど天高く螺旋に伸びて、頂点で1周回
っている。その円周には丸いものが散っている。それは定期的に色
や形を変え、ますます不思議な様相を呈していた。そう、一言で言
うと変な塔としか形容できなかった。

この世界では何か意味のある形なのかもしれないが、いわゆる有
名芸術家が設計しました的なそういう謳い文句がありそうな、何と
も描写しがたい不思議な造形をしていた。

「あれがこの町のシンボル、か」

町で方角を見失っても、あれを目印にすれば何とかなるような気
がした。

広場には薬売りや装飾品売りはもちろん楽器弾きや大道芸をする
人など、そのような感じの人たちが行き交う人々相手に己の技能を
披露していた。

こんなに人がいるならば、紛れてここで絵を売っても変に目立た
なさそうだ。風景画ならいけるだろうかと、オキシはふと思う。

絵を売るという行為はなんとなく踏みきる勇氣はないが、キセノ
ンが「良いんじゃないか」と言ってくれたので、「旅の思い出に絵
葉書を一枚いかがですか」的なことを、やってみても良いかもしれ
ないと、少し心が動く。

それにしても人が多い。人の波は流れ渋滞することはないのだが、時々方がぶつかってしまいそうになるほどに混んでいた。

「……ちよつとだけ歩き疲れたかも」

いつも研究室と自宅の往復くらいしか出歩いておらず慢性的な運動不足で、しかも久々に人の多いところを歩いて、精神的に少し疲れたのだ。

「少し休むか」

「ごめんね、体力無くて」

広場にある噴水の縁の一角が空いていたので、そこに座る。

噴水の噴出口に穴はなく、代わりに三角錐のアクアマリン藍玉のような透明な空色の結晶が水に沈んでいた。その鉱石に水は集い空にしぶきをあげ舞うのだ。

「飲み物か何か買ってくるから。オキシはここでおとなしく少し待っていられるよな」

「もちろん大丈夫」

オキシは胸を張って言っているが、キセノンはどこか不安そうな面持ちをしていた。

「とにかく、ちよつと行ってくるから、ここを動くなよ？」

「分かった」

キセノンはオキシを残して人ごみの中へ消えた。

「行っちゃったなあ」

オキシは握りしめていた右手を開く。そこには光沢の無い灰色の硬貨が1枚あった。新品のときはもっと輝いていたかもしれないが、長い間人の手を渡るうちにくすんでしまったのだろう。

この硬貨は通りを歩いている時に、この国の貨幣についてキセノンに聞いた時に1枚もらったのだ。

オキシが今持っている硬貨は一番安い硬貨で、露店に並ぶ食べ物はこの硬貨が2、3枚あればたいがい買えると聞いた。

ちなみに、先ほど食べたような食堂ならば灰色よりもひとつ上の価値がある銅色の硬貨が2枚もあれば満足の良く食事が取れる。そして、部屋を借りるときは銀色の硬貨が1枚あれば2・3日、黄金色の硬貨が1枚あればおおよそ半月、真っ白い硬貨が1枚あれば一月程度、贅沢はできないがなんとか暮らせると言っ話だった。

他にも赤色や黒色の硬貨があるらしいが、それは一般庶民ではなかなかお目にかかれない珍しい硬貨らしい。基本的には、灰色と銅色と銀色の硬貨が一番日常的に使われていると言っことをオキシはキセノンから聞いて知ったのだ。

「ちよつとだけ50円玉に似ている」

この世界の硬貨は総じて真ん中に穴が開いており、その周りには文字のような模様が小さく刻まれている。今オキシが手にしているその硬貨は、例えるなら古くなって光沢の無くなつた50円玉のようであつた。硬貨の大きさは50円玉よりも大きく、同じように穴も幾分か大きいが。

オキシは硬貨に開いた穴を左目で覗き込む。

そこから青い空が見えた。空を鳥に似た生物の群れが横切つていく。視線を少し下に移すと高い石の壁が見える。この壁は魔物が侵入しないようにするためのものだ。町の外周が壁で囲まれている以外は木造の家屋が並んでおり、日本でも昭和の古い町並みが残る場所のような風景であつた。

「大人しく待っているようだが」

興味深そうに硬貨の穴から世界をのぞいている様子は端から見れば実にほほえましく、親を待っていて手持ち無沙汰な子供の行動にしか見えなかつた。

「さつさと買つて、さつさと戻るか」

大人しくしているのは大変いいことなのだが、あんまり放つてお

くと今度は手がつけられなくなるくらい熱中し始めるに違いないのだ。

広場の噴水の縁に座っているオキシは、先ほどまで町の景色に目を奪われていたが、次は通りを歩く人たちが興味の対象となっていた。

ものめずらしそうに辺りを見る者の存在は、旅人がよく訪れるこの町においてはさほど珍しいものではない。それは単なる日常の風景のひとつであり、特にそれについて気をとめるものは少ない。

オキシの容姿はこの世界においては馴染みのないものなので、町に行く人も横目にするのがあり時折視線がかち合うが、それ以上のことはなく人は変わらず通り過ぎていく。

「あ、キセノン発見」

覗き込んだ硬貨の穴の先でキセノンを見つけ、穴越しに目で追ってみる。キセノンは露店で何かを買おうとしている所だった。

（こうやって見ると、案外キセノンの姿って溶け込むんだ）

キセノンの緑系統の髪は日本にいたらかなり目立つ部類に入るだろう。しかし、この世界の人類は実に彩り鮮やかな色をもっているのだ、たとえば地球ではありえない配色だったとしても違和感無くそこに存在している。

（それにしても、本当にみんなガタイがいいなあ）

通りを歩く人々は男女問わず体つきがしっかりした人が多い。武器に身を包んでいる彼らは魔物の駆除を生業としている者である。ならば毎日鍛えているに違いなく、立派な肉体を持っていても何の不思議は無い。

（これじゃあ、僕が子供に見えても仕方ないかも）

オキシは日本人の平均的な体型であつたが、殆ど運動もしない、食べるものも食べないという健康的とは言えない生活をしていたの
で、この屈強な中にいては、かなりひよろひよろしているように見えるかもしれない。

（食肉類^{イヌ・ネコ}とか、偶蹄類^{ウシ・シカ}とか、無尾類^{カエル}とか。……それから、いろいろ混ざつた合成獣^{キメラ}っぽいのもいるな）

外見の形は地球の人間と変わらない者が多いが、時々かけ離れた奇妙な風貌に出会う。それがなんとも不気味で幻怪でありながら、どこか夢幻的で心が弾んだ。

（獣人^{モンスター}つてやつは、話で聞くのと実際に見るとでは、驚きも違うのだな。百聞は一見にしかず、いい体験をしたよ）

小説やゲーム等あまり手にしてこなかったが、『魔物事典』や『幻想動物博物誌』といったような、さまざまな作品に登場する生物を集めた設定集のような図鑑の類は人並みには読んでいた。

物語の内容や登場人物たちの個性についてはあまり盛り上げられなかったが、^{ファンタジー}幻想的な話題についていけないほど、その世界観を全く理解できないわけではなく、話に混ざつて相槌をうてる程度の知識は一応持っている。

（しかし、この世界の遺伝法則がものすごい気になる。しかも、見た目が明らかに異種族なのに交配できて、しかも何の問題もないなんて、なんか変な感じがする）

異種同士の夫婦とその子供らしき姿もちらほら見かけるのだ。

自然の摂理も違っているのだろうか。彼らを見てみるとそれが非常に不思議で、異世界の遺伝子はどうなっているのだろうかと思ひな
つてしまう。

しかし地球でも細菌同士でなら異種で接合することもあつたくらいだから、実は何も不思議なことはないのかもしれない。

（ああ、微生物のそういうところの遺伝形態も、もしかしたら地球

では考えられないことが行われていたりするのかな。有性無性問わず生殖の様子も是非とも観察してみたいな。別々の個体だったものが交わって、新しい一個の生体になっていく様子なんか、本当に生命の神秘だよ)

「……ん、あれは何だ？ (どれが手？ 足？ 何本あるんだろう。絵に描いたような頭足類的な火星人だな。コロっとしていて、キモかわいいと言うのか、なんと言うのか……)」

『あれはね、オウムガイだよ。タコとは少しちがうね』
移りゆく思索をめぐらせていると、その思考の中に突然、ふいに少年のような声が混ざってきた。

「ん!？」

オキシは辺りを見回すと硬貨の穴越しに目が合った。空の色を映したような薄い青緑の色である。

(これは……なんだか、ちょっと面倒くさい予感がするな)

頭の中に声が響いているのだ。それだけで調子が乱されてやつかいのに、何か誘われでもしたら、断るにしても何をするにしても相手をしなくてはならない。本当に煩雑であるという言葉に尽きる。

「ところで、君はいつたい……何？」

誰、ではなく、何と問うてしまう。それは手乗りサイズのゼラチン質な人型で、噴水のみずたまりから少し浮かんだところにいたのだ。

『何かといわれれば、おいらは水の精霊だよ』

液体の人型はそう答えた。

「精霊？」

精霊は自然の具現化した形と言うけれど、なるほど、その薄く色づいた透明な体は水で構成されているようだ。

（それならば正確には生物とは違う成り立ちなのか？）

『そうだよ。この町を流れる水の「流れ」から生まれたの。精霊の中では若い方だけど、それでも数百年はこの場所で水の流れを見ているよ』

オキシが疑問を思い浮かべれば、精霊は心の声が読めるのか答えてくる。

「精霊なのか」

精霊と言う名の半透明な液体生命体があるか探ろうと、よく『見て』みよう？？つまりは顕微鏡の眼の能力を使って凝視した。精霊の表皮は何か得体の知れない作用が共鳴して膜のようになっており、体内の液体を人型に保っていた。そして、その内部に保有している液体の方は、不純物が一切含まれておらず、原子と原子が揺らめきながら綺麗に結びつき、ときに散りながら水の分子を作り上げていた。構造的に見ても純粋な液体しか存在しないことが伺えた。これほど純度が高い水はぜひとも微生物の培養の時に使いたいものである。

「……いいね。まるで机の上に描いたお手本のように純粋で理想的な状態だ」

それが生き物でなかったら、まちがいに培地の材料として確保してしまうほどにすばらしいものであった。

「それにしても、てつきり固体^{ゲル}のコロイドかと思ったんだけど、何度見てもこれは完全な液体の状態。しかもそうでありながら、それは流動もせずそこにとどまっている。これは膜なのか壁なのか殻なのか、まるで分からないものに覆われている。体内に見えるのは本当に水のみで、目と口と言った顔らしき器官は体表にあるが、それ以外には核や液胞も何もない、なんらかの器官も何も見当たらない。間違いなく何の雑じりつけも無いただの水だ。だのに、生きて

いると分かる生命体。本当に得体の知れない不思議な世界だな、こ
こは」

純粋な水であるのはわかったのだが、その水に大きな動きが見ら
れないにも関わらず、腕や脚のようなものが動いたり、髪のような
ものが揺れたり、外見の形が変わる現象というのは、観察してい
てまことに不思議なものであった。

オキシは、精霊を仔細に眺めながら己の感じたことを一方的にま
くしたてた。

『ん？ ほとんどは何を言っているのか早くて聞き取れなかった
けれど、おいらって不思議で理想的なの？ すごい？ かつこう
いいの？ おいらほめられてるの？』

精霊は、彼女が自分の何かを絶賛していることだけは感じるこ
とができた。

「その通り、僕はとても感動しているんだ。本当にいい物を見た、
ありがとう」

できればもう少し観察をしたいところであつたが、この精霊の
声は頭に響いてどうにも集中できなかった。

『ねえ、ねえ、ところでこんなところで何していたの？』

「僕は人を待っているんだ。暇だったから、こうやって世界を見て
いたんだ」

オキシは硬貨を目にあてる動作をしながら説明した。

『そうなんだ。あのね、もしよかったら、おいらと契約しようよ！』

精霊は瞳を輝かせオキシにそう誘う言葉を放った。

「け、契約？」

これはまた面倒くさそうな響きの単語に、オキシは精霊を見つめ
た。

期待するかのように精霊の青緑の瞳が、ますます深く空の色に輝
いていた。

11・水を向ける者あり。

精霊は変わらない毎日に飽きはじめていた。若い精霊は総じてすこし刺激的で面白そうなのが大好きである。しかし、ここしばらくはそのようなことは体験していなかった。

この町を流れる水はこの精霊そのものである。今日も気ままに水の流れに身を任せ、何事もなくいつものように平凡な日常が過ぎていくのかと思っていたのだが、その水流に何か変な気配が伝わってきたのだ。

何かが水に落ちた。それは、この世界になじんでいないような何か違和感を感じる気配であった。その精霊の感知範囲の中に、面白いく分らないモノがやってきたようなのだ。

精霊の元までその情報が届くまでに少し時差がある、今そこへ行ってもその場所にはいないだろう。しかし、まだそれほど時間が経っていないので、その場に残っているかすかな気配をたどっていけば見つけることができるだろう。

精霊は時を移さず、気配が濃く残っている『それ』を感知した場所へ向かう。『それ』の気配は、虎豹亭裏の用水路からはじまり、その後は食堂の中を通り、町の広場の方へ伸びている。そして、その終点で見つけたのだ。硬貨の穴越しに世界を見ている『者^{それ}』を。

最初は単なる興味で眺めていたのだが、それがまとう魔力の特質に気がついた時、己も魂が震える思いに駆られてしまった。

精霊は『おもしろそうなこと』が大好きだが、それと同じように『不思議な魔力^{おもしろ}』にも目が無い。これがなかなか面白い気配の持ち主であると気がつき、ぜひとも話がしたいと思ってしまったのだ。近年まれに見る心地いい魔力に、ついほくほくと気持ちが弾んでしまい何をしているのか声をかけてしまった。

精霊には分かっていた。彼女が見える類の人間だということが。

声をかけると案の定、振り向いた。特に驚きもせず、しばらくじっと見られたが、非常に感動しているようなので悪い気は全くしなかった。気分も最高だったので、何の迷い無く「契約したい」と自然に口がそう動いてしまったのだ。

「契約？ ……ごめん、断わるよ」

しかしオキシは、精霊の申し出を辞退した。

『ええ、そんなこと言わずに、おいら便利なんだよ。契約しようよ』

「そんな、急に言われてもな」
オキシは眉をひそめた。

特に契約と名のつくものは、意味も分からないまま軽々しく結ぶものではないし、精霊と契約を結ぶと言うことがどういうことなのか、未知の領域で判断が難しいのだ。

と言うよりも、神という存在に遭遇しただけでも納得しがたい出来事なのに、さらに精霊と言う存在の遭遇に、本音を言ってしまうばオキシは今、理解の範疇を越えている存在に畏れを感じている。

自分の中で受け入れる準備ができていない、いわゆる不可解な怪奇現象を身近に置いておきたくない心理が働いてしまっているのだ。

「なんというのか精霊と契約するということの意味がよく分からないんだよ。契約は相互の理解や合意が必要だろう？ 内容がよく分からないのに、そう契約だけ迫られても……」

『あう、おいら急ぎすぎちゃった？ そうだよ、理解がないまま契約を結ぶのはよくないよね。ちゃんと説明するから！』

精霊は契約の内容と自分がいかに役に立つかを熱弁しはじめた。

精霊の話によると、契約は『魔力を報酬に精霊がそれに見合った力を貸す』と言う至極単純なもので、水の属性を持つこの精霊ならば「物体を水で包んで流す事」はもちろん「水に濡れないようにす

る事」もできる。『水に関することなら任せて』と精霊は両腕を腰にあて、得意げに胸を張りそう語った。

「ふむ、僕の魔力ってやつを君が食べることで、より多くの水を操めるのか？」

『そうだよ』

オキシは最初は気乗りがしない様子で聞いていたが、いつしか精霊の言葉に耳を傾けるようになっていた。

「水を操るということは、水を気化……つまり蒸発というのか、乾かすというか、そういう状態変化もできるのか？」

『もちろん、乾かしたり、凍らせたりもできるよ。でも、水の状態変化はおいらの性質だけじゃ限界があるから、大きいことは無理だけれどね』

「だいたいわかった」

オキシは左手の人差し指で鼻の辺りに触れる仕草をする。「おつと」と言葉を発し、何か思い出したような表情になったが、すぐに気を取り直して考え込んでいる。

この精霊ならば、不純物のない水を作ることなど朝飯前だろう。それに、ほかの物事に対しても色々な場面で使えるだろうと、オキシは結論付けた。

「うるさくしないなら、契約してもいいよ」

『やった』

オキシのその答えに精霊は喜んでいいる。

「それにしても、僕に魔力なんてものがあるんだな」

『ちよつと変わった魔力を感じるよ。珍味な気配かんじがするの」

「そうなのか。……僕の魔力が珍味ねえ。しかし、僕は魔法を知らないし……しばらくは、精霊の餌付けにしか使い道が無いだろうな
あ」

『おいら餌付けされたの?』

「そうだよ。餌付けされるほうはエサを求めて腹を満たし、餌付けするほうは自分の心や好奇心を満たす、お互いに満足する結果を得る。それを餌付け行為と言わないで、なんというのだろう?」

オキシはすました顔で平然と言う。

『おいら、餌付けされちゃった』

なぜだか知らないが精霊はうれしそうにしている。

「……で、契約するには、何をどうすればいい?」

『まずは、おいらの名前教えるね。おいらは、ロゲンハイド』

「ロゲンハイド、か。……ハイドロジェン水素を並び替えたような感じの名前だな」
自分の名前はオキシジェン酸素のような発音で呼ばれ、この精霊の名前は並び替えれば水素のようだ。
ハイドロジェン

酸素と水素が契約を結んで水を操る、文字だけで見れば、電子を共有して結合している「ジハイドロジェンモノオキサイド一酸化二水素」、つまり「水」になりそうな組み合わせだ。

それはまるで酸素と水素の化学反応のようではないか。まるで「神が用意した」ような、できすぎた偶然にオキシは苦笑いを浮かべる。

『おいらの名前はロゲンハイドだよ! ロゲンハイド! ハイドロなんとかじゃないよ』

「こつちの話だから気にしないで、話の続き聞かせて」
そして、契約についての話を続けるように促した。

「じゃあ、今度はお姉さんの名前教えてよ」

「お、お姉さん?」

精霊のその言葉にオキシは驚いた。いつも性別不詳に見られることの多い??むしろ、髪を短くしてからは少年に間違われることが多かったのだ。偶然かもしれないが、精霊はよどみなくはそう言っ

ただ。

「お姉さんの気配はちょっと変わっているけれど、おいら達にはそれくらいなら簡単にわかるんだよ」

精霊というものは、そういうものらしい。

「そうなのか。ええと……僕の名前は、おきいしじゅんな沖石 醇奈だよ」

少し驚いてしまったものの、オキシはすぐに気を取り直し、本名を名乗った。

『オキイシジユンナちゃんか、いい名前だね』

「ちゃん付けか……まあいいや。ロゲンハイドちゃん、僕はどうすればいい？」

オキシは、ロゲンハイドに名前をだいたい正確に発音してもらえた嬉しさに自然と笑ってしまった。

『おお。おいらも、ちゃん付けされちゃったよ』

ロゲンハイドは、なぜか笑みを浮かべたオキシを見て、少し照れ気後れ気味になってしまう。

『ちょっと待っていてね』

気を改めた精霊は、噴水の水面に光でできた魔方陣を展開し始める。ヒエログリフ神刻文字のような象形の文字で描き終えると、それをひよいと持ち上げてオキシの前に差し出した。

『でね、ここに「ロゲンハイドと契約結ぶ」って思いながら手を置くの！』

ロゲンハイドは魔方陣の一番下にある空白の部分を指差した。

「これは、契約書みたいなものか」

『そうそう。それで契約は終わり！』

「かなりいい加減なんだな」

契約はこんなに簡単でいいのだろうか。

『本当は色々儀式が必要なんだけど、きつと面倒でしょ？』

「まあ、そうだけど。大丈夫なのか、こんなので」

『形式にこだわるのは、大昔からいる精霊だけだよ。実は、あんま

りそういうの気にしない精霊が多いんだよ」

精霊の世界でも、「近頃の若者は」とか言われていたりするのだろうか。そんなことを思いながらオキシはロゲンハイドの話を聞く。「人間社会で言うところ、とにかく判子さえもらえれば提出しても処理的に問題ないからいいやつて感じと言ったら良いかな！」

「そういうものなのか」

オキシはロゲンハイドが差し出している魔法陣に触れた。光でできている模様なのにしっかりと感触があり、手渡しができることに摩訶不思議な力を感じずにはいらなかった。「やはり、魔法は得たいが知れない」と、考えながらもそれを受け取った。

そして、ロゲンハイドが言うように、「ロゲンハイドと契約結ぶ」と考えながら魔方陣に手を置いた。魔方陣は光り輝くと回転しながら2つに複製し、片方はオキシの、もう片方はロゲンハイドの体内に消えていった。

「これで契約ってやつは終わりか」

『そう、よろしくね』

「ああ、よろしく。……さて、僕は観察活動に戻るよ」

精霊についてはもう興味がなかったように、オキシは再び景色や人を観察する作業に戻るのだった。

『え？ えええええ？ ああ、もう少しかまってよ』

予想外の薄い反応に、ロゲンハイドはオキシの白衣を引っ張り気味に気を引こうとする。

「頭の中が、なんだか騒がしいな」

精霊の言葉は聴いてはいいたが、特に内容の意味までは深く意識を向けておらず、ただの雑音の一種としか認識していなかった。ふだんであれば、その程度ならば完全に無視できるのだが、頭の中に

直接響くその違和感のせいで、どうも波に乗れないでいた。精霊が意識下にやってきてから、あまり観察に深く『集中』できないのだ。

「ん……ちょっとうるさいぞ、この噴水の底に沈めるよ？」

少し騒がしかったので、オキシはいつものように言葉をはく。

『あゝん、いじわる！』

その言葉はかなり本気であることを感じた精霊は、おとなしくオキシの肩に座り一緒に硬貨の穴をのぞいてみる。精霊の重さや感触は、意識しなければ無いに等しい。現にオキシも肩に乗っている口ゲンハイドを全く気にしていなかった。

『楽しい？』

口ゲンハイドは問う。

「うん」

オキシは短くそう答える。

『……そつかあ。飽きない？』

「うん」

『……つれない』

『あ！ オキシちゃんの知り合いっぽい人が、こっちに来るよ』

脳内に響く声は、嫌でも認識してしまう。だから、そう告げた精霊のその声もオキシにも支障なく届いていた。

「え？ もう、キセノン戻ってくるの？」

オキシが視点をそちらに移せば、確かにキセノンがこちらに向かって来るのが見えた。残念ながら観察の時間は、ここまでだ。

11・水を向ける者あり。(後書き)

「水を向ける」

(1) 巫女が霊を呼び出すときに水をさし向ける。

(2) 相手の関心を引くようにそれとなく誘いかける。気を引いてみる。

今日みかけて、意味を始めて知った言葉。ちょうど良いので今回のタイトルに使ってみた。

1 2・「2 H? + O? 2 H? O」の契約。(前書き)

機種によってはサブタイトル正しく表示されなかったり、小さく見えにくいかも。

ちなみに「2 H 2 + O 2 2 H 2 O」(水素と酸素で水になる)という化学反応式が書いてある。

12・「2H? + O? 2H? O」の契約

この世界に住む大半の人は精霊が出現しても、そこにいるという気配をなんとなくしか感じることでしかない。しかし、ここは人の集まる広場と言うこともあつて精霊を見ることが出来る能力を持つ者たちが何人かいた。

精霊が現れた、それだけなら少しも珍しいものではない。精霊はどこにでもいて、いつでも気まぐれに現れるのだから。

しかし、今回はいつもと異なっていた。広場の一角から契約時特有の魔力の流れが発生したのである。それは、今まさに契約が行われたことを彼らは感じていた。

「何やってるんだ、あいつは」

キセノンは、そのあらましを見ていた。この広場に満たされた気配を感じて振り返ってみれば、それを行っていたのがオキシだったのだ。

「本当に、目を離すと何をしでかすか分からんな」

今回は精霊だったからよかったものの、この調子じゃ口のうまい悪人にもついていきそうな勢いだ。

「面倒見のよさそうな精霊だったら、いいのだが」

買うものを買ったキセノンは、オキシの元に急いで向かった。

無論、それを感じたのはキセノンだけではなかった。

「こんな町中で精霊の契約、か」

フォスファールはそう思った。どこでそれが行われたのかは不明だが、この広場のどこかでそれが行われたのだけは確かだった。

『最近の若し者は、なっておらぬ』

彼に付き従う赤い精霊は嘆き、炎がゆらめくように深いため息を

ついた。

「このような小さな田舎町にいるような精霊の格は、たかがしれているだろう」

『左様、未だ物知らぬ、生を得たばかりの幼子じゃ』

町に憑く精霊は、その地に住む者たちの営みが作り上げる。この地に人が住み始めてから数百年、かの精霊もその流れとともにあった。しかし、何千年もこの大地に在ったこの炎の精霊にとって、数百年も存在していない者はみな、幼子なのである。

「まあ、わたしには、どうでもいい事だがな」

彼はそれ以上のことは気にもとめず足早に広場から去っていく。こんな些細なことで、自分の貴重な時間を無駄にするわけにはいかないのだ。

(どうやら、あの子契約したみたいね)

ギルド
組合で受付嬢として働いているサルファは仕事の手を止めて、そこからかろうじて見える場所にある噴水のほうを見ていた。その噴水の縁に座っている子が、どうやら精霊と契約をしたようなのだ。精霊と契約を終えた黒髪の人間は辺りのざわめきなど全く気にした様子もなく、硬貨の穴から世界をのぞき始めていた。これ以上進展がなさそうだと確認すると、彼女は自分の作業に戻るのだった。

このように精霊を感じ取れる人々の中だけではあるが、オキシの知らない所でこの出来事は知られていたのであった。

「待たせたな」

買ってきた飲み物を差し出しながら、キセノンはオキシの傍らにいる精霊に目を向けた。

「……で、その精霊と契約したのか？」

「この人も精霊が見えるんだね！ しかも、契約しているね？」

「ああ、風のと、ちよつとな」

ロゲンハイドとキセノンは、普通に会話をしていた。

「ん？ あれ、普通にしゃべれるの？」

ロゲンハイドが声を音として発音していることに、オキシは気がついた。

「しゃべれるよ」

「じゃあ、今度からはそれでしゃべってよ」

てつきり精霊とは会話するには脳内でしかできないのかと思っていた。普通に音を発して会話ができるのなら、最初からそうしてくれば良かったのにと、オキシは思う。あの直接頭の中に声がひびくのは、むずがゆく気色が悪いのだ。

『覚えていたらね』

ロゲンハイドは「くくく」と笑い、頭の中に語りかける。

「やっぱり噴水の底に沈めてしまおうかな」

思っていることが口に出てしまう。

「ふむ、この精霊は見たまんまの水の精霊か」

オキシの悪態は放っておいて、キセノンはロゲンハイドを満たす属性を見ていた。

精霊は基本的には己の性質にのつとつた容姿をとるが、人が様々な服を着こなすように見た目と反する属性の外見を好んでとる精霊も時々いるのだ。

たとえばそれは風の精霊に多い気質なのだが、いわゆるおしゃれ好きな精霊になると、呼び出すたびに見かけが大きく変わっていたりするのだ。しかし、どんなに姿が変わったとしても、本質は変わらないので、慣れてしまえば惑うこともなくなる。

「そう、水を操れるんだって、すごいよね。これで風呂とか洗濯の

手間要らずになったわけだ。もう泥だらけになっても、見つかる前にどうにかすれば、誰にも文句は言われまい？」

オキシはにこやかに口走る。

「おう、おいらは汚れを落として、乾かすよ！」

ロゲンハイドは、小さな腕で胸たたく動作をした。

「これからよろしく頼んだ」

「まかせとけ！」

オキシとロゲンハイドは、手のひらと手のひらを合わせた。

「お、おまえらなあ」

キセノンは呆れてため息しか出てこなかった。

「それにしても、キセノンも精霊と契約しているのか。風の精霊か、さつき使った乾かす魔法は精霊が？」

キセノンが風の魔法を使っていたのをオキシは思い出した。

「いや、あれはオレ自身の魔法だ。オレの精霊はなんと言うのか攻撃専門なんだ。まあ、そのうち機会があれば紹介するよ。あれは、町中で呼ぶにはちょっと危険すぎるやつだしな」

「危険なんだ」

「呼び出してすぐ口にするのが『どいつが相手だ』だからな。何よりも、たまに爆風と共にやってくる」

しかも、それは好んで火の精霊に擬態しようとする、激しい性質を持つ風の精霊である。

「そ、それじゃあ、町で呼ぶのは難しいね」

「おいらも、あいさつ代わりに小規模だけど爆ぜれるよ！」

ロゲンハイドは手を天高く掲げた。その手のひらに小規模ではあるが、何かが集まっていくのが見えた。

オキシは思わずロゲンハイドの手を握り下ろした。するとその不穏な気配は急速に大気に散っていった。どうやらそれが発動する前

に拡散させることは成功したらしい。

「ロゲンハイドちゃん、マネしないでいいからね」

「ちえ、この程度なら、町中でも大丈夫だったのに」

ロゲンハイドは残念そうに舌を鳴らした。

「まあとにかく、ほら飲み物だ」

キセノンはオキシに買ってきた飲み物を手渡した。

「ありがとう」

オキシはキセノンから飲み物を受け取った。

紙製の器に入った飲み物は澄んだ黄色をしていて、何の草の茎が分らないが麦稈ばっかんのような中空の細い筒状の道具がささっている。これはどう見てもストローである。

異なる世界であっても似たような生活様式を持つ文化があれば、生活用品も近似した形質になっていくのだろうか。そういえば、さつき食べた食堂の食器も地球と変わらない物であったし、同じ用途に使う道具は似通った形に洗練されていくのだらうと、オキシは考察した。

こういう麦稈のような茎を使い捨てのストローとして流通させることができるのなら、穀物のようなモノを育てている田畑がたくさんあるのだらう。

食肉も普通に流通しているようなので、何か干し草を食べるような家畜のような生き物も飼って可能性は高い。そうであれば、畑の一角に飼料貯蔵庫サイロがあるだろうか。それがあれば最高だが、無かったとしても、長期保存可能な飼料にする工夫はなされているはず。そういうものが存在せずに、ただ土に埋められて肥料になっているだけだとしても、そういうところにはそれらを分解する微生物がたくさんいるだらう。

最悪、手間と労力はかかるけれども、牧草ロールベールロールくらいは自力で

作れないことはないのだ。

（乳酸発酵やアルコール発酵といった有益そうな発酵をあえてしないで、普通にカビさせたり腐敗らせたりするのも、また別な面白い一面を見ることができそうだから、それはそれで一興かもしれない）
そんなまだ見ぬ微生物のことを思いながら、オキシは管に口をつけて液体を吸い上げる。甘さと、さっぱりとしたほのかな酸味の香りがした。

「うまいか？」

「ん、不思議な後味だけれど、甘くておいしいよ」

アストロのみ
「星の実ベースだからな。子供に大人気なんだ」

「ふーん、子供に人気のねえ」

この甘くて飲みやすい味は、確かに子供向けのようにも思える。

（おいしいのは認めるけれど、ささやかに子ども扱いされてるような気がするのは、なんだか嫌だな）

「それにしても、案外普通に待っていたな。また話にならないような状態かと思っただぞ」

キセノンはオキシの頭をなでる。見ていたことには間違いは無いが、思っていた以上に普通の状態だったのだ。最悪の場合、あの草原で見かけた時のように『何か』をじっと見ていると思っただのだ。

頭をなでられたことにオキシを眉をしかめ微妙な顔つきをしていたが、全くうつとうしいというわけではなさそうだった。

「まあ、いろいろあつたしね」

精霊と契約したのだ。

「あと、こんな人の多いところでは、あんな風にはならないよ。たぶん、基本的には……」

声が小さくなっていく。ロゲンハイドが話しかけてこなかったら、先程も危うくまたどうしようもできないくらい、のめり込んでいたかもしれないことを思い出す。

「ああ……すごく気になることがあったら、だめかもしれない」

今回はロゲンハイドが頭の中に話しかけてきたので、それが気色悪くて思ったように観察できなかったただけなのだ。気になることがあれば、人目がある場所だろうと無かるうと、本当に些細なきっかけで、気持ちが高ぶり我を忘れてしまうとも限らないのだ。

「だろうな」

まだ出会ってから間もないが、それだけははっきりと分かるような気がするのだった。

オキシは飲み物をごくごく飲んでみると、ロゲンハイドが静かに寄ってきた。

「ねえ、なんかさつきから妙な視線を感じるんだ。これはオキイシちゃんに向いている、なんか奇妙な視線」

ロゲンハイドは、オキシにささやいた。その視線は何か確かめるような、そして不安や危惧の感情を含んでいて、ロゲンハイドは違和感を感じたのだ。

「向こうから」

ロゲンハイドは指差した。オキシは顔を上げてそちらの方を見た。契約した者同士の感覚は多少共有にすることができる。詳しい説明など無くても、ロゲンハイドが見ているものの方向や距離は狂い無くわかるのだ。

人の通りは途切れることなく流れていたが、その合間を縫ってこちらを伺うように見ている人物が、確かにその向こうにいたのだ。

彼は一言で言うとき赤い人であった。羽織っている外套は一般的な控えめの色であるが、髪はもちろん、その下に見える身体からだは赤褐色の甲殻を身につけているのだ。鉤のある尻尾がなければカニかエビを思い起こすほどに、つやのある渋い赤を印象づけている。

その男とオキシは目が合った。その瞳までも赤い瞳をしている。

それまでは不確定さを確かめるような顔つきが表に出ていたが、視線がぶつかった事によってそれが確信に変わり、彼は動揺した様子で慌てて逃げていった、ようにオキシには見えた。

「行っちゃったね。なんかすつごい驚いていたけど」

ロゲンハイドは、口を開いた。

「今のは知り合いか？」

キセノンは、遅れてオキシとロゲンハイドの见ている視線の先を見たが、去っていく直前からしか捉えることができなかった。

「知らない人」

オキシは首を振り即答する。蠍のような容姿をした知り合いはいないはずである。

「本当に知らないのか？」

キセノンがそういうのも仕方ないだろう。キセノンはちらりとしが見ることができなかったが、それでもそれは普通ではない雰囲気だったのだ。オキシはあまり気がついていないようだが、それはまるで化け物を見るようなそんな目だったのだ。

「はて？」

当のオキシは全く身に覚えが無いのか、まるで隙だらけの無防備な表情を見せていた。

「俺の知らないところで何かやらかしたんじゃないのか？ そう、たとえばあの草原であいつに会ったとか」

いくら人氣が無い場所とはいえ、あの場所に一昼夜いたのだ。自分以外にも話しかける人がいてもおかしくはない。

しかし、いくらオキシが奇妙な絵を描いていた、意味不明な行動、言動をするとはいえ、それだけでああなるとは思えないのだ。あのうるたえぶりは、それほど尋常ではなかった。

「キセノン以外で会った人、ねえ……」

オキシは記憶の糸をたどるように目を細め、低い声で唸っている。

「思い出すのに、そんなかかるものなのか？」

あの時のオキシは異常なまでに集中していたので、もしかすると意識の外で起こった出来事は、ぼんやりとしか覚えていないのかもしれない。

少しして、ふと何か脳裏に思い浮かんだようだ。

「そういえば、話しかけてきた人は何人かいた。邪魔しないでって言ったら、そのままにしてくれた人が大半だったかな。僕もそっちの方見てないから、その人たちの顔はまったく分からない。ただ、キセノンみたいになつとつこかったのが一人いたような気がする。邪魔しないでって言ったら、邪魔しないって言っただけで、よく分からないけれど何か……その人は赤い色をしていたような気がする」

オキシの記憶はいまいちはつきりとしないうだ。しかし、何かあったことはその反応から確かである。

「詳しく聞かせてくれないか？」

「僕もよく分からないんだけど。キセノンを無視してから、少し経った頃かな」

オキシの言う「少し」と言うのが数分後なのか数時間後なのかキセノンには判別がつかなかったが、指摘するのは野暮であるし、ややこしいことになりそうなので、水はささないでおいた。

「何かあったのか？」

キセノンのその問いにオキシは首を少しかしげる動作をして少し長めに思索し、たった一言だけキセノンに伝えた。

「……変な感じが、した？」

「は？」

状況が全くもって分からないので、キセノンは思わず聞き返してしまった。

12・「2H? + O? 2H? O」の契約。(後書き)

どうでもいい由来・雑学なあとがき

アストロのみ
星の実

(アストロノミーは「天文学」。アストロで「星の」「天体の」と言う意味。星の実の形はイメージ的にスターフルーツっぽいだろうなあと、今のところなんとなく考えている)

ばっかん
麦稈

(簡単に言うと、麦わらのこと。ちなみに、収穫後の麦畑に置いてある円筒状のやつは「麦稈ロール」って言うらしい。で、それは家畜の寝床になるらしい)

13・プラナリアは、その切れ端から再生する。

「何かあったのか？」と、そうキセノンに問われ、オキシはその時の事を思い出そうと、記憶をさかのぼった。

確かあの時は

月が空に輝いている。

それは大きな、大きな満月であった。

あたりは暗くなり始め、世界は徐々に夜へと移行していく。

その頃になると、オキシは描く作業もほどほどに、水中を漂う微生物たちをただひたすら眺めているだけになっていた。

刻々と景色は移り変わっていくが、観察に夢中のオキシはその緩やかな変化に気がつく事は無かった。

電子顕微鏡と同等の視覚を持つという能力があるオキシの眼は、電磁波一（可視光線）の範囲が強化されたのはもちろん、粒子線一（電子線）の波長まで知覚することができるのだ。たとえ闇に覆われたとしても、別の波長が補って世界の物を認識するので、太陽から放たれる光線が少しくらい減った程度では、視界に大きな変化は起きず、見えなくなつて困るということはないのである。

そのようなこともあり、夜になつたことさえ気がつかず、時間が過ぎるのも忘れて、オキシは夜を徹する勢いで観察をしていた。

空を覆う満月は、天頂に輝きはじめた。

花はしぼみ、草木は露にしなり、そのたゆとう闇に鳴く虫たちが曇りのない静寂を奏でている。世界はもうすっかり夜の様相で、皓々と月明に包まれていた。

そんな時である、背後から男の声が聞こえたのだ。

「何か探し物かい？ 俺も手伝おうか？」

そう邪魔者がまたやってきたのだ。

「大丈夫、間に合ってます、邪魔しないで」

オキシは機械的に返答した。

「……そうか、それはすまなかった」

彼はそう言った。

それが彼の発した最後の言葉だったことを、オキシは記憶している。

本来なら何の変哲も無いやり取りなのだが、その違和感はすぐにやってきたのだ。

それは一瞬のように感じたが、まどろむ夢のような記憶は覚えて
いる。血の気が引くような、ぞわりとした痺れが、ふわりと眠気に
襲われたように朦朧と、何も感じなくなる感覚に移り変わり、次第
に感覚を奪っていったのだ。

このままこの心地のいい世界を感じているのも悪くないかなと思
い、この「眠気」を受け入れてしまった。

なっていた
聞こえていた 虫の音が無くなった。

意識はぼんやりとある、自我と体の主導権はない、目の前から思
考が消えていく。

そして世界の色が失われていく。

「（そう、あの時は確か…… ああ、あれは、なんと言ったのか…… そ
う！）……変な感じが、した？」

そしてその意識が落ちる前、闇の中で確かに蠍の尾のようなもの
を見ていたのだ。そう、まるで、さきほど見た広場から去っていく
彼のような、赤い赤い甲殻を身にまとった人の形を。

オキシはそんなことがあったなあと思い出した。しかし、オキシ
は記憶を脳内で再生するだけで、他人に伝えるための言葉に変換し

ての状況の説明は全くしていない。

不意に思わず口に出してしまった「変な感じが、した？」というそのオキシの第一声に、キセノンは「は？」と思わず聞き返すことしかできなかったのである。

「何を言っているんだ？」

キセノンはもつともな事を言う。

「え、ええと、状況を思い出すと……それがあつたかどうかは定かじゃないんだけど……ええと、あれは、確か……」

オキシは思い出す。あの時のことを？

もしかすると、数分意識が落ちていたのかもしれない。気がつくともう誰もいなかった。

なんとなく右腕に違和感があり見てみると、袖をまくった覚えがないのに、まくられていた。心なしか肘の辺りから先の腕がほんのり白いような気がした。そして向こうに落ちているのは、人間の腕らしき物体であるような気がした。

「……まあいいか」

深く考えないことにした。

観察する作業に戻り、愛しの微生物たちが動き回るのを眺め始めた。

これはおそらく小型甲殻類の一種だろうか。滑らかな流線型の体がすばらしい。

吻の横に生えた櫛のような第一触覚は、水中の植物微小生物プランクトンを掻きこむために、せわしく動いている。体が透明であるので、体内を移動する様子がよくわかる。食べると同時に排出する、なんとも簡単な消化器系だが、口、消化管、肛門までどのように流れていくのかがよく観察できた。

第一触覚の隣から生えている第二触覚、それは左右に一本づつあり、四つの関節を持っている。その第一関節からは棘のような四本の繊毛が生えており、そのそれぞれがさらに細い毛で覆われている。それを使って水をかき移動していた。

泳ぐための遊泳肢なのだろう……動物微生物の腕。泳ぐためにそう進化した腕。

……腕。

……腕、腕、腕！

「右腕が何で落ちているんだよ！ 気になって、仕方が無い。本当に観察の邪魔だな」

その落ちている右腕らしきものが気になって、集中力がすぐに切れてしまった。あんなものが、近くにあるのが悪いのだ。

この右腕は間違いなく自分の物である。見覚えのある位置にほくろがあるのを確認した。

「……にしても、僕の体は再生までするみたいだね、まるでプラナリア。すごいな」

プラナリアとは非常に再生能力の高い生き物である。頭を失えば頭が生え、尻尾を失えば尻尾が生えてくる。切り離さずに縦に裂いた場合は、その傷口どうしがくっつき合ってふさがるといった再生はせず、頭側ならば双頭になり、尾側ならば双尾というように再生するらしい。

50ほどの断片に切り刻んだとしても、再生できる栄養環境さえあれば、そのそれぞれからプラナリアが再生し50頭になるという逸話まである。とにかく失った部分を再生しようとする生き物なのだ。

たいていの場合は正しく再生するが、ごくたまに再生させる方向を間違えて頭から頭が生えて両先端が頭になってしまったり、しばばになってしまったりする、かわいいやつでもある。

腕が再生しないまま落ちていると言うことは、プラナリアとは異なり、全ての断片からは再生することはないのかもしれない。この腕からも自分が再生してもう一人増えると言うことはなさそうである。その点では安心した。

「自分の切れ端が片っ端から再生していたら恐ろしいものな」

もしも微塵のばらばらになった場合は再生するのか、するとしたらどれがするのか、気にはなるが実際に試してみる気にはなれない。

「しかし再生する体とは…… ちょっとそれは、我ながら不気味ではある……」

環境への耐性もあるから軽く不死に近い体質で、しかも再生し続けると言うことは、もしかすると細胞死関連も変更され、簡単な不老のようにもなっているかもしれない。

しかし世界に完全はありはしない。不老や不死に近いというだけで、その時がきたらあんがい簡単に地に還ることになるかもしれない。

「今はとにかく、あれをどうにかしなくちゃ、ちょっと気持ち悪いし」

地面に残された右腕のパーツを見てつぶやいた。もともと自分の右腕だったとしても、人間のパーツが落ちているのだ。生理的に不気味さを覚えるのは仕方が無い。

「それにしても……なんか結構な怪我のはずなのに、こんなに出血が少ないと心臓仕事して！ って、ちょっとだけ思うよ」

この右腕さえなくなってしまうえば、ここで犯行が行われたとは思わないだろう。それほど、血に染まった草や真つ赤な水たまりがないのだ。

「さて、どうしたものか」

夜もあけそうな時間、ほんのりと青い太陽が陰から顔をのぞかせ空を染め始める、そんな時間。

オキシは「ていつ」と空高く放り投げる。青い太陽に照らされた大地の向こうへ、きれいな放物線を描いて飛んでいく右腕。

この世界にとっては異世界産の異物ではあるが、きつと野生の動物や昆虫や微生物が食べ、分解し、いつしかこの大地に還し、この世界の一部として扱ってくれるだろう。

そういえば、夜になったのも、空が明るんだのも、思い出してみればなんとなく感じていたはずなのだが、まったく意識の中に入っていなかった。それに加え、いつ右腕を斬られ再生したのか気がつかなかった。

（しかしまあ、熱中している時は本当に全てが些細なことになるから、きつと知らないうちにあった出来事なのだろう）とオキシは脳内だけで、再認識する。

「多分、あの人に斬られたか、刺されたか何かしたんじゃないかな？」

自分の腕が落ちていたという状況から推理した結果、それしか思い当たることは無いのだ。

「そう思うと彼があわてて逃げた理由に納得がいく。斬ったはずの人間がこんなにぴんぴんしているのだもの……というのか、彼も平然としていれば誰もまったく気がつかなかったのに、彼は案外ドジだねえ」

自身に起きた事柄なのに、オキシはまるで他人事のように涼しい顔で言う。

「やつは、最近町でうわさになってる通り魔なのか？」

最近、夜の町を一人で歩いていると突然襲われるのだ。犠牲にな

るのは、幼い子供やかよい女性、時にはあまり争い^{いざこざ}ことが得意ではなさそうな男性といった、いわゆる楽にねじ伏せられるであろう者たちが多かったが、ひとりで見回っていた警備の者も襲われたことがあるのでかなりの手だれだと考えられた。

夜にしか現れないこともあって、人々は夜になり始めたら一人での外出を控えているのだ。周辺の町でも多少の被害は出ているが、フェルミの町を根城にしているのか、この町が一番犠牲者が出ているのだ。

「通り魔なんて本当にいたんだね。物騒だ」
オキシはやはりそっけない言葉を放つ。

「よくお前は無事だったなあ……怪我は？ お前は鈍いから、気がついていないだけなのか？」

「もう治ったから大丈夫だよ」

右腕が再生したばかりの頃は少し色が異なっていたが、今は時間がたっており、すっかり馴染んでいたので跡さえ残っておらず、すっかり元通りになっていた。

「治った？ 話はよく分かんが、問題はないようだな……」

オキシの性格からして、治ってなくとも、治ったと言いそつだが、元氣そのものなので、さほどひどい怪我ではなかったのだろう。

オキシに再生の能力があることを知らされていないキセノンだったが、とにかく怪我をしていないことにすっかり安心し、安堵の息とともに様々な疑問はどこかへいつてしまった。

「ん……通り魔？ 通り魔は人殺しだよね？」

何をいまさら思い出したのか、オキシは当たり前のことを言い出す。

「そつだが……（さつきから、話が噛み合わねえ……）」
キセノンは現状を理解しようとはがんばっていたが、オキシからは

何があったのか経過が分かるような情報を何一つとして得ていないのだ。

困惑するキセノンを放置して、オキシは迷いなく言った。

「あ、そうか、あの人は人殺しだったんだ。僕はそれに遭って……」
あの時は……と言うよりも、今の今まであんまり深く考えなかったので思い至らなかった。

少なくとも右腕が無くなった事は状況から確かなのだ。知らないうちに右腕は再生していた。それらが起こったことは全くもって自覚がなく、見事に恐怖や苦痛がなかったのだ。

しかし今改めて状況を思い出すと、再生という不思議な力が宿っているから助かったに過ぎず、もしかすると普通なら、とても痛いままに死んでいたのかもしれない。

「うわあ、痛い、怖い、殺されちゃう。いや、死んでないからいいのか？」

混乱しかかっているオキシは、次第に落ち着きがなくなる。

「大丈夫か？ 傷が痛むのか？」

「大丈夫、僕は平気だよ、けがはないよ……うん、だいじょうぶ、へいき」

心なしかオキシの声が震えている。今頃になって、あの時に起きたことは恐ろしいことだったのではないかと、意識が実感しだしたのだ。

「……いやあ……本当に……通り魔……なんて……いるんだ、……ねえ……」

「オキシ？」
「だいじょうぶ……だいじょうぶだよ？」

オキシは目を伏せた。その視線の先にある、空になった紙コップが小刻みに震動している。ふるふるとわずかに揺れている。

（確かに夜は危険が多い。分かつてはいるけれど、自分が住んでい

た田舎では、物騒なことは皆無だったからな。街灯の無い畦道あぜみちを日付が過ぎたばかりの時間帯に歩くことなんてさらにあったし……しかしこれは、危機管理どうこう以前の問題だな。夜に不審な人物がいたにもかかわらず、しかも気がついていれば逃げる機会もあったかもしれないにもかかわらず、まるでその危険に関心が無かった。念頭にさえなかった……完全に平和ボケしすぎだ)

いまさら悔いても仕方ないのだが、もしもこれが地球での出来事だったら？　もしも、再生する能力が無かったら？　そう仮定すると、抑えきれない背筋の寒気は途切れることを知らないのだ。

今までどこかに追いやっていた「ストレス勝手の異なる世界に来てしまった不安と緊張」も手伝って、生きた心地がしないほど恐ろしい深い虚無に襲われる。

「とにかく落ち着け。大丈夫だから」

キセノンはオキシの横に腰掛け、震えているオキシを安心させるように、そっと抱き寄せて背中を優しくさする。キセノンの手にも、その細やかな震動は伝わってくる。

(ずいぶん震えているな。よっぽど怖い思いをしたのだろう……)
キセノンはキセノンで、オキシの記憶があやふやになっているのは、もしかしたらこのせいではないかと勘違いをしていた。

「話は落ちついてからでいい」

キセノンは震えるオキシの黒髪をなでながら、そう言った。

「……ありがとう」

オキシはキセノンに身をゆだねる。服の向こうから聞こえる、キセノンの穏やかな心音に耳を傾ける。目をつぶって、その生命の鼓動を感じ取る。キセノンは変温動物なのだろうか、頬に伝わるほんのりぬるい温い体温がなんだか心地がよかった。

「落ち着いたか？」

「だいぶ。寒くないのに震えるなんて、そんなこと本当にあるんだと、それにびつくりしたよ」

伏しているのが表情は分からなかったが、のんきなその声を聞くなり平静を取り戻したようだ。

「もう大丈夫？ それにしても、ひどいことするよね。本当に無事でよかったよ」

ロゲンハイドは、オキシに頼ずる。

「うん、ありがとう」

しかし、通り魔が捕まらない限り安心できない。犯人が逮捕され刑務所に収容されれば、この不安も恐怖も少しは和らぐだろうか。

オキシは、この一刻も早い犯人の逮捕を強く願う。

「犯人を捕まえる？ そうだ、こういう時は！」

オキシはそうつぶやくと伏せるのをやめ、顔を上げた。先ほどまで血の気が引いて少し青かった顔色もずいぶんよくなったように見えた。

オキシはポケットからチラシで作ったメモ帳を取り出した。その中から、できるだけ余計なものが印字されていないものを探し出す。

「これかな」

オキシは紙を引き抜き、本を下敷き代わりにして何か書き始めた。数分ほどして、完成したものをキセノンとロゲンハイドに見せる。

その紙には、虎豹亭でキセノンを描いた時よりもさらに単純化された線であったが、先ほどの男の特徴を捉えている顔が描かれていた。

「さっきのやつって、こんな感じだったかな。どこか違うところが

あつたら言つて、直してみる」

異世界人の顔は見慣れていないし、彼の顔をじっくり見て記憶したわけでもないの、もしかすると全く似ていないかもしれないのだ。

「あ、似てる似てる。うまいうまい！」

ロゲンハイドは、液体の表面を緩やかに揺らしながら頷いている。「俺はあまりはつきり見たわけではないが、まあ似ていると思うぞ」キセノンも同意した。

こういう犯罪者を描いた似顔絵というものは、少しあいまいな方が、人は足りないものを勝手に補完して見ると言うことを、オキシは聞いたことがあった。二人の反応を見ても、十分に機能を果たしているように思えるので、似顔絵はこれで良しとした。

「よし。じゃあ、この紙を通り魔の捜査している人に渡そう。通り魔らしい怪しい人を目撃した、こんな感じの人だったと、犯人の手がかりのひとつの情報として提供することにするよ。通り魔ではないにしても、あの人は何か、ありそうだし。それに白か黒かとか、より確実な犯罪の証拠は、彼らが見つけるでしょ？　僕ができるのは、不審者の情報の提供くらい」

「おお、それはいい考え。これよく描けているもの」

ロゲンハイドは頷いた。確かにこれを渡せば、捜査の役に立つだろう。

「これはどこに持って行けばいいかな？」

この国の治安維持の仕組みについて全く知らないオキシは、どういう人がそういう仕事をしているのかが分からないのだ。

「それなら組合ギルドへ行くか」

ギルド内には職業紹介所はもちろん、捜査機関や警備等の治安施設といった公共施設も入っているのだ。公的な機関の集合した場所と言つていいだろう。

「どのみち休憩が終わったらギルドでいろいろする予定だったしな。身の振り方を考える前にそこへ寄ろうか」

「よし、善は急げだ。さっさと行こう、行きましょう!」

オキシは立ち上がる。立ち直るのが早いのか、切り替えが早いのか、先ほどまで震えていた人物とは思えないほど、元気な声でオキシはそう催促した。

「向こうにあるのがギルドの建物だ。いろいろな施設があるから、何か困った事があれば行ってみるといい」

キセノンの指差した先には3階建ての建物があった。茶褐色の屋根に、白く塗られた壁が映え、しゃれた雰囲気の木造の建築物である。公共機関が集まった所という話がうなずける大きさである。

「まずは、通り魔の情報を届けないとな」

キセノンは駐在所に向かう。

「イリジー、ひさしぶりだな」

キセノンは入り口の近くに立っている制服を着た人物に声をかけた。イリジーと呼ばれた若い男が治安組織の者のようだ。

「あ、キセノンさん。こんにちは。それから、君もこんにちは」

イリジーはすこし姿勢をかがめ、オキシにもそう言った。

「こんにちは」

オキシはイリジーを見上げた。身長はキセノンのほうが少し高く見えるのだが、警察官や守衛といった強持てな職業の人ということもあるだろう、より体格が良くみえた。

「キセノンさん。この子はどうしたんだ?」

「さっき保護したんだ」

キセノンはいきさつを軽く説明をする。

「実は例の通り魔についてなんだが……ほら、オキシ」

キセノンに促されて、オキシは不審者の情報をイリジーに差し出

した。

「ええと」

警官のような職業の人と話そうとすると変に緊張してしまう。言おうとしていたことをまとめておいたのだが、いざ目の前にするとその言葉が気持ちと共に萎縮してしまう。

「通り魔に遭いました。何があつたのかよく分からないことも多いけれど、襲われて……なんか、すぐ気を失ったみたいで、気がついてらなげか誰もいなくなっていて」

いきなり襲われ自分もよくわからないことが多いので、あやふやになってしまふ。しかし、気絶している間に、右腕が切られていたことは確かで、草原に放置すれば助からないほどの瀕死状態だったに違いない。

少し背丈のある草むらで、しかも昼間でも人がいるかどうかの目撃者がいないであろう夜の草原では、助けを呼んでもこないだろう。どうやっても助からないほど瀕死であつたと確かめたからこそ、彼は放置して去つたのだ。

そうでなければ、通り魔の彼があんなに慌てていたのかその説明ができないのだ。死んだと思つた人間が全て元通りの状態でけろつと町にいたのを見かけたら化け物かと思うだろう。

それは決してよい記憶ではないのでオキシの表情は曇っていく。

昨晚の事を思い出し、血の気が引くような不快な寒けが全身に横切ってくる、真っ白にしびれた音が聞こえ、考えるにも思い出すにもそれに必要な思考が記憶の想起が滞っている、いやその記憶そのものは鮮明にあるのだがうまく言葉にする事ができない。それを見ていたはずなのに、過ぎる心象は霞の中にある恐怖の意識だけ、それだけが明瞭に記録されているのだ。

「ええと……うまく説明できなくてごめんなさい……」

しがみつくように無意識に右腕を握り締めていた。そこにそれがきちんと存在しているかどうかを確かめるようにしっかりとつかんでいた。

もう少し落ち着いてからなら言葉にすることも可能かもしれないが、今はまだそれができない。もうこれ以上思い出したくもない。オキシは目を伏せた。足元にある小石や雑草が二重にぼやけゆれている。

「ああ、こわかったんだね。大丈夫。悪い人は、お兄さんたちが必ず捕まえるからね！」

イリジーは優しくオキシの頭をなでる。彼もまたオキシを子供だと思っっているのだろう。

黙り込んでしまったオキシの代わりに、キセノンが自分の知っている事をいくつか補足した。

先ほど広場で偶然その人物を見かけた事はもちろん、昨夜は町の外の草原にいたと思われる事、そのせいかどうかは分からないが記憶の混乱が起きている事など、キセノンはイリジーに伝えていた。

「今度からは夜遅く、外にいちやだめだよ。でも無事でよかったね」話を聞いてイリジーはやさしく言い聞かせる。

「気をつけます」

それはオキシ自身も反省すべき点だとは理解しているが、今はそう願うので精一杯だった。

「じゃあそろそろ行こうか」

用件も済んだのであまり長居をしても仕方ない、キセノンはそううながした。

「捜査、お願いします」

オキシはイリジーに頭を下げる。

「確かに任せられました。情報提供ありがとうございます！」

イリジーは敬礼をする。彼らの姿が見えなくなるとイリジーは、入手した情報を本部へ報告するために奥の部屋へ入った。

「捕まるといいね」

通り魔の似顔絵を届け、やれることはやったという実感を得て、ひとまず肩の荷がおりたオキシはそう言った。

「ああ」

キセノンは頷き同意する。

「今度襲われそうになったら、おいらがやつつけるよ。だから大丈夫、おいらにまかせて！」

「ありがとう、頼りにしているよ」

得意げに胸をたくロゲンハイドを見て、オキシはわずかに笑みを見せた。自分はここに生きていて、一人じゃないんだと思えること、それが今は心強かった。

14・音もなく忍び寄る赤い影。【残酷描写有】（前書き）

【警告??】

この話には、残酷な表現が含まれています。

苦手な方はご注意ください。

14・音もなく忍び寄る赤い影。【残酷描写有】

連続殺人犯である男の足は自然と草原へ向かっていた。

「この辺だったはずだが」

昨夜、犯行に及んだ場所に死体は無い、何も残っていないかった。最初、場所を間違ったと思ったが、見覚えのある赤茶けた血痕^{いろ}が草の葉にわずかに残っている。ここで間違いないはずだ。

誰かが死体を発見し運び出したとしても、そういう噂はどこから流れてくるものだ。しかし、野原で死体が発見されたという噂は今のところ聞いていない。

「やはり、あれは昨日のやつなのか？」

死体がここに残っていないことは、紛れもない事実なのである。運よく誰かに助けられたのだろうか？

あの時、草原にはひと気は無かった。それに奴は悲鳴さえ上げなかったのだから、誰にも気づかれなかったはずだ。「あの状態」で放置されれば、到底助かるとは思えなかった。

殺したはずの者がなぜ生きているのか、それは分からなかった。仮に失った部分を再生する珍しい能力を持っていた者だったとしても、その能力が発動するには、その時に少なくとも「生きている」ことが絶対の条件なのだ。あの人間は間違いなく、死んでいるはずなのである。

それは、彼が一番よく知っている。

先刻、町の広場にいた人間は、確かにこちらをじつとあの黒い瞳で見っていた。他人の空似ではないだろう。あんな容姿の餓鬼は、そうそういない。やはり間違いなく昨晚の草原で見かけた人間だと、彼は確信している。

（夜の暗がりよりも深い黒に惹かれて、狩ってはみたが……）

あれは人ではなかったのかもしれない。人に化けた物なのかもしれない。闇の化身なのかもしれない。

男は思い出す、昨夜のことを

月は冷酷な嘲笑を浮かべ闇を貪っている。晴れやかに澄んだ夜は、それだけで心に広がる澱みに平穏をもたらず。それを純粹に求め、より掻き立てる抑えようのない飢餓にも似た欲が、静やかな月光のもとに顕になる。

それは指令なのだ。

欲している、欲しくてたまらない。濁ったように渦を巻く衝動が、穏やかな深層にくつくつと沸きあがる。

「最近、きちんと戸締りする家も増えたねえ」

鍵がかかっているということは入ってはいけないうこと、だから入るべきではないのである。たとえその力ギがすぐ壊れる脆弱なものだったとしても、彼は鍵がかかっている家には決して立ち入らないのだ。

彼にとつて、道をひとりで歩いている者や、鍵のかかっている家では就寝している者が獲物なのだ。それにあてはまらない者は、決して手を出さなかった。被害に遭うか遭わないかの差は、たったそれだけであった。

それは他人には到底理解できない決まりのひとつである。

適当にうるついでいれば人に会うこともあるが、今日はその運もなかったらしい。仕方ないので運動がてらに、草原を散策してきた

のだ。

少し時間をつぶせば、また町の様相はかわる。その時になれば、もしかするといい獲物がいるかもしれないのだ。

草原は夜風にどこまでも揺れている。そよぐ葉から夜露はしたたり、地に染み消えていく。

人も動物も眠りにつく時間である。そこに何かいるとすれば、魔物くらいだろう。人がいることの方が珍しい。男もその場所に期待を全くしていなかった。しかし、なにやら静かな草原に生物の気配がするのである。

彼は目を凝らして、伸び放題の草の陰を凝視する。その男の目は夜でもよく見えた。特に生物の発する熱を感じて見ることができたのだ。

そこに生物がいることは一目瞭然であった。はじめ、それは魔物が動物だと思ったのだが、どうやらそれは人のようなのだ。はつきりと確認するために気配を消し少し近づいてみると、それはまちがいなく人の子であった。こんな時間に何を探しているのか、草原の地面を見ていた。

（こんなところで獲物に出会うとは）

彼はゆがんだ笑みを浮かべ、唇の端をなめた。

月夜の闇よりも深い黒の光沢をたたえた髪を、月の光に染まる生やかな肌を見て、己の欲^ほがたぎるのを感じた。その妖しげに煌く色に誘われるように、彼はさらに近づいた。

いつもならば、これはチャンスとばかりにさつさと済ましてしまふ所のだがここはひと気の無い草原。少しくらい遊んでも大丈夫だろう。

「何か探し物かい？」

今日の獲物に優しく声をかける。しかし、地面を見ることに一生懸命で、彼の問いかけに気がついていないようであった。

いったい何をそんなに夢中になって見ているのかは全く分からないが、だからと言って何を見ているのか興味があるわけでもなかった。

「なあ、俺も手伝おうか？」

あきらめず再び語りかけてみる。

「大丈夫、間に合っています、邪魔しないで」

今度は声が届いたようだ。振り向きもせずに勢いよくそう答えた。「そうか、それはすまなかったな」

彼にとって、その反応は思っていた以上にそっけないものであった。

こつも反応が薄いとなると、これ以上話していても得るものもなさそうだ。逃げようとする獲物を狩るのもいいとは思ったが、簡単にはそういった展開にはなりそうに無いのだ。

（日のある間に、お家に帰っていれば良かったのにね）

彼のやけに真つ赤な唇が、にいつと嗤う^{わらう}。

そして、いつものように鉤がついた毒の尾で獲物を刺した。刺されたという痛みも感触も無いはずだ。本人が刺されたことに気がつかぬ間に毒はまわり、おかしいと思ったときにはすでに遅い。己の鉤針から出る毒は、生命こそ奪いはしないが、どんなに屈強な者であろうと意識を奪うほどの力を持つのである。

小さな体の人間は、毒を注入されてから数秒も経たないうちに意識を失い地面に崩れた。

彼は倒れているその人間の腕をつかむ。小さな呼吸は確認できるが、力が抜け何の反応も返さない。体にすっかり毒が回って全ての感覚のすべてが麻痺しているのだ。

「さてと、さつそくいただきますか」

その男の種族は「血液」を食事することで生きている。血液を糧にしていると言っても、他の仲間は「動物の血」を摂取していた。彼も普段はそれを口に行っているのだが、ただ彼が仲間らと異なっていたのは、それ以外にも「人の血液」を食すことに何とも言いがたい快感を覚えていたことにある。

この男が異常なのだ。

彼だけが異質だったのだ。

「どんな味がするのかな」

どこその文学では首筋を噛み、血を啜るという化物が出てくる話があるが、あれは良くない。実際にやったことがあるのだが、吻の仕組みが異なるのかあそこは食らい辛いし、何よりも血流の勢いがあり過ぎて、繁吹^{しぐいて}いてしまうのだ。

あんまり出血させるのは美しくないし、服や顔に染み付いた血を洗い流すのにもひと手間かかる。そして、何よりも噴出した分の血がもつたいたいと思うのだ。

彼にとって最もかじりやすい場所、それは今つかんでいる腕である。細くはあるが柔らかな二の腕、それにかぶりついたらどんな味がするのだろうか。

男は邪魔な袖をまくりあげる。白い衣の下から水蜜種の白桃のような輝く肌を見せた。彼は滑らかな肌にそつと牙を立て、染み出る血をすする。

癖のある味だが、舌に感じる刺激はとろけるような熱を持っている。この生命の水が胃の粘膜に温かく消えていくのと同時に、至福が脳に染み渡り、幸福が世界のすべてを満たしていく。

これだ、いつも求めてやまない、この心地のよい快感。この瞬間は、何物にも変えられない恍惚の時なのだ。

「おっと、少し力入れすぎたかな。あまりにも細いから」

かじりついているうちに、右腕は千切れそうになっていた。このままでは邪魔にしかならないので、切り落とした。地に落ちた腕から染み出すのは、みずみずしい光沢を持つ赤珊瑚の色である。

「赤か。この味は少し独特だが、色はそんなに珍しいものではないんだな」

鉄さびの匂いを伴った味がしていたので、どんな珍しい色かと思っただ、よく見かける血色のひとつであった。

彼は喉の渴きが癒されるまで堪能すると、次なる作業に取り掛かる。食事が終わったらすること、それは「戦利品の採集」である。

おいしくいただいた獲物の体に備わっている角や鱗や爪や髪、とにかく気に入った部位を剥ぎ取って持って帰っているのだ。そして特に気に入ったものなどは、装飾品や日用品に仕立てて日常的に眺められるようにしているのである。

「閉じた瞳の色は何だろな」

彼は閉じたまぶたを指で開け広げる。その下に見えたのは、月夜の下では限りなく黒に見える濃茶の瞳であった。

「すばらしい。これは記念にもって帰ろう」

眼球は弾力はあるが、力を入れ間違えるとすぐに壊れてしまいそうなほど柔らかく脆い。拉い^{ひしゃいで}でしまわないように気をつけながら、眼窩に沿うように指を這わせ丁寧にえぐって引き抜いた。眼球に付属している余分な神経や視神経の類は引きちぎり、そうしてやっこの手に中にそれは納まった。

まだ人肌の温度を残して心地がいい。

手のひらの上でぬるりと転がる感触はもう少し味わっていたいが、余り長く弄んでいては傷がついて劣化してしまう。

彼は懐から透明な容器を取り出し、状態保存の魔法で満たした。

この魔法の効果は長くは持たないが、住処に戻り、さまざまな加工を施すまでのげれば問題は無いのだ。彼は瞳を静かに器に移し封じ込めた。これで晴れて自分の所有物となった。

顔に無意識の笑みが浮かぶ。

「本当に珍しいものを手に入れた」

器の中で妖しく漂う珠は虚を見つめている。早く家に帰って正しい処置をしなくては。

全てを終えてすっかり満足し、その場から立ち去った。

殺人鬼の男は、すぐにその場を離れたので、その後起きた出来事を知らなかった。彼がその場所を去ってから少し経った頃、オキシの体内の毒は完全に分解され、体内で自動的に合成されていく代謝エネルギーが体の自然治癒力を高めていき、失った右腕を、眼球を、血液を、時間がまき戻ったかのように元のように復元していったのだ。

そして、全てが元通りになり、目覚めたオキシはほんの少し寝落ちした程度にしか感じていなかった。感覚が麻痺していたおかげで、右腕が無くなっていた事はもちろん、血を吸われていたことも、瞳が採られていたことも知る由はなかった。

オキシは少し違和感を感じつつも、何事も無かったかのように観察の作業を再び始めたのである。そのことを彼は知らなかった

先ほど広場で見かけた時、あの黒い瞳も右腕も元のとおりになっていた。失われた部分が再生するのは「生きている」ことが最低限重要なことだが、もちろんそれだけではだめなのだ。再生するための体力も必要なのである。
エネルギー

彼は血の大半を吸った。それだけでも体には相当な負担がかかり、相当な量の体力も失われるはずである。しかも、体内をめぐる血がある程度失ったら生物は失血死することを彼は知っている。

現在まで食してきた生物は少なくとも全てそうであつたし、血のめぐりを失つた状態でもなお生きている生物を彼は今まで聞いたことがなかった。

（何でやつは生きていたんだ）

男はすでに適切な処置を加え装飾物として生まれ変わったその戦利品を見る。確かに同じ瞳がそこにはあつた。

濃褐色の虹彩は、半貴石のようでやはり美しい。

「くくく、なかなか面白い」

生きていたのを見かけた時は柄にも無く驚いてしまったが、化け物だろうと、人ならざるものだろうと、何だろうと、美しいものは美しい。闇のようなこの黒に囚われるのも悪くは無い。

（俺はすでに呪われているも同然なんだ。俺は人の皮をかぶった人を狩る化け物、やつは人の皮をかぶった死なない化け物）

やつは何なのか。何の目的で、人にまぎれているのか。

「いつか、やつとはゆっくり話をしたいものだな」

彼はしばしの間、日に照らされ耀^{かがや}う黒い瞳に見惚れていた。

14・音もなく忍び寄る赤い影。【残酷描写有】（後書き）

この世界の血液は普通は何色で、何味なんだろうとふと考えてしまった。

ちなみに、地球に存在する呼吸色素（血液の色素）は、ヘモグロビンなら赤、クロコルオリンなら緑、ヘムエリスリンなら赤紫、ヘモシアニンなら青になる。呼吸色素とはちよつと違うけれど、ヘモバナジンは淡い緑の血液になるらしい。

しかも、ヘモシアニンは銅、ヘモバナジンはバナジウムでできている。それ以外は鉄。

異世界へ行った時、見た目が似ているからと言って、ついつい剣についた血なんかをなめちゃいけない。その血は鉄分ではなくて、硫化水銀（辰砂）を含んだ赤い血液かもしれないのだから！（笑）あ、でも、そういう世界にしちゃうと、普通の動物の肉も、普通の地球人の場合は食べられない可能性が出てくるか……

そして、いつも（こつそりと）間違いの指摘ありがとうございます。

知識の間違いや勘違いが多いとは思うので、明らかにおかしい事がありましたら、気が向いた時で良いので教えてくださると助かります。

（自分は、高校も大学もいわゆる文系クラスと言われる集団にいたような人間なので、実は科学の基礎的なことを授業ではあんまり学

んでいないのです。特に物理系と地学系は中学止まり・汗)

15・地球人は幼形成熟です。

飾り気のない色彩の壁紙に囲われた部屋は、蛍火を閉じ込めたようなガラス管の照明に照らされ、淡い色を落としている。事務所のようない味気ないように見えて、どこかやさしい雰囲気がある空間であった。

部屋にいくつか置いてある植物は観賞用植物だろうか、背丈の半分ほどの大きさで、緑の葉や赤い小さな実をつけた植物が鉢に入っていた。

オキシはその観賞植物が気になって仕方がなかった。見た目はなかなか力強く開放的で、枝は幹から手足のようにいくつも子吹いている。しかも刺激を与えたら、いかにも動き出しそうな、曲がり具合である。

葉が茂っているものの、その葉のついている根元には綿毛で覆われた刺座があり、その枝を中心にして放射線状に鋭い棘が数本の伸びているのも見受けられた。刺座の特徴があるということは、この植物は地球で言うところの多肉植物に近い。この植物は多肉植物と同じように水の少ない乾燥した地域出身で、あまり水をやらなくてもいい植物のなのかもしれない。

「変な植物……」

オキシは、樹木なのか多肉植物なのかよくわからない、この変わった植物から目が離せなかった。

部屋には複数の机が並べられており、数人の人がそれぞれに作業をしていた。

「やあ、コルバート」

一番近くにいた茶けた翼を持った男に、キセノンは声をかける。

「キセノン、どうした？ ああ、迷い子ですか」

コルバートは、キセノンの傍らにいて植物をじっと見つめている

小さな子に気がついた。

「そうだ。しかし、普通の迷子なら良かったんだがな。こいつは多分記憶喪失かもしれない」

キセノンは小声でコルバートに伝える。

「多分、と言うと？」

「その自覚があまりないんだ。名前や自分の国のことは覚えているようなのだが、詳しく聞こうとしても、要領を得なかったり、あやふやな答えだったり、常識も知らないことが多すぎる。全部忘れたわけじゃないから、忘れたことに気がついていないのかも知れない」

「なかなか厄介だな。ふむ、こんなところで立ち話もなんだ。向こうで詳しい状況を教えてもらおうか」

「オキシ、行くぞ」

「……」

オキシは植物に夢中になっているのか、キセノンの呼びかけに反応を示さなかった。

「またか」

キセノンはオキシの手を引いた。

「待つて、刺座に何か……」

なにやら訳のわからないことを言っているオキシを、キセノンは強制的につれていく。

「ああ、やっと、見つけたのに」

枝に細い口を刺し、樹液を吸っている微生物を発見したのだ。邪魔をするキセノンに対しオキシは文句を言うが、今何をしているところなのか思い出し、すぐにはっとする。そして、「ごめん、つい」と一言、照れくさそうに謝るのだった。

「おまえは、夢中になると本当に周りが見えなくなるな」

キセノンは、あきれるしかなかった。

コルバートは一角にある木製の間仕切りで区切られた空間に案内

する。

「あら、こんにちは。座って座って」

そこには、女性が一人いた。その女性に促されオキシは革張りの椅子に座った。硬いかと思ったのだが、予想以上にふかつとする椅子で座り心地がよかった。心地はいいのだが、なれない感覚に逆になんだか緊張して体が硬くなってしまふ。

「はじめまして。わたしは、ロジユヌ」

「こちらこそ、はじめまして。沖石です」

「オキシちゃんね。きれいな色の髪ね。珍しい色」

「黒色は珍しいの？」

オキシにとつては、彼女の頭から生えている渦巻いた特徴的な角の方が珍しい。

「そうね、黒い色はあまり見かけないわ」

「そうなのか」

地球では黒色を体に宿すことは、全く珍しいものではない。むしろ、世界で一番多くあふれている色であるかもしれない。

地球では黒色素は、紫外線から守るために発達・進化してきたものだからである。太陽からの紫外線がある限り、黒色素メラニンからは逃れられない。

地球の常識では、紫外線は生物にとつては脅威であり、特に老化の原因のひとつだからといって、非常に恐れる女性もいるのだ。

異世界の生物たちは、地球の常識では考えられない仕組みで、紫外線から身を守っている可能性もある。それとも、紫外線が特に問題にならず脅威ではない構造の生命たちなのかもしれない。あるいは、この世界の太陽が発する紫外線自体が弱いのかもしれない。オゾン層のような紫外線を吸収する大気が地球よりも濃いのかもしれない。

紫外線から身を守る必要がなければ、進化の過程で紫外線を吸収する色素が生まれる必要性はなくなる。その色素を作る必要がない。黒色以外で代用している可能性もあるが、結果的にこの世界では黒はなかなか表に現れない珍しい色素になっているのかもしれない。そういう可能性が思い浮かんで消えていく。

そういえば、この世界はなんだか色が全体的に淡いような気がした。本当に「気がする」程度なのだが、色素が濃くてもせいぜい深緑や赤褐色で、地球では考えられない色の髪を持っている人間も多いが、確かに見えている世界に真っ黒を持つ生き物は未だ見かけたことがなかった。

世界が異なれば生命の理も異なるように進化する。この世界では黒色系の色素が生成されにくい可能性があると、安易な考えではあるがなんとなく納得のいくひとつの結論を導き出した。

（やっぱり、ここは地球ではないんだなあ……）

オキシはそう思いながら、コルバートとロジュヌの準備が終わるのを待っていた。

コルバートはロジュヌに2・3何かを伝え、引継ぎを行っているようだ。ロジュヌは引き出しから書類を取り出し、そして口を開いた。

「今からお姉さんがいくつか質問するから、分かる所だけでいいから答えてね」

そう言われオキシは姿勢を正した。

「緊張しなくていいからね？」

ロジェヌは質問を始めた。

「あなたのお名前は？ オキシでいいの？」

子供に対して語りかけるようなやさしい口調で、オキシに問う。

「名前はおきいし 沖石 じゅんな 醇奈です」

オキシは本名を名乗る。

「オキシジェンナちゃんね？」

どうしても、名前の発音が酸素オキシジェンのようになってしまいうのだ。さやかな違いではあるが、自分の名前が異なった発音で呼ばれるのは、それはそれは違和感がありまくる。

本当は「ジェ」ではなく「ジュ」であるのだが、しかし、その発音の訂正は難しそうであるし、なによりも面倒くさかった。

「まあ……そんな感じです」

もうすっかり訂正をあきらめているオキシであった。

「オキシジェンではなくて、オキシジェンナだったんだな」

キセノンは、ようやくあの時不機嫌になった理由を知ったような気がした。名前を間違えられたら誰だって不機嫌になるだろう。

「あの時は……訂正も面倒だから、そのままほったらかしにしたいだけだよ」

オキシが「酸素オキシジェン」と言われることに、こんなに反応してしまうのには、理由があった。

小学生の頃は「醇」と言う字が「酸」に似ているため、「酸」という文字が教科書に出てくるたびに、ちらりと視線を向けられ（そのときに出てきた文字が「酸素」だったこともあり）、「酸素」という単語には多少敏感になってしまっているのだ。

その後、化学の授業で酸素がOxygenオキシジェンということを知ったときには、親の名づけセンスをも疑った。しかし、彼らならやりかねないのだ。オキシの両親もまた変わり者であったので、「子供の名前は、酸素っぽい名前にしよう」と考えてもおかしくない。だが、いくら酸素に似た名前でも、断じて自分は「酸素オキシジェン」ではないのだ。

「僕のことは、今まで通りオキシでいいから」

醇奈じゅんなというその発音に訂正することが難しそうと思っているが、だからといって「ジェンナ」と呼んでほしいとは決して思わないの

だ。

「次の質問いいかしら？ オキシちゃんは、いくつ？」

ロジェ又は次なる質問を投げかけた。

「23歳」

「23？」

その場にいた者たちは戸惑いの表情を浮かべた。オキシの予想通りの反応を彼らは示したので、ついついため息をついてしまう。

「オキシちゃんは、23だったんだね。おいらはてっきり、ここ数日中に生まれたばかりの赤子だと思ってた」

戸惑う彼らに混ざって、ロゲンハイドは意味のわからないことを伝えてくる。

「なんだよそれ」

「だって、そう感じたんだ。気配は赤子と同じで、まだ世界に馴染みきっていないんだもの。でも体はしっかり定着してて、だから何だか変な感じがしておもしろかったんだよ」

ロゲンハイドの面白そうに笑う言葉が送られてきた。

（うまれたばかりと同じか）

この世界にやってきたばかりだから、ロゲンハイドの言うことは、あながち間違っではないのかもしれない。

「でも、僕は23歳だよ」

こればかりは譲れないのである。

「オキシちゃんの国で使っている数え方で23歳なんだね」

コルバートは納得しようにうなずいた。

この言葉から伺えることは、この世界にはさまざまな年齢の数え方があるということだ。ここは自分にとっては異世界なのだし、地球での数え方と同じとは限らない可能性もあるので、一応肯定の返

事をしておくことにした。

「でも、一応言うけれど成人はしているよ。僕の国では20からが成人」

オキシは個人的に重要なことを言った。彼らの言葉には、どうも子供扱いの気が含まれていて、なんだがむずかゆいような、恥ずかしいような、そんな変な気分になるのだ。

「20から成人？ ああ、すいません。その、若く、見えたので」
再び予想通りの反応をありがとう、とその様子を見たオキシは思う。

「外見が幼く見えるのは、民族としての特徴という話は聞いたことがあるよ」

アジア系の人種は若く見られがちという現象は話に聞いたことがあったが、それは異世界でもなぜか起こることらしい。

「じゃあ、オキシちゃんの一族はみんな大人になっても子供みたいな外見なのね」

ロジエ又は、なるほどと頷いている。

「そういうことになるのかな」

「顔の雰囲気というか、骨格も体型もどう見ても猴種エイプシあたりの子供だよな。大人になっても子供のままだって、なんだかわいー一族だな」

コルバートはオキシの頭をもしやもしやとなでたり、頬をつついてみたりと遊んでる。オキシはされるがまだ。

「ちよつとコル。かわいそうよ」

オキシは彼らの反応を見て、一つの説を思い出していた。

（僕が子供に見えるのは、人種の特徴から来るものではなく、地球と異世界の進化の過程が違うから起きているのではないだろうか？
そうだよ、もしそうであるならば色々納得がいく。そもそも異世界で地球人の微々たる人種差的な感覚が起きているのは、どこおかしいと思っただよ）

地球の現人類は類人猿の幼形成熟ネオテニーと言う説がある。ネオテニーとは性的に完全に成熟しているにもかかわらず、幼体の性質が残る現象のことで、何百万年もの昔、猿の中で幼児のような形態のまま成熟するようになる進化が起こったものが、今の人類になったという考え方があるのだ。

実際に、人類とチンパンジーの大人同士を比べるよりも、大人の人類と子供のチンパンジーと比べた方が似ている点が多く、まるでチンパンジーなどの猿の子供をそのまま大きくしたように見えるのだ。

子供の特徴を残したまま成長していくネオテニーが起きていない異世界人類にとって、地球人類は成熟しても顔は丸みを帯びたままで子供っぽく、成体の立派な身体に比べるとどうしても華奢になり、どこか中性的に見えてしまうのかもしれない。

「とにかく……」

オキシはコルバートの手を払いのける。

「僕の国では特に、若く見られることをありがたがる価値観をなぜか持っている変な民族だから、若く見られる事はすべてほめ言葉として受け取ってしまいそうになるけれどね。でも、どうあれ自分は23年生きてきたと思っている」

進化の過程上によるもので仕方のないことだったとしても、納得したわけではない。なので少し皮肉を含んだ言い方になってしまう。

「ま、まあ、色々あるからな。キセノンの所も、なかなか独特な年齢の数え方するよ?」

少しいじりすぎたかなと思ったコルバートは、さりげなく話題を切り替えた。

「そうなんだ。キセノンはいくつなの?」

爬虫類系の顔をしたキセノンの年齢は、外見からは全く想像もつ

かなかったのだ。落ち着いた雰囲気だが、だからといってそれほど歳をとっている感じは受けず、まだ若者であるという認識くらいしかなかった。

「歳は54だ。俺らは脱皮すると、暦に関係なく1つ年をとる」

「じゃあ、キセノンは54回脱皮したんだ」

さすが爬虫類、予想外の年の数え方だ。どのくらいの頻度でそれが起こるのかは分からないが、今までに相当な回数の脱皮を行ったことになる。

どういう風に脱皮をしていくのか、実に興味深い。蛇のようにきれいに皮が剥がれて形が残るのだろうか、それとも、トカゲやカメのように、1枚1枚めくれるように行われていくのか、いずれにしても好奇心を誘う魅力的な事象である。

「ちなみに、この国の暦に直すと百歳くらいだろうか」

「案外お爺さんなんだな」

「じ、じいさん？ オレたちの種は長命なんだ。軽く数百年は生きるぞ」

「じゃあ、まだ若い方なんだキセノンは」

数百年生きる種族なら、百歳なんてまだまだ人生の入り口だろう。「そうだな」

「数百年生きるのか、すごいね。僕の国では80・90も生きると死ぬ人が多いのに」

「人間にしては長生きだな。確かこの国は50・60くらいだったかな。魔術を使わないで普通に生きた場合は」

「長生きの、やっぱりあるんだ」

どこの世界にも、不老長寿や不老不死になろうとする人はいるらしい。地球と異なることは、その術が存在するということだろう。「あまり一般的ではないし、大変な儀式らしいがな」

材料は手に入りやすく、成功率もそれほど高くはない。失敗すれば、ときに取り返しをつかないことになることもあるのだ。しかし、

危険は大きくとも、得られるものの魅力は大きく、この術を行おうとする者は、いつの時代にもいる。

「少しおもしろそう」

生命の寿命や老化、命の根源の何たるかは研究の対象としてはなかなか関心がある分野ではあるが、だからといって、自分がそうないたいからくる探究心ではないので、そういう真理を追い求めている人と話しても方向性が異なり、話が合わないかもしれない。

「おもしろそうと言う好奇心だけで、実際にやられたらたまったものじゃないがな」

キセノンはそう言った。

「盛り上がっているところ悪いけれど、次の質問いいかしら？」

「あ、はい」

オキシは、慌ててロジェヌの方に向き直った。

オキシがロジェヌの質問に答えている間に、キセノンはコルバートに尋ねておきたいことがあった。

キセノンは懷から紙切れを取り出し、それをコルバートに見せる。それは虎狛亭でオキシがキセノンに渡したチラシの切れ端である。

「こういう文字を見たことがないか？ 今のところ手がかりになりそうなのは、この紙切れに書かれた文字だけなんだ」

この場所には、さまざまな人が集まる。キセノンよりも彼らの方が異国の言葉や文字には詳しいのだ。

「こんな複雑な形を持つ文字は精霊文字くらいだが、それとも全く違うな」

何か分かることがあれば、手がかりになると思っていたのだが、この紙に印字された文字はコルバートも見ることがないものらしい。

「ん、裏になにか書いてあるね」

コルバートは、裏に何か書いてあることに気がついた。チラシの

裏を見ようと裏返そうとした。

「裏は関係ない」

キセノンは紙を奪い取ろうとする。その紙の裏には似顔絵が描いてある。自分の似顔絵が描かれたものを他人に見られるのは、どこか照れくさいような気がしてきたのだ。

「あ、キセノンそっくりだ。これはどうしたんだ？」

「オキシが描いたんだよ、なりゆきでな。俺が最初に見かけた時は、何かをじっと見ては変な絵を描いていたんだ」

「なかなかじゃないか。絵描きか何かだったのかな？」

「それが、そうでもないらしい。描いた絵を売って歩いていたような感じはしなかった」

オキシ本人から、他人のためにというのが足りないから、売る気がないというようなことを聞いたのだ。

「そうか。絵からさぐるのは難しそうだな。まあ、外見も珍しいから、この周辺の噂を調べ回れば、どこから来たのか軌跡くらいは調べることはできるぞ。俺の翼でひとつ飛びだ」

コルバートは背中に生えた自慢の翼を広げてみせる。

「それを口実に、仕事をサボる気だろう？」

「ちゃんと仕事はするぜ？」

コルバートはやにやと薄笑みを浮かべている。まず間違いなく怠ける事を企んでいるであろう顔である。

「ここに名前を書いて」

書類には本人が書いた署名が必要なので、この国の文字で自分の名前をどう書くのか教えてもらい書き込んだ。

文字数を見るに、おそらくアルファベットのように子音と母音のそれぞれが文字を持っている体系のようだ。

自分の名前をどう書くのか分かったのは、収穫であった。初めて書き込む文字を見ながら、オキシは満足していた。

「おつかれさま。これで書類はおしまいね」

一通りの書類はできあがった。これで少しの間であるが、ここにある宿泊施設で寝床を借りられることになった。しばらくの宿泊先は、無事に確保できたのだ。

「短い間ですが、お世話になります」

「キセノンと相談したんだけど、彼がオキシちゃんにギルドの案内をすることにしたよ。俺らが案内するよりも、適任だと思うんだ」
終わった事を見計らって、コルバートがそう語る。そう、キセノンに依頼したのだ。

「いい考えね。懐いているみたいだし」

ロジェ又も賛成する。この流れはいつもの事なのだろう、キセノンもこうなることは分かっていたようだ。

「しかし、今日は色々あったからな、もう休むか？」

「大丈夫だよ」

「いや、無理はしないほうがいい」

草原で少し昼寝をしたとはいえ、オキシはおそらく十分な睡眠をとっていないとキセノンは思っていた。今はまだ体には出ていないが、きつと疲れている。早めに休ませたほうがいいような気がしたのだ。仕事探しは明日でもいいだろう。

「そうそう、無理はよくないわ。そろそろ夕刻だし、晩のご飯でも食べるといいわ」

ロジュ又はそう提案する。もうそんな時間らしい。特に食べる必要はないのだが、付き合わなくてはいけないだろう。

「……というか、食べ」

キセノンはため息をつきながら言った。

「夕飯も虎狒亭にするか？ それとも、別なところで食べるか？」

「虎狒亭がいい。あそこ、おいしかったし」

「じゃあ、行こうか」

「いつてらっしゃい」

コルバートとロジユヌに見送られながら、二人は外へ出た。

15・地球人は幼形成熟です。（後書き）

どうでもいい、ネタ

幼形成熟してきたから幼形嗜好ロリ・ショタになるのか、幼形嗜好だから幼形成熟してきたのか。

ネタでも本気でも、幼形嗜好ロリ・ショタと日常的に言っている日本人の外見が、外国の人から見て幼く見えることがあるのは、どこか意識の底で幼形を選んきた結果なのだろうか。

尾の長い鳥は、より長い尾を持つものを選び交配していくことでより尾がながい子孫を残してきた。

だから、幼形成熟してきた人類は本質的には幼形嗜好

16・太陽が隠される時間。

目撃情報の報告や寢床の確保と色々回っているうちに、だいぶ時間が経っており、建物の外に出るころには空の様相は変わっていた。見える空は変わらず晴れ渡り、太陽も天高く輝いている。しかし、オキシは空にあるその天体を見て固まった。空に輝き大地を照らしているこの世界の太陽は、地球のそれと大差ない大きさをしていたのだが、月の大きさは異なっていたのだ。

地球の場合、月の見かけの大きさは太陽とそれほど変わらない。しかしこの世界の月は何という大きさであろう？ 地球の月が1円玉の大きさならば、今空に浮かんでいる月はCDやDVDといった光ディスクくらいだろうか。視界に入る空の16分の1ほどが月なのだ。

「日蝕になりそうだ」

この世界の天体運行についてはわからないが、このまま月が昇れば間違いなくあの小さな太陽を覆うだろう。おそらく数分で終わる地球の蝕と違い、数時間ほど世界は闇に包まれるに違いない。

「日蝕？ ああ、もうすぐ夜だな」

この世界には日蝕という言葉がないのだろう。キセノンは初めてのことは何のことか分からなかったようだ。しかし、オキシが空を見て月を見てそうつぶやいたので、何のことが推察できたようである。

「え、夜になるの？」

「ん？ お前の国では、夜になることを日蝕というのだと思っていたのだが、違っていたか？」

「月が太陽を隠す現象のことを日蝕と言うのだけれど……」

まさか日が沈まず、日蝕の時間が夜だなんて思わなかった。

「日を蝕むなんて、面白い表現をするんだな」

キセノンは、異国の表現に関心を寄せているようだった。

（日蝕って、どんな風に翻訳されたんだろう）

この世界に存在しない言葉なのに、意味は通じているのだ。確か微生物は通じていなかった。言葉はその言葉の意味すること知らなければ、単なる記号である。おそらく肉眼で確認できない微小の生物がいるという概念がないから、通じなかったのだろう。そう考えると、日蝕と言う言葉が通じたのは、太陽が月を隠す現象を皆が認知しているからなのだろうか。

「とにかく、この国では日蝕とは言わないんだね。ひとつ勉強になったよ」

勉強になったのは、日蝕という言葉は使われていないということではなく、日蝕が夜になる証であるということであるのだが。

「いらつしゃい。あいているところに、適当に座ってよ」

忙しそうに調理場と店内を行き来しているタンタルが、来客に気がつきそう声をかける。

昼間に訪れた時は、中途半端な時間に来たということもあって店内は閑散としていたが、今はたちこめる熱気と喧騒に満ちている。室内には剣や弓や槍と言った武器を携えた人や、ローブを身にまとった人、たくさんの修羅場を潜り抜けてきたであろう歴戦の冒険者たちが、ほんのひと時の休息を満喫していた。もちろん冒険者だけではなく、仕事を終えた職人や商人、常連らしきおじさんたち、さまざまな人が食事を楽しんでいた。

「キセ、ひさしぶりだな」

空いている席を探していると、大声が聞こえてきた。少し離れたテーブルから、呼びかける者があったのだ。

声をかけてきた彼を表現するなら熊のような??彼の指の先に長

く湾曲した鉤爪が見えたので、もしかしたら本当に熊なのかもしれないが、筋肉質でがつしりとした体格をした男性であった。

彼とは、お互いに愛称で呼び合うような気の知れた仲なのだろう、キセノンも軽く手を上げ、彼の呼びかけに答えていた。

「レニか。それにフランも。元氣そうで何よりだ」

レニと呼ばれた男と同じ席には、剣士というには軽装の武器に身を固めた女性もいた。細身でしなやかな体つきで、金色の大きな目の中に縦長い瞳孔が入っているのが、実に印象的であった。

「こつちへ来いよ、一緒に飲もうじゃないか。連れのちびも一緒に。おい、タンタル！ 料理追加だ！」

彼は返事を聞くまでもなく店の者を呼び、いくつか料理を注文した。彼らと同席することは強制的に決定らしい。

席に着くと、女性が話しかけてきた。

「強引にごめんね。私はフランシー。で、これはレニ」

「僕はオキシ、です」

オキシはあえてフルネームは名乗らなかった。どうせまたおかしい発音をするに違いなく、そう言った雑多な訂正をするのが非常に面倒だったのだ。

「オキシちゃんね。キセとは、よくつるむ狩仲間の一人なのよ」

フランシーは、キセノンとは一緒に組んで魔物退治をする仲間である、簡単に説明する。

一人では対処できない大物を駆除する時に、息の合う仲間数人と共に行動することで、確実性と生還性を高めるのだそうだ。

彼らがどんな役割分担なのかは、想像するしかないが、見た感じでレニは接近戦が得意そうに見え、身軽そうなフランシーは追い込みや攪乱と言った補助に向いていそうだ。キセノンは帯剣しているが（攻撃的な）精霊を使役できると聞いているので、案外後方支援系なのかもしれない。

他にも数人の仲間がいるようなのだが、確かにここにいるメンバーだけ見ても、攻撃面においてはバランスがよく、欠点を補いあっているように思えた。

「ここで会ったのも何かの縁だ。ほら、ちび。これ飲んで大きくなれよ」

レニンは空のコップをオキシに手渡した。そして、液体が半分ほど入った薄茶色の瓶をわしづかむ。瓶に張られたラベルの文字は読めないが、力強い感じの書体で文字がでかでかと書いてある。

「それは、お酒？ お酒はちよつと苦手なだけだな」

オキシはアセトアルデヒド脱水素酵素（アルコールの分解に必要な酵素）を持っているので、酒は飲めることには飲め、強いほうといえは強い方なのだが、アルコールの味はどうも好きではなかったのだ。

「いいから、いいから。飲め、飲め」

しかし、レニンはさらに酒瓶を差し出し勧めてくる。酔った人は感情が高ぶっていて、ちよつとしたことで怒りやすい、「俺の酒が飲めないのか」状態になっても困るので、逆らわないほうがいいだろう。不本意ではあるが、素直に受け取ることにした。

「本当にちよつとでいいから。ああ、もういい、もういい。そんなにいらない！」

一口分だけでいいと言ったのに、コップに半分くらい注がれてしまった。

ひとまずオキシは、匂いを確かめる。漂う香りは確かにアルコールで、地球のそれとさほど変わらないひんやりとした馴染み深い匂いがした。

この世界の微生物もアルコール発酵するものがあるのだなと思いはせながら、オキシはほんの少しコップを傾けて、透明な液体をなめるようにちびつと飲んでみた。

あまり酒は嗜んでいないので味の良し悪しに関してはよく分から

ないが、この痛みにも似た辛味の刺激は、間違いなくアルコールの含まれた飲料水である。

「苦い。もうちょっと甘ったるいのない？」

とげとげしく痛かったので、舌先がひりひりしてきた。アルコール醗酵して出来あがった、ありのままの酒はどうも苦手なのだ。

オキシが飲酒するときは、大抵ミルクの味でごまかして甘いカクテルにしていた。アルコールのあの味をある程度まぎらわすことができれば、割といくらでも飲める性質なのだ。

「ははは、まだ子供には早かったか」

そんなことは知らないレニンは豪快に笑いながら、顔をしかめているオキシの様子を見ていた。

「僕は、もう子供じゃないのに」

しかし、だからといってむきになって飲み干すことはしない。自分にとつてあんまり益にならないし、子供でもないのだから、そういった無理はしても仕方がないと自制できるのだ。

「そうそう、大人になっても、こんな飲んだくれのようになっちゃだめよ」

お酒の入ったコップをテーブルに置きつつ少し遠ざけているオキシを見て、フランシーは微笑ましく心和ませていた。

「年齢がどうであれ、お前は子供だ。子供も同然だ。お前は常識知らずだしな」

キセノンはオキシの頭をなでながら、そう言った。キセノンはオキシが成人している事を知っているが、それでもなお、到底大人には思えず子供のように感じるのだ。

「っ」

常識知らずだとそれを言われてしまうと否定はできない。この世界については、下手をすると子供よりも知らないのだ。

「……子供じゃないにしても、子供に見えるんだから、今のうちに

思う存分甘えておけ？」

キセノンは小さく耳打ちする。

「うん」

オキシは小さく返事を返す。子ども扱いされるのは癪だが、情報が少ない今の状態では救いなのかもしれない。多少おかしいことをしても、注意されるだけですむのだから。

「僕がこうして、ここにいられるのは、キセノンのおかげだよ」

キセノンがああ草原から町まで連れ出して、いろいろ面倒を見てくれたおかげで、ひとまず当面の寝床も確保できたのだ。

「でも、最悪、この町の公園のすみっこで眠ってもかまわなかったのだけれどね」

「まだ、それを言うか。お前のようなやつが、そんなところで寝ていたら何されるか分からないぞ」

「じゃあ、草原でもいいや」

案外、草原の上で眠るのは気持ちよかったのだ。

「だから、町の外は魔物とか、それにあそこで」

「あ、そうだったね。やっぱり部屋は大事なんだね」

キセノンはどっと疲れが出た。ため息さえ出ないようだ。

「がははは、よくはわからないが。これはキセは苦労しそうだな」

レニンは腹を抱えて笑いながら、意気消沈しているキセノンの肩を叩く。

タンタルが、料理の皿を持ってやってきた。運ばれてきた料理は、琥珀色に熬いってつてあるものが、緑鮮やかな山菜の上に盛り付けられていた。

「ちよっと、おまけしておいたからね」

「おう、すまないな。ほら、ちび食え」

どうやら彼の中で「ちび」と言うのは確定らしい。彼は「これは

「うまいんだぞ」と、その揚げ物を取り皿に乗せながら薦めてくる。オキシは彼に差し出されるまま、皿の上のそれを頼張った。それはほんのりゴマの香りのする丸い物体で、見ただけでは一体何なのか見当もつかなかった。

皮がカリカリしていて、噛むと皮がぷつりとはじける。まぶされた微塵切りの野菜炒めが甘みをおびていて、なめらかな肉汁と混ざる。

これは何の肉なんだろう？ 動物でも魚でもなく、どちらかと言えばエビやカニと言った甲殻類の味に似ていた。慣れた味ではないが、どこか馴染みのある味なので、口には合うようだ。

「うまいか？」

「うん」

「そうか、そうか。こっちもうまいぞ、もつと食え」

まだ空になっていない皿に、レニンは次々に乗せていく。

「そ、そんなに食べられないよ」

「レニンたら、なんか親戚のおじさんみたいね」

フランシーは一連のやりとりを見て、そう感じるのであった。

こうして夕食はにぎやかな内に幕が下りた。

「もう少し飲み歩こうぜ？」

レニンはさらに別の店を回るらしい。虎狛亭であんなに飲んでいたのに、足取りはまだしつかりとしていた。おそらく、まだ飲み足りないのだろう。

「まだ飲むの？ 少しまとまったお金が入ると、すぐにこうなんだから」

フランシーは呆れ顔をしていたが、彼の提案には満更嫌でもない様子である。

「キセはどうする？」

「付き合いたいのはやまやまだが、日が隠れる前に、オキシを送らないとな」

一応、キセノンはまだ仕事中なのだ。

「そうか、そうだな、これからは大人の時間、子供はもう帰る時間だ。このちびの件が片付いたら、その後でいいから来いよ」

「仕方ないな、いつもの場所に行くのか？」

「ああ、俺たちは先行ってるぜ。ちびも元気でな」

レニンはご機嫌で去っていく。

「レニ、待ってよ！　じゃ、オキシちゃん、またね」

フランシーもレニンの後には続き走り去っていく。

「なんだかんだで二人は仲がいいんだね」

まるで嵐のような人たちだったと、オキシは振り返る。

「ああ見えて、夫婦だからな」

意外な事実をさらっと知ってしまう。

「そうだったんだ。……レニンさんはいいいお父さんになると思うよ」
子供にべつたりな親バカな父親になるだろうと、オキシは感じずに入られなかった。そして、妻に頭が上がらなくなるだろうとも、どこかですっ飛ばしてしまふのだった。

「そうだな。さてと、俺たちも行こうか」

キセノンに先ほど宿泊先の確保をした施設まで送ってもらった。そして、そこでロジユ又と合流し、今日のところは彼と別れることになった。

「ロジユ又あとは頼んだぞ。じゃあ、オキシまた明日な」

「うん、また明日」

オキシはキセノンと別れた。

「部屋はここ。ちょっと狭いけれどね」

「いや、十分です」

注意事項や建物内のどこに何があるのか等、ロジユ又から簡単に

説明を受けながら、しばらく借りることになる部屋まで案内された。用意された部屋はベットと小さな棚がひとつずつあるだけの、六畳一間といった感じであった。

色々物がある場合には狭い部屋ではあるが、これくらいの広さなら格段に安い一人暮らし用の部屋と大差はない。それに、オキシにとって、部屋には基本的に寝るところさえあれば問題はないのだ。

「これは鍵。出かけるときは、入り口の管理人さんに渡してね」

ロジユ又から手渡された鍵は鈍色をした金属にひいろを加工してできている。鍵には紐が通されていて、戸に書かれた文字と同じものが印字された板が下げられている。

「何かあったら、気軽に声をかけてね。じゃあ、おやすみなさい」

「おやすみなさい」

ロジユ又と別れ、オキシは部屋へ入った。

「……で、ロゲンハイドは、これからどうするの？」

今まで特に何をするでもなく、ただなんとなくそこにいて、ここまですべてきた精霊にオキシは問う。

「おいらはいつものように、適当に過ごすだけ。もし邪魔なら消えるよ」

「いや僕の邪魔さえしなければ、いても別に気にしないから、好きな事してて」

精霊は無視しても、特にかまわないようだ。

やっと一人の時間がとれると、オキシはすべてから開放されたかのように嬉々として、数時間ぶりに本を開いた。

17・月輪の天体観測を。

ふと気がつけば、すでに太陽はすっかり月に隠されて、あたりは夜の闇に包まれていた。オキシは今まで明かりもつけず暗い部屋の中で、草原で観察した微生物たちの走り書きを整理整頓する作業をしていた。

「おや、もうすっかり外は暗くなっただんだ」

オキシはある事に気がついた。風景はすっかり月夜の色をしているのだが、『見よう』と思えば夜に覆われた世界でもしっかり見えていることに。いくら月が明るいといっても、その薄明かりの中では見えにくい部分もあるものなのだが。

その現象について、オキシには思い当たる節があった。電子顕微鏡は可視領域にない波長の光で世界を見ている。だから世界に太陽あかりがあるうとなかろうと関係がなく物はよく見えるのだ。

この眼が電子顕微鏡の性質を持つと言うことは、暗闇でも物体が見える可能性がある。小さなものを見ようと思うことで、顕微鏡のような拡大する機能が発動している。それならば、もしも倍率を上げない状態で『見たい』と思うのならば？

「やっぱり！」

見ようと強く思うことで、世界がもつとはつきりと見えた。まるで暗視スコープのようだ。

太陽から来る光が少ないので色鮮やかというわけでもなく、羽虫の群れのようなさざめく塊ノイズも少し写りこんで、見慣れている風景と比べたら劣る画質だが、明かりがなくとも見えるのは素晴らしいことである。

眼鏡なしでも生活できるようになっただけでも喜ばしいことなのに、見える波長の範囲も強化されていたとは。この眼の能力は、使

い方によつては別の事にも使えそうだ。色々試してみる価値はありそうだ。

「それならば」

この眼は望遠鏡のようにならないだろうか。「遠くの対象を拡大する」のか、「小さな対象を拡大する」のかの目的の違いはあれど、物を拡大してみると言う点では、顕微鏡と望遠鏡もそうは変わらないはずである。

オキシは窓のネジ締め式の鍵を開け、空を望む。その空にあるのは大きな天体、地球を周回する衛星の何倍も大きく見える星が輝いている。ここが地球ではないという証拠、別の場所であると主張する天体、あの月の表面を見てみたいという衝動にかられたのだ。

「それにしてもこの大きさ。やっぱり潮汐力がすごそうだなあ」

今日の空は満月。拡大するまでもなく、空に浮かぶあの大きな月は、それだけでも存在感がある。

地球でも月による潮汐力は重要で、海に波ができていなかったら、今のような生命は生まれていなかったと言われている。遠い昔、生命の素となる有機物の海をかき混ぜる力がある月によってもたらされ、地球は生命あふれる星となったのだ。

地球と月の距離でさえ、大きな影響があるのだ。これほど近くに月があるこの星に、影響しない方がおかしいだろう。

そういえば、強い潮汐力は星をも歪ませる力を持つと、そういう話を聞いたことがある。

たとえば木星の近くにある衛星などはその強力な潮汐力で星が揉まれているというのだ。その変動が摩擦となつて地熱を発生させ、星の活動を活発にしている。

実際に木星の衛星エウロパでは、そうして生まれた熱が氷をとかす力となっている。大地の活動で厚い氷で覆われた地殻の下に液体

の海をつくっていると考えられているのだ。そして地熱で熱せられた水が噴出する場所には、極限環境に生きる微生物たちがいるかもしれないと期待されている。

地熱があると言うことは重要で、たとえ太陽からの熱が少なくとも、さらに氷で覆われている冷えた星だったとしても、このような形で星を暖める要因があれば、生命が生まれる可能性があるのだ。逆に、たとえ太陽光は十分でも、自らの活動が行えない星であるならば、それは単なる大きな石ではない。

また一方で、星の活動つまり火山活動が活発すぎれば、星は高温のマグマに満ちた星になってしまう。エウロパよりもひとつ内側を回っている木星の衛星イオは火山活動が活発な火の衛星である。

星の活動が過ぎれば、それはそれで生命にとっては危険極まりなく、とても生きていけるような環境ではないのだ。

自分が今いるこの星は、もしかしたら木星とその衛星の関係のように、あの月の周りを回っている小さな衛星なのかもしれない。

この星がこんなに月の近くにあっても、イオのような炎の星や、エウロパのように氷の星にならず、緑豊かな生命のいる星になっている。もちろん潮汐力だけでは判断はできないが、この星にとって、月との距離がこの距離だからこそ、星を揺り動かす力が程よい活動を促し、生命を生んだのかもしれない。

それ以外のさまざまな要因、たとえば太陽との距離や大気の成分などといったものが重なった上で、地球と同じように『奇跡の星』になったのだろう。

オキシは月を『見た』。

予測の通りまるで望遠鏡で覗いたときのように拡大されて、月が網膜に映った。しかし、さすがに少しピントが合わないようだ。ぼ

んやりと霞んで見える。

顕微鏡はあんまり倍率を上げると、光の「波としての性質」が強くなり対象の像がぼやけていく。その顕微鏡的な範囲の中で見えるような焦点距離が決定されているのか、どうやらずっと遠方を見るのには向いていないようだ。あくまでこの眼は顕微鏡なのである。

しかし無いよりは遥かにましで、これでも玩具の望遠鏡程度には使える。あの巨大な月の表面を観察するには充分であつた。

月の大地は太陽によく映える白い色をしている。太陽を隠しているにもかかわらず、月は明るく輝きを放っていた。月の大地の様子を見るに、月自身が自ら光を発していたり、月の向こう側にある太陽の光が何らかの影響を及ぼしているようには見えない。どこか別の光源から放たれた光を受けて輝いているようだ。

自分があるこの星が恒星のように輝いているのだろうか？ しかし、この大地はずっと向こうの方まで暗く、月を照らすほどの光を放っている場所があるとは思えなかった。

では、その光はどこから来るのか？

その謎の解決の糸口は、時が解決してくれた。

雲の陰のようなくすんだ色をした小さな円形状の翳りが、月の表面を時と共にゆっくりと移動しているような気がするのだ。あの丸い陰影は、この星の影が映りこんだものだろう。これは、太陽、自分がある星、月という順に並んでいる時に起こる現象、月蝕である。地球の月蝕とは異なり、その影はあの月を覆えるほど大きくはない。だから、小さな丸い影があのように月の表面を移動していくように見えたのだ。

「日蝕どころか、月蝕までも見ることができるのか」

この現象の示す事実、今現在、月の裏に隠れている太陽以外にも、強い光を放つ恒星が存在している可能性を示唆している。この

場所からは見るできない大地の裏側に、もうひとつ太陽となりうる明るい星があるのかもしれない。

今後の経過を見てみないと確信は持てないが、この世界の天球では、なんと豪勢な天体の展覧会が毎晩のように起こっているのだ。

「あの月には、もしかして大気があるのか？」

月の縁がぼんやりと見えていたのは、それはピントが合っていないせいだと思っていたのだが、どうやらそれだけが理由では無かったようだ。

月の表面に不鮮明ではあるが、うつすらとした芥子色^{からし}の帯状の筋が現れたのだ。それは対流しているかのように渦を巻き、時とともにゆっくりと確かに形を変え、消えていった。それは雲のような気象現象によるものなのか、砂の舞った嵐なのかは定かではないが、風が吹くということは空気の対流があるという証拠、おそらく薄く大気があるのだろう。

しかし、大気は存在しても、見える範囲に液体の水は存在していない。岩肌の山脈や谷や盆地の影が、地球の月と同じような陰色の海を形成していた。

それはまるで、水も緑も失い砂と岩だけの星となった、さびれ荒廃した地球を見ているような気分させる。

故郷とは異なる月の光、月の形、月の色。

「あの月の海にも、ウサギはいるのだろうか？」

月の海ではうさぎが跳ねて。カニもさわさわと？

地球では、うさぎやカニやロバ、それはもう様々な生き物の形に見立てて、想像するだけでなかなか騒がしく楽しい逸話があった。

「あの月の海には何がある？」

地球とは異なる衛星は、空にまるくある。月は黄色の明るい光に

包まれているはずなのだが、どこか淡々とした夜陰を漂わせている。どこかの草むらで虫が涼しい声で歌っている。その虫の唄は草木の揺れる音と共に風に乘って抜けていく。

ああ、本当に昼間はめまぐるしくにぎやかに過ぎていった時間だった。この身に起こったことを思い出す暇さえなかった。そう、実感が無いのだ。あまりにも突然すぎて。今は、まるで遠くまで旅行に出かけたような気分になっているのだ。

旅行はいつか故郷に帰ることができる。だが、次元の異なる別の宇宙に迷い込んでしまった自分は再び奇跡に頼らなければ帰ることさえできやしない。

この澄みきった空気は、目に映る世界の色は、夜の光は、紺の色に浮かんでいる。

「自分は忘れられるだろうか。いや、忘れる必要は無いんだけど、悲しまずにいられるだろうか」

急に世界から消え、ひとりここへたどり着いた。突然のことであつた。

自分は確かにこの場所にいる。

今はとても楽しい。

見るものすべてが、新しく新鮮で不思議に満ちている。

しかし、この先ずっとそう在れるのだろうか？ どう思うだろうか？

自分にはこの世界に骨を埋めると言う、決意も覚悟も今は無い。しかし、だからと言って迷い、悩む葛藤も無い……いや、この状態を葛藤と言うのかもしれない。

とにかく、事の重大さを分かっていながら、全く理解していない

のだ。

それはまるで、物言わぬ物体に話しかけるような独り言。誰に問うでもない、己自身に問うている。

もしも、仮にと、言葉では、思考の上では、いくらでも仮定できる。しかし、導きだされる感情が、怖い。

月の光は、どうしてあんなにもさびしい色をしているのだろう？

あの月の海には何があるのだろう。

地球の月には、ウサギの形をした海がある。それはカニにも見える。ロバにもシシにも見える。

でも、あの空の月には何もいない。

見えるのは岩肌の大い。

ただ霞が渦巻いているだけの空の標。

「僕は、この宇宙で生きていく」

月はまだ太陽を隠し、世界は夜の底に溶けて、微弱に生まれる光の中に沈んでいる。

17・月輪の天体観測を。（後書き）

エウロパ星人のドライ6（シックス）やビター35（スリーファ
イブ）と聞いてピンとくる人とは、きっと趣味が合うと思う。

18・日輪の天体観測を。

月の端から太陽の青白い光が見え始めた。日蝕が終わる、つまり夜が明ける、明けたことになるのだ。

太陽を隠していた月はもうすぐ地平線に沈み、そして、それを追うように青い太陽もいずれ沈むことだろう。夜が明けたにもかかわらず太陽が沈むと言う現象は地球ではおかしいことだが、実際にこの空で起きていることであり疑問を挟む余地すらない事実なのである。

「ん、何だろう？ あれは……太陽？」

オキシは日蝕が終わってからしばらく空を見ていた。月はすでに地平線の向こうへ沈み、続いて太陽も沈もうとする頃、同時にその反対側の空が黄色に明るんできたのだ。

今まさに、2つ目の太陽がその姿を現そうとしていた。驚いたことにこの惑星系には太陽が2つあるのだ。

ほぼ対極に並んでいる太陽を同時に見ることができる時間は、片方が沈み、片方が昇る、その時のみ。時間限定の自然現象なのだが、それをしっかりと見ることができた。沈みゆく青い太陽と、昇ってくる黄色の太陽、二つの光源が地平線に見えた時は感動すら覚えた。青白い太陽が沈む頃に黄色い太陽が出てくるような感じのため、常に太陽の光が地上に届くことになり、日没によって夜になることは無い。また同じように2つの太陽は月も照らしているので、月の満ち欠けは存在せず毎晩満月となる。光の差さない新月のような暗闇の夜は存在しないのだ。

地球生まれのオキシにとって、月蝕が終った時よりも、太陽が地平線から昇る時になってやっと「夜明が明けた」という実感が沸いて出てくる。

「……と言うことは。ああ、また徹夜してしまったなあ」
そういえばこの異世界に来てから、あの野原で軽く睡眠をとったくらいで、ろくに眠っていない。

基本的に知的好奇心が満たされれば何でも良く、熱中できる対象があれば睡眠を削るのは苦ではない。身体が発する信号は感じることはできるのだが、求めている欲求が総じて鈍い。寝不足でも特に体調や精神的な部分にまったく変化が起きない身体と言うのは、わずらわしさが無いので喜ばしいことではあるのだが、少し不気味な感じもした。

「この感覚は、生物としてどうなのだろう？」

夜は明けたが、人々はいつ起床し活動したすのか、この世界の生活サイクルがまったく分からない。つまり、いつ頃キセノンが迎えに来るのかはわからないのだ。組合ギルドが比較的空いているという昼頃に来るとは聞いていたが、いつが昼頃なのか皆目見当もつかなかった。

眠いわけでもなく、まったく眠る必要性を感じないので、今から眠って中途半端に起こされるよりも、この際このまま起きていようと決めた。

オキシは部屋の中を見回す。昇ったばかりの太陽光は、部屋の中にまでは差し込んで来ず薄暗い空間を作っている。部屋の隅のほうにシャボンの玉のような物が浮かんでいることに気がついた。その中では、ロゲンハイドが眠っていた。

オキシは急にその泡が非常に気になりだした。触ると割れてしまっただろうか、それとも硬いものなのだろうか。頭にあるのは、そのことばかり。それに触れることによって、ロゲンハイドを起こしてしまう危険性は考慮していたが、そのような気遣いはあつという間に意識のあなたに追いやられた。

オキシは、そうつと触れてみた。それは温かくも冷たくもない、少し柔らかな感触で弾力がある水であった。

「あ、ごめん、やっぱり起こしちゃった？」

触れたときの振動で起こしてしまったのだろうか、ロゲンハイドが目を開いたのだ。

ロゲンハイドが体を起こすと、水の膜が大気に溶け消え去った。

「いや、大丈夫だよ。空の何をあんなに熱心に見ていたの？」

ロゲンハイドは特に文句も言わず、問いかけた。

「月だよ。月がきれいだったから」

「おいらびつくりしちゃったよ。だって夜の間ずっと飽きもせず、熱心に空を見ていたのだから、なんだろうって思った」

「観察して熱中しだすと、どうしても時間を忘れてしまうんだ」

「そういえば、昼間もそうだったものね。観察が好きなんだねえ。」

「おいらも好きだよ、観察」

そう言ってロゲンハイドはうつすらと笑う。おそらくはずっとオキシの観察していたのだろう。

「……いつから起きていたの？」

「精霊は睡眠は必要ないんだよ。ただ、眠っている状態の真似をするだけ。ふかふかなモノでごろごろするのは気持ちいいもの」

「それは確かに」

日がな一日、ぼんやりと観察したり考え事するのは、なんて素敵なことだろう。

「ロゲンハイドちゃんも、観察が好きなんだ」

それならば、あのすばらしい微小ミクロの世界を見たらどう思うだろう。

「この辺で虫眼鏡ルーペが売っている場所はある？ レンズでもいいのだけれど」

小学生のころ読んだ科学雑誌に『牛乳パックと虫眼鏡で望遠鏡や顕微鏡を作ろう』という記事があつて、虫眼鏡が数枚あれば顕微鏡

は簡単に作れることをオキシは知っていた。ちょうど夏休みだったので、自由研究も兼ねてそれを作り色々なものを覗いてみたものだ。作り方はとても簡単なので、それを作ってロゲンハイドに贈ろうと考えた。

「レンズ？」

ロゲンハイドは、聞きなれない単語に首をかしげている。もしかすると存在しないのだろうか。

「レンズと言うのは……ああ、ルーペは向こうか」

愛用のルーペは地球に置いてきた鞆の中だ。ルーペは野外に出かけた時にしか使わないので、普段は邪魔にならないように鞆にしまつてあったのだ。ああ、どうして白衣のポケットなり首にかけておかなかったのか、少し悔やまれる。

過ぎてしまったことに後悔しても仕方がない。そういえばレンズといえば、ルーペ以外にもうひとつ自分は持っている。それはいつも身に着けていたので、一緒に異世界に来たのだ。

オキシは白衣のポケットに入れてある眼鏡を取り出して「こういうのある？」と聞いてみた。

「この場合は物が小さく見えるから、僕の欲しいレンズと少し違うのだけれど」

この眼鏡には、かなり度の強い凹レンズが使われているので、顕著に対象の物が小さくなるのが見て分かる。

「おお、これは玻璃水晶^{はり}みたいだね。珍しいから値段はうんと高いんだよ。この町ではまず手に入らないと思う」

「そうか……」

それならば仕方ない、と言って諦めるオキシではない。無ければ代用品を探したり、工夫して作ればいいだけなのだ。幸運なことに、目の前にいるのは水を扱う精霊である。顕微鏡は無理だとしても、虫眼鏡のようなものならば今手持ちの道具だけでもすぐに作れる。

オキシは昼間キセノンにもらった銅貨を探し、こう切り出した。
「この硬貨の穴に、さっきロゲンハイドちゃんを覆っていたような水を一滴たらしめて欲しい」

先ほど触ったあの不思議な状態の水を使えば、時間が経っても途中で蒸発してしまう事はないだろう。

「いいよ」

ロゲンハイドはそう言うと言指先から水滴をしたたらず。銅貨に垂らされた水は穴をふさぎ、表面張力に支えられ中央で弧を描いて膨らんだ状態になる。

「水の量もちょうどいい。ちゃんと凸レンズになっているね」

オキシはその硬貨を本の文字に近づけ、出来具合を確認をしている。非常に小さな微生物を見るには少し倍率は足りないが、身近にあるものを少し詳しく見るにはいいだろう。

「コツがいるけれど、うまく覗けば物が大きく見えるよ。覗いてごらん」

オキシはロゲンハイドに、水滴レンズを手渡した。

「あ、本当だ。文字が大きくなって！へえ、水で作れるんだ！」
硬貨の小さな穴を覗き込み、間違いなく文字が大きくなっていることを確認し、ロゲンハイドは驚きの声を上げている。すっかりお気に召したらしい。

「水で作ったレンズは、ガラス製のに比べると色々劣るけれど。まあ、玩具の虫眼鏡として遊ぶには良いんじゃないかな。……子供の頃はこうやって、よく五円玉の穴に水を張って作ったものだよ」

レンズは対象物にかなり距離を近づけないといけないので、手元を誤って近づかせ過ぎて、下の新聞紙に水分を奪われてしまう失敗を何度も起こしてしまった。今となっては懐かしい思い出である。

「ゴエンダマ？」

「僕の国で使われている、このお金みたいに穴の開いている硬貨だよ」

「ふん。ねえ、これって近くの物しか見えないの？」

「残念ながら、すぐ近くのものしか見えないんだ」

「さっきオキシちゃんが見ていたから、遠くも見えるのか、ちよつと気になっただけ」

「望遠鏡を作るにはレンズが最低でも2枚必要なんだよ。それに、この硬貨レンズでは小さすぎて望遠鏡にするには向いていないから難しいよ」

「望遠鏡？ ああ、天眼筒のことだね。魔術師たちが作ったやつ。おいらは1回しか見たことがないけれど」

「この世界に望遠鏡の概念はあるようだ。レンズの値段が高価だから、あまり広まっていなみたいだが。」

「大きめなものがあれば天眼……いや、その望遠鏡はできるんだね？」

「うん、そうだね。他に筒を用意する必要があるけれど、その入手は難しくなさそうだし」

「筒に関しては竹や木や紙等いくらでも代用品があるので問題は無い。問題なのはレンズだけなのだ。」

「大きなレンズ、おいらの水で作れるかなあ」

「ロゲンハイドは水を出現させ、大きさを変えたり、薄く伸ばした水を出しては、それを覗き込み、首を傾げては消したりを繰り返していた。」

「そんなこともできるのか、魔法ってすごいな」

「重力や張力、あらゆる物理現象を無視して、そこに存在していたのだ。」

「（粘土のように自由に形が変えられるのか。魔法と言うのは便利なのかかもしれないな）」

「変幻自在に形を変える水の様子を見て、オキシはそう思った。」

「ただ薄く伸ばすだけじゃだめなのか……何が足りないんだろう？」

イメージがつかめない」

像がゆがんたり、ぼやけたりするだけで、思ったようなものは作れないようだ。ロゲンハイドは、どのようにすればレンズが物を拡大したり、縮小したりするのかと言う原理が分からなかったのだ。

「レンズには、大きく分けて凸レンズと凹レンズって言うのがあって……」

凸レンズと凹レンズの形、基本的な性質、光の屈折や反射、焦点距離や虚像と実像など、光路図を描きながら、オキシは丁寧に解説し始めた。

「……しかし、だからといって、ただ単純に高倍率のレンズを組み合わせて倍率を上げるのがいいというわけでもないんだ。像の歪みや色のずれ、色々な収差が修正できないのであれば、ものすごい高倍率を出せたとしても、性能がいいとは言えない。でも、その収差を小さくできるレンズも発明されている。それは非球面レンズと言ってちょっと複雑な形をしているんだけど……」

オキシの講義は終わりそうに無い。相手が何につまずいているのか、それを汲み取る能力があまり無いので、どんどん先に進めてしまふのだ。自覚はしているのだが、どうしても直らない癖であった。「う、うん。なんとなく分かったような、難しくてわからないような」

レンズの形や、焦点というものがあると言うのは、なんとなく理解することはできたのだが、焦点距離を求めるとか、幾何光学と言うやつが出てくるあたりから、ロゲンハイドは全く分からなくなってしまった。

「とにかく凹レンズや凸レンズを何枚か作って、出来上がったら貸してごらん。良さそうな物をその中から選んで、あとの事は僕がするから」

今回作る望遠鏡は、正立像で見ることができる接眼側が凹レンズ

の望遠鏡にしようと考えている。接眼レンズも対物レンズも凸レンズにすると倍率は大きいものが作れるが、その性質上、見える景色は逆さまになる。そのことに対してまず間違いなく尋ねられるだろう。しかし、どうして逆さなのかという質問に答えるとなると、どうしても先ほどの説明と似通ったものとなってしまうので、お互いに時間や体力を無駄に浪費してしまい得策ではないと感じたからだ。基礎知識のまったく無い相手に説明する、それが自分の力量ではいかに難しいかオキシは知ったのだ。

「僕の魔力は遠慮なく好きなだけ使っていいから、理屈云々は置いておいて、いろいろな事を試してみるといいよ」

自分はこの世界の技術や魔法の知識は皆無、だから水のことは水の専門家に任せるのが一番。それに個人的な趣味に巻き込んでしまったのだし、そのために魔法を使わせてしまうのだ。一応契約した身でもあるし、研究費として魔力くらいは提供しないと、申し訳が無い。

「おいら、やるよ。レンズを水で作れるようにがんばる！」

ロゲンハイドはやる気に満ち溢れた表情で、水をまとった半透明な体を震わせていた。

18・日輪の天体観測を。（後書き）

実際に、作ってみたい人はどうぞ的な参考文献？（その1）

5円玉のレンズ

<http://www.asagaku.com/rikaitime/2006/10/1025.htm>

親子でつくる30分で出来る望遠鏡の作り

<http://homepages.nifty.com/yamaca/jisaku/singl/single.htm>

牛乳パックで作る変倍望遠鏡

<http://homepages.nifty.com/yamaca/jisaku/vr1/vr1t11.html>

牛乳パックで作る顕微鏡

<http://homepages.nifty.com/yamaca/jisaku/vr1/vr1t3.html>

19・過剰技術に気をつけようかなあ。

「そうだ。望遠鏡ではなくて、顕微鏡を作ろうとしていたんだっただけ。もちろんロゲンハイドのために望遠鏡は作るつもりだが、本当の目的はそれではない。」

いろいろなことに気を取られるのはいつものことだが、話がそれたおかげで「水でレンズを作れること」を思い出せた。

それに「蒸発しない紙にも染み込まない変幻自在な魔法の水」の存在を知ったのは大きな収穫で、寄り道した先で得た結果は十分に満足できるものであった。

この魔法の水があれば、あの顕微鏡が作れるかもしれないのだ。その顕微鏡は使い勝手があまり良くないので、記憶の底に深く沈んでいたが、水レンズのおかげで思い出すことができたのだ。

「ロゲンハイドちゃん。紙に乗せても形が崩れない球形の水は作れる？ 大きさは、さっきのよりも少し少ない量でいいんだけど」

硬貨のレンズを覗いているロゲンハイドに、再び頼みごとをする。今から作ろうとしている道具、それは単式顕微鏡と言って、その名の通りレンズが1枚でできた顕微鏡の事だ。

（ちなみに学校にある接眼レンズや対物レンズといった複数のレンズを使っている顕微鏡は複式顕微鏡と言う）

球状のレンズは、曲率が大きいため小さくとも高倍率が得られる。その分歪みもひどくなるが、硬貨の穴に水を張ってできたレンズよりも、もっと小さいものが見えるのだ。

単式顕微鏡でも、十分に微生物の世界を見ることができる。実際に微生物を歴史上最初に顕微鏡で見た人物が、微生物を発見した時に使ったのも、球形レンズが1枚だけの単式顕微鏡だったのである。

「球形の水？ 簡単だよ！」

そういい終わらぬうちに、ロゲンハイドの指の先には、きれいな球形の形をした水が浮かんでいた。

「これ、どうすればいい？」

「あ、必要なもの作るから、少し待って」

本当は画用紙のような厚めの紙があるといいのだが、手元がないので広告チラシを折って使うことにする。中央に小さな穴を開け、余分な光が反射しないように穴の周りを黒く塗りつぶす。そして、ロゲンハイドが作った小さな水球を穴に押し込んだ。

次に服から摘み取った毛玉を指先に乗せ、出来上がったばかりの顕微鏡を覗き込んで具合確かめる。狭い視野の中に、絡み合った繊維を確かめることができた。

「ぎりぎり大丈夫かな。やっぱり単式の顕微鏡は、ちょっと扱いづらい」

もつときちんとした物を作ればいいのだが、今は材料もない。それにしっかりと作るには、やはり専門の人でないと難しい。

繊維は繊維で観察するのは楽しいのだが、生き物の動く様にはやはり敵わない。オキシは軽く息を吹いて指先のほこりを飛ばすと、辺りを見回した。

「次は何か微生物を。どこにいるかな？ …… そうだ、こつち来て」
簡単な顕微鏡でも見えそうな、大きめの微生物が外の水たまりにいたことを思い出したのだ。

オキシは開いている窓に足をかけ、とうつと外へ飛び降りた。部屋は1階にあるので、なんてことはない。安全に地面に着地することができた。

「あつ、窓から外へ行くの？」

やや野生的な行動に、ロゲンハイドは驚いている。

「近道、近道。細かいことは気にしない、気にしない」

部屋の戸を開けて、鍵をかけて、廊下を歩いて、挨拶しつつ玄関から出るだなんてしてられないのだ。

「みずたまり、みずたまりはどこにあるかな」

日中に日向になっている場所はすっかり乾いているが、水はけの悪そうな場所の日陰にはまだ小さな水溜りが残っていた。さっそく水溜りを見つけたオキシは、小躍りしながらそれに近づいた。

「このみずたまりの水も、魔法で形を変えることはできる？ 例えるなら、葉っぱくらいの薄さの板にしてもらえると嬉しい」

指で大体の大きさを示す。観察の対象物に光が通らなくては、この顕微鏡は見えないのだ。

「まかせて」

ロゲンハイドが、水たまりの表面に何やら投げ込むような仕草をする。

水面が震えだしたかと思うと波紋が広がり、その中心から引き伸ばされたひとつの雫が薄く変形していく。そして、それはオキシの手のひらに収まった。ガラスかプラスチックで作ったかのようなしつかりとした塊だが、間違いなく水でできた板である。

「これは……プレパラート作りも楽になる」

水をそのままプレパラートにできるのだ。しかもこの水は蒸発しない。観察対象の状態さえ気をつけていれば、そのままの状態で長く保存もできそうだ。

対象の水を薄い板状にしてそのまま保持するという、この魔法はぜひとも自分でも扱えるようになりたいものだ。ほんの少し魔法に興味が出てきたが、今はそんなことよりも微生物である。

オキシは出来上がったばかりの水の板を、顕微鏡の目で覗いてみる。一番大切なのは、このすくい上げた水の中に彼らがいるかどうかである。

「いた、ミジンコもどき！」

ミジンコにはある胸肢が無かったり、ミジンコにない特徴があったりと、よく見てみれば細かい相違は多々あるのだが、豆のように丸い輪郭、^{シルエット}枝分かれした触角、それを振って泳ぐ特徴のある姿は、地球人がそれを見ればまず間違いなくミジンコではないかと言ってしまうほどに、まるでミジンコだったのだ。オキシも発見した時、「ミジンコだ」とつい口走ってしまったほどである。

今は「ミジンコもどき」と呼んでいるが、ある程度微生物の種類が集まったら、フタツノミジンコなり、ウシミジンコなり、ミシミジンコなり、それっぽい名前をつけたいと思っている。

「何かいるの？」

ロゲンハイドは、夢中になって水の板を例の道具で見ているオキシを、不思議そうな面持ちで見守っていた。

「ああ、たくさんいて素敵すぎる……いや、いや、違う。僕がコレに夢中になってどうするんだ」

オキシはやつと我に返り、自身に突っ込む。

「その道具で見ると何か見えるの？ その中に何かいるようには見えないけれど？ ……そういえば小さな反応はある、ような気もするし、ないような気もするし？ でも、やっぱりよく分からないや」「見なくても、分かるの？」

それは少し興味深い現象である。精霊は生命を感じることができる特別な能力を持っていると言っのだろうか。

「何か存在すれば独特の気配を出すからね。それが持つ質で契約をするしないか決めるから」

「気配？」

「気配というのは、魔力に似ているけれど……なんかそういう風を感じるんだ。でも、こんな微弱な気配は、意識を向けても漂ってきただ単なる残滓か何かだと思って、全く気にも止めたことがないよ。」

何かそこに生き物があるなんて、まず気がつかない。何かいると聞いた今でも、そこに何かいるなんて信じがたいことだよ」

ロゲンハイドは、この水の中に何かいることが腑に落ちないのか首をかしげている。

「とにかくこれで見てごらんよ。確かに生物がいるから。言うより、実際見てみた方が良い」

百聞は一見にしかず、百見は一験にしかずである。

オキシはロゲンハイドに、一式を手渡した。受け取ったロゲンハイドはオキシから教えてもらったように顕微鏡を目に当て、水の板を覗きこむ。

「あ、本当だ。今何か妙なのが横切った。こんなちっこいのに生き物なんだね」

「その小さな生命はこの水の中だけではなく、この空気の中、土の上、土の中、砂漠はもちろん火山帯の海底や冷たい極海、果ては宇宙にまでいるんだ。もちろん外だけではなく家の中にもいる。ありとあらゆる場所に、彼らはいるんだよ」

これが自分が愛してやまない神秘にあふれた微小の不思議たちなのだ。

「でも、なんだか魔物みたいだ」

ロゲンハイドは、奇怪なものを見てしまったかのような声で言う。「その不気味な造形を見て、何か悪いモノのように思つかもしれないけれど、彼らも自然界に必要な一員。きちんと世界を循環させるための役割があるんだよ。この生き物は、そのとがった吻で水中を漂うチリのようなものを食べているんだ。そのチリは植物の切れ端だったり、死骸の欠片だったり、とにかく水中を漂っているものは何でも口に入れてしまう性質があるみたいなんだ。いわゆる水をきれいにする掃除屋といったところかな」

この微生物の食性の事はもちろん、天敵などから身を隠し見つか

りにくくするために負の走光性（光を避ける性質）を持ち、光を当てれば、まるでおぼれているかのようにせわしく腕を動かしながら、物陰に隠れようとする事など、オキシはこの微生物について、自分が見て知ったことを矢継ぎ早に語りだす。

「そう思っ て見てみると、忙しく水中を漂っている様子がかわい
いと思わない？ 本当にかわいらしいやつだ」

魂を何かに奪われたかのように、オキシのまなざしが怪しい輝きを帯び始めた。

「ああ、僕たちの見ている世界はほんの一部にすぎない。この単式顕微鏡のような、こんな単純で貧弱な仕組みの計器でさえ、これだけ様々なことを観測できる。昔の人はこの少ない情報で少ない知識で、世界を見て調べ上げ考察し、学問の礎を築いてきた……」

今では微生物は生命とは何か、を語るには欠かせない存在となっている。もはや生物学を学ぶ時には、必ず語られるほど基礎的な事なのだ。

オキシは、いかに微生物が謎に満ち、生命の進化を語る上で重要であるかを話し続けた。

そして、いつしか話は生命の根源たる遺伝子を操作するの話に変わっていく。

「……今まで品種改良は、思い通りの組み合わせの性質が表に出て、しかも安定して発現するまで交配を何度も繰り返して、何年もかけて改良していく大変な作業だったんだ。でも、遺伝子を操作すればそれは要領よく実現できる。それだけではない、他の生物から欲しい性質を持つてくる事だってたやすい。本来生えるべき場所ではないところに器官を生やしたり、異なる動物のものの埋め込んだり……例えば本来触角になる部分に翅を生やす、光るための細胞を埋め込んで暗闇に光る体にする事だってできる。役に立ちそうなところで

は、ある有益な物質を生産する遺伝子を微生物に組み込んで培養し量産させることや、失った器官を再生させる研究もされていて……」
遺伝子組み換えやクローン技術と言った、難しい問題がはらむ技術のことまで早口に熱弁する。ほうっておけば、延々と話し続ける勢いだ。

「な、なんかよく分からないけれど、それが可能ならすごいことだよ。世界の法則を解明し、思うままに生命を作り変える。それはもう神の御業のよう……」

ロゲンハイドは、もはや何を言っているのかさっぱりわからないオキシを静めにかかる。

「……もしかして、ここではあまり公にできるものではない？」

新しい技術と言うものは、偏見や誤解や曲解があり、正しく理解されない一面も持つものである。

しかも生物を使った実験は、生命を弄ぶおぞましい禁忌の術を研究しているように見えてしまうこともあるだろう。一歩間違えれば糾弾され、排除されかねないのだ。

地球の科学の歴史を見てきても、社会的、宗教的、さまざまな観点から弾圧が行われてきた。この世界においてはどのような当世風なのか、それが少し気がかかりであった。面倒なことに巻き込まれ、ゆっくりと観察できなくなるのは避けたかったのだ。

「なんと言うのか、魔術師^{かれら}が語る生命の原理よりも、ずいぶん考え方が進んでいると言うか、次元が違うなあと言うか」

ロゲンハイドがそう戸惑うのも仕方がない。この世界には本来存在しない理論なのだから。それこそ本当に異なる次元からやって来たのだから。

「次元が違う、か。少し過剰技術だったか」
オーバーテクノロジー

見合わない科学は世界の均衡を乱す。「科学を扱う者としての倫

理」については講義で何度か耳にした。だからこそ、それがどう言うものか知っている。

バイオテクノロジー分子生物学的な知識は、医療、食品、農業に革命的な変化を起こし、生活の中に直接入り込んでいくような技術である。その実現によって、どこで何が起こるかはわからない。もし何か起これば、これは広範囲に被害が及ぶ可能性もある。そして、一度変化した世界は、もう二度と元のように戻れない。

遺伝子組み換えやバイオテクノロジーという単語を知っている人たちでさえ、その技術は「毎年10万人を救うからよし」として行うのか、しかし「副作用などで毎年100人の犠牲が出るから悪し」としてやめるのか、倫理問題やリスクのつりあいが取れず、その技術についての議論をし、是非を問い騒いでいる。つまるところ急激な発展に人間の精神的な処理能力がかみ合わず、手に余っている状態なのだ。

地球においてもそうなのだから、その概念さえないところに、自分が便利だから自分が欲しいからと言う、その一方的な結果だけで安易に技術を開発するのは、「未知」と言うだけで沸き起こる、言い知れぬ不安や恐怖だけを煽り危険が大きい。

その影響で、人が観察に没頭している時に、うるさく抗議されたり、物を投げられたりしようものなら、非常に邪魔で仕方が無い。

この世界では、レンズの仕組みは一般にはその知識が普及していないが存在している技術なので大丈夫かもしれないが、その原理が解明されているとはいえ、それは地球ほど進んでいない可能性もあるのだ。

この世界の技術がどの程度のものなのかまったく分からない以上、何も考えずに自分の持つ知識を他人に伝授するのは危険かもしれない。

勝手に技術を持ち込むことで、その地域の文化や伝統を壊してし

まう可能性がある。それまでこの世界の誰かが研究し培ってきたものを否定し、破壊してしまう。それでは押し付け^{エゴ}以外の何物でもない。

「……さっきの話は極秘、秘密だよ」

自分はたいした苦労もなく有用な「結果」^{ぎしゆつ}のみを使い、実現するために動くことができる。それでは尊敬すべき過去の偉人たちの苦労と喜び、業績を汚すようで失礼だし、それではあまりにもフェアじゃない。

この先、この世界に生まれるであろう素晴らしい天才たちの「楽しみ」を阻害してしまうのだ。この世界に生まれたものは、この世界に適応し進化した彼らが発展させていくべきである。

新しい事実を発見^{めんとしなこころ}する喜びは、彼らのもの^{しづめ}なのだ。そういうことは、彼らに任せてしまおう。そう自分の中で正当化をする。

うっかり地球産の技術や知識^{テクノロジー}を持ち込んでしまうこともあるかもしれないが、基本的に自分の心の中にしまっておこうとオキシは決めた。

そういうこの世界に無い技術・知識を広めてしまうことで、人が押しかけてくるのは、正直なことを言ってしまうえば迷惑極まりないのだ。他人に説明することによって、自分の観察のための時間を削られるのは勘弁してほしい。こっさりゆっくりと誰にも邪魔されずに、一人で観察していたいのである。

それもまた自己納得^{エゴ}でしかないが、その方が自分にとっても、この世界にとっても平穏で幸せなのかもしれない。

それに自分は微生物を観察しその生活の様子や一生をただ記すという、いわゆる多くの人間にとって「なんの役にも立たないコト」を調べるのが好きなのだ。

病原菌や遺伝子研究を専門にしていたのならばとにかく、それらの学については概論や入門の授業で学ぶような基礎的な知識しかな

い。

数多にいる微生物の生態を解明するなど、知的好奇心を満たす以外で何の役に立つというのかと、オキシは苦笑う。

「おお、オキシちゃんの一族の秘術なんだね。オキシちゃんつて、やっぱり魔術師なの？」

オキシの浮かべた笑みを、どう捉えたのか興味深そうに尋ねる。

「いや、秘術ってほどじゃないけれど……それに魔法とかそういうのは、まったく分からないから魔術師ではないよ」

魔法については、その存在も、その原理も、理解できないことだらけだった。

「そうなんだ？ 他人に秘密が漏れないように暗号のような言葉もじを使い、世界の理を説いた理論や技術に、そう思っただけだねあー」

世界の魔術師たちは、中世ヨーロッパにいた錬金術師の記した書のように、彼らにしか分からない独自の文字で、自らの研究の成果を記す者も数多くいるのだ。そういう風習があるので、この世界に存在しない日本語で書かれた書は、確かに彼らの研究をまとめたものと同じに見えてもおかしくはない。

オキシは魔術師に会ったことがないので、彼らがどういう存在かは分からなかったが、研究の成果を秘術として隠す行為が存在し許される世界であることは感じ取れた。

秘密裏に研究することが可能な環境ならば、多少オーバーテクノロジーな研究をしても大丈夫ではないかと、そつと悪魔が囁いた。

静かな町外れに住んで、不思議な器具、瓶詰めホルマリンづけの動物たちにあふれた独特な香りに満ちた部屋、そして何を研究しているか分からない魔術師……まるで狂科学者のようであつと憧れるかもしれない。

「でも、研究職っぽいところは似ているかもしれないけれど、やつ

ぱり魔術師と呼ばれるのはしつくりこないな。少なくとも、自然科学と超自然現象は相反する存在……」

地球では非科学的な物に分類されている魔法が、この世界ではあたりまえに存在する法則であるのは認めざるを得ない。しかし、それはあまりに地球での常識とはかけ離れているので、この非科学的現象をすっかり受け入れるのには、時間がかかりそうである。

「僕の研究は一人では難しいから、ロゲンハイドちゃんには、色々手伝ってもらいたい」

こと魔法に関しては、からきしなのだ。慣れない場所での研究には、現場を良く知る有能な助手がいるにこしたことはない。オキシは、ロゲンハイドはとても良い助手になると確信し、そのことを伝えた。

「じゃあ、おいらのことは、ロゲンって名前で呼んでよ。『ロゲンハイドちゃん』なんて、他人行儀だもの」

成り行きで「ちゃん付け」のまま過ごしてきたが、その呼び方にこだわりがあるわけではないので、その提案には賛成であった。

「よろしくロゲン」

「こちらこそ、オキシシ」

二人は遠慮なく呼び捨てしあう。自然と笑みがこぼれ、ますます友誼が深まっていくのを感じた。

19・過剰技術に気をつけようかなあ。（後書き）

実際に、作ってみたい人はどうぞ的な参考文献？（その2）
手作り単式顕微鏡！

レーウエンフック（歴史上最初に顕微鏡で微生物を見た人）の顕
微鏡

[http://www.kagaku.info/faq/le
uwenhoek030905/index.htm](http://www.kagaku.info/faq/leuwenhoek030905/index.htm)

水滴で顕微鏡

[http://www.geocities.co.jp/NatureLand/2111/microscope/suite
ki/suiteki.ms.htm](http://www.geocities.co.jp/NatureLand/2111/microscope/suiteki/suiteki.ms.htm)

20・発音が微妙におかしい原因は母音の中に。

キセノンは約束通り、オキシを迎えるために宿舎へやってきた。

本来ならば、出入り口へとまっすぐに向かうのだが、中庭の隅の方に見覚えのある色が見えたので立ちどまった。それは何かをしているオキシとロゲンハイドだった。

「そんなところで何やっているんだ？」

キセノンは二人にそう呼び掛けた。そういえば再会するたびに、何をしているのか問うているような気がした。相変わらずといえば、そうなのだが、オキシのしている行動は、傍目に見れば奇妙で意味がわからない。

「あ、もうそんな時間？」

振り向いたオキシの手には、透明な薄い板が何枚か握られていた。魔力をかすかに感じるので、魔法の産物であることは間違いない。

「それは、なんだ？」

「水の板。いくつかつくってもらったんだ。放っておいても10日は持つんだって、すばらしいよね」

これらは簡単に形成した物なので、長い時間が経つとさすがに水を包んでいる魔力が薄まり普通の水に戻ってしまう。魔力をこまめに補充するか、しっかりと媒体を準備して、時間をかけて魔力を練りこめば、半永久的にこの形を維持し続けることもできる。

その水でできた板がよつぽど嬉しかったのか、宝物を自慢する子供のように、オキシの笑顔がまぶしかった。

「そうか、よかったな」

オキシはよくわからない変わった物で喜んでいる。

キセノンは、オキシが自分の鱗を見て「きれい」と言っていたことを思い出し、もしかすると単純に透明色できらきらした薄い物が好きなのかもしれないと、検討違いな結論をだしていた。

「もうでかけるが、準備はいいか？」

「あ、ちよつと荷物を取ってくる。待つてて」

水の板を大切に白衣のポケットにしまいこむ。そして、オキシは窓の縁に足をかけて、よじ登り部屋に入る。

「そこは窓だぞ！」

キセノンは、オキシの行動に目を丸くする。

「いいの、いいの」

部屋の入り口には昨夜から鍵がかかっている。この状態で窓から外へ出たので、玄関からでは部屋に戻れない。部屋へ戻るときは、どちらにしろ窓から入らなくてはいけないのだ。

荷物といっても、自分には本しかない。準備はあつという間だ。

「白衣は脱いで行こうかな。どうしようかな」

本来はこれを着て街をうろつくものではないのだが、異世界人にそれが分かるはずも無い。着ていて不都合なことも無いし、なによりもポケットがある。自分が持っている服はポケットが少なく小さい。小物をポケットに詰め込む癖のある者にとってポケットは重要なのだ。

白衣は内ポケットまであるし、満足のできる大きさのポケットがある優れた衣服なので、このまま普段着にしてしまおうとオキシは思った。

もちろん今度は、ちゃんと部屋の戸から出た。管理人に部屋の鍵を預けるために玄関口へ向かう。

「おはよう。昨夜はのんびりできたかな？」

「おはようございます。おかげさまで、快適な夜でした」

夜通し観察しまくり、すごく充実した夜だった。

オキシは鍵を管理人に預け、キセノンの待つ外へ向かう。

「気をつけて行ってらっしゃい」

「はい。いつてきます」

「おまたせ」

オキシはキセノンと合流した。

「昨夜はゆつくり眠れたか？」

「う、うん。まあまあ、ね」

まったく眠っていないけれど、否定すればそれはそれで面倒くさい。寝てはいないがゆつくりはできたので、大差はないだろう。

『本当は、まったく寝てないけどね』

ロゲンハイドは、オキシにだけ聞こえる言葉で言う。

『寝てないことは、内緒だよ？』

オキシはロゲンハイドに、こっそり語りかけた。

『わかったよ』

ロゲンハイドも共犯者になった。

「朝飯は……まだ食べてないだろう？」

到底食べているとは思えなかった。

「いや、大丈夫。もともと朝はあんまり食べないんだ」

食えることが必要ない体質になったせいかな、まったくお腹がすいていないので、適当にそれっぽいのを言う。その言葉を聞いてキセノンはきちんと食えというような顔をしたが、諦めてため息をつくだけに留めた。

「行くか」

「うん」

「いい仕事があるといいな」

「おまえは、外見が子供に見えるからな。どうしても仕事は限られてしまうが」

「だとは思っているよ」

飯に大人に見られていても、それはそれでできないものやりたくないが多そうだが。

「子供のこづかい稼ぎになるようなものも、ちゃんと用意されているから、ちょうどいい仕事はあると思うぞ」

子供でも組合ギルドに登録すれば仕事を探せる。日本とは異なり未成年でも立派な働き手として認められているのだ。

もしも日本のように労働について法がきつちりと決まっているような国であつたら、身分も出身国も何もかも不明で、本人がいくら成人していると言い張っても年齢を証明するものがないので、働かせもらえなかったかもしれない。

「何気に充実している社会なのかもしれないな」

ちよつと自由すぎるような気もするが、それで成り立っているのだから、そこをとやかく言っても仕方ないだろう。

「この町はちよつと特殊な事情があるのだが。食うには困らない暮らしやすい町ではある」

キセノンは言う。この町は国境に近く、簡単に言つと補給の町である。町で道具を整えて、この先にある過酷な土地を越え隣国へ行つたり、その逆に隣国からの長旅の疲れをこの街で癒し、それぞれの目的地へ向かうのだ。

人の出入りは激しく品物も集まる、ちよつとした仕事を見つけるには恵まれた町なのだ。

何かをしようと思うものには、手をさしのべる。豊かであるが故の精神的な余裕からくる、他者への思いやりにあふれている。面倒見がいい人が多いのは、そういう背景があるのかもしれない。

話しながら歩いたので、あつという間に目的地に到着した。

「いらつしやい」

受付嬢のサルファは、来客を笑顔で出迎える。彼女の黄金髪ブロンドからは、丸みを帯びた長めの耳がのぞいている。瞳は赤くはないがまるでウサギのようなやさしい雰囲気フレイムの女性である。

「あら、あなたは」

昨日、精霊と契約をした子ではないか。見覚えのある黒い髪。珍しい色なので覚えていたのだ。

サルファは精霊と契約はしていないが、見ることはできるのだ。精霊を見ることができたり、感じたりできる人は多いが、契約をできる者は少ないのである。

「昨日、精霊と契約していた子ね」

「……はい。成り行きで」

昨日、精霊と契約した場所は、ここから場所が近い。目撃されていたのだろうと、オキシは思う。

「今日はどういうご要件で？」

「昨日連絡したと思うが、こいつが例のやつだ」

「ああ、この子なんですな」

ある程度の話は伝わっているらしい。

「じゃあ、俺は向こうで待っているから」

キセノンは、そう言う待合室の一角に腰を下した。

「簡単にギルドについて説明するわね」

サルファは、ギルドについて説明を始めた。ギルドを介すと、報酬から税や諸経費は一定額引かれるが、仕事の依頼主の未払いを防げ、提携している店を利用する時に優遇される特典がある。

報酬は現金での受け取りも可能のようだが、大半の者はギルド付属の銀行に振り込んでもらっているようだ。

この銀行は貯金しても利子などはつかず、定期的に預けている額に比例した税が少し取られる。しかし、それでも多くの人が利用し

ている理由は、高い安全性と利便性である。

硬貨は数十枚も持てばかさばり重くなっていく。そして、あまり多く持ち歩いていると、盗人に狙われやすく、盗まれたときの痛手も大きい。大量の硬貨の保管場所に困った時、そんな時にこの銀行は役に立つのだ。銀行というよりかは、貸し金庫に近い制度のようだ。

魔法が組み込まれたシステムにより、偽造硬貨は受け付けず、成りすましによる不正な取引も難しい。本人以外認証されないという個人識別システムに関しては、地球の技術よりも上である。

時折引かれる税もそれほど多いわけではなく、安心を買っているような感じで利用する人も多いようだ。

特に断る理由も無いので、オキシは口座を作ることにした。

「ご質問がなければ、これに記入お願いします。その情報を元に『登録証』を発行しますね」

サルファは書類を差し出した。しかし、オキシは文字を読むことができない。

「僕はかろうじて自分の名前は書くことはできるのですが、この国の字はまだよく読めないんです。どこに何を書けばいいのか」

自分の名前に使われている文字とその組み合わせの文字は、何となくわかるのだが、それだけでは到底読めるとは言いがたかった。

「それならば私が書きますね。最後の署名だけは自分で書いていたかなくてはなりません」

「お願いします」

そして、『登録証』をつくるための書類作成が始まった。

「お名前は何でしょう？」

「名前は沖石 おきいし 醇奈 じゅんな です」

「オキシジェンナ？」

「……そうです」

そういえば、この世界では姓を名乗る風習はあるのだろうか。今まで誰も、どこまでが姓でどこからが名なのか、何も言っていない。オキシジェンナで、ひとつの名前と名づけているのだろうか。この名前を聞いて、どこか遠い異国の名前と思うのか思わないのか、名前だけで性別の判別はつくのかつかないのか、名前についての疑問がわいては消えていった。

「生年月日をお願いします」

オキシは悩んだ。地球の暦がこの世界に通用するとは思えなかった。

「ええと、この国の暦とは違う暦の国からきたから、どう答えて言いか」

「そうですか。大丈夫ですよ。今日から何日後に誕生日が分かります？ それとも、今日の日付にしておきますか？」

暦が違ふところから来る人は案外多いのだろうか、誕生日が不明の場合の対応も、存在しているようだ。

「この登録内容は3年後の誕生日の月まで有効なんです。それを過ぎてしまったら、一時的に使えなくなってしまうので、気をつけてください。大抵の人は、誕生日の月を記入している方が多いですね、忘れにくいので」

更新する必要があるから、目安になる日にちを書かなくてはいい。それは、生年月日である必要はなく、任意の日付でも大丈夫なようだ。

「ちなみに、この国の暦ってどんな感じですか？」

ついでにこの国の暦を聞いておこうと思ったのだ。

「1周期は7つひつつきからなっています。1周期は36つに分かれていて、黄の1日、次は青の1日、その次は黄の2日、次は青の2日と言う

ように、青の18日まで全36日、黄と青が交互に来ます」

青とか黄色というのは、この世界にある2つの太陽の色である。曜日みたいなものだろう。

「なるほど。つまり一年は252日なのか」

一日の長さが地球とは同じとは限らないが、ずいぶん短い1年である。

「じゃあ、6周期ろくがつの、青の7日をお願いします」

オキシの名前の醇奈という名前は6月7日Juneに生まれたからつけられたのだ。

地球での誕生日と同じ数字にしておけば、目安には良いだろう。

そして、青と黄では青が好きなので、それを選んだ。

（19日以降、そして8月以降の生まれじゃなくてよかった。そうだったのならば、誕生日に似たような日付を選べなかったから）

「では、6周期の青の7日ですね。生年は空欄にしておきます」

「はい」

「次は職業ですね。空欄でも大丈夫ですよ」

「職業は学生かな」

所属していた学校は世界の彼方にあり、もうその場所で学ぶことはできないので正確には無職になるのだろうか。

「学生さんなんですか。すごいですね。では次に属性は？」

魔法には様々な属性がある。魔法をあまり使わない人もいるが、基本的には全ての人は魔法を扱えるのだ。

「属性？」

「得意な分野だけでも良いですし、よく使うものだけでもいいですよ。それから申請したくない場合は言わなくても大丈夫ですよ」

「得意分野？……微生物かな」

よく分からないので、研究の専門を答えておいた。何にせよ自分はそれ以外、得意ではないのだ。

「ビセーヴェツ？」

聞いたことがないと思いつつも、サルファはそう書き記した。

「最後に出身は」

「日本、でいいのかな？」

「ニホン？」

「ええと……遠い場所にある小さな島国だし。この国とはまったく交流もないので、知らない地域とは思いますよ」

この世界自体と交流はないのだが、別に嘘は言っていない。

「ずいぶんと遠いところから、いらしたんですね」

こんなに小さい子なのにもかかわらず、知らない土地を旅しながら様々なことを学んでいるのねと、サルファは感心した。

「最後に個人識別のための情報を記憶するので、この器械に手をかざして下さい」

オキシは言われた通りにその器械を覆うように手を差し出した。

器械が起動し、幾何学模様が描かれた同心円状の光が浮かび上がる。そして、その陣は2、3回発光して器械の中に消えた。

「はい、お疲れさまでした。登録証が出来上がったら呼びますので、少々お待ちください」

発行されるまで、少し時間がかかるようなので、待合室の方で待つことにした。

待合室には何人かいてそれぞれに待ち時間をつぶしていた。オキシは部屋を見回して、キセノンを探す。

キセノンは目をつぶり瞑想しているようだった。その横でロゲンハイドは、レンズづくりに熱中している。水を薄く伸ばしてはのぞきこみ、気になれば体内に収容している。なので今はちよつと太り気味の造形になっている。それがなんだかおかしかった。

オキシは彼らの隣に座り、部屋を眺めた。外からの光を取り入れられるように窓は大きく、直射日光をさえぎる薄手の布から柔らかな光がさしている。木目の壁には様々なチラシが貼っており、鮮やかな色を散らして独特の雰囲気を出していた。

そして部屋の角、天井付近に設置してある器械が目に入った。

「あれは、まさか」

黒曜石のように黒光のする鉱石の板に、映像が映し出されているのだ。人々の雑談に溶けてよく聞こえないが音声までついているようだ。内容は魔物情報や、イベント情報、ここ最近の天気傾向などのようだ。

色数の少ない荒い画質で、しかも動画というよりは、どちらかというと動く紙芝居か、静画のスライドショーといったところだろうか。テレビほど滑らかな映像ではないが、道具に関して技術的には地球と近い部分があるのかもしれない。

「どうした？ 知っている場所でも映っていたのか」

キセノンは画面を見ているオキシに尋ねた。

「いや、こんな器械もあるんだと思って」

見知らぬ場所を映しているテレビもどきを指さした。

「受像機のことか。珍しいのか？」

「いや、そう言うわけじゃないけれど。受像機っていうのか、これは」

オキシは受像機をじつと見つめる。映像は定期的に変わり続けるが、文字が読めないのもそれが残念で仕方なかった。

「文字の勉強を少ししようかなあ」

自分の名前くらいしか読み書きできないのは、なにかと不便そうだ。少なくとも、この受像機に映し出される内容や、張り紙などを読めるくらいにはなりたい。欲をいうなら書物をすらすら読めるようになれば、一番いい。どこに自分に有益な知識が紛れ込んでいるかわからないのだ。

そういえば、手持ちの本に辞書機能のようなものもあったことを思い出し本を開いた。この国は確かアクチノとキセノンは言っていた。オキシは、アクチノ語の概要と特徴の項目を開き、黙読しはじめた。

アクチノ語には母音が4つしかない。ア、イ、エ（ウに近い中間音）、オの4つである。つまり、「ウ」と「エ」の発音があいまいな言語なので、自分の名前である「ジュンナ」という発音は難しく、どう頑張っても「ジェンナ」となってしまうようだ。言語全体に及んでいる訛りみたいなものって思うしかない。謎は解けたが、ちょっと納得のいかない法則であった。

そういえば、自分の名前には偶然にも4種全ての母音入っているなど、ふと思った。

母音の基本的なことがわかった所で、記されている言語の文字の形を一通りばらばらと見ていく。外国語を学ぶ時と一緒に。最初は、文字の形に慣れることだ。文字の隣には、英語の辞書でもよく見かける発音記号が書いてあるので、読み方もばっちりである。

「これならなんとか、使いこなせそうだ」

大体の文字の形を把握したところで、何か訳してみようとあたりを見渡した。壁に張ってある紙に書かれている文字を辞書で探してみる。

そうやって、いくつか文字を調べ読んでみて気がついたことなのだが、文字だけでは意味がわからない単語でも、その文字を読み上げてみると、地球に存在する単語ならば、その瞬間意味がわかるのだ。翻訳の能力は、どうやら音に反応して発動するようだ。

「ふえるのためのFermi いじやのarap つじくのadraped のくへopmet ed

oyiraroh よてい ああ、これは停留所の時刻表だね。何か乗り物が来るのか」

ローマ字読みに近いあやしい発音しかできないが、それでも自分で口にしたアクチこくちノ語が、自動翻訳機能されていく現象を感じた。それは、なんとも奇妙な感覚である。

「文字の勉強しているの？ えらいね」

サルファが、お茶を盆に乗せやってきた。

「あ、ありがとうございます」

オキシはコップを受け取った。

「はい、キセノンさんも」

「ああ、すまない」

キセノンも受け取った。

紙コップには、文字が印字されていた。

「ええと、Aze、Azzeirf…… Rolacあつさつて、書いてあるのか」

オキシは拙い口調で、文字を読みあげている。読み慣れていない形の文字は解読しながら読んでいるので、アクチネイティブノ語を母国語スとしてビーカーいる者たちには、かなり少し舌つ足らずに聞こえてしまう。

「ああ、もうかわいい」

サルファは耐え切れずに、オキシを抱きしめる。彼女はかわいらしいものが好きである。

急なことにオキシは困惑する。これは間違いなく子供か小動物扱いされてると感じ、微妙な表情になり身を固くしてじっとすることしかできなかった。

(や、やわらかい……)
とても。

温かい匂いも少しする。

なぜかわからないけれども、少しだけ意識してしまい恥ずかしい気分になる。

「なんてうらやましいんだ」

「サルファさんの抱擁！」

待合室にいるサルファファンの男たちは、一連の出来事を羨望の視線で見ている。彼女の抱きついていている相手が子供のようなので、嫉妬までは至らなかったが、うらやましさをいっばいになった。

「くっそー、あのガキと代わりたい」

「おまえがガキだったら相手にされないさ。なによりもかわいげがない」

「なにを」

彼らは勝手に盛り上がり始めた。

「金髪美女と黒髪の子供が、ぬふふ」

何気に変態的妄想発言も喧騒に混じって聞こえたような気がするが、気にしてはいけなйдらう。

「サ、サルファさんは、人気者なんですね」

腕の中でなんとか声を発した。

「あらあら、おねえさん。勉強の邪魔しちゃったわね。あのうるさいおじさんたちは注意しておくから、お勉強頑張つてね」

サルファは満足したような表情で去っていった。

「……びっくりした」

まさか、いきなり抱きつかれるとは思ってもいなかった。日本にはない大胆で包容力のあるスキンシップに、かなり緊張してしまった。

オキシは気分を落ち着かせるために、お茶を一口飲む。清涼感のある甘い香りが、気分を落ち着かせる。

「これはお茶だね」

当たり前のことを言い、一息ついた。

そういえば、このお茶が入っているのは、紙製のコップである。ちようどこういう厚い紙がほしいと思っていたのだ。

「飲んだ後でいいから、キセノンの紙コップも頂戴？」

オキシは、キセノンの紙コップをねだる。

「何に使うんだ？」

キセノンは疑問に思う。このコップはそんなに耐久性があるものではない。基本的に使い捨てなのだ。

「ちよつとね、つくりたい物があつて」

このコップを切り貼りすれば、望遠鏡の筒に良さそうなのだ。見た目は不格好になってしまいが、いい筒が見つかるまでの代用品としては最適だ。ロゲンハイドもいくつかレンズを作っているようだし、今夜はレンズ選びに忙しくなりそうだ。

20・発音が微妙におかしい原因は母音の中に。（後書き）

この世界の暦、登場！

暦は、元素の周期表を見て思いついた。

（壁に「元素周期表」が貼ってあるのだ！）

ちなみに周期表で2周期の16族は「酸素」。

なので、2月16日生まれにしてしまおうとか、考えた時期もあった。

21・蠍はいやだが、雛はいい。

「オキシジエンナちゃん！」

サルファはオキシの名を呼ぶ。登録証に加工する処理がすべて終わったのだ。

「取ってくる」

今だ慣れぬその響きの名前を呼ばれ、オキシは本を閉じて立ち上がる。そして、窓口にいるサルファの元に向かった。

「お待ちせしました。これが登録証です」

受け取った登録証は、全体がまだほのかに温かった。材質はよくわからないが、合成樹脂プラスチックのような軽くて固い物質でできている。

白地に青いラインが入ったシンプルなデザインで、少し傾けると光に反射して紋章のような模様がうつすらと表面に現れる。薦と6本足の獣で構成されているこの模様は、確かアクチノ国の国旗に描かれている文様だ。そのちよつとしたギミックに、ときめいてしまった。

この組合ギルトの登録証は、提携している店で見せると割引になるのはもちろん、簡単な身分証の代わりとしても使える。もしも紛失した場合の再発行には、ほんの少し費用がかかるようだ。

そう言う大事なものは白衣の内ポケットに入れておけば失くさないだろうと、オキシはポケットにしまいこむ。

「仕事を探す時は、この部屋へ行ってください。掲示板に依頼書が貼ってあります」

サルファは見取り図を取り出し、依頼掲示板がある場所を指示す。その部屋は待合室のさらに奥にあり、登録証をつかわないと入れない場所らしい。

「いい仕事が見つかると、いいですね」

「はい。ありがとうございます」

オキシは掲示板のある部屋へ、向かうことにした。

「今度は仕事探し？」

ロゲンハイドは漂いながら語りかけてくる。十枚ほどのレンズが体内にしまわれ、体は瓢箪のような奇妙な形になっている。そんなに物をしまいこんで重くはないのだろうか。オキシはそう疑問に思うが、当のロゲンハイドは変わった様子もないので、特に不便はないのだろう。

依頼掲示板のある部屋の出入り口は、普通の扉ではなかった。半透明の布のようなものが行く手を阻んでいたのである。覆っているそれをよく見てみれば、気体のように何かが流動していた。これは間違いなく魔法の産物であろう。

その扉の右横には、白い円が描かれた正方形の平たい黒い石が取り付けてある。キセノンはその石に彼の登録証をかざした。キキッと不思議な音が鳴り、入り口を覆われていたものがあっという間に霧散した。キセノンが中へ入ると、そこは元のように覆われた。

「なんか、すごいな」

覆っていたものが一瞬で消え、そして再び構築される現象を、目の前にしてつい声が漏れてしまう。

「オキシ、どうした？」

中から呼び掛けるキセノンの声がした。

そうだ、いつまでも感心してここで立ちどまっている場合ではない。

オキシはキセノンがそうしたように、登録証をかざし入り口を開いた。この現象が魔法の力であるといってしまうえばそれまでのだが、どのような原理でそうなるのか、やはり理解しがたかった。相変わらず不可解である。

「すごいたくさんある……」

これは紙の匂いだろうか、部屋を満たす独特な雰囲気を感じた。部屋はいくつか仕切り板で区切られており、その板も部屋の壁も一面に紙が貼られている。基本的に依頼書は黒い色の文字で書かれており、文字だけではなく絵が描かれたものである。

キセノンは迷わず部屋の一角へと、オキシを導いた。

「いわゆる雑用系はここに張り出されるんだ」

さすがキセノンは、どこにどんな依頼が貼り出されているのか把握していた。

「たくさんあるね」

雑用系は誰でもできる仕事なので、依頼を受ける人口が一番多い。そして気軽に依頼する人も多く、さらには一定量の人員や品を常に募集している日雇いのちよつとした仕事もある。

「文字がもつとしっかり読めれば、自分で探せるんだだけだなあ」

まだ多くの文字が読めないので、調べながらだと非常に時間がかかってしまう。

「文字が読めないのは仕方がない。今日は俺がいるから必要ないが、職員に言えば一緒に探してくれるぞ」

文字が読めない人は多いのだろうか。そこらへんの対応はしっかりしているようだ。

「おいらも探すよ」

この町で生まれ育ったロゲンハイドも、この国の文字が読めるようだ。

「頼りにしているよ」

「さて、できそうな仕事……たとえば薬草採取が得意とか、力仕事^が得意とか？」

この世界の植物については、まったくわからない。そして、力仕

事は論外である。オキシは首をふった。

「僕が今までやったことがある仕事といったら、農作物の間引きをしたりとか、収穫したりとか、そこで採れた作物を箱につめたり、あて先の札を張ったり……あぁ、最近だと微生物をひたすら寒天培地に塗布する作業をしたこともあるな。なんかそんな感じの仕事はしたことがある」

近所は農家が多かったので、時期になると母や祖母は手伝い^{パート}に出かけていたのだ。オキシはそれに幼いころから、ついて行っていた。小学低学年くらいのときは、専ら近く堀や田んぼでザリガニやおたまじやくしを取って遊んでいたが、高学年にもなるとお菓子欲しさに作業をよく手伝ったものだ。

知らない人とかかわる仕事は嫌いなオキシにとっては、近所コミユニティの狭い範囲で行われ、しかも大半の時間は人間を相手としないこの仕事はかなり好条件であった。

しかし大学に上がると実家から離れて暮らしたと言うこともあり、それらの作業を手伝うことはなくなってしまった。

「懐かしいな、農作業」

オキシの胸中には故郷が映っているのだろうか、わずかに目を細めほんのり笑んでいる。

「農家の出なのか？」

「農作業は、近所で募集していたからやってみたことがあるというだけで、うちは農業が専門じゃないんだけれどね。とにかく、単純作業は得意なんだ」

「ふむ、そんな感じのを探してみよう」

キセノンはそれを踏まえて、依頼を探していく。

オキシも文字を調べながら解読し探す。読み慣れない文字なので時間はかかるが、最初の行を読めば大体何の仕事かは分かるので、なんとか読み進めて行く。

「ねえねえ、あっちでもしろいの見つけちゃったよ」

いくつか並んでいる掲示板を飛び回っていたロゲンハイドが、隣の掲示板で何か見つけたらしい。オキシを呼びに来た。

「何か見つけたの？」

オキシはロゲンハイドに連れられてその掲示物の前へやってきた。
「これこれ」

ロゲンハイドの指さす先に、見覚えのある絵が張り出されていた。
「うわ！」

思わず小さく奇妙な声を出してしまった。そこにあったのは、昨日オキシが描いたあの通り魔の似顔絵である。似顔絵以外にも、色々細かく情報が書かれているようだが、その文字を読むところではない。自分の絵が貼つてあるのは、なんだか少し照れてそれどころではなかった。

「そっち掲示板は、お尋ね者が張り出される場所だ」
キセノンがそう説明する。

お尋ね者は依頼を受けていなくとも捕らえれば（ものによっては成敗すれば）、報酬がもらえる。ここに貼り出されている以外にも、彼らの情報が書かれた小冊子があり、彼らを追い詰めることを生業としている者はそれを携帯して、いつでも確認できるようにしている。

「お尋ね者……」

自分の描いた絵ばかりに目がいつて気がつかなかったが、この掲示板には他にも何枚か顔の描かれたものが貼つてあった。

「……早いね、行動が」

昨日の今日で、まさか貼り出されるとは思わなかった。

「昨日あの後、おまえが襲われた場所付近に何か手掛かりが残されていないかと人を派遣したら、そこで似た人物を見かけたという話

を聞いた」

「詳しいね」

「職業柄、な」

キセノンはお尋ね者を捕らえることが専門ではないが、何度か仲間と組んで盗賊団などを退治することもある。そう言う仕事をしている関係上、仲間内ではそういう噂はすぐに回ってくる。もちろん彼の耳にも、その話は入ってくるのだ。

「あんなことがあった後だ。偶然そこにいたにしてはあまりに不自然で、不審に思って話を聞こうと話し掛けたら、やつは逃げたらしい。この掲示板に貼りだされたということは、手配をするに値する何かがあったのだろう。そうでなければ、本来はもっと時間がかかる」

キセノンはそう説明した。色々事情があるようだ。

「本当に犯人は犯行現場に戻るものだったんだね……逃がしちゃったみたいだけれど」

よほど思い出さくないのだろう、オキシは眉をひそめて嫌そうな顔で、その紙を見ていた。

「まさか出くわす思わなかったから、追いつめるには準備不足だったのだろう。それに、やつは隠れ潜むことを得意としている蠍種^{スコレオシ}だしな。姿を隠し逃げたのならば、見つけるのはなかなか難しい」「そうなのか」

逃げ出したついでに、どうせならばこの町から離れ、どこか遠くに行ってくれるとありがたい。そうであるならば、もう会うことはない。それはある意味で喜ばしいと、オキシは思った。

「……隠れるならいつそのこと、地獄にでも逃げ込んで、こんがり真っ赤な焼きサソリになってしまえばいいのに……そうすれば、二度とこの世で目にすることはないから」

オキシは容赦ない言葉をさらっとはく。もう二度と会いたくはないし、関わりたくは無いだ。

「オキシシ、怖いよ」

そのような言霊ことばを本当にかけていそうなオキシの気配に、ロゲンハイドはほんの少しおびえている。しかし当のオキシは自分が恐ろしいことを言っていることも、つぶやくように声に出ていることさえも、まったく気がついていない。

「ああ……考えるのやめ、彼がどうなろうと僕にはもう関係ない。仕事探しに戻ろうつと」

それにあんなやつで思考を使うのは、時間の無駄で、非生産的である。オキシはなかば強制的に気を取り直し、さっさと仕事探しを再開する。

ロゲンハイドとキセノンは、切り替えの早いそんな様子のオキシにあっけにとられたが、お互いに目が合うと、肩をすくめ、ため息まじりに苦笑うと作業に戻った。

「これなんかどうだ？」
キセノンが1枚の紙を指さしている。オキシはその依頼を見ている。

「モモー M o m a r o w e d ……ええと、この文字はなんだっけ、g n y、いや、g n i l ……g n i l ……？」

発音すれば意味が自動翻訳の能力で理解できるが、今はまだ文字の形を見ても読み方がすんなり出てくるわけではないので、かなりつつかりながらの解読である。

「それは、雛つて単語だよ」

ロゲンハイドが助け船を出す。

「雛？ モモー口の雛か……ふむ」

「これは雛の雄と雌を分けて、出荷の手伝いだな。日によっては卵を箱に詰めることもするようだ。これは1日だけでも可能だ。賃金もまあまあ一般的だな」

「雛の仕分け……」

雛のオスメスの見分けは、難しいと聞いたことがある。しかし、

それは地球のひよこの話であつて、ここは世界が異なるから雖も形状が違うのかもしれない。

「誰にでもできるから大丈夫だ。単純作業が得意なら向いている仕事だと思つぞ。それとも、別のものにするか？」

「いや、それやつてみるよ」

人間相手になければ別に何でもよかつた。それに、たまには小動物と触れ合つてみるのもいいだろう。そう思いオキシはこの仕事をすることにした。

「じゃ、この依頼書を受付に持っていけば受けられるぞ」

「わかつた」

オキシは依頼書を携えて、受付へ向かう。

「この仕事を引き受けます」

受付で依頼書を提示する。

「モモ一口の仕分けですね」

サルファは受け取ると内容の確認をする。

「そうです」

オキシはうなずいた。

「仕事はいつからはじめますか？ 明日から大丈夫ですよ」

「明日からで」

早い方がいいだろう。仕事をしなくてはいつまで経つてもきちんとした部屋を借りられないのだ。本音は観察を優先したいところだが、働くことは多少我慢どころである。

「仕事の詳しいことは、向こうで説明があります。明日、頑張つてね」

赤い印の押された紙と集合場所の地図を受け取った。自分以外にも何人がいて、全員集まったところで乗り物で少し移動するらしい。町から少し離れた場所に、その養モモ一口場ともいふべき牧場があるようだ。

「頑張ります」

こうして、なんとか仕事先を決めることができた。

22・微生物は神ではないし、崇拜も信仰もしていない。

「面妖な……」

朱をまとった炎を着こなし、炎に染まる肌を持つ精霊は面白いものを見るように、その橙の目を細めた。

「どうした？ フェルム？」

いつもは静かに付き従う精霊が突然口を開いたので、フォスファーラスは精霊の視線を追った。視線の先には、先ほどまで受付にいた爬虫族と哺乳族がいた。爬虫族の方は何度か見かけたことがある人物なので、フェルムが反応したのは、おそらく黒髪の哺乳族の方だろう。

「あれがどうしたのだ？ 何か気になることでも？」

黒色を持つ者はめったに見ることがない希少種だが、それ以前に人に興味を持つとは珍しいと、フォスファーラスは己の精霊にそう問うた。

「左様、なかなか特殊な気配を持つ童よ」

その子供には注目に値する点があった。見た目はすでに確立した個であるのに、まるで生まれたばかりの赤子のように、世界に対して馴染んでいない不安定さを感じたのだ。

「そうか、おまえでも面白いと思うことはあるのだな」

フォスオーラスはフェルムとは異なり、あまり興味がないと言った様子で、ギルドの受付へ向かう。

「あら、久しぶりですね」

サルファは二人にあいさつをする。

「久しいな。これを」

フォスファーラスは、依頼承諾書と証拠となる魔物の部位を提出する。

「はい、確かに受け取りました。壊れやすいので、扱いがなかなか

大変だったでしょう？」

「これくらい、なんてことはない」

魔物は死ぬと、霧となり存在が消滅する。その時に、体の一部を残していくことがある。魔物を倒したと言う証拠は、もっぱら魔物がその残した遺留品を「鑑定」することによって行われている。

残された遺留品、それがその魔物を倒したという証拠になるが、魔物によって残していく部位や壊れやすさが異なっている。魔物討伐の難易度は強さや生息地といったもの以外にも、この入手の確率も関係してくるのである。

中にはどんなに倒してもまったく何も残さず消える魔物もいるが、そう言う魔物は森の奥に住み、人里近くで見かけることはまずない。人に害をなさない生物は基本的には討伐の対象にならないので、そう言う魔物の駆除依頼が出ることはほとんどないと言っている。

鑑定をこなしながらもサルファは、彼の精霊がオキシを目で追っていることに気がついた。

「……もしかしてあの黒髪の子が気になっちゃう感じ？」

サルファは、フェルムにそう語りかける。サルファに問われたが、フェルムは沈黙を貫いている。あまり多くを語るような精霊ではないのだ。

「相変わらず無口なのね」

「すまないな、こう見えて恥ずかしがり屋なのだ」

「フォスさんが謝ることはないわ。あの子はね、さつき登録していた子よ。かわいいよね」

サルファはにこやかにそう語る。

「あんな子供よりも、サルファ、君の方がかわいいよ。今晚、どうだい？　一緒に食事に行かないか」

フォスファールスは、彼女の勤務時間を把握している。今日は夕方にはあがることを知っていた。

「フォスさん、あなたにはたくさんこの恋人がいるでしょう。その娘たちと行ったらどう？」

皮肉を含んだ言いまわしで言葉を投げかける。

「君が一番である、いつも言っているだろう？」

フォスファールスは、迷いなく自信たっぷり、そして意味ありげに赤い唇をして笑む。

「さて、どうかしらね……食事だけよ？」

まんざらでもない様子で、サルファはその誘いにのる。

「そのあと、そのまま愛しあってもかまわないのだが？」

フォスファールの赤い瞳に、情感のこもった微笑が揺らめく。

「それはだめよ。こんな昼間から、何を言っているのかしら？」

彼女は「うふふ」と表情をゆるめた。

「わたしはいつでも歓迎するぞ？」

フォスファールスも、にやりと笑み返す。

「冗談はさておき、いつもの場所で待っているからな」

「わかったわ」

約束を無事に取り付け、全てを済ませフォスファールスは去っていく。

「なんであいつばかり」

「サルファちゃんと、うらやましい」

「誘う勇気もないくせに……君たちはいつも妬んでばかりだね、ぬふふ」

「なにを」

ひそひそと待合室の人々はささやきあう。そこは嫉妬の嵐に包まれていた。

これもまた、いつもの風景である。

一方、オキシたちは待合室を出て、地下の一室へ来ていた。

「いろいろ積まれているね」

オキシはその部屋の天井を見上げている。木で組まれた棚が天井までそびえたち、荷物が積まれている、一見すると倉庫のような場所である。ここに保管されている物は、いわゆる中古の道具たちである。

新調したり引退などで道具を手放す時はもちろん、あるいはある特定の魔物を退治する時にしか使わない道具はそれが終わると使い道がなくなる。さすらう冒険者などは、そのような無駄な荷物は増やせないで、そういう時は捨ててしまうしかない。

しかし、それではもったいないので、まだ使えるものはこういう場所は無償で寄付したり、売って金にしたりするのである。

冒険者の使う道具は特殊な物が多く、そういうものは気軽にゴミとして捨てられるものではない。きちんとした手続きをして、そのゴミを出さなくてはいけないのだ。それは面倒であるため、捨てるくらいならこの場所に寄付するのである。

あまりにも使い物にならない物や特殊すぎるものは受取を拒否されてしまうが、ある程度の手数料を払えば面倒なゴミ処理手続きを代行してもらうこともできる。ゴミ処分の手間も煩わしさも省けるこのシステムは、おおむね好評である。

ちなみにもあまりにも悪質な不法投棄は罰金が発生し、しかも「ゴミもきちんと捨てられない者」としてからかわれ、ちょっと肩身が狭くなる。

この場に集められた道具たちは、職人の手によって修理されたり、きれいに磨かれて、棚に並ぶのだ。それらは貸し出されたり、中古品として売りだされたり、物によっては無料で提供され、新たな持ち主の元で使われる。

懐寂しいかけだしの冒険者がここへ来て、必需品を求めれば、1

からそろえるよりも安くなることが多い。うまい具合に在庫が余っている、無料のものだけで全てそろってしまうことさえある。

ただし無料で手に入るものの機能は最低限である。しかし、無いよりはましであろう。稼げるようになれば、より良い品物や、自分好みのものを買ったり、自分だけのものを特別注文して作ってもらえばいいのだ。それまでのつなぎと考えればいい。

もちろんこの場所には、初心者だけではなく、上級者も入りびたっている。上級者ともなるとさすがに無料のものには見向きもしなくなるが、中古品の売り場にはときに思わぬ掘り出し物があつたりするのだ。

「その本、いつまでもそう抱きかかえているのは大変だろう？　こういう鞆はあつて損はない。それにポケットにも色々物が入っているようだし」

水でできた板や、何に使うかわからない道具、正直ガラクタにか見えない物がたくさん入っているのだ。

「ああ、鞆はあつたほうが便利かもね」

ポケットに入れるものは、そこに入っているからいいのであつて、他のところにしまうつもりはないが、本を入れる鞆はあつてもいいかもしれない。

「この箱に入っている物は無料だ。勝手に持っていていいんだ」

さまざまな鞆が箱からあふれんばかりに積まれている。

「いろいろあるんだね」

これを使っていた者がかけだしを卒業した時に、この鞆はここへ来たのだろう。もしかすると何度も持ち主を変え、ここにあるのだ。新たな新入りを支えるために。

「この鞆なんてどうだ。小さくて軽い」

肩からかけるタイプの布でできた小型鞆を勧める。

「でもその鞆に、この本は到底入りそうも無いんだけれど？」

鞆の大きさに比べて、本は大きいのだ。

「こういう鞆には、普通は魔法がかかっていて、その本くらいの大
きさだったら簡単に入るぞ」

物を入れる鞆に、魔法を施すのは当たり前のことである。その魔法を扱って初めて鞆職人として認められるのだから。

「なんと、四次元な鞆なんだね。三次元の物なら何でもさくつと入
っちゃう感じ？」

もし、そんな何でも収容できる夢の袋が地球にあつたら??今と
なつては、顕微鏡の類は必要なくなってしまったが、愛用の双眼実
体顕微鏡と、大学にある電子顕微鏡を間違いなく入れたいと思つた
だろう。それから、シャーレやスポイトや時計皿といった観察に必
要な道具や、部屋の書物すべてと、パソコンと、クマムシのぬいぐ
るみとミカヅキモ型クッションと??

「ヨジゲン? なんかよく分からないことを言っているが、鞆に入
れたものが小さくなるだけだぞ? それに、これは半人前が作つた
ような鞆だから、あんまり物は入らん」

いくら魔法の鞆と言っても、容量は無限ではないらしい。

「そうなんだ」

鞆の良し悪しはよくわからないが、今の段階でその鞆でも機能的
には充分であるように思えた。オキシはその鞆に本を入れてみる。

「おお、ぴったり。これいいね!」

両手が自由になった。

かつて誰かが使っていた物だとしても、このような鞆が無料で手
に入るのは、すばらしく思う。

オキシは初めて自分の鞆を手に入れた子供のようにはいしゃい

る。オキシにしてみれば、こんな機能のついた鞆は初めてなので、あながち間違いではないのだが。

「……本当に大人なのか？」

本人は成人しており独り立ちもしたといっていたが、どう見ても言っていた年齢よりも下に見えた。

「小さくなった分の質量とか体積はどこへ消えるんだろう？ 不思議だな。魔法ってやっぱり不思議」

この現象は、物の理を凌駕している。オキシは急に真顔になり、鞆を掲げ首を傾げていた。

「そついや魔法は初めて見たとか言っていたな」

乾燥させる風の魔法を使ったときのオキシの反応を思い出す。

「そつ、魔法は何一つとして知らないよ。魔法なんて体験したことはなかった。だから、今までそんな実在しない現象にそれほど興味は湧かなかった」

魔法よりも、科学の世界の方が謎と神秘に満ち、美しく不思議であふれていると感じていたのだ。

「魔法が存在しない？ もしかして、オキシはウエンウエンウエム地方で育ったの？」

ロゲンハイドは「ウエ」だらけの不思議な響きの地名を出す。

「うえんうえんうえむ……」

「ああ、あの森ならありえるが……魔法を知らないとなると、どれだけ深い奥地から来たんだ？」

この町からそれほど遠くはない位置にある広大な森、この国と隣国の国境になっている「どこの国にも属さない森」は、こことは大きく異なった環境なのだ。

不思議なことにその森は魔法が発現しにくい場所なのである。そのため魔法文明はあまり発達せず、昔は魔法を知らない者もいたという。そのような土地柄、彼らは魔法を使う習慣がなく、魔法を必

要としない原始的な生活をしている。魔法が実在しないと言うような者がいるとしたら、そこにしかない。

しかし、最近では魔蓄器^{バッテリー}の発達で、あの一帯でも魔法の道具が扱えるようになり、少しづつ魔法の文化は普及している。ずっと森の中にある村に住んでいる人だったとしても、魔法を知らないという人は減ってきていると、聞いていた。

新しいものを受け入れることに抵抗のある保守的な年配の者ならとにかく、若者で魔法を知らないとなると今時めずらしくもある。

「僕の故郷は田舎であることは認めるけれど、森の中なんてそんな辺鄙な場所ではないよ」

オキシの故郷は田舎ではあったが、平野にありこのフェルミの町と大差ないくらい建物が並んでいる。列車も1時間に2本は最低でも駅に停車する程度には、交通の便はいい場所にある。

「僕の故郷は日本と言って……、森ではなくて島国なんだよ」

この世界には、日本という国は存在していないのだから。いくら話したところで分かるはずもないが。

「ニホン。聞いたことがない国だな」

ウェンウェンウェム地方は、陸の孤島ではあるが島国はない。キセノンは世界のすべてを知っていると言うわけではないが、少なくともこの国の周辺にはないのだ。世界地図を見たならば、見つけれらるだろうか。

「ちょっといいか？」

キセノンは部屋の一角に向かう。本が棚にたくさん並び、調べものもできるように机まで用意されている。まるで書物庫のような場所だ。

「図書館？」

「ああ、ギルドの登録証を見せれば、貸出禁止以外の本は借りられるぞ」

「そうなんだ、覚えておこう」

文字が読めるようになったら、ここに来てみるのもいいかもしれない。ここではどんな知識にふれることができるのだろうか。

キセノンは棚に丸めて置いてある世界地図を広げてみせる。地図は使い古され端の方は少し損なっていた。

描かれているのはもちろん地球とはまったく異なる形、偏り具合の地形である。一番目を惹くのは、海に描かれている不思議な造形の海獣や、到底水に浮かびそうにない帆船の絵である。これらは実在する物なのか、創造の産物なのかはわからない。

世界を描いた地図の空白部分には、何か描きたくなるものなのだろうか。異なる世界の地図にもかかわらず、地図を書く者たちの似たような性質に触れて、なんだか親近感がわいてしまう。

「世界地図、初めてみた。へえ、世界ってこんな形しているんだ。結構細かく描いてあるんだね。この町はどこにあるの？」

この地図がどの程度正確に描かれているかはわからないが、緻密に描かれているというだけで、正しいと思わせてしまう説得力がある。

「ここだ」

キセノンは一番細長い大陸の内陸部を指さした。

「結構、内陸なんだね……ちなみに僕はこの世界の形を今まで知らなかったから、これを見ても日本は示せないよ？」

オキシはたのしそうに、大陸の形を眺めている。

「たしかに、その通りだな」

世界地図を初めてみたと言うのなら、これを見せて二ホンの場所を聞いても無意味だろう。

キセノンは自分の目で島国を一通りみるが、二ホンと言う国はなかった。もしかすると、見過ごしてしまうほど小さな国なのかもしれないが。

「ニホンと言う国は載っていないな」

「おいらも見つけられなかったよ」

二人で探して見つからないと言うことは、よっぱど目立たないか、書かれていないかであろう。

「……ずっと辺境の辺境にある小さな国だもの。省略されていてもおかしくないと思うよ。これと言って何かあると言うわけではないし。だから、地図上に書くだけ無駄と思う」

異世界の地図で同名のそれを見つけれたら、それはそれで驚きであり、逆に行ってみたい。

「本当に遠いところから、来たんだな」

地図に乗っていない謎の島国にほんから来たというオキシ。なぜ、故郷を離れここへ来たのか。その旅の目的は何なのか。しばらくしたら、まだどこかへ旅立つのだろうか。

「こんな遠くまで来た目的はなんだ？ 何か探しものか？ それとも見聞の旅か？」

キセノンはそう問う。

「旅の目的……」

別に旅などしていないが、遠くの国から来たと思っているキセノンにしてみれば、そう思ってしまうのも理解できる。

「ん、僕の目的は……微生物探し、そしてそれを調査する。それ以外に存在しない」

そう、断定できる。

「ビセーヴェツ……それは、どこにあるのかわかるのか？ 見つかりそうか？」

その単語は何度かオキシの口からは聞いた言葉だが、それ以外の者からは聞いたこともない響きの言葉である。こんな遠くにまで探しに来るもの。よっぱどな物なのだろう。

「どこにでもいるといえはいるし、いつでも見つけられるよ。今、この瞬間にだって、僕は微生物を捉えられる」

カビとホコリの匂いがほのかにするこの場所も、間違いなく彼らの生活圏なのだ。

「なんだ、そのまるで神のような概念的な存在は。もしかしてビゼーヴェツはおまえの信仰している神の名なのか？」

己の信じる神の御心のまま世界を巡り歩く者がいることはキセノンも知っていた。

「微生物は神ではないよ」

1回だけ「神は微生物だったのか！」と叫んだこともあるが、それは勘違いだった。今となつては、いい思い出である。

「でも、微生物は信仰はしていないけれど愛は注いでいるよ、一方的に。愛というよりはむしろ……かけているのは命と言つたほうが近いのか？ そう、まさしく人生ささげても良いほどに！」

オキシは力強くそう宣言した。

「人生をささげる……それを信仰と言うのではないか？」

「崇め奉ると言つた崇拜はしていないし、それに信仰とはまた違うと思う」

日本人の多くは、おそらく信仰と言う概念は薄い。

「でも、だからと言つて無神論者とか無宗教つてわけじゃないよ。

自然や言葉に宿る魂^{たま}？ たぶん、そんな感じの目に見えない何かを畏れ、崇拜しているだけだよ」

日本人は、信仰の宗教は持つていないが、少なくとも崇拜の宗教は持つていると思うのだ。

オキシは一息ついて、無意識に左手の指先で鼻のあたりに触れる。しかし、その先に眼鏡はない。この癖はなかなか直りそうにない。

「ん……そう、微生物つて言つのは、簡単に言つと肉眼で観察できないほどとても小さな生物で、何もないように見えるこの空気中に

も、この部屋の柱や床にも、そして僕たちの体表や体内に生きづいて……」

微生物について語りだすオキシの瞳に独特な意気^{いろ}が忍び寄る。

「はい、ストップ、ストップ！」

語り出そうとするオキシをあわててロゲンハイドがとめる。その話は、今朝さんざん聞いたのだ。あの熱々とした講義を、いろんな意味でここで聞くわけにはいかない。オキシの口から続きの言葉が発せられる前に待ったをかけた。

「邪魔をするな。僕は今、キセノンに微生物のすばらしさを、だね！」

出鼻をくじかれ、瞬く間に険しい表情になり、ロゲンハイドを刺すように睨み付ける。

「微生物がとてとてもすばらしいことは、おいらが十分に分かっているから、落ち着いて」

「ロゲンは結構な邪魔をするよね」

しかし、オキシはぶつぶつとふてくされたままだ。

「ああ、もう。やっかいだな」

この状態になったオキシはとても扱いづらい。放っておけば歯止めなく長々とそのまま突っ走ってしまうし、邪魔をすれば理不尽な非難を向けられる。こちらが邪魔をしてしまっているので、強く言えないところも部が悪い。

「ほら、これで機嫌を直してよ、ね？ きつと面白いのがいるから」

ロゲンハイドは、部屋の隅にあるホコリをちよちよいと集め、水で作り上げた小さなビンのような容器に入れてオキシに手渡した。それを目にしたとたんに、うつうつとした文句はぴたりと止んだ。

「それいいね！」

オキシはそれを受け取るとすぐに嬉々と熱中しだし、何事もなかったかのように静かになった。むしろ黙々としてそれを見ている。

相変わらず、怒ったり喜んだりと忙しく次々変わる感情である。

「ふう、なんとか気をそらせることができた」

気休めにしか過ぎないが、ひとまず安心である。

「うづむ」

キセノンは二人のやりとりに、ただただぼかんとするしかなかった。

物でつるにしても、ホコリを集めたものを手渡すだけで、この変わりよう。オキシには不可解な謎が多い。

「精霊よ、本当にこいつと契約してよかったのか？」

苦勞が絶えないように見える。

「いいの、いいの。悪気があるわけじゃないのはわかるんだ。これくらいなんてことないよ。それに、こんな面白い人間はそうそういないよ」

ロゲンハイドは、水を散らしながらくるくるまわる。確かにホコリを手渡して、怒りが収まるような人間は面白いのかもしれない。

「ならいいんだが……精霊もよく分からないやつだな。特に水の精霊は変わった者になつきやすいと言うが」

オキシの場合は、変わっているにも程があるようにも思えるが。

「……類は友を呼ぶと言うからね。似たもの同士は集まりやすいのだろうさ、きっと」

オキシは突然口を開いた。

「聞こえていたのか？」

「いつだって音は聞こえているよ。それらの音をいちいち言葉として解読して、理解して、反応するのが面倒で、たいてい無視してるだけ」

オキシは堂々とそう言い放った。

「……やっぱり無視していたんだな」

キセノンは、それを何度か体験していた。

「……」

しかし、オキシはキセノンのその言葉に何の反応も返さない。言っているそばから無視の態勢だ。

キセノンはもう何度目になるかわからないため息をついた。

23・ホコリは総じて灰色である。

ホコリという、まさしく塵のような小さな世界にも、食べて食べられての残酷でいて、どこか幽玄でうつしい秩序ある世界が存在する。

その単なるホコリは、布や紙の擦れくず、すす、砂、食べ物のかす、髪の毛などで構成され、その塵の1つ1つは、白や赤や黄と様々な色を持っているが、それらの色がすべて絡み混じり合い、ひとつの塊として溶けてこんで、くすんだ灰色を成す。

無彩色で味気ないように振る舞いながら、目を凝らせば実は色鮮やかなその世界、そこには人知れずひっそりと生きている者たちがいるのである。

部屋の隅から容器の中へ住処を移され、ある生物は光から逃れるように隠れようと必死になって繊維と繊維の間に潜り込もうとし、ある生物は気配を消すようにじっとそこから身動きせず、色彩豊かな灰色の世界が静まるのを待っていた。

（だいぶ驚かせちゃったかな）

明かりを背にし気持ちばかりの影を作る。そして彼らが落ち着くのをじっと息を殺して見守った。

「オキシ？」

「邪魔しないで」

オキシは飽きもせず、ホコリの入ったそれを見ている。いつの間にか、鞆にしまった本まで取り出して書き記そうとしている。ところかまわずだ。

「いや、ここでは往来の邪魔になる。向うに机があるから、そこまで移動しないか？」

人はまばらとはいえ、こんなところでしゃがみこまれては、通行の邪魔になってしまう。机の上で色々書き込むのであれば、読書をする人たちの景色と馴染んで、だいぶましな状態には見せることができる。

「向うの机……わかった」

少し遅れて返事が来る。もう少しぐずぐず文句を言うと思ったが、あんがい素直にそれに従う。

オキシは机や椅子があつた方が観察は楽に行えると思ったから、移動することにしたのだ。

オキシは椅子に座ると、すぐに本を机の上に展開し、ホコリの入った容器を置き、ひじを机について先ほどと変わらぬ視線でじつと見始める。

ホコリの中の生物たちはいつしか落ち着きにちじょうを取り戻しつつあり、いつもと変わらぬ様子を見せ始めている。

一番目につく大きな生き物は、合計4本の脚を持つ節足の生物である。ホコリの繊維に、頭を下にして頑丈な前足でしっかりとまっている。ホコリにしがみつくと節足の脚は細かいとげに覆われており、小さな頭を挟むように左右に2本ある。より頭に近い前脚は、後ろ脚よりもやや大きく、鋭いぎざぎざのたくさんついた鎌の形状をしており、しっかりと物にしがみつけるような構造になっていた。丸みをおびた腹もやはり細かい毛のようなとげに覆われて、しばの先には長めの刺が2対ある。その形状は何種類がある。詳しく調べないとわからないが、大きく分けて2種類に分類できそうなので、個体差や年齢差と言うものを考慮しても、その形状の違いの意味するところは、性差によるものの可能性があるように思われた。

頭は小さく、触覚といったものはないので、のっぺりとしている。

複眼が3つと単眼が2つの計5つを持っているが、単眼は小さく目立たないので、ぱっと見は3つ目の生物に見える。

口の両端にはハサミのような牙があり、それはホコリの繊維を切断する。その内側には4本のひげのような口器があり、切り刻んだ繊維を口の中へ運んでいた。

（このダニもときは、繊維を食べるんだ）

こういったホコリにいる代表的な生物といったら、ダニだろう。家に出没する彼らは、たいていの場合、カビや人のフケ、食べかすなどを食べてはいるが、紙や布の繊維は食べない。

この書物庫にいる生物は、家とは異なり、多くの紙に囲まれている環境のせいか、食性は繊維を食べることに特化したのかもしれない。ちよつとした繊維害虫である。

繊維といった栄養の少ないものを食す彼らの体内、もしくは細胞内には、生命を維持するために彼らに必要な栄養を提供してくれる微生物と共生していると思うのだが（少なくとも、地球の生物ではそうであった）、このままではよく分からない。彼らの色のついた厚い表皮が邪魔で、体内の様子はよく分からないのだ。

その共生している微生物がすでに完全に細胞内に取り込まれてしまっている場合はあんまり興味はないが、体内を動き回っているような生物であったなら最高である。すぐに確かめることができない。このどうすることもできないもどかしさが、なんともいえない。

オキシに観察されていることも知らない彼らは変わらずあちこちらへ移動して、口をもしやもしやとせわしく動かしている。いくら共生している者から栄養を提供してもらっているとはいえ、起きている限り常に食べ続けなくては生きていけないのだろう。それほど、繊維とは栄養の薄い食料なのだ。

そんな彼らの食卓に忍び寄る影があった。

（あ、これは天敵かな）

ダニもどきがこれだけたくさんいるのだから、彼らを食す天敵がいてもおかしくはないだろう。

青みがかった灰色の体に黒い斑点がある細長い1匹の虫が、無数にある短めの脚で繊維をかき分けてながらやってくる。口の先が尖っていて、ダニもどきにそれを突き刺し中身を吸いだしている。

それにしても、すごい食欲である。

次々に体液を吸いつくして、この生物の通った後には、空っぽになつてくしゃくしゃになつた抜け殻が捨てられているだけ。この小さなビンの中にいるすべてを食らいつくして、全滅させかねない勢いである。なんと表現したらいいと言うのか、ただただ一方的な殺戮なのである。

成す術がないから諦めてしまっているのか、仲間が次々に食べられていくにもかかわらず、彼らは呑気に食事を続けている。さすがに暴食の捕食者の近くにいるものはちょっと移動したり、下に落ちたり、警戒はするけれど、取り立てて慌てている様子がない。

ついつい「逃げて」と言いたくなるが、彼らにその声おとが伝わったとしても、言葉は伝いわらないだろう。彼らとは住んでいる世界が違いすぎるのだから。

この肉眼でもその存在がぎりぎり確認できそうな生物たちも、観察していて楽しい小さな生物ではあるが、少しだけ生物として高度に進化しすぎている。オキシにとっては今ひとつ魅力的に感じないのである。

もう少し得体のしれない生物は、ここにいないのだろうか。もっと下等で単純な、最低限の器官や細胞が組み合わさっただけのような多細胞生物や単細胞生物、いわゆる原生生物的な生物が。

オキシは大量虐殺の現場から視線を少し移し、別の生物を探し始めた。

「一体、何を見ているんだ」

ときに意味不明な単語をつぶやき、「うじゃうじゃ」だの、「もしゃもしゃ」だの、「げじげじ」だのと、何かを形容するような擬音を発している。そして、相変わらずあの不気味な絵を描くのである。

「オキシの見えている世界は、おいらたちとはだいぶ違うんだよ……」

ロゲンハイドも、オキシの目に映る世界そのものは見たことはないが、近い世界に触れたことがある。確かにその絵に描かれているようなものがうごめく世界だった。

「俺も何か見てこようかな」

オキシはしばらくここを動きそうにないので、キセノンは掘り出し物がないか見に行くことにした。

「じゃあ、おいらはここでオキシを見張ってるよ」

「すまないな。まかせたぞ」

キセノンはロゲンハイドにオキシを任せ、しばらく席を外した。

「あ、これは」

ホコリの片隅に連なる群^{コロニー}体を作っている球状の生物を発見した。オキシは注意深くその造形を観察する。

光沢のある透明の殻に包まれ、形状は球状、液体に満たされたその中心では心臓らしき器官が波打っている。その波打つ心臓から数本の細い管が放射線状に伸び、その先端は殻を支えるように枝分か

れた毛細管が根づいている。心臓が震えるたびに、その中をわずかに黄色をした体液がめぐっている。

色の入った小さな硝子玉のような無機質的な外見ではあるが、その内部を満たしているのは間違いなく生命の輝きである。

心臓の下あたりには、壺を逆さにしたような半透明の器官が4つあり、その中にはダニもどきの屍骸や食べカスらしき物体など、何かが入っていた。その壺のような器官は咀嚼するように全体を縦に横に激しく伸び縮みを繰り返し、消化液をなじませ溶かし吸収している。

それにしても、どこが頭でどこが尻かがわからない、目や脚までも無いのだ。見えるのは心臓と言った循環系と消化器官、そして殻の中を満たす液体だけ。全てが殻の中に閉じ込められている。

体内に取り込まれた食糧があるので、何らかの方法で取り込み、することは確実なのだが、殻には切れこみがなく、どこから取り込み、どこから排出するのか検討もつかない。どのようにしてそれが行われるのかがわからない。

流動している体内の様子から植物や菌類というよりは動物的事であることは推測はできた。まったくもって奇妙である。

ぜひとも捕食の瞬間を見たいものである。

「オキシ、そろそろ昼の飯にしようと思うのだが？」

いつの間にかキセノンは戻ってきていたようだ。ちなみにオキシは熱中していたので、キセノンがどこかに行っていたことは気がついていない。

「ご飯？ …… いつてらっしゃい」

しかし、オキシは顔をあげることなく、愛想のない返事する。

「おまえも行くんだ」

記憶が正しければ、オキシは朝から何も食べていないはずだ。

「いやだ、今、いいところ」

微動だにせずつっぱねる。まったく観察をやめる気配はない。せっかく興味深い生物を見つけたのだ。観察を中断したくない。

「しかし、食べないことには倒れるぞ？」

1日や2日くらい食事を抜いたところで死にはしないが、オキシのこの小さな体のどこに余分なエネルギーが蓄えられているか不安になる。おなかがすいてフラフラしてしまうのではないかという懸念があるのだ。

「僕は、腹を満たすことよりも、好奇心を満たすことのほうが、重要なんだよ」

キセノンの心配をよそに、勝手な理屈をこねて動こうとしない。

「……ロゲンハイド、ちょっと余計なことをしたな」

うるさくできるような場所ではないので、無理やり連れていくといった強行手段を使うこともできず、キセノンはほとんど困り合っている。

「んー、仕方ないよ。それでもアレよりは遙かにましなもの」

恍惚として語るあの状態よりは。

その早口で語り出される内容は生命のなりたち、根源。未知なる世界へと誘う罠であり、あれはある意味で興味深くもあり、恐ろしくもあり、気軽に触れては行けない領域を垣間見たような、底知れない知識を無意識に語り出す危険があるのだ。そして、気がつけば、何を言っているのか理解できないほど専門的な内容になっているのだ。

「この状態よりも、ひどいことがあるのか？」

キセノンは信じられないと言った様子で、机にかじりついて離れないオキシをまじまじと見た。

「仕方ないな、何か軽くつまめるものを買ってこよう」

何度か声をかけ説得するが、それでも粘るオキシに根負けした。いちいち世話が焼ける、と思いながらキセノンは書物庫の一角にある、小さな売店に向かう。そこでは調べものをしながら軽く飲食ができるようなものが用意されているのだ。

書籍を扱う場所での飲食は禁止されていそうなものだが、紙が濡れたり汚れても魔法でかなり綺麗に修復することができるので、貴重な文書を保管しているような場所でない限り、厳しく禁止しているところは少ない。

しかし、いくら綺麗にできる技術があると言っても、匂いがたちこめたり、食べくずをぼろぼろこぼされたのでは、周りに迷惑にもなるし、掃除の手間もかかるので、飲み物は持ち込み可能だが、食品の持ち込みは制限しているところも多い。

ちなみに売店では匂いも少なく、こぼしづらいものを販売している。おいしい保存食と言った感じではあるが、腹を満たし満足するには少し微妙な感じのものしかない。

「何か食べたいものはあるか？」

キセノンは一応オキシに尋ねる。

「ない」

予想通りの淡泊な反応が帰ってくる。無表情で熱心にホコリの入った容器を見つめたままである。

「適当に買ってくるぞ？」

キセノンは確認を取る。

「……あ、動き始めたな、丸いの。やっとだ、やっと。変形するんだな、やっぱりその殻が変形するんじゃないか。ふふふ、この勝負は僕の勝ちだ」

キセノンの気苦労も気遣いもいざ知らず、オキシは急に笑みを浮かべ、そう独り言をつぶやいた。

「何か……勝負していたのか？」
勝負をしていたらしい発言をするオキシに、キセノンは相変わらず訳がわからないと思うしかなかった。

定期的に響く乾いた紙の擦れる音が黒茶ブラックの色に響き、時たま聞こえるひそひそ声でさえ、無音に溶けている。静けさに満たされる景色に降り積もる細かなホコリはほのかに揺らめく照明の灯の下で、きらりちらりと舞う。

オキシは時々左手の指先で髪をすくようにもてあそんだり、何かメモしたりする以外は大きな動きもなく、無我夢中に容器の中のほこりの観察に没頭している。

時は静かに駆けていく。

窓口にずっと座っていた職員たちが動き出し、人のいない部屋に鍵をかけ始める。

「オキシ、そろそろ出るぞ」

閉館まではまだ少し時間はあるが、オキシがこの状態なので、早めに声をかけた方がいいと思ったのだ。

「今いいところ。だから嫌だ」

オキシは予想通りの反応を返す。あの野原で見せたように、ただただ、だだをこねてその場から動こうとしない。

「どうしたものか」

さすがにそろそろ止めないといけないのだ。悩んでいる間にも、

時間は迫っている。

「かなり怒るけど、『語り』かけてみるよ」

直接頭に語りかけることは、「集中できないからやめて欲しい」と、オキシに言われているのだ。逆に言えば、あの異常とも言える集中力を乱すことができるのだ。

かなり嫌っているようなので怒ることは間違いないが、それでも意識はきちんとこちらに向けてくれるはずだ。

『オキシシ、オキシシ』

ロゲンハイドは、食い入るように熱中しているオキシに語りかけた。

『邪魔するな。その頭に響くのは、嫌だと言っただろう？』

その声は、意識の中に別の意識が割り込んでくるように響きむずがゆい。

『いや、ここ閉館しちゃうんだ。だから観察はひとまず、ね？』

ロゲンハイドは、なだめるように語りかける。

『ああ、うるさいなあ。ここが閉館するって、どうでもいいよ。そんなこと……』

あまりに耳障りなのでオキシは耳をふさぐが、その声は空気の振動で伝わる音ではない。その行動は無駄である。

『だめだよ、出なくちゃ！』

ロゲンハイドは、透き通った腕を組み強く言う。負けてはいけないのだ。

『……ん、そうなのか。……仕方ないなあ。……わかったよ』

不機嫌そうに返事を返しながらも、しぶしぶ納得して顔をあげる。

「今日は、これくらいにしておいてやる」

オキシはそう言い放ち立ち上がると、机の上の荷物たちを、少し手間どいながら鞆に入れる。鞆の中に物を入れる瞬間に起きる現象に

慣れていないせいだ。

「……一体何と勝負をしていたのだろうか？」

まったくもって、わからなかった。キセノンが気にしたところで、機嫌が悪いオキシは答えてくれないだろう。

片付けが終わると、オキシは無言のまま、大振りな動作で出口まで歩き出す。まだ少し不機嫌な感情は落ち着いていないようだ。

「待ってよ」

ロゲンハイドとキセノンは、オキシを追いかけた。

24・それは恋人ですか？ それとも友達ですか？

斜めに差し込む色は、続く廊下を夕暮れの光に彩っている。

奥まった部屋の灯りがぼんやりとつき、ほんの少しあいた隙間から光が漏れている。戸から伸びた光の筋は窓からの夕焼けの光と混じり、木目を描く床に映り鮮やかに染まっていた。

日が差し込む大きな窓から外を見上げれば、今日も空の大きな月が太陽を隠そうとしていた。もうすぐ日蝕、もとい夜になるのだ。

「ああ……また、やつちやつたな」

オキシは弱々しくつぶやく。

「気にするな。いつものことだろう？」

キセノンは縦長の虹彩を細め、オキシの方を見た。知り合って間もないが何回かこういう場面を見ているので、キセノンの中にオキシの性質は、そういうものだという感覚がすでに定着しはじめていた。

「そうなんだけれどさ」

今日も一日の大半を観察に費やした。満足はしているが、かなり好き勝手のやりたい放題をして、キセノンやロゲンハイドにいくらか迷惑をかけた自覚はしている。どうせなら放っておいてくれた方が、ずいぶんと気が楽だったのに。

夜の迫る廊下の果て、正面玄関に通じる広場にさしかかる付近で、オキシは別の通路から歩いてくる二人組に気がついた。片方は見ええがある、受付のお姉さんだ。

彼女の隣にいるもう一人は男性で、磁器のような透き通った白い肌をしていた。人を寄せ付けけない冷たい印象があるが、逆にそれが人を惹きつける魅力のようにも受け取れる、そんな表裏一体の雰囲気

気をもっていた。

「あ、オキシジェンナちゃんじゃない？ 偶然ね」

サルファはオキシと目が合うと、営業用ではない自然な笑顔が帰ってくる。まぶしい笑顔というのは、今の彼女のためにあるのかもしれない。それほど、魅力的な笑みだった。

「僕のことは、オキシでいいですよ。隣のお兄さんも、ね」

サルファの隣にいる金髪の男性に、上目遣い気味の視線を移し、念をおし伝えておく。「ジエ」だけは、どうしても避けたいのである。

「オキシ、か。わたしはフォスファールスだ」

突然はじまった自己紹介に、彼は赤い瞳を数回瞬かせていたが、相手が名乗ったからには、こちら名乗らねばと思い、すぐに己の名を名乗った。

「フォスファールスさんですね」

少し言いにくい名前だがオキシは覚えた。名前を覚えるのは、割と得意なのだ。

「ああ、よろしく」

そして、フォスファールスはキセノンの方を見やる。

「俺はキセノンだ。フォスファールス、よろしくな」

キセノンも便乗して名を名乗った。どうやら彼らは初対面だったようだ。

「あら、二人って知り合いじゃなかったのね」

サルファも意外そうに、彼らの顔を交互に見ている。彼女はギルドの受付をしているので、ギルドを訪れるほとんどの人と接している。キセノンやフォスファールスは常連であるので、てっきり知り合っているものだと思っていたのだ。

「何度か見かけたことがあるだけだ」

「その程度でしかなかったな」

キセノンとフォスファールスは、お互いに顔を知っているというその程度だった。

「そうだったの。ちよつと、意外ね」
キセノンとサルファとフォスファールが内輪の話で盛り上がっている。

『どうしたの？ ロゲン』

オキシは先ほどから、陰に隠れ様子を窺ががっているロゲンハイドに小さく声をかけた。ロゲンハイドは、じいっとフォスファールスを見ている。いや、彼ではなく彼の傍らにいる火の塊のような精霊を見ているようである。

火の精霊は見えているだけで熱そうな揺らめきを持っているが、ロゲンハイドに触れても濡れないように、あの精霊にその気がなければ触れても火傷を負うことはないのだろう。

『いや、ちよつとね。こわいというか、格が違うからね。おいら、あの精霊と比べたら、まだまだ子供なんだよ』

ロゲンハイドは、あの炎をまとった精霊が少し畏ろしいようだ。

『雲の上の人みたいな感じ？』

『雲の上……そうだね、とうてい敵いそうにないよ』

オキシとロゲンハイドは、二人だけつながっている精神世界にもかかわらず、ひそひそと会話をする。

『……幼き子らよ』

突然、凜とした硬質的な声が響く。オキシとロゲンハイドは、同時に肩がびくつとなり顔を見合わせた。この威厳のある声の主は一人しかいないだろう。二人はその声の主を見た。

火の精霊はなおも語りかけてくる。とても居心地が悪いというのか、威圧感というのか、よくわからないが、そこにあるのは『強い』という流れ。飲まれないようにするので、精いっぱいであった。

ロゲンハイドはおっかなびっくり話しているのは感じる。火の精

霊は変わらず淡々とした響きで、言葉を語っている。

オキシは戸惑っていた。ロゲンハイド一人でも響く声の違和感や気色が悪いのに、そこに2つ目の意識が入り込むと、倍を通り越して相乗的に跳ね上がる。

2体の精霊が混在する意識下、それだけで世界は混沌で混線状態、めちやくちやだ。

『おまえらうるさいよ。僕の頭の中で勝手に入り込んで……どうせなら、僕の意識の中ではなく、外^{よそ}でやってよ！ うせろ、消え失せろ！』

オキシは、彼らを強制的に排除しようと試みるが、成功するはずもない。実態のないものはつかみどころがない、意気込みだけがからまる。

気がつけば、フォスファースはにやとオキシやロゲンハイドを見ていた。思ってみれば彼が契約している精霊なのだ。当然、精霊の関心がどこへ向いているか、感じ取れるはずだ。

にやけてないで、助けてほしい。オキシは、そう思った。

「フェルムも、それくらいにしておいたらどうだ。困惑しているだろう」

オキシの願いが通じたかどうかはわからないが、やっと妙な気配から解放された。

『珍しいな、お前から話し掛けるなんて』

フォスファースは、フェルムに語りかける。

『まだまだ未熟なれど、なかなか面白し構造が精神世界じゃ』

フェルムはそう言い赤く揺らめいていた。

「何だっただよう」

精霊は去り、ほっと息をつく。ものすごく疲れた。声だけであんなにも侵食するのだ、本当に勘弁してほしい。

「あはは、敵わないでしょ？」

ロゲンハイドもオキシと同じように一息ついた。力が抜けたのか、その液体の手足が全体的に沈殿し、人型というよりはヘチマのような滑らかな形になっていた。相変わらず流動性に富んだ体である。

「でもロゲン。君も大概、似たようなものだよ」

彼の精霊ほどではないが、ロゲンハイドも同じ性質のものなのだ。オキシはくすくすと笑っているロゲンハイドを視線で刺した。

「オキシちゃん、精霊と仲がいいのね。ところで、今からどうする予定なの？」

サルファは尋ねる。

「今から虎狛亭でご飯食べる予定だよ」

オキシはそう答えた。

「私たちも、ちょうど食べに行こうと思っていたところなのよ。一緒に食べない？」

サルファは、ぜひともオキシとご飯が食べたかった。ここで会ったのも何かの縁とここぞとばかりに、誘ってみる。期待にあふれる淡茶の瞳が輝いている。

「デートの邪魔しちゃ悪いよ」

そんなことを知らないオキシは、遠慮がちに断った。二人の邪魔はしたくない。

「いいのいいの。デートじゃないし」

「あれ？ この人はサルファさんの彼氏さんじゃないの？」

漫画であれば、無意味に光をちりばめた華か何かをきらきらと背負っていそうな美男美女が仲よく並んで歩いているのだ。それなり

の関係であるとオキシは推測していたのだ。

「違うわよ」

サルファは笑顔で首を振った。

「わたしたちは、いつも愛し合っているんだよ」

フォスファールスは、サルファの肩に軽く腕を回した。笑んだ赤い唇から鋭い犬歯が覗いている。いちいち動作が気取っているが、わざとらしさを感じない、なんてさりげない格好よさ。はじめてみるキザな印象の強い人に、これが好青年と呼ばれる生き物なのか、とオキシは密かに感動していた。

「お兄さんは彼氏さんじゃなくて、旦那さんだったのか」

そうかもう結婚していたのかと、ひとりで勝手に納得した。

「ち、ちがうわよ！ もう、フォスさんもたらめ言わない。オキシちゃんに誤解されちゃうじゃない」

「わたしは一向にかまわないぞ」

「もう！ 私は食事に誘われたから来ただけで、特別な関係じゃないわ」

「素直じゃないところも、かわいらしい。そんな恥ずかしがらなくても良いんだよ」

「なんだか、らぶらぶだねえ」

サルファはおしゃれで、雰囲気もやさしい感じがしてすてきな人だし、フォスファールスはちよつと危険な香りがするがいい人そう。だ。だれもがうらやむと言言葉が似合う二人である。

「そうかそうか」と、オキシはうなずいている。

「だから、ちがうわよ！ 友達よ。と、も、だ、ち」

ますます誤解を深めているように見えるオキシにサルファは釘をさす。

「二人は単なる友達なのかあ」

「そうよ」

「実は僕にもいるよ。そういう冗談言いあえないけれど、異性の食い仲間が」

「ご飯を食べに行く時にしかつるまない友人たち、それが食い仲間。異性と二人っきりのこともあるし、同性異性関係なく何人かと行くこともある。学食や近所の定食屋なんかによく食べに行ったものだ。でも逆に言えば、ご飯を食べる以外に交流がないんだけどね」

ただでさえ、大学は研究やバイトやサークル活動に忙しい者が多く、講義の時にしか顔を合わせないような関係なんて、ざら。その少ない友人の中でも、たまたま空き時間が一緒の、暇つぶしに食事に行く仲間がいるだけ、ましなものだろう。それが日常だったのだ。

「それはそれで、寂しいわね」

「そうかなあ？　いろいろ面倒くさくなくいいと思うけど？」

男女比がおかしい理系の学部では特に。慣れてくれば、どうでもよくなることだが、異性と対面する時、妙に気を使わせたり、いかにぎくしゃくしないかが大切なのだ。

実際のところは、オキシは変わり者なので、男だとか女だとか言う前に奇人扱いへんじんされることの方が多かった。それに加えて中性的な外見ということもあり、そういう性別でのくくり関係なく、どちらの集団でも、それこそ空気さんそのように自然に馴染むことができたので、あまり男女関係のそういった妙なことに巻き込まれたことはなかったのだが。

基本的にオキシは一人が好きなので、自分から誘うことはあまりなく、誘われても面倒だから行かないこともあった。それなりの距離を保ちつつ、集団の隅の方で適当に合わせていた。

そのような特殊な環境に慣れてしまっているので、オキシの人付き合いは、淡泊な方である。

「でも本当にいいの？　邪魔じゃない？」

サルファが良くとも、フォスファールは二人きりがよくて誘ったかもしれないのだ。

「わたしは、サルファが楽しめればかまわない。それに、あなたたち知り合えたこの日を記念して、食事を共にするのも悪くはない」
さすが、余裕のある大人は言うことが違う。少しキザなセリフだけれど。

「キセノンのかまわないよね？」

オキシはキセノンに確認をとる。

「ああ」

そうと決まれば、彼らはさっそく虎狛亭に向かった。

食事時ということもあり虎狛亭は、いつもの活気に満ちている。

「この店に来るのは、久しぶりね」

サルファやフォスファールは、もっと洒落た店で食事しているような感じがするものなど、その言葉を聞いてオキシはそう思った。

「何にしようか」

キセノンは、壁に張られた品書きを眺めながら尋ねる。

「僕はよくわからないから任せた。ちなみに僕は魚が好きだよ」

オキシはまだこの国の文字に慣れてはいない。今日一日で、文字を読解できるほど上達できるはずはなかった。仮に文字が読めたとしても、この世界の固有たぐひもの有名詞は、よくわからないので、どちらにする自分の好きなものを言って皆に投げるのだが。

「モモローやロボスタは定番だから頼むとして。魚となればスマニクかスマワカあたりが旬か」

フォスファールは、定番の料理名をいくつか挙げていく。

「野菜も食べなくちゃだめよ」

サルファも楽しそうに、品書きを指さしては何を頼もうか悩んでいる。

「モモ一口。そういえば、明日、モモ一口に会うなあ」

モモ一口と言えば、この前キセノンが食べていた、ひと口サイズに切られた肉片しか見たことがない。いったい、どんな生き物なのか、未だになぞの生物なのである。

「モモ一口の雛はあんなにかわいいのに、大人になるとかなり大きくなるから、本当に親子なのかってびっくりよね。あんなに大きくならなきゃ、飼いたいと思うのに」

サルファはモモ一口について語る。雛は相当かわいらしいようだ。

「サルファは、かわいいものが本当に好きだものな」

そんなたわいもない話をしながら、にぎやかに食べた。

虎狒亭の前でサルファとフォスと別れ、キセノンはオキシを宿舍まで送る。

「虎狒亭に部屋を借りるなら、たまに会うかもな。何か困ったことがあったら、相談に乗るぞ」

たった2日ほどであったが、本当にいろいろなことがあった。できることはしたが、少し目が離せないところがあって心配だ。うまくやっていけるだろうか。巣立つ子供を見送る親の気分になっているキセノンであった。

「いろいろ、ありがとう」

「またな」

「うん、またね」

キセノンはこの世界で初めて知り合った人である。彼との別れは、なんだか少しさびしいような、やっと解放されてうれしいよう、ちよつと複雑な気分だった。

しばらく会うこともないだろうキセノンの背中を、オキシはいつまでも見送った。

25・モモーロの雛は、ひよひよ鳴く。

空を伝う宵の光はゆらゆらと闇に揺らめいていた。星のきらめきは寝息を立て月光の合間を縫って燃えている。夜露を含んだ草木の香りは、風の中に溶けて月夜に沈んだ町を撫で、夜の闇にそつと消えていく。

ほとんどの家の灯が消え夜陰に静まっていると言うのに、窓からさす月明かりをかき消すように、その部屋からはかすかに光が1点、小さく漏れていた。

3本の足のついた洋燈^{ランプ}は木製の机の端に置かれ、月の灯を閉じ込めたようなぼんやりとした火が、ガラスの中で燃えていた。洋燈は平坦な机を照らし、並べられたレンズは木目を透かし、きらきらと微粒子の灯を映していた。

「無理しなくていいよ。おいら、急いでるわけじゃないし。明日早いのに」

ロゲンハイドは何回か心配そうに声をかけるが、とうのオキシは「あと、もうちょっとだけ」を繰り返し相手にしていない。性格上、興味がある事柄は、1度作業を始めるとのめりこんでなかなか止められなくなってしまうのだ。

オキシは時折、その澄んだレンズを洋燈の光の下で透かして集積する光線を机に映している。大体であるが焦点距離測っているのだ。そうして何枚もあるレンズの中から良さそうなものを選びだした。

次は宿舎の管理人から借りてきたハサミや接着糊を使い、2つの紙コップから筒を2つ作った。

片方の筒にもう片方の筒を入れて、出し入れすることによってピントを合わせられるように、片方の筒は少し小さめに作ってある。筒の内側は黒く塗り、そうすることで光が反射しないのでよりきれ

いに見えるようにしてある。

結局、その夜のうちに望遠鏡を作り上げてしまった。

一通りの作業が終わり、ふと背伸びをすれば、窓の外がすでに薄ら明るくなっていることに気がついた。今日もまた、眠ることなく朝を迎えていた。

オキシはちらつと白衣のポケットに入っている銀色の時計を見た。ガラスに覆われた文字盤の上で、おおよそ夜明けの時間とは不釣り合いな時刻を示している。

その時計は決して壊れているわけではなく、ただ単にこの時計が地球の時しか刻んでいないのである。

この時計が正確な時間をさすことは、もう無いだろう。

「夜はだいたい11時間程度か」

オキシは蝕が始まる頃にも時刻を見ていたので、おおよその時間を計測できた。たとえ正確な時は指示さなくとも、時の長さを測る分には何も不都合はなかった。

時刻を確かめたオキシは時計をしまふ。時計は懷の中で何ら変わることなく機械仕掛けの音を響かせて、規則的に巡りつつづけている。

「ちょっと早いけれど、そろそろ時間だね。行って来るよ」

オキシは鞆を肩にかけ、出かける準備をする。

仕事の待ち合わせの時間は「太陽が月から完全に出る頃」と、わりとおおざっぱで感覚的な頃合を示された。

この世界に時刻を示す機械は存在するらしいが、時間の感覚は日常的に細かくこだわっていないようなのだ。

「いつてらっしゃい」

ロゲンハイドは今日は留守番しているらしい。望遠鏡で色々なも

のを覗きに行くようだ。「もしかしたら、オキシシの仕事場も覗きに行くかもしれないけれど」と、付け加え言っではいたが。

「いろいろ覗くのはいいけれど、望遠鏡で太陽を覗くと失明してしまふ危険があるから、気をつけて」

とオキシは伝えた。精霊が失明するかどうかはわからないが、注意しておくにこしたことはない。

「何かあつたら呼んでね」

「わかった。じゃあ、いつてきます」

オキシはいつもと変わらぬ様子で、部屋から出ていく。

「まったく寝てないのに。何で平気なんだろう？」

確か人間と言う生き物は睡眠が必要ではなかったかと、元気に出かけていくオキシを見送りながら、少しだけ疑問に思うロゲンハイドだった。

オフジエ

集合の場所である広場の変な塔の前には、すでに数人集まっていた。種族性別年齢はばらばらで、顔見知りの者同士、小さな組をつくり雑談をしていた。

身長がだいぶ高い者が多い。この人たちは身長が伸びる性質でもあるのだろうか。

自分よりも高い背丈の人がこつと並んでいると、彼らに身長差があったとしても「おおきい」という印象だけが先にたつて、その個々の差の方にはあまり目が行かなくなってしまう。

オキシはすでに成長期は終わって、数年前から身長は伸びなくなっている。あと数年この町にいたとして、今後ずっとこの身長のみまで成長しないのを目にすれば、ずいぶん小人な種族だと思われるしまつだろうか。

「おはよう、君はモモローの仕分けに登録した者かね？」

塔の真下で、帳面を持った責任者^{リーダー}らしき男性が、声をかけてくる。オキシは頷くと、名を尋ねてその名簿に確認の印をつけた。

まだ全員は集まっていないようなので、もう少し待つように言われ、オキシは集団の隅っこの方でぼんやりとあたりの景色を見ていた。

「こんな朝早くから店が出ているんだ」

早朝の時間だというのに、広場ではいくつかの店がやっている。

朝早く仕事へ出かけたり、旅立つ人たちのためだろう。朝市のような雰囲気、昼間とはまた異なった賑やかさがあつた。

一通り広場を見回し、次にオキシは広場の中心にある塔を見上げる。改めて見てみると変わらず妙な造形である。

これは実は時計なのである。月や太陽の光と位置を感知して形を変えるらしい。

キセノンからは最初「町のシンボル」としか聞いていなかったが、昨日偶然にもこの塔で時刻を確認していたのを見て、この塔の正体を知ったのだ。その時は驚いてしまった。到底、時計だなんて思えない風体で、単なる前衛的な建築物かと思っていたのだ。

これは時計塔だったのだ、だから町のどこにいても分かるように町の中心で、あんなにも高くそびえ立っていたのだ。

今、塔は全体的に緑の色に染まっている。今日は黄色の太陽が昇る日なので、時が進むにつれだんだんと黄色が強く変化していき、真昼には完全に黄なるのだ。

頂点にある大きな輪に沿って散っている球体の位置が、より細かな時刻を表しているというが、読み方はまだ覚えきれていない。

時計塔を見ると、話し掛けてくるものがあつた。

「おはよう。同じくらいの子がいて良かったわ。あたいは、テルル。あんたは？」

声のする方を振り向くと、同じくらいの身長の子がいた。長い栗色の髪を一つに束ねて編んでいる。彼女の髪は単色ではなく、境目が不明瞭ながら唐茶や亜麻色を含んで濃淡の移りゆく虎斑が散っている。まるで熱帯の平原に生きる動物のようにも見える、なんとも不思議で美しい縞模様の浮かぶ印象的な髪だった。

「僕はオキシ。よろしく」

年齢については明らかに勘違いをしているが、面倒なのでその勘違いは放っておくことにした。

「見かけない顔ね」

「この町には、最近来ただけなんだ」

「そうなんだ。……あ、魔動車が来たみたい」

牧場までは少しあるので、魔動車という乗り物で移動するらしい。

「白い箱が……浮かんでる」

窓や乗降口と言った多少の付属品があるが、箱が走っているのだ。比喻表現ではなく、本当に箱が宙に浮かんでいるのだ。

魔動車と呼ばれたその車には車輪がなく、穏やかな水面を帆走^{はしる}る船のように滑らかに疾走していた。オキシはこの浮かんでいる車を見て驚きを隠せない。

「何を当たり前のこと？」

テルルは怪訝そうな顔をして、不思議なものを見るような表情をしているオキシに言った。

「ああ、僕の住んでいたところには魔法なかったから、こういう物を見たことないんだ」

「というとうェンウェンウエム地方から来たのね。魔法がないって、不便でしょ？」

魔法がないと言うと、皆はその地方を思っらしい。

「いや、不便とか便利とかいう前に、魔法が身近にある生活が、どんなものなのかまったく想像もついてないよ。この車が浮かんでい

る現象は魔法によるもの言うのは想像がつくけれど」

明らかにおかしいものならば気がつくが、自分の気がつかないところで、たくさんの魔法の産物に触れていてもおかしくない。

昨日手に入れたこの小さな鞆でさえ魔法がかかっているのだ。いったい、どれほどの物に魔法が使われているのか、検討もつかなかった。

「ふうん、変なの」

その一言で片づけられた。

「全員揃いましたので、皆さん移動します」

責任者の男性がそう叫ぶ。オキシはテルルとともに列に並び、魔動車に乗り込んだ。

魔動車はすうつと滑らかに発進し、早すぎず遅すぎずの速さで町を抜け草原に出る。

電動機エンジンがないのだろうか、あの空気を震わす低音の振動が聞こえない。道路に接していないせいか、舗装のされていない土の道でも動きはなめらかで揺れもない。

「思ったよりも早い。どのくらいの速さまで出るんだろう」

オキシは後ろに流されていく草々を目で追いながら、疑問を口にする。

「この車は、この速さが限度ね。もっと早く動かすには、もっと質の良い魔石を積むか、自分の魔力を追加で提供すれば出るわ」

「そついう物なんだ」

オキシは再び外を見た。

地平線に向かって土の道はゆるやかにのび、少し銀を含んだ白に塗装された魔動車は、緑に吹かれた草原を目的地に向かって走っていく。

駆ける風につかまって、養分の豊富な生きた泥と草の醗酵した温かな匂いや、獣の生活している臭い、いわゆる田舎らしい特有の香りが漂ってくる。牧場の姿はまだ見えてこないが、確実に近づいている感じが取れた。

田舎育ちのオキシは、豚や牛のいる牧舎がある道をよく通っていたので、臭いでなんとなく家畜の判別がつく程度には鼻がきいた。しかし、漂ってくる獣臭は、記憶と照らし合わせても、まったくじみのない臭いだった。

いつしか道脇には、木で組まれた柵が続いている。ここら一帯がモモ一口を飼っている牧草の原なのだろう。囲われているのは柵の向うではなく、自分たちの通っている道の方ではないかという錯覚に陥り始めた。

地平線に見えてきたのは、まるで2本の木が手を取り合って生えているような門であった。道路を挟むように2本の丸太が立ち、高い所で緩やかに弧を描いた一枚板の看板が組んである。大地から生えた蔦が絡まり、根づいたその柱は木のように緑々とそびえ立っている。

その木製の門をくぐり抜け、少し進んだところで魔動車は停車した。向こうにある茅葺^{かやぶき}屋根の建物が牧舎だろうか、だいぶ離れているのに、ひよひよと雛の高い鳴き声が漏れている。

車に乗っていた全ての人が降りると、責任者^{リーダー}は一人ひとり名を呼び、数人づつの班に振り分けた。知り合ったばかりのテルルとは、違う班になってしまった。

「違う班になっちゃったね」

テルルは残念そうに言った。

「そうだね」

特に残念であるという、そのような感情は特になかったが適当に

合わせておく。

班が決まったところで、そろそろと雛の声に満ちた建物に入る。中ではすでに数人の人が作業しており、布を頭に巻いた人、首にタオルを巻いた人、何か歌を口ずさむ人が、それぞれの仕事をこなしていた。

箱の積み重なった台車を押している人とすれ違う。その台車にも車輪がなく、氷の上をすべるように、荷物を載せながら動いている。浮かぶイメージがあれば、誰でも使えるごく普通の道具なのだが、この世界の一般的はオキシにとって一般的とは限らない。車輪がない造形の車たちは違和感がとてつもない。

この世界では、車輪や滑車といった力学的な現象を利用した器械はあんまり発達していない。そのような原理に頼らなくとも、物質は魔法という事象で動かし運ぶことができるのだから。

電燈がたくさん吊るされて、その下にワラの敷き詰められた大きな箱がある。繊維の絡む柔らかなワラの上、淡い桃色をした雛が密集していた。

体はふわふわとした綿毛が生えそい、嘴を持っていたが翼はなく、足は獣のように4つ足で鱗に覆われている。鳥の要素がいくらか強いが、どこか獣のようでもある、よくわからない生物であった。

オキシのいる班は、初めての者たちが集められたようだ。作業に入る前に、雌雄の見分け方の講習があった。

落ち着きのない雛の結構細かい特徴を見なくてはいけないが、まあまあわかりやすい特徴なので、本当に誰にでも仕分けはできそうだ。

「数匹くらい間違ったって、かまわないから気軽にやってくれ」
そう言っと、責任者の彼もまたモモー口の仕分ける作業に取りかかり始めた。

オキシは、雑踏の中から雛を1匹すくいあげる。手のひらに感じる肉球の感触や、あまり鋭くない足先にある爪の感触、ほんのりとした体温が手のひらと触れ合う。

覆われた綿毛のやわらかく温かな胴体は、少し力を入れてしまえば簡単に潰せてしまいそうなほど小さく脆そうに感じてしまう。大切に扱わなくてはいけないという緊張が手の中に収まり、震えてしている。それは雛の力強い生命の脈動が伝わったものなのか、雛を持つことに馴れていない自身の手の震えによるものなのか、オキシには分からなかった。

オキシはぎこちない手つきで雛を仕分けていく。時々つかみ損ねて落としそうになったり、雛の足が指にしがみついて離さなかったり、多少の苦労はあるが、なんとかこなしていた。

ふと何気なく顔を挙げて隣の台で作業をしている人物を横目で見てみる。袖をまくった腕は4本で、髪型は頭部中央の前から後ろにかけてまるで鶏冠のように髪を立てている。鉄パイプを持って改造したバイクに乗っているのが似合いそうな外見である。しかしそれにもかかわらず彼はまじめな熟練者なのだろう、ほとんど一瞬で雌雄を見分け、雛をつかみ横の収納箱に移していく。

次々に箱の中に放る様子は、見ていて感動さえ覚える圧倒的な風景だ。モモー口のたくさん入った箱ひとつに5、6人で作業しているのに、彼はおそらく同じ量を一人で行っているのだ。伊達にモヒカン刈りではないと言うことか。

「そろそろお昼の休憩にしましょう」

オキシたちの班がなんとか2箱ほどの雛を仕分けた頃、責任者は

そう呼びかけた。今から、昼食のための休憩に入る。

「あれ、お昼は？」

どこからともなく、テルルがやってくる。

「ええと……僕は、昼を食べる習慣ないから、今から適当に散歩で
もしようかと」

食べなくともいい体質とはとも言えないので、うまくごまかし
ておく。テルルに声をかけられなければ、どちらにしろ休憩時間は
外でもうろついて、適当に過ごそうと思っていたことは本当である。

「それで、お腹すかない？」

昼を抜くなんて考えられないといった様子でテルルは尋ねた。

「うん、大丈夫」

食べなくとも嘘偽りなく平気なのだ。昼だけではなく、朝も夜も
必要ないのだが、その情報は秘密である。

「そうなの。たまには、あたいも外で食べようかな」

テルルは、オキシの散歩についていく気満々である。

建物から出て、オキシとテルルは近くの樹の下に座る。

「どう？ 馴れてきた？」

テルルは昼食のパンを頬張りながら、そう尋ねた。

「だいぶね」

雛を躊躇なくつかめるようには、なった。

「きつと、目をつぶると雛の幻がみえるくらいに焼きついているわ
よ」

「ああ、確かに。何か雛的なものがひよこひよこ動いているよ」
オキシはまぶたに映る幻影を感じていた。長時間見続けたものが、
こつ言う風にまぶたの裏に残像が映っているように見える現象は、
専門の用語で何と言っただろうか。いつか大学の講義で習ったよう
な気がするのだが、もうすっかり忘れてしまった。

「モモー口に取り憑つかれたね」

テルルが笑いながら冗談を言う。
「そうだね。すっかり憑かれたね」

オキシもつられて笑みかえす。そういうとりとめのない会話をし
て、昼の時間を過ごした。

休憩が終わって、引き続き仕事だ。

しばらくモモーロの雌雄を見分け続けているうちに、オキシは気が
ついたことがあった。どう見てもオスは胸のあたりに濃紫色の模
様があるのだ。メスにはその模様はない。

明らかに異なっていた。

見間違いではない。

何度確かめて見ても、間違いなくオスの特徴を持つものには模様
があり、メスには模様のあるものが1匹もない。

例外は存在しなかった。

こんなわかりやすく確かめやすい特徴を、この仕事をしている人
が気がつかないはずは無い。考えられるのは、見えているのは自分
だけなのかもしれないという仮定である。

生物によって見える色の範囲はまったく異なっている。

地球の生物で言えば、人間の見ている世界と、犬や猫の見ている
世界は違う。犬や猫は人よりも少ない光しか見ることができないの
だ。逆に鳥や昆虫は紫外線や赤外線など、人間よりも多くの光を感
じることができる生物もいる。

モモーロと、この世界のヒトが見ている世界は違う。モモーロた
ちは、この濃紫色が見えている。異世界から来たオキシにもそれが
見えている。同じものを見ても、それぞれに異なったものが見えて
いる。

今、映っている世界は、ほんの一部に過ぎない。自然の世界は、
すべて見るには広く、そして深く濃い。

（ちよつとずるいけれど、僕には見えるのだから仕方がない）
その模様は明瞭、雛を一目見るだけでわかってしまうので、楽々と仕分けられてしまう。

あの一人で作業している4つ腕の人に比べると劣ってしまうが、他の人よりは少しだけ早く雛の雌雄を見分けることができる。

「案外、たのしいものだな。雛の仕分け」

ほんのちよつとだけ見分け方が簡単になり得た気分のおキシは、生活費稼ぎの天職をここに見つけたと思った。

だからといって、さすがに毎日やろうとまでは思わないが、たまにやるくらいならば、問題なくこなしていけそうだと、おキシは感じたのだった。

月が地平線から顔をのぞかせる頃、一日の仕事は終わりとなる。

来た時と同じ魔動車に乗り町へと戻る。町に着くとギルドに終了の報告をするため向かう人が多い。それ受理されると、給金が振り込まれるのだ。報告は何日か分まとめて出すこともできるが、大抵の人はその日のうちに提出してしまう。

オキシとテルルも人の流れに乗って、報告に向かった。

「明日も来る？」

帰り際、テルルはおキシに尋ねた。

「しばらくは働くつもりだよ」

虎狒亭でしばらく部屋を借りることができるくらいまで貯めるつもりでいる。

「そっか、じゃあ、また明日ね」

テルルと分かれ、おキシは馴れてきた道を宿舎へ向かって歩いた。

25・モモローの雛は、ひよひよ鳴く。（後書き）

この世界の時計、登場！

時間に関しては、「太陽が月から完全に出る頃」や「月が昇る頃」など大雑把に表現することが多い。

時計塔の構造の元ネタを言えば、原子核の周りを回る電子のような形をしている。

26・難はうたたねている。

オキシが部屋に戻ってきた時、ロゲンハイドは部屋にはいなかった。きつと町の周辺で望遠鏡を覗きこんで何かを見ているのだろう。どこで何を見ているのやらと思った時、精霊と契約したからなのだろうか、それほど遠くない場所にいるような感覚がした。思うこととでなんとなく気配をつかめるようだ。ちょっとした発見であったが、だからといって今は特に用があるわけでもない。このままそうと放っておくことにした。

部屋に差し込む斜陽はホコリに当たって舞っている。空に月は昇ったが、まだ太陽を隠す時間ではない。

オキシは鞆を机の上に置きベットに腰かける。その揺れが収まらないうちに重力に任せて倒れた。弾む布団を背中に感じながら、柔らかな感触に全身を沈めオキシは息を吐く。

今後のことを、いろいろ考えてみる。

いろいろとは言ったものの、出てくるものは「観察したい」という欲求のみ。頭の中はそればかりだ。

オキシは手を伸ばして鞆を引き寄せて、中から本を取る。仰向けのまま、本をぱらぱらと眺める。ずいぶん書き込んだものだ、我ながら感心してしまう。

異世界の微生物で、オキシのお気に入りは『ミジンコもどき』だ。このミジンコもどきに惹かれるのは、地球のミジンコに似ていると言つ愛着に似た感情もあるかもしれない。

この世界にミジンコがないので、見つけたあの微生物を「ミジンコ」と呼んでしまってもかまわないような気もしたのだが、だか

らといって単純にミジンコと呼ぶのも、どこか違和感があった。ミジンコというと、地球のあのミジンコがどうしても思い浮かんでしまうのだ。

そういうふうでもいいような意味不明で不毛な悩みが堂々巡っていたが、結局その時は「ミジンコ」に「もどき」をつけることで落ち着いた。

このミジンコもどきは、多分、おそらく、高い確率で、これは動物である。だが、本当にそう分類してもでいいのだろうか？ だいぶ不安になってしまう。

なぜならば成体の姿だけを見れば動物であると言えるが、その一生を見てみると菌なんだか動物なんだかよくわからなくなる生物だったのだ。

草原ではじめて出会った時、見た目が完全に動物であつたのでそう思っていたのだ。

その生物を観察をしている途中で夜が明け、太陽の光が水中に差し込んだ。その瞬間、ほとんどの個体が発芽を始めたのだ。

そして、あつという間に無数の胞子となって水中に消えていった。残されたのは、すべてを放出し空っぽになった塵のような殻だけ。

そう言う菌に寄生されていたのだと思い、面白そうだからその胞子の行方を追うように眺めていた。

胞子は意思を持ったようにいくつか集い連り、しばらく水中を漂い、水の底に沈んだ。その胞子が土に付くと、胞子の中で何かが動き出したのだ。そして、そこから生まれたのだ。予想に反して先ほど見た動物を小さくしたような生物が。

あれが彼らの体を張った産卵だったのである。

その時、オキシは思わず嬉々として叫んだのだ。

「うわ、何たる思い込み。あのミジンコもどきめ、地球のミジンコとまったく生態が違うじゃないか！ 何たる不覚。何たる真実。これだから、発見の瞬間は……最高なんだよ！」

ミジンコもどきは何かに寄生してしまった宿主かと思っただら、実はその胞子とその生物の卵だったのである。

それは、それは、なんともたまされた気分になったのだ。まさに、そういう例があるので、油断ならないのである。

異世界に来て早々、先入観の恐ろしさと、異世界の生物がやはり別世界のものだという事を知ったオキシなのだった。

ミジンコもどきは普段は光に対して逃げようとするのだが、成熟すると光に向かい産卵のために散ってしまう。

成熟した個体にもしはずと光が当たらなければ、いつまで生きるのか、どうなるのかという実験を兼ねて、ロゲンハイドに作ってもらった水の板のうち何枚かは、1日中、陽の射さない日陰に置いている。

今のところ、彼らは弾けることなく生き続けている。産卵には光きっかけが必要のひとつであるという仮説は正しそうだ。

水中に散った胞子のような卵は、水底の泥の層まで到達しないと生まれない。1度、卵として散ってしまったら、泥の環境にたどり着くまでずっとそのままの姿で水中をいつまでも延々と漂い続けるのかという実験もしている。

こちらは今のところ、日陰と日向の2つの環境に配置している。長く日に当たっても、長く漂い続けても、いつか泥にさえたどり着ければ卵は孵るのだろうか。

そして、地球では、水たまりに住むような生物は乾燥に対して対策を練っているものがある。水のない間は干からびた干物のように

しているが、ひとたび雨などが降り水に触れば元のように復活するのだ。この世界でも、水たまりの生物たちは何か対策を練っているのだろうか。

それを確かめるべく、いくつかの成長段階のミジンコもときや卵は今、陰干しにして緩やかに乾燥中だが、しばらくしたら水に戻してみようと思っている。

彼らの生態はまだまだ分からないことだらけだ。調べたいことは山ほどある。

地球の常識と比べてみて想像できることもあれば、常識にとらわれてばかりいては見えないものもある。先入観を取り払うのは、なかなか難しい。

オキシは本を閉じ机の上に放り投げた。

外から届く光が窓のガラスを透かして部屋の床で揺れている。空では、だいぶ太陽が隠されて月の光が強くなったようだ。

異世界でも光の弱まる暮夜の時間はどこか物悲しい。

草木のすれる音、虫の声が月夜の紗に浮かんでは溶けていく。ささやくような音は響いているが、それがかえってあたりの静けさを際立たせる。

布団の温かな落ち着く感触は、すべてを呑みこむ泥のように温かなぬみを内包し微睡まどろみが湧き出てくる。

何日もの間忘れていた沈み込む心地よい眠気に引きこまれそうになる。

これからどうするか。

このまま寝ないで朝まで起き続けることもできる。眠ってしまうこともできる。

これから何をしていくのか。

漠然とした気持ちしかなく明確な目的がない。考えても答えは出ない。

ちようどいいから眠ってしまおうか。

月に磨かれて景色は透き通った夜の戸張の中に深く身体を押し込め、幽きまどろみの淵で意識は夢へと逃避していく。

うつうつと見る夢は現実味があるようで形をなさない、意味不明の集合体。それが何かと思う前にぼうつと静かに凪いで曖昧になっていく。

感じたのは懐かしい田んぼの風景と、空に揺れる電線と飛行機雲。どこか見覚えのある懐かしい建物が生ずる街を抜け線路を超えれば、田んぼと神社の杜が広がっている。

空はやたらと澄んでいて、ガラスに覆われた水槽に満たされた水面を見ているようだった。冴えた青を映す水泡で挟まれたアスファルトの道は真っ白で、草の生えたあぜ道と畑は水声に揺れていた。水槽に張られた水は風に震えている。

田んぼのぬかるみの、その踏んだときの感触は、たまらなく現実のものに近い錯覚を覚える。足の裏、指の間に感じる泥の柔らかくほんのり暖かい感触。

あふれでる泥の中、水槽は木々を映す空で満たされている。

生命を育む泥に沈んでいる世界。

夢に深く消えていく故郷の風景。

目が開いた。

視界に映るのは白い布団の色、その先の木の壁である。

昼間、働きに行った牧場の泥の匂いのせいだろうか、久しぶりに

見た故郷の生温かい夢だ。

意識のはつきりとする頃には、夢はほとんど朝に溶けて消えてしまうが、今はまだ目覚めたばかりで未だに鮮明に残っている。ほんの一時の消え残る夢が支配する時間である。

眠りの途中で起こされると機嫌は悪いが、自らの意思で目覚める時は夢の内容を反復し、夢が現実か、目覚めと眠りを行き来にながらも、確実に覚醒に必要な工程が緩やかに移行していく。

「眼鏡、眼鏡はどこいった」

長年組まれた手順により、指先だけが枕元を探り眼鏡を求める動作する。

数秒後、急にやる気をなくしたかのように動きが止まり、オキシは深く息をつき、ゆるりと起き上がった。眼鏡はもう必要ないのである。

窓からの光はまだ夜の色を映していた。この世界の夜は、ずいぶん長い。

オキシは顔を洗うために洗い場まで行く。顔を洗って多少は目が覚めたが、いまいちすつきりしない。風呂にでも飛び込みたい気分であった。

この地方にはお湯をためてゆつくりつかる風呂の習慣がない。川や池で軽く沐浴する程度である。

顔を洗う程度ならば、各家に引いてある小さな水場で済むが、全身ともなると近くを流れる川へわざわざ行かなくては行けない。

どこに誰がいるかわからないような開けた場所での水浴びは、現代日本の生活に馴れてしまっているオキシには少し抵抗があった。それに朝の水はとても冷たそうだ。

もつともそれらしい理由をつけてはいるが、一番を占めている理由はただ単純にその場所まで行くことがとても面倒くさいだけである。

「ロゲンハイドに頼めば、今すぐにすつきりできるだろうか」
この世界にはそういう便利な魔法があると言っていた。

オキシはまだ少し湿って頬にかかる髪を耳の後ろにかけた。

『ロゲン、今、来れる？』

ロゲンハイドを思い浮かべ、体内の何か繋がった感じを引き寄せ
て語りかけた。

「呼んだ？」

すぐに水を散らしながらロゲンハイドが現れた。

「びつくりした」

何の前触れもなく顕現したので驚いた。そういえば、精霊を召還
するのは初めてだった。契約してからは、ずっと一緒にいたのだ。

「何か用？」

「ちよつと寝汗かいちゃって、ちよつとすつきりしたいんだ。それ
から、服もこれしかないから、ついでに服の汚れも落として欲しい」
面倒なので、服も体も全部洗濯を頼んだ。

「任せて！」

ロゲンハイドが指を鳴らすと、オキシの視界は透明に包まれた。
息苦しくはない。ほどよい水温に包まれて、心地良い。そう思うの
も一瞬で、あっという間に水は引いて、乾いていく。

「ありがとう。魔法は素敵だ、素敵すぎる」

早いしさっぱりするし、癖になりそうだ。オキシはひとつ魔法の
味を知ってしまった。

「オキシシって、思いのほか胸があるよね」

ロゲンハイドは水そのものの精霊で、水で覆っているモノの形を
感じることは造作ないことであった。

オキシは普段は体の線を隠すような、少しゆったり目な服を着て

いるので、華奢な少年のような体形に見えるが、やはり出るところは一応出ているのだ。

「……」

ロゲンハイドの発言を聞いたオキシは、無言のままロゲンハイドを握りつぶす勢いでわしづかみにする。そして、容赦なしに勢いよく床に叩きつけておいた。

かなり強く打ちつけたので、ロゲンハイドは床に体のすべてを飛び散らせて、無残な水たまりになってしまった。

「あ、ロゲン。大丈夫？」

「……まさかこうなるとは思わなかったよ。まったく酷いな」

ロゲンハイドはすっかり元の形に戻り、透明な体を揺らしている。まったく怪我は負っていないようだ。精霊には物理攻撃はほとんど効かないのである。

「いや、なんとなく、つい」

オキシはうつすら笑みを浮かべた。ちょっとやりすぎてしまったかもしれない。笑ってごまかした。

「なんとなく、あんなに強く叩きつける？」

透明な腕を組みながらロゲンハイドは言う。

「それは、ちょっとだけ反省している。ごめん」

反射的に動いてしまったとはいえ、手加減しようと思えばできたのだ。

「もうオキシは、本当に何をするかわからないよ」
行動の読めないオキシには、いつも驚かされる。

「でも、とにかく。これから、この魔法よろしく」

何にせよ、あつという間に洗淨・乾燥が終わってしまうこの魔法はすばらしい。これを体験してしまったら、今までの入浴には戻れない。もうこれ以外にはない。オキシは大絶賛だった。

「でも、次はおいらを投げないでよ」

ロゲンハイドは、にやりと笑みながら言った。

「わ、わかってるよ。ところで、望遠鏡で世界を覗いた感想はどう？」

オキシはロゲンハイドに尋ねた。望遠鏡の評価を聞いたかったのだ。

「いいね、最高だよ」

ロゲンハイドは望遠鏡を気に入ってくれたようだ。ロゲンハイドはどこからともなく望遠鏡を取り出した。精霊は自分の所有物を自由に出し入れできる小さな空間を持っているのだ。

「月も、遠くの森も、よく見える」

望遠鏡を手に、嬉しそうに見たものを語っていた。

「お気に召したようでよかったよ」

紙の筒はどうしても強度や耐久性に問題がある。もう少し丈夫で見栄えがいい筒を見つけたら、改良版でも作ろうとオキシは心に決めた。

「ところで、ロゲン。ひとつお願いできるかな」

「なに？」

「月から太陽が出てきたら教えて。僕もいくらか気をつけるけれど、多分、気がつかないから」

夜が明けるまで、まだしばらく時間がある。出かける時間まで観察したかったのだ。

ここが自分の家ならば、目ざまし時計を3個ほど設定しておくのだが、そんなものはここにはない。この世界で目ざまし時計に匹敵するものは、ロゲンハイドのあのうるさい声なのだ。

「いいよ」

ロゲンハイドは快諾した。

「ありがとう。そして今のうちに謝っておくよ。暴言はいてごめん

ね、ロゲン」

きつと、そうなるに違いないのだ。

「うあ、なんとなく想像つくなあ。でも、あんまり気にしないでいいよ。おいらはそんなのは平気なのだ！」

ロゲンハイドは胸を張って言った。

数刻後。

「おはよう」

テルルはオキシを見つけると、手を振り駆けよってきた。

「おはよう」

オキシは挨拶を返す。

ロゲンハイドのおかげで、オキシは時間に遅れることなく集合場所に行くことができた。ロゲンハイドは本当にいい精霊だ。今度、お礼に魔力提供えんりきでもしようと、オキシはそう思う。

「今日も頑張ろうね、オキシ」

テルルはにっこり微笑みながらそう言った。

今日はテルルと同じ班に振り分けられ、二人は隣同士で作業する。仕分けの仕事はまだ2日目だが、モモローの様子が見えることもあり順調にこなしていく。だいぶ難の扱いも馴れてきた。

「見分けるの早いよね。それで間違わないんだから、すごいよね。何か、いいコツでもあるの？」

テルルには、オキシがほぼ一瞬で見分けているように、見えるのだ。しかも、それでいて正確なのである。テルルは尊敬のまなざしを向けている。

「なんと言つか……なんて言おう」

他人には見えていない模様なんて、そもそもどう説明したらいいのだろう？

「そこ、しゃつべてないで手を動かす！」

多少のおしゃべりなら見逃してくれるが、ちょっとおしゃべりに夢中になって、作業が止まってしまったようだ。班のリーダーが注意する。

怒られてしまったが助かった。この話はここでおしまいになったのだから。

昼休みもテルルと一緒にである。昨日と同じ木陰に腰かける。

「今日も、お昼持つてきてないのね」

テルルは今日もパンを持ってきている。

「え、まあ、うん……… 必要ないし」

食事はとらなくともいい体質だし、何か食べたい気分でもなかったのだ、特に何も持つてこなかったのだ。

「これあげるよ」

テルルは自分のパンを一つオキシに差し出した。

「でも、それテルルの昼ご飯」

「いいのいいの。あたいの分はたくさんあるし、子供はたくさん食べないと大きくなれないって、母ちゃんが言っていたよ。それにご飯と一緒に食べた方が楽しいんだから」

「確かに食事は多い方が楽しいとは言うけれど」

「つべこべ言わずに食べる！」

オキシが決めかねていると、無理やり手渡された。丸い形をしたパンで皮は硬めである。とてもいい焼色をしている。

「じ、じゃあ、いただきます」

オキシはパンを口にした。

「やわらかくておいしい」

皮は思っていたよりも薄く、さくつと音を立てる。中はたっぷり空気を含んでしっとりとしている。このふっくら膨らんだパンは発酵させたパンだろうか。オキシの頭の中は、酵母菌のことでいっぱいだ。

「あたいの姉ちゃんはね、パン屋なの。姉ちゃんのパンは町で一番おいしいんだから。よかったらオキシも買いに来て」

いつも仕事に出かける前に寄っているらしい。テルルはその店の場所を地面に書きしるした。

「……う、うん。ぜひ行くよ、買いに……」

あぶないあぶない。微生物偏執狂^{マニア}の血がうずいて、もう少しで爆発するところだった。オキシは、そつと胸をなでおろす。

「……」

テルルはじつとオキシを見つめている。もしかして酵母菌にちょっとだけ思いをさせていたので、不審に思ったのだろうか？ 沈黙に耐えられなくなったオキシは目をそらした。

「オキシって、もしかしてはにかみ屋なほう？」

「いや、そういうわけじゃ」

誰だってそんなに見つめられれば、視線をそらしたくなるものはなかるうか。

「だって、時々もじもじしてはつきりしないし、ちよつと引つ込み思案なのかなって」

「そ、そうかな」

説明が面倒くさいから適当にごまかしたり、言葉を濁したりしているの、そうとらえられても仕方ないのかもしれない。

「言いたいことがあったら、はっきり言わないとダメだよ」

子供は時として大人以上に、鋭く正論を口にする。

「わかつているけれど」

大人には大人の事情がある。

実を言えばオキシは子供が苦手であつた。ちよつと騒がしいから苦手という理由もあるが、それ以外にも妙な苦手意識を持つてしまふのだ。

個人的な理由で苦手意識をもつてしまつているので、親近感を持つて接してくれるテルルには申し訳がないのだが、心の底ではどうしても少し距離を置いてしまふのである。

パンも食べ終わり、二人はよく晴れた空を見上げている。雲は流れ、鳥が群れで飛んでいく。木陰に吹く風は髪をなでていき、心地良く抜けていく。天気もいいので、仕事があればこのまま観察に出かけたい気分になつてしまふ。

「ところで、オキシはお金ためて何するの？ あたいはいつか都会へ行つた時に色々買ひ物したいと思つているよ」

テルルはそれが夢らしい。稼いだものは幾らかは家に入れているが、買ひ物のために貯めていゝらしい。

「僕は……ひとまずは部屋を借りられればいいやと思つていゝかな」
部屋を借りる時、1日単位で借りるよりも数日単位で借りたほうが安くなる。なので、お金のからないあの宿舎にいられる間うちに、少しでも貯めてしまおうと思つていた。

「そつか、オキシはこの町の人じゃないから、色々生活費がかかるのねえ。生活のためつて、なんだか夢がないわ」

「僕もそう思う」

オキシは苦笑う。思つてみればそれ以外のことで、取り立てて何かしたい事があるわけではなかつた。

（研究室に引きこもりつきりだつたから、個人的な買ひ物を楽しむ事なんてここ数年してないし、それに欲しいものは時間くらいだつ

たからな)

意外に物欲が無いと思ってしまったオキシだった。

午後は微睡^{まどろみ}みまったりとしている。隣にいるテルルは睡魔と戦い中で、時々雛を持ったまま、とろんとしている。すぐに、はっとしては作業を始めるのだが、単純作業に再び睡魔に捕まってしまうようだ。雛も手のひらの上で、心地よさそうにしている。

声をかけた方がいいだろうか。あるいは軽く揺さぶった方がいいだろうか。

(居眠りなんて、基本的に放っておくものだったからなあ)

授業中に居眠りをしているのは、よく見かけることで特に気にしたこともなかった。それに、あんまり人と話すのは得意ではなかった。なので、こういう時はどうしたらいいのか、よくわからなかった。

「テルル、大丈夫？」

小さく声をかけてみるが、返ってくるのは生返事。

さてどうしたものかと少し悩んだ末に、オキシはもう放っておくことを選んだ。一応声はかけたし、放っておいても微睡む時間は一時的な現象で、じきに自然に終わるのだから。

モモー口の雛は今日も元気である。ひよひよと鳴いて軽くつつきあい戯れていたりと、他の仲間の腹の下に潜ろうとしていたり、隣同士で身を寄せ合ってたた寝ている。

そのような様子の雛に和みながら、オキシは仕事をこなしていた。

昼間は仕事、宿舎に帰れば観察と、2・3日は変わりばえのしない毎日を送った。取り立てて特記すべきことがないと言っことは、いいことだ。だいが異世界に馴染んできたということかもしれない。もっぱら日常というやつは、変わり栄えがしない方が平穩ですばらしいものである。

今日はテルルが休暇を取っているので、昼の休憩時間は一人で過ごしている。

「やっぱり一人って落ち着く」

観察しだすと時間を忘れるので、仕事中は微生物や顕微鏡の目で『見る』ことは封印している。代わりに虫の翅や葉や実などを、熱中しない程度に眺めている。

鳥の羽や虫の翅、何かの種、何かの葉、牧場にも草原と同じようにいろいろなもの落ちている。

変わった形の全く知らない虫、知らない草。見るもの全てが新しい。そのようなさやかな自然を見ていると、何もかもが不思議でならなかった子供の頃に戻ったような気分になってくる。

昨日までは、それらのものを拾うとテルルに「そんなの拾わないの」と怒られてしまっていた。しかし今日は彼女はいないので、思う存分に拾っては、光に透かして眺めていた。

気になるものを拾っていると、モモー口の雛が1匹木陰から現れた。ここはモモー口の牧場、放し飼いのモモー口が普通に歩いてい

るのだ。

この放し飼いの雛は、仕分けている雛よりも少し成長している個体だ。

雛の間は鳥に近い見た目だが、大人になるにつれて毛並みも肉付きも獣のようになり、人を乗せて走ることができるほど大きくなる。そこそこの力を持っているので、荷台をつけて荷物を運ばせたり、長旅のお供にしたりと、昔から活躍してきた。

最近では魔動車が普及しつつあるが、モモーロはいまだに根強い人気がある。とりわけ過酷な地を旅する者にとっては、いざという時に食糧になるということが大きかった。

オキシはふと思いついて、そのモモーロをつかまえて切り株に乗せた。雛は切り株から降りられず、右往左往している。

オキシは本を鞆から取り出し、モモーロをスケッチし始めた。つぶらな瞳に、くちばし、4本の足、そして雛の綿毛の1本1本まで丁寧に描いていく。

> i 2 2 6 1 8 — 3 1 2 <

「今日は一人なんだな」

モモーロの雛を描きこんでいると、声をかけるものがいた。声のした方を見上げれば、声の主はモヒカン刈り鶏冠頭の青年である。彼は、ものすごい速さでモモーロを仕分けられる人だ。

仕事場では、後ろ姿しか見ていなかったなので気がつかなかったが、よくよく見てみるとモヒカンのように見えたのは単なるとさか鶏冠であっ

た。ガラの悪いように見えて怖い外見だったが、そういう外見^{しゅぞく}だけで話をしてみれば普通の青年だった。

「昼はいつもこの辺にいるようだが、今日は何をしているんだ？」
「まあ、いろいろと。ここにいるのは、ここが気に入っているからだよ」

「その絵はモモーロか。上手だな」
オキシの描いていた絵を見て、感心したようにうなずいたそして、大きな手のひらで、オキシの頭をなでる。

この世界に来てから、よくなでられるとオキシは思いながら、絵をほめられたことに対してお礼を言う。

「ありがとう。で、カボンさんは、僕に何か用？」

彼とは話したことはなかったが、この牧場主の息子なので何度か名を聞いたことがあったのだ。その彼が、まだ数日しか働いていない自分に何用かと思うのだ。

「ん、特に用って程でもないのだが……おまえは何か他人には見えないものが見えているかい？」

カボンは、そう問いかけた。突然そう言われても何のことか分からないので、オキシは首を傾げるしかなかった。

「たとえばモモーロの模様、見えているのではないかい？」

カボンはさらに言葉を続けた。

「モモーロの……」

モモーロの模様とは、オスにしか存在しないあの模様のことだろうか？ 他の人には見えない模様かと思っていたけれども、見える人が他にもいるということだろうか？

「いや、知ってどうこうするわけじゃないんだ」

オキシの沈黙を警戒として受け取ったのか、カボンは経緯を話し始めた。

牧場で長く働く人たちの間には「モモーロの模様が見える人がいる」という噂があった。本当にごく稀にしか現れないので、ほんの少し昔までは虚実入り混じった噂もあり、信憑性にかける話だった。

しかし最近、魔術師たちが儀式の二工として、様々な生き物を儀式で作り出した特殊な魔法の中に置いたところ、模様が浮かび上がる生物がいたらしい。そのひとつがモモーロで、詳しく調べてみるとモモーロについては性別の違いで模様の浮かぶ反応が現れるか否かが決まることを突き止めた。

そして、その話を聞いた魔技師が、その魔法を発する魔法具をつくり、一般の人にも見えるようにすれば、モモーロの仕分ける作業効率もあがると、実用化を目指しているらしい。

「数年前に、その魔技師の開発したものを見に行ったことがあって、そのときにモモーロに模様があるのを実際に見たんだ」

カボンはいつの間にかその研究について熱く語っていた。彼はもしかすると、モモーロを愛してやまないのかもしれない。

オキシは黙ったままカボンの話を聞いていた。

魔法やモモーロは自分にとっては専門外であるが、どこぞの研究所の人たちが実験や技術開発を頑張っているのは、すばらしいことだと思う。オキシはそういう技術的な濃い話を聞くのは好きであった。

「それでモモーロの模様は確実にあることが証明された今、あの噂の真相は、その魔法を使わずとも模様が見える魔眼の一種を持っていた人だったんじゃないかと思ってさ」

カボンはオキシの目を覗きこむ。

「おまえの瞳の色は変わっているし、だから、いろいろな人に見えないものが見えてもおかしくないと思ったのさ」

迷信的で安直な理論の飛躍が見られるが、勘は正しいと言えよう。

「カボンさんの言う通り、確かに僕はモモ一口の様子は見えるけれど、人には見えないものが、いろいろと見えているわけじゃ……」

見えているわけじゃないと言いかけて、少なくともオキシには他人には見えない微生物を見る事ができることを思いだした。この能力は、広義には魔眼というものの一種に含まれるのだろうか。こと魔法に関しては、わからないことだらけのオキシは戸惑ってしまう。

「他人が見えないものが見えるのは認めるけれど、でもどうして、僕が模様を見えていると思うようになったの？」

魔眼であるか否かはとにかく、カボンがそう思い至った経緯を知りたかった。

「仕分けるのなかなか早いし、腹のあたりを確認しているようだったから、もしかして見えているんじゃないかなと思ってね。いやあ、本当に見える人が存在するとは」

カボンは感動している。そして、オキシを再びなでる。彼にとって見れば噂の中でしか存在しなかった者に会えたわけだ。それはそれは感涙にむせいても仕方のないことだろう。

「そつえば、カボンさんも見分けるの早いよね」

雛をつかんだ瞬間に、見分けているように見えるのだ。

「ああ、それはオレくらい熟練になると、触り心地でわかるんだ」

カボンは得意げに4本の腕を組んだ。

「それはそれで、すごいと思う」

さすがモモ一口牧場の息子といったところだ。

「ああ、今からでもうちの子になって欲しいくらいだ」

カボンは冗談まじりに願望を言う。

「この仕事する人にとっては、夢のような力だからね。そう思うのはわかるけれど……」

モモ一口の仕事はまあ好きな方だが、一生の仕事にしたいかというと、ちよつと違つのである。

「そうか。やつぱり、だめかあ」

「ごめんなさい。でも、たまに仕事しには来ますよ」

何かにつつと縛られるのは面倒くさいが、時々ならば一応構わないのである。

「いやいや。こうして来てくれるのは助かるよ。これからもよろしくな」

そう言つてカボンは、オキシの頭にぽんと手を置く。

「でも、いつでも歓迎するぞ」

けつこつ本気だったのかもしれない、そんな気配を感じた。

「あはははは、考えておきます」

まだ異世界に来て数日。新しい場所での生活に慣れることで手いっぱい。自分の身の振り方さえ定まっていないので、あまりややこしいことは避けたかつた。

それにカボンの家にお世話になつてしまうと、気ままに生活できないような気がして、オキシは丁重にお断りしたのだ。

28・培養がしたい。

「……」

オキシは通りを歩きながら、考えていた。

（……培養したい）

先ほどから思うのはそればかりである。

今、手元にいるのは水たまりに住んでいた大小様々な微生物だけ。自然から分離し適当に育てることも、それはそれでいいのだが、菌の一つや二つ取り出して純粋培養したいと思い始めていた。人工的に培養するのが難しい絶対寄生菌を除けば、適切な環境さえ与えてやれば、培養は簡単にできるのだ。

（ああ、培養するための培地がほしい）

培地といえはまず思い浮かぶのは寒天を使った培地である。培地に使われるのは何も寒天だけではないので、強いこだわりはないのだが、やはり寒天培地が一番扱いなれているものなので、もしもそれが入手できれば最高であった。

シャーレに満ちる寒天の培地に、微生物の作り出す美しい色の集合体^{コロニー}。採取した微生物を培養して観察するのが、まさに醍醐味なのだ。

ロゲンハイドの魔法では無菌状態の純水は作れても、ゲル化はできない。オキシは寒天を求め、市場をうろついて探しまわった。目についた店で尋ねてみたが、いずれの店でも同じ回答で寒天はほとんど入荷することはない品物であるということだった。この地方でそれは一般的なものではないらしいが、店の者に「寒天」という言葉は通じたので、存在していることだけは確かである。

「乾物なんだから、ちよつとくらい流通していてもよさそうなのに」オキシは残念そうにぼやく。

実際に何もない場所で観察を始めてみると、道具についていろいろ不満も出てくる。代用品を探したり、道具を試作する楽しさはあるのだが、制作にばかり時間をかけられるわけではないのだ。

（実験室は本当に恵まれていたんだなあ）

つくづく心からそう実感する。

気がつけば、普段はあまり来ない地区まで足を伸ばしていた。このあたりは住宅街で、旅人や行商人が行きかう町の中心に比べると幾分か落ち着いた感じがする。

しかし、そんな風景に目もくれず、オキシは歩を進めていた。

「ん、これはパンの焼けるにおい」

微かに香ばしい匂いが鼻孔をくすぐった。あたりを見渡せば、カゴに入ったパンの描かれた看板が目に入った。もうすぐ晩の買い物時である。それに合わせて、焼きたてのパンを提供できるようにしているのだろう。

（パンの酵母菌なら、培地は麦芽の汁でもいいよなあ。この世界の酵母菌はどんな形をしているのだろう。やはり丸い形をしていて、出芽するのだろうか）

酵母菌は動物性の微生物に比べると大きな動きはなく地味だが、ぼこぼこ出芽していくところが、なんともかわいいやつらなのだ。

「パンの醗酵……」

ぜひともパンを作っているところを見たい。醗酵させている現場を確かめたい。オキシは行動を開始し、誘われるように匂いの発生源である店を覗いた。

店内では女性店員が客の対応をしていた。オキシは、彼女に見覚えのある面影を感じていた。

「ああ、確かテルルのお姉さんは、パン屋で働いているって言うたような」

テルルがそのようなことを言っていたことを思い出す。

オキシはパン屋の扉を開けと、カランと鈴が鳴った。

「いらっしやいませ」

鈴の音に反応し店員は笑顔であいさつをする。

「あ、あの。パンって、どうやって作るんですか？」

入店早々、オキシはそう尋ねた。

「今ちようど、明日の分の仕込みをしているはずだから、見ていく？」

あまりに興味津々な様子であるし、断ってしまうのもなんだかかわいそうに思い承諾した。

「ぜひ。よろしくお願いします」

突然の申し出にもかかわらず快諾してくれたことに感謝した。

案内された厨房では、生地作りが手作業で行われていた。

「この子が見学したいんだって」

「忙しいところ、突然ごめんなさい。よろしくお願いします」

作業を見せていただくので、オキシはそれなりの礼儀を払う。

「礼儀正しい子だね。ゆっくり見ていっておくれ」

パン職人が作業台の上で白い生地をこねている。粉や水を使ってパンの生地を作る工程は地球と大差ないように見えた。

材料がある程度こね終えると、つやがある緑色の大きな葉を取り出た。その葉は二又脈系の葉脈を持つ扇形で、大きさは違えど地球の植物で言えばイチヨウの葉に近い形状をしていた。

職人は慣れた手つきでその葉をパン生地を包むようにかぶせ、出来上がったものを木箱の中にしまい始めた。

「その葉は何？」

おそらく今からしばらく放置して醗酵させるのだろうか、見知らぬ工程が入っていたので、オキシは尋ねた。

「これは『パンの葉』っていつて、これは使くとパンがおいしくふくらむのさ」

パン生地を葉で包んだり、葉を刻んだものを混ぜたりして、箱に入れて一晩放置すれば、ふつくらパンの生地ができあがるというのだ。

「そのパンの葉って、どこで手に入るのですか？」

まちがいなくパンを醗酵させている酵母菌がこの葉にいる。オキシは期待で胸が満たされる。

「普通に市場で売っているよ」

「市場で。わかりました。探してみます」

「窯を使う時は熱くなるから、やけどに気をつけてね？ わからないことがあったら聞きにおいで」

普通に家でパンを作るのだと思っているのだろう、窯の扱いについて忠告する。

「いろいろ、ありがとうございます」

パンの作り方を聞いただけ聞いて帰ってしまうのもなんだか申し訳がないので、帰り際に焼きたてのパンを2個ほど買い、オキシは軽い足取りで店を出た。

さつそくその足で向かったのは、もちろん市場である。夕食の間が近いこともあり、多くの人でにぎわっている。オキシは人を避けながら露店に並ぶ品々を見てまわる。

山積みの野菜、根菜、果物が並んでいる店を見つけ、オキシは足を止めた。この店なら売っていそうだ。

「パンの葉ありますか？」

様々な種類の似たような葉物が並んでおり、自分で探すのを早々に諦め、オキシは店主にそう尋ねた。

「アルよ！ このかごの中にあるのがそうだヨ！」

店主のさした先には、パン屋で見たものと同じ葉が、束になって重なっていた。

「ついさっき届いたばかりの、取れたてのパンの葉だヨ」

どうやら新鮮なパンの葉ではないと、パンがおいしくなくなるらしい。

「古いのには毒があつて、食べるとお腹を壊すから気をつけなきゃだめだヨ」

店主は傷んだパンの葉の恐ろしさを語る。

特にカビの生え始めているようなものは、使用するには危険とされていた。カビが生えた食糧はそれだけで毒であるという認識が強いのだ。

「カビには、気をつけます」

店主の忠告にオキシは頷き返した。心の中では、むしろそのカビの生えそうな古いパンの葉も欲しいと思っていたが、おそらくもう処分されているだろう。

（カビのすべてが毒と言うわけではないんだけど、仕方ないか）

パンの葉の鮮度が落ちてくると、人にとって危険な微生物が人の役に立つ微生物よりも活発になる、ただそれだけのことである。

人にとって役に立つ微生物も、何の立たない微生物も、危険な微生物も、普通は共存している。普段は有益な働きをする微生物だったとしても、環境によってはときに害をなすこともあるのだ。

「パンの葉を一束ください」

「はいヨ！ まいどアリ！」

「ありがとう」

オキシは商品を受け取った。

この店はいわば野菜のみを扱う店なので、小麦粉の類は売っていない。オキシは別の店へ行き、パン生地作成に必要な材料を買ったのち、家路につく。

（数枚は普通にパンの醗酵のために使って、残りはひたすらカビを生やそうかな。酵母菌培養、楽しみだ）

ひとまずやることは、醗酵時に現れた菌から酵母菌の検討つけること。そして、邪魔な他の菌を排除し、有益な菌だけを取り出し純粋培養するのだ。

そう考えるだけでオキシは心が躍るのだった。

28・培養がしたい。(後書き)

寒天培地がなかったころは、ポテトのふかしたやつを培地に使っていたと知って、だからポテトサラダ作ったときは気をつけないといけないなと思った。

29・食よりも好奇心を満たすことを選ぶ。

「ロゲン、水で空箱を作つて。冷たいのから熱いのまで！」

パンの葉を巻いた小麦団子を机の上に並べ、オキシはロゲンハイドを呼び出しそう頼んだ。

「いきなり何を？ …… まあ、簡単なことだけれど」

突拍子もないことを頼まれるのは、もう慣れたこと。ロゲンハイドは、オキシの望み通りの箱を作り出した。

「ありがとう」

箱が出来上がると、嬉々とした様子でオキシは箱の中に作つたばかりの団子を並べていく。

「この湿っぽい箱、最高だね。本当に魔法つて便利だ」

魔法で作られた箱は、温度湿度はもちろん、気密性もある程度管理でき、微生物の繁殖しやすい環境をそこに作りだせる便利な代物なのだ。

「常温の水の箱ならとにかく、熱いのとか冷たいのは、おいらの力じゃ、手のひらくらいの大きさが限度だけれどね」

「これがあるのと、ないのでは大違いだよ！」

培養することの怖い点は、自然界では少量なので問題が起きていない微生物でも培養すれば大集団になり、病原性がなくとも取り扱いを間違つと環境に影響を与える危険があることだ。

菌を育てるための培養器インキュベータや、菌を隔離できる無菌実験台クリーンベンチに匹敵する機器が、ロゲンハイドの掛け声一つで、いつでもどこでも顕現する、それは非常に素晴らしいことではないか。

危険な病原菌を扱つたり、遺伝子を組換えるならとにかく、酵母菌を培養する程度なら、この手乗りサイズの実験室でも充分な設備

なのだ。

「よし、これで最後だ」

オキシは箱の中に、生地を入れ終える。オキシができる作業はここまで。あとは一晚放置し、ただ見守ることしかできない。

「明日が楽しみだ」

ここからはパンの葉に住む微生物たちの活動にすべてをゆだねるしかない。

次の日。一晚置いた小麦団子に変化が現れていた。オキシは机に並んでいる様々な温度の箱を覗いていく。

「やっぱり低温過ぎても、高温過ぎても、やっぱり膨らまないものなんだね」

オキシは酵母菌が一番働く環境、適温適湿の見当をつける。これは酵母菌を培養する時に必要な情報なのである。オキシは、醗酵によつて膨らんだパンをさつそく観察し始めた。

「あああああ、たくさんいる！」

オキシは、歓喜のため息をついた。

「あれ？ パン焼くんじゃなかったの？」

昨晚オキシがしていた作業はどう見てもパンづくりだった。一晚経つていい具合に膨らんだので、てつきり焼くのかと思いきや、オキシは箱から取り出さないで、いつまでもただ眺めているだけだった。

「実は、ここからが本番なんだ」

焼いて食べるのが目的ではないのである。この中に酵母菌として働くものがあるのだ。それを見つけないといけない。

「オキシシが食べる物を作るなんて変だと思ったんだよ。やっぱり、何かを『見る』ためか。……いつも通りのことで安心したよ」
オキシの奇行に対して、「いつものことか」とその一言で片づけられるほどに、ロゲンハイドはすっかり慣れてしまっていた。

オキシシがパンの葉を入手してから数日後。仕事から戻ってきたオキシシは今日も微生物を観察する。

箱の中で様々な菌たちはコロニーを作り、美しい彩りをまとい、ビロード状、綿毛状、粒状、様々な形状で発育していた。

電子顕微鏡並みの倍率まで見ることができるので、小麦粉の構造だけでなく、カビの様子もよく見える。オキシシは菌たちの営みの成果を見て、思わずによりとする。

「ちょ、箱の中、カビだらけだよ！ こっちのも、全部カビだらけだ！ これ、ずっとほったらかしにしていたでしょ？」

オキシシが覗きこんでいる箱の中を見て、ロゲンハイドはぎょっとする。まだらの小麦団子は、もはや何か別の物体のようになっていた。

「ほったらかしてないよ。しょっちゅう様子を見ていたよ。綺麗で素敵だね」

何かに憑かれたようなうつとりとしたまなざしで、カビに魅入っている。

「す・て・き、じゃないよ。これは、もう捨てるしかないよ」

ある意味で見事なカビではあるが、どんなにだらしないずばらな人物でも、ここまでのカビを見つけたら捨てることを選ぶだろう。

「これは捨てないよ」

オキシは即答する。

「なんで！」

ロゲンハイドはオキシの返答に、思わず叫んでしまう。

「これがまさに理想の姿だからだよ」

思惑通りに立派に育ってくれたのだ。捨てるなんてとんでもない。

「カビだらけなの？」

「カビだらけだから、いいんだよ。特にこの箱の子たちは、なかなか思うように育たないから失敗したのかとはらはらしていたんだ」

オキシが次に手にとったのは、鮮やかなまだら模様の団子ではなく、うっすらと膜の張ったようなカビが生えたものであった。

醗酵したパンにいる菌のなかで、醗酵力のないものや危険なものは取り除き、最終的に醗酵する力の強いと思われる菌を絞り込む。

そして、その菌の作るコロニーを掻き取って新しい培地に移しそれを培養する。それを数回繰り返すことによって、より菌の純度を高めることができる。いわば酵母菌の有望株^{エリート}のみを、大切に育てていると言っような感じだろうか。

しかし、生物は気まぐれで思うように動いてくれないこともある。丁寧に育てようとしている時はなかなか育たず、必要な時に大発生する。だから面白いところでもあり、頭を悩ませるところでもあるのだ。

「やつと純粹培養がうまくいったことだし、さっそくだけれど、今日は普通にパンを作ってみるよ」

オキシは小麦をこねて、最後に培養した菌の一部を切り取って生地^{生地}に混ぜた。

「そ、それカビだよ？ 食べ物に混ぜるのは危険だよ？」

オキシの奇行にはなれているはずであったが、さすがのロゲンハイドもその行動には目を丸くした。

カビは毒があり危険なものであるのは常識である。それなのに、食べ物に混ぜてしまったのだ。ロゲンハイドは、オキシが何を作ろうとしているのか分からなかった。

「大丈夫、大丈夫。このまま、しばらく放置しておこうね」

そう言ってオキシは、ほんのり温かい魔法製の箱の中へ、パン生地を入れた。

酵母菌の数がパンの葉や大気中にいるものとは比べ物にならないほど多いので、菌にとって過ごしやすい適温適湿の箱に入れば、その強い醗酵力で早く醗酵が行われるだろう。

「でも、カビは……」

「すべてのカビが害あるものとは限らないんだよ」

「オキシシは、本当に何をしようとしているの？」

「簡単に言くと、パンの葉よりも生地を寝かせる時間が短くてすむものかな。最終的にはこれをつまく乾燥させて粉にして、パンの葉よりも長く保存がきいて、短時間でパンがふつくらする粉、そういうのを作りたいんだ」

オキシはここぞとばかりに得意満面に、長々と語りだす。

トライイースト

酵母菌を乾燥させたもの、それは地球で言うところの乾燥酵母である。実際のところ、オキシにとって乾燥酵母を作るのはパンを作る人のためではなく、菌の保存という極めて利己的な目的のために作ろうとしていた。乾燥酵母が完成すれば菌を比較的長く保存でき、観察したい時に戻して実験や観察に使うことができるのだ。

「もし、それが本当だとして……パンの葉はカビが生えやすいのに、保存の魔法がうまく働かない食品の一つだから、そういう保存のきくものができるのなら、画期的ではあると思うけれど」

パンの葉に保存の魔法をかけると、生地がうまく膨らまないことが多いのだ。

「保存の魔法？ そんなものもあるんだ」

「ああ、オキシシは魔法を知らなかったね。保存の魔法にはいくつもあるんだけど、どれも食べ物が腐りにくくする魔法なんだよ。遠くの土地に食糧を運ぶときに便利なんだ」

ロゲンハイドの話を聞いている限りでは、保存の魔法は時を止めそのままの状態で保存するといったものではなく、乾燥や冷凍などその食品にあった魔法をかけているようだ。中には純粋にカビ避けや虫避けを願うものまであるらしい。

「カビ避けの魔法か。殺菌のようなものだろうか？ ……腐敗も醗酵も微生物が行うんだから、腐敗防止なんてしたら、微生物の腐敗はもちろん、醗酵も働かなくなるのはうなずけるな」
オキシはつぶやいた。

微生物の活動のうち、人間の役に立つものが醗酵と呼ばれ、害になるものは腐敗と呼ばれているにすぎず、本質的に行っている生命的営みは同質の現象。魔法で腐敗防止をすることとは、微生物の活動を停止させることと同義、つまり醗酵も行われない。

その魔法で作りに出された環境に耐性がなかったり、自己を維持する栄養を合成できない状態が長く続けば、最悪の場合全滅することもあるだろう。

保存の魔法によって訪れた危機に対して、微生物たちが己の種を維持するために休眠状態になったとしても、その魔法を解いた時に有益な菌よりもそれ以外の菌の方が復活が速やかな場合、有益な菌が根付く隙がなく、栄えるまでに時間がかかってしまう場合もある。

「食品そのものの時間を止めてしまうことはできないの？」

その食品の時をそのままの状態で止めて、必要なときに戻せるよ

うにすれば、問題は解決しそうなものであるが。

「時を止める……まるで子供の発想だね。時を自由に繰る魔法は、それこそ伝説の中でしか語られない魔術師たちの憧れる幻の現象。いまだ実現していない魔法のひとつなんだよ」

「そうか、魔法も万能ではないんだね。魔法は割となんでもできるような印象があったけれど」

科学にも超えられない限界があるように、魔法にも魔法なりの秩序ある理の上に成り立っているようだ。

「そうこうしているうちに、そろそろいい具合かな」

箱の中のパン生地は醗酵し、いくらか膨らんでいた。今までパンを手作りしたことはほとんどないので、どの程度膨らめばいいのかははっきりとした自信は持っていないが、オキシはこれで充分だろうと感じた。

顕微鏡の目でパンを見ても、見た範囲には他の菌が大量に発生している様子もない。まずまず成功といえるだろう。

「……膨らむの早すぎない？」

普通は一晩かかる現象であるのに、膨らむのが早すぎるのだ。

「ふふふ、これは早く膨らむものだと言ったでしょ。ま、とにかく焼いてみよう」

仮に焼き具合が芳しくなくとも、それなりのパンはできあがるだろう。

「このパン、大丈夫なのかなあ」

そのパン生地にはカビが混ざっているのだ。到底、まともなものができるとは思えなかった。

「大丈夫だよ」

選んだその酵母菌が毒をまったく作らないと言う保証はないが、少なくとも生地混ぜてから焼くまでの間に生産される量では、摂取しても人体に実害は出ない程度でしかない。

むしろ、パンが出来上がってから起こることの方が問題だ。焼きあがった直後はほぼ無菌状態であるが、時が経つにしたがって大気中に当たり前にいる普通の菌などが付着していき、パンを侵していく。数日もすれば有象無象のカビが目に見え始め、食べるのは危険な状態になるだろう。

「とにかく早くこのパンを焼こう。焼きに行こう」

宿舍の厨房にある焼き釜を借りてパン焼くのだ。見た目は何の変哲もない窯なのだが実は魔法で動いている道具なので、電子レンジのオーブン機能のごとく初心者でも簡単に扱えるのだ。

オキシは窯の中にパン生地を入れて、電源を入れ稼働させた。あとはできあがるまで待つだけだ。

数十分後、パンは無事に焼きあがった。窯から取り出し、でき具合を確認する。

生地をこね足りなかったせいか、醗酵させすぎたせいか、微妙な焼き色で膨らむことには膨らんだが少しへこんでいる不格好な形になっていた。

「ちょっと、形が悪いかな」

パンづくりは初めてということもあり、最初からうまくいかないのは仕方ないと言えば仕方ないだろう。

「でも、一応、見た目は普通だね」

ロゲンハイドからみたら、パン生地にカビを混ぜて作ったパンにしては普通なのだ。

「見た目も何も、これは元から何の変哲もない普通のパンだよ」

オキシにしてみれば、パン生地に酵母菌を混ぜて作った、ごくごく普通のパンである。

「さっそく食べよう」

「待って、おいらが毒見する。もしも毒があつたら、大変だよ」

精霊の身体は単なる魔力の塊である。血肉を持たないその性質上ほとんどの毒に耐性がある。そして何か物体を体に通せば、人に対して危険に働く毒が含まれているかどうか分かるのだ。

「……僕はそういうのは平気だから、大丈夫なんだけれどな」

この世界に来る時に、命にかかわる猛毒を食べたとしても、何の問題もない体質になったのだ。

「その自信がどこから来るのが、おいらには理解不能だよ」

事実を知らないロゲンハイドはそう言いながらパンを飲み込んだ。その透明な体の中にパンはあつという間に溶けていく。

「……あれ？ 普通のパンだね」

多少粉っぽい感じはするが、ふんわりと焼けているパンである。予想に反して、毒はまったく感じられない。

「あんな材料なのに、危険がないのがやっぱり不思議でならない」
「危険そうな子は排除したから」

興味の無い者からしたら、カビはみな同じように見えるだろう。しかし、それぞれに個性を持って存在している。そのささいな個性を観察して違いを見分けるのだ。

古くなつてくるとより活発に発生するような菌や、妙な匂いを発する菌は、危険とみなしてまっさきに除外した。

それに加えて熱耐性持つているような菌も候補から外している。パンの葉に自然発生している少数ならあまり問題はないが、人工的に培養すると言うことは、通常ではあり得ない数になるのだ。パンを焼いた後も脅威的な量が生き残り、パンを分解し続け、おいしさに影響を与えかねないからだ。

「生地混ぜたあのカビには不思議なことに毒はなくて、すごいのはわかったけれど……これの作り方というか、材料はだれにも教えない方がよいよ。うん、絶対知らない方がいい。目の前で見ていたおいらだって、まだ信じられないもの」

ロゲンハイドは疲れたように肩を落として、げんなりしている。あれはどう見ても、カビを混ぜこんだとしか思えなかった。カビの生えている食物はたいいて体調を崩すので、カビは毒であると言う認識が強いのだ。そのカビをパンに混ぜる、普通ならそれだけで毒が食糧を侵してもおかしくない状況なのに、何の危険もない普通のパンになることを信じると言っても、なかなか信じられないだろう。

「説明がいろいろ面倒そうだし、そうするよ。一族の秘術ということにしておくさ」

まだこの世界に存在しない考え方の上に成り立っているものだ。微生物がいることを知らないこの世界で、小さな生物たちが醗酵や腐敗を行っていると、すぐに受け入れるのは難しいだろう。

秘術ということにしておけば、それ以上しつこく追及してくるような面倒なことはあまりないのだ。

「さて、一応酵母菌の発見に成功したところで、今度は乾燥させてみようかな」

乾燥に耐えられるのであれば、菌の保存も比較的楽になる。オキシは、この酵母菌が乾燥に耐えられるかの実験を始める。

徐々に自然乾燥させてみたり、時には魔法で水を蒸発させる。そしてその後に、糖や小麦を少し混ぜた水で戻すと、菌たちが復活す

ることも確認できた。一応、乾燥対策は持っているようだ。

「でも、まだ試作段階だから、どうしても質にばらつきがある。なかなか、むずかしいなあ」

小瓶に入った微生物の粉を見つめるオキシは小難しそうな顔をしている。

乾燥させる方法やそれにかかる時間、そして乾燥から復活させる段取りの違いで酵母菌の活性具合、つまりパンの膨らみ方に差が出てしまうのだ。

酵母菌の発見と培養は地球の知識を元に比較的楽にこなすことができるけど、未知なる菌の性質を知るにはまだまだ観察が足りなかった。

「カビ保存の魔法、存在しないものかなあ……」

そのような魔法があれば楽できるのにと、オキシは思う。

「そんな魔法を求めるのは、オキシくらいだよ」

微生物の存在とカビの有用性が知られていないこの世界で、その魔法の存在意義を見いだせるのは、オキシだけだった。

「でも菌の保存くらい、魔法がなくとも、科学で何とかするさ」

そのような魔法を探求するよりも、科学的手法で探求した方が、オキシにとっては早く答えに巡りつく。

菌の乾燥保存について、まだまだ課題は多いが、この瞬間、まちがいなく異世界版「乾燥酵母^{ドライイースト}」の誕生が誕生したのだ。

30・魔物ってなあに？

仕分けの仕事も順調で資金も溜まり、時期も来たので、オキシは虎狒亭に移ることにした。今の段階で、この町以外へ行く予定もないので、部屋をしばらく借りることを虎狒亭の女将に伝えた。

「何か困ったことがあったら、気軽に言ってちょうだいな」

女将は部屋のカギをオキシに手渡しながら言った。

「はい、ありがとうございます」

虎狒亭の1階にある食堂は何回か利用したことがあるが、二階へ行くのは初めてだった。木製の階段を登った先は廊下は続き、部屋の戸がいくつか並んでいる。

鍵の頭部分に刻んである記号と同じものが描かれた部屋を探し出し、中へ入る。

部屋の広さは今まで泊まっていたところと大差ない。壁紙は白を基調とした明るい感じで、床は木製のタイルが敷き詰められている。観音開きの窓が2つあり、朱鷺色とぎいろのカーテンが片側にまとめられている。

「あ、ハンモックだ」

部屋の隅にハンモックが設置してあった。

ハンモックだとベットに比べベットメイク関連の手間が省ける。

それが虎狒亭の安さの秘密のひとつである。

もしもベットや布団で寝たければ、別のところへ行かなくてはいいけないが、どこでも眠れるオキシは寝具がハンモックであろうと、寝袋であろうと、草むらだろうと、そこが眠れる場所であれば関係なかった。

オキシはハンモックに触ってみる。当たり前だがゆらゆらと揺れ

た。柱に複雑な結び目がしっかりと結びつけてつけてあるので、ハンモックの吊り下げ紐を引っ張ってみてもびくもしない。

旅人の中には自分のハンモックを持ち運んでいる者もいるので、このハンモックを取り外して、自分の使い慣れたハンモックを使うこともできる。

ハンモックの設置具合を確かめ終わると、オキシは乗ってみた。この独特の揺れと浮遊感には癖になりそうだ。

「そういえばキセノンは今いるのかな」

ゆらゆらとハンモックを無意味に揺らしながら、オキシはそう思う。

この町にいる時は、ここに泊まっていると聞いている。色々世話になったし、もしも滞在しているのなら軽くあいさつしようと思ったのだ。

ハンモックの心地を確かめるのもそこそこに、オキシは1階に降りた。

食事時にはまだ早いので客はまばらである。オキシは、部屋の隅の方にいたタンタルと軽くあいさつを交わし、尋ねてみた。

「今、キセノンはここに泊まっている？」

「キセノンは今、魔物退治でこの町にはいないよ。でも、もうそろそろ戻ってくるんじゃないかな」

長い時は一月以上いないこともあるが、キセノンはこの辺を拠点としているので依頼が終われば、この地に戻ってくる。

「魔物退治に……そうなのか」

魔物もよくわからない生き物である。仕分けの作業をしている時も、ちらほらと話題には出ていた。話を聞いていると動物とは区別されている生き物であるというのは、何となく感じ取れた。

しかし、この世界の常識っぽいことなので、「それは何か」と質問するのはなんとなく勇気がある。

そう言う常識的なことはロゲンハイドかキセノンに尋ねたい。彼らはすでにオキシを常識知らずと言うのを知っているので、そういう疑問をいくらか聞きやすい。

部屋に戻ったら、今日こそはロゲンハイドに聞いてみよう。いつもは帰宅する頃にはすっかり忘れてしまっていたが、こういうものなのか知りたいと常々思っていたのだ。

「ありがとう。僕はもう部屋に戻るね」

知りたいことは知ったので、オキシはさっさと部屋へ戻ることにした。

そして、さっそくロゲンハイドを呼び出し聞いてみた。

「動物と魔物は、何が違うのか知りたいんだ」

「ん〜、魔物は魔物で、動物は動物。全然違うよ」

ロゲンハイドは、身も蓋もないことを言う。

「それはなんとなく分かるんだけど、僕は動物しか知らない。魔物がどういうのか、まったくわからないんだ」

地球には魔物と呼ばれる生物は存在していない。この世界に来てからも見たことがないので、どんなものなのか想像さえつかない。

オキシが魔物について知っていることといったら、日光を苦手とするものが多く夜行性で、大抵の場合は薄暗い森や林に生息していて、たまに町に侵入することもある害獣ということくらいであった。

「魔物を知らないって……」

ロゲンハイドは、特別な道具を使わないと見るできない微生物という生物を知っているオキシが、魔物という生物を知らないと言うことに驚いた。

「動いている生き物は、大抵動物に分類されるような感じだったか

らさ」

オキシは言う。

「魔物も動物も似ているところはあるから、地方によっては区別が無いのかなあ」

「多分そうだよ。きっと区別してなかったんだ」

そのロゲンハイドの勘違いは使える、そう思ったオキシは話を合わせた。

「魔物というのはねえ」

ロゲンハイドは、魔物という生き物をどう説明しようか、腕を組んで考えこんでいる。

「一番の特徴は、死んだ時に大部分が塵となって消え去ることかな。現れる時も湧いて出たように、もやもやって忽然と姿を表すのが多いんだ」

ロゲンハイドは、魔物について語った。

中には動物や植物の体に乗っ取ってしまうものもある。そういう魔物につかれた生き物も魔物に含まれる。行動や気配におかしな点が見られることや、時には外見も部分的に変化するので、わかる人にはすぐに魔物だと分かるようだ。

「おいらたち精霊にしてみたら、魔物はそこに存在するだけで、その付近がゆがんでいるように感じるから、少し離れた場所にいてもすぐに分かるけれどね」

そう言うロゲンハイドは、魔物を気持ちの悪いものと感じているようだ。

「ちょっと興味深い生物だな」

寄生したり、寄生されたり、ありふれた摂理であるが、そういう生命の攻防はオキシにとって非常に興味深いところだった。

しかし府に落ちないのは、何もないところに忽然と現れたり消えするという点である。何らかの生命だとしたら、自然に現れたり消失

することなどあり得ないのだ。生命は自然発生したり消滅するものではない、そこには原因となる何かが存在しているはずのだ。

それは地球での常識だが、地球にはない原理で生まれ出る生物なのだろうか。

「魔物は魔法と何か関係する生き物なのだろうか？ 魔法で動いているとか、魔法の産物とか」

魔法については、正直なんだかよくわからない。そういうものであれば、地球では考えられない現象が起きて、生命が発生しても不思議はないように思うのだ。

「魔物は魔法生物とも似ているけれど、まったく違うよ。魔物は人工で作り出されるものじゃない、れっきとした生き物。それに魔力が薄くて魔法が発現しにくいウエンウエンウム地方にも魔物は多くいるんだから、魔物の誕生に魔法が関係しているとは考えにくいんだよ」

「そうなのか。魔物か、ちょっと気になるな」

突然現れて、死ぬと消滅する謎をもつ不思議な生物「魔物」。魔物は自然発生するように見える何かがあるのかもしれない。実際にその光景を見てみたいものだ。

「興味本位で近づいちゃだめだよ、危ないから」

オキシの思考を知ってか知らずか、ロゲンハイドはたしなめる。

「それは大丈夫。魔物は見てもいたいとは思っているけれど、微生物以外の生物を見るために、危険を犯す気はさらさらないよ」

オキシはきっぱりと言い放つ。

「そうそう、わざわざ魔物なんか見るために危険を犯すなんて……いやいやいや、どんな場合でも危険はだめだって！」

一瞬納得しそうになったロゲンハイドは慌てて否定する。

「危険だから、いいんだよ。そういう危険地帯は、だれも邪魔する人は来ないだろうし」

人にとって過酷な環境にも微生物は生きている。そして、そういう場所は人はもちろん、大型の動物も寄り付かない。オキシはどんな環境でも平気な体を持っているので、ますます理想的なのだ。

「……そういう問題なの？」

邪魔者がいないと言う理由だけで、危険地帯へ行くことをいとわないなんて考えられなかった。

一体どうしているんだと、ロゲンハイドは困惑する。

「うん、そう言う問題。邪魔ものさえいなければ、どんな場所でも楽園だよ」

オキシは即答する。

「うう、オキシシって感覚がおかしいよ。本当に無茶しなきゃいいなあ」

ロゲンハイドはそう願う。

しかし、その願いは叶うことはない。微生物のために無謀な行動に出るオキシに、日々悩まされることになるうとはロゲンハイドは思ってもいない。

31・魔物が現れた。でも、観察はする。

この世界の1日は24時間ではない。詳しく計ったわけではないが、30時間は越えているように思う。

1日が長いので夜も地球よりも長い。この世界の住人は、その長い夜に見合った睡眠をとる。つまりは、地球人よりも多くの時間をとっているのだ。

「また中途半端な時間に目がさめたな」

窓の外を見てみれば、月明かりが強く、まだ夜はあけそうにない気配が漂っていた。

1日が24時間の地球にいたせいか、いまだにこの世界の周期に馴染めていない。夜の早い段階で寝てしまうと、真夜中に目が覚めることもしばしばある。逆に深夜過ぎに眠り始めたとしても十分な睡眠がとれてしまう。

「この世界の人にしたら、僕はすごい不摂生だろうな」

そんなに眠りもせず、あんまり食べもせず生活しているのを知れば、そう思うだろう。

「まあ、日本にいた頃も、規則正しい生活をしていたとは言えないけれど……」

今日も充分に眠り、すっかり眠気もとれた。特に何をするでもなく、大気中を舞い漂う微生物たちをただ眺め、ハンモックでゆらゆらしていると、突然鐘の音が鳴り響いた。まだ眠りのそこにいる人も多い夜明け前だと言うのに、けたたましく鳴っているのだ。

「こんな時間に、なんだろう？」

耳触りに響く音に、意識が現実に戻される。

この世界に來たばかりのオキシは未体験のことで知らなかったのだが、これは魔物が近くに現れたことを呼び掛ける鐘の音である。どうやら、近くで魔物の群れが発生したらしい。

現れたのは小さな魔物だが人を襲うこともある種類ということもあり、目撃者の連絡を受けて捜索した結果、草原に陣取っている魔物たちを見つけ、付近地域は警戒体制に入っただ。

そろそろ夜が明けるので、魔物は動きも鈍くなりおとなしくなるのだが、再び夜になれば活発に活動しはじめ、今夜にも町を襲いに來る可能性もある。被害が出る前に早急に駆除しなくてはいけない。

魔物が出たので町の門は閉ざされた。魔物の完全駆除が終わるまで、よほどの理由がない限り一般市民は外に出ることができないのだ。もちろん、その中にはオキシも含まれている。

「せっかくの休みなのに、野外での観察もできないなんて」

牧場までの道も閉鎖され、仕事は休みになった。魔物がいるので草原に出ることはできないが、町の片隅で一日中思いつきり観察ができるオキシは思っていた。

しかし、広場の植えこみのあたりや、用水路に生えた苔や藻を観察しようとすれば、「こんなところで遊んでいないで、子供は部屋でおとなしくしているように」と注意され、その場を立ち去らねばならなかった。

「魔物は町中にいるわけではないのに、別にうろつくくらいいいじゃないか」

何度目かの強制的排除に出くわし、すっかり不機嫌なオキシは言う。

彼らは、オキシが駄々をこねてもぐずっても相手にせず、力づくでその場から引き離すのだ。ずいぶんと手際がいいので、こういう

面倒ごとの扱いには慣れているのだろう。彼らはまったく聞く耳を持たないので、キセノンよりも厄介な邪魔者だった。

「どさくさにまぎれて、あらぬことを企む輩もいるし、そういうのに巻き込まれたら、困るでしょ？」

ただでさえオキシはひとつけのないところへ行こうとするのだ。その現場に居合わせてしまう危険性も高くなる。

いつものように助手として召喚されていたロゲンハイドは、仕方ないよという風になぐさめる。

「そうだけど、これじゃ何もできやしないじゃないか」

町の人も、いつも以上に見回りを強化しているので、ことごとくオキシは発見されるのだ。

今日は部屋に閉じこもって観察するよりも、野外で観察したい気分なのだ。だから、素直に言うことを聞いて部屋の中でおとなしくするつもりはない。

「ち、魔物め」

オキシはそう毒づいた。

これも、すべて魔物のせいである。さすが害獣の中の害獣。非常に腹立たしい。

「いつそのこと、今日は魔物退治の様子でも見てしまおうか」

この近くに魔物がいるということは高いところに登れば見えるかもしれない。観察の邪魔をした魔物が倒される様を拝んでやるのだ。

町で一番高いのは時計塔だが、あれは登るものではない。仮に登ったとしても、あつという間に見つかってしまう。町を囲う街壁の方がいいだろう。

見上げてみれば街壁の上に、ちらほらと人がいるのがわかる。彼

から見物人の中にまぎれてしまえば目立たなくていい。
しかし、オキシは街壁に登るための階段がある場所を知らなかった。

「ロゲンは、街壁に登れるところがどこか知ってる？」

昔からこの町にいた精霊なので、それくらい知っているだろうとオキシは思ったのだ。

「基本的に壁には登っちゃいけないものなんだけれど」

何をしに行くのか、その目的を聞いてロゲンハイドはため息をつくが、魔物を見たことがないと言うオキシに、あの魔物の恐ろしい姿を見せるいい機会だと思い、その場所を教えることにした。

「オキシシは木登り大丈夫だね？」

「10年近く登ってないけれど、多分大丈夫」

ロゲンハイドは、街の人たちが街壁に登る時に利用している暗黙の場所に案内した。

「この木を登れば壁の上にいけるよ」

ロゲンハイドの言う、その木は樹木というよりも、どちらかといえば蔦植物に近い形状をしており、登るのにちょうどいい感じに壁を這っていた。

オキシはその木に手をかける。

幾人も登るためか、その木は樹皮が剥がれすべすべになっていた。絡み合う樹幹は縄梯子のように登りやすく、オキシはすぐに石畳の通路へ到達することができた。

そこにはすでに十数人の人々が集っていた。娯楽の少ない町の近くで行われる魔物退治に、人々はついつい高みの見物をしてしまうのだ。

街壁の高い場所から、いつもとは異なる高さから草原を見下ろすと、地平線より少し手前で煙が上がっているのが見えた。

「あそこかな」

遠くにあるのでそのままでは見えないので、目の能力を使って景色を拡大してその場所を見た。

大小様々の個体がいる赤褐色をした生物の集団が目映った。

「なんか妙ながいるね」

その生物は、半透明の膜で覆われた皮膚は湿っているような光沢を持ち、頭も首も胴体も同じ太さで長く伸びていて、腹の部分だけぷつくりと大きく膨らんでいる。胴体からは細長い刺のような節足が数本伸び、鉤のある爪先を見せるように前足を高く掲げ威嚇をしていた。

その姿を無理やり地球上の動物で例えるならば、ミミズと蜘蛛を掛け合わせて、両生類にしたような印象を受けた。

「あれが魔物なのか。ちょっと変わっているけれど、やっぱり動物の一種のように見えるなあ」

地球に現存するどの生物にも似ていない奇妙な姿形であるが、見た感じの印象は動物の域は脱していないように思えた。

「オキシって、目がいいね」

「さすがにあの距離だと、ぼやけて細かいところはわからないけれどね」

本来は遠くを見るための能力ではないので、像がゆがんでしまうのは仕方ないことだ。

「おいらには、ちょっと遠くて見えないなあ」

ロゲンハイドが目を凝らしても、魔物の集団は遠くにいるのでよくわからなかった。気配で世界を認識している精霊は、視力がそれほど良いわけではないのである。そこで、ロゲンハイドは望遠鏡を取り出して、覗きこんだ。

「ああ、やつぱり。あのでろでろと殿んだ体、あれはどうみても魔物だよ。気色悪いでしょ？」

ロゲンハイドは魔物の姿をとらえ、顔をしかめている。

「そうかなあ、僕はあの横腹をつついてみたいんだけど。柔らかいのかなあ」

かなりぬめぬめはしているだろうが、弾力のありそうなあの腹はカエルのように柔らかそうに見えるのだ。

「うわあ、触ってみたいの？ あれを？」

信じられないといった様子でロゲンハイドは言う。

「そういえば、みんなが気色悪いって言うものたちは、僕は割と平気なものなあ」

発酵・腐敗した液体や、病気にかかって奇妙に変形した植物、カビや変形菌など、そういう一般的には嫌悪感をいだくような性質のものに普段から親しんでいたので、感覚が麻痺しているのかもしれない。あの程度では、何も動じることはないのだ。むしろ魔物に対して気持ち悪くて可愛いという愛々しささえ感じてしまっていた。

「オキイシってやつぱり変」

「人の嗜好は色々あるんだよ。僕は多少、マイノリティ少数派だという自覚はあるけれど」

「多少、ねえ……」

相当変わっているよと、呆れながらロゲンハイドはそう思っていた。

魔物の形姿の観察はさておき、オキシはその魔物と戦っている人たちへと目を向けた。

数人の男女がそれぞれに武装し、いくつかの組に分かれ、魔物と対峙している。

その中に見覚えのある顔をオキシは見つけた。この町に来た日の夜、一緒に夕食を食べたレニンとフランシーだ。虎狒亭で見た時とは異なり、しっかりと武装し、険しい雰囲気をもっている。彼らは他の人たちと力を合わせ魔物と戦っていた。

彼らは剣はもちろん弓矢や槍を用いて、魔物との戦闘を行っている。

太陽の光に、金属製の刃がまぶしく反射する。まるで火花を散らすかのような激しさを持って、魔物の爪と武器とがぶつかり合い、その力は拮抗している。遠くにあるのに、その衝撃音が耳に届く錯覚をしてしまう。

「あ、今、何か魔物に刺さったね」

あれは魔法だろうか、彗星のように尾を引く光芒状の槍が、魔物の体を鋭く貫いたのだ。

「ああ、魔物が消えていく！ 本当に消えるんだ」

頭部や腹が急激にどろどろに溶け、塵となつて大気に消えていく。そして、外骨格の一部や肢といった残骸しかそこには残っていないかった。

その現象は、見ていて非常に不思議であつた。

「あ、すごい。今度は1発でしとめたみたいだ」

「魔物の急所にあたっただね」

魔物には核と呼ばれるものがあり、それを壊すことができれば、どんなに元気だったとしてもあつという間に塵と化してしまう。

地道に体力を削っていてもいいが、なるべく無駄な体力を使わず狩るために、魔物を狩る者たちは核を見つけ出し仕留めるようにしている。

魔物によつて核の場所や数は異なっており、手練れの者になるとその場所をよく心得ており効率よく狩りをしている。

「急所をわかっていても、狂いなく攻撃を当てることができるのはすごいよ」

魔物を屠っていく熟練の技を目の当たりにして、もはや「すごい」という純粹な感情しかわいてこない。

テレビで描かれる狩りのドキュメンタリー映像でも見たことがないような、緊迫した様子にオキシは息を飲む。

これは娯楽のために作られた番組ではないのだ。編集や決められた台本は一切ない。人対魔物の、生きるか死ぬかの殺しあいなのだ。気を抜けば死、容赦のない残酷な現実がすぐそこにあるのだ。

魔物との死闘は続いている。

魔物の群れの数は大分減ったが、群れの中の1匹、一番大きな個体がなかなかしぶとく対抗を続けている。動きの鈍くなる昼とはいえ、魔物たちが反撃しない理由にはならない。魔物も生命の危機に必死に抵抗しているのだ。

のっぺりと丸みを帯びた頭には、深く空虚に満ちた眼がじめつと輝いて、敵対している者から目を離さずにいる。傷から流れる体液に濡れた体をふるわせて、魔物は長い首を持ち上げた。同時に、大きく口を開き、何か液体を吐き出したのだ。

「あの魔物、口から何か吐いた」

その液の到達点にいた者たちは、素早く避けたり、盾を構えて防ぎ、体に触れないようにしている。

「あれに触れるとどろどろに溶けて、骨だけになっちゃうんだよ」

ロゲンハイドは身震いする。

肌に触れた場合、早急に洗い流さないと、最終的に骨とプルプルとした単なる塊になってしまうのだ。

「肉を溶かして骨が残る……あの液体はアルカリの性質があるのか？」

酸であつた場合は、皮膚に触れると表面火傷するようにただれるが、肉をどろどろに溶かしているわけではない。それに、強い酸であるならば骨も溶けてしまうだろう。

「肉を溶かす液か。魔物は、ただ単に死んだら自分の体液で溶けてなくなっているだけだったりしてね……」

動物は死ぬと自身の酵素により身体が分解が始まる。たとえば、足が早いと言われる鯖は捕った後、適切に保存しないとすぐに痛んでしまうのだ。

魔物も早さこそ尋常ではないが、それと同じような現象が起こっているもおかしくはない。特にあの魔物は肉を溶かす性質を持つあの液体を持っているのだ、そのことが何か関係しているのかもしれないと、オキシは仮説を立てる。

「溶けたからといって塵になって消えてなくなるわけじゃないよ。溶けた分のどろどろはそこに全部残るからね」

「そうか、やっぱりそう簡単な話じゃないよね」

思いつきの仮説は、あつという間に否定された。確かに、特にそういう物質を持つ生き物はそれに対してある程度の耐性も持っているはずで、いくら死後、各器官の統制が取れなくなっただからといっ

ても、あんなにいと簡単にきれいさっぱり溶けてなくなるとは思えない。

魔物の自己溶解の原因には、もっと様々な理由がありそうだ。

「魔物の消失か……悪くはないね」

この世界特有の不思議な自然現象に触れることができ、今回の魔物退治見物は、なかなか満足できるものであった。

そうこうしているうちに、最後の魔物が倒される。街壁の上で見物していた人々が歓声をあげる。

「魔物、全部退治されたみたいだね」

ロゲンハイドも、歓声に混ざって小踊りしている。

魔物はすべて倒したが、その死骸の片付け作業が残っている。それと平行して、見逃しの魔物がないか周囲を調査しなくてはならない。しかし、多くの人にとってそれは興味の対象ではなく、観客たちはひとり、またひとりと帰路につく。町人たちにとってのイベントは終わったのだ。

「おいらたちも、降りようか」

「そうだね。今日は魔物を見ることができてよかったよ」

魔物退治の血肉わき踊る興奮よりも、魔物が消えた時の感動の方が大きいオキシであったが。

そして、魔物に関するすべての作業が終わると、やっと町に平和「しんやん」が戻るのである。

31・魔物が現れた。でも、観察はする。（後書き）

魔物のイメージとしては、怪誕蟲^{ハルキゲニア}（古生代の奇妙生物）をベースにして、ムヘイシロアリ（自爆するシロアリ）を合わせたような……
そんな感じ〜

32・魔物の痕跡

魔物の脅威が去り、町の門が解放された。その時を待っていましたとばかりに町を出る影があった。それはオキシとロゲンハイドである。

「魔物が出たばかりなのに、草原に行くの？」

「うん、行く」

オキシは当たり前だと言わんばかりに、肯定の返事をする。

「そっちは、魔物のいた方角だよ」

そうなのだ。今、オキシが向かっている方角は、魔物の群れが現れ、そして退治された場所なのだ。

「今日の目的地はそこ」

町から見える場所にあるとはいえ、その場所は歩きではちよつと時間がかかる。オキシは多少急ぎ足でずんずんと草原を歩いていく。「ええ、なんでよりによって？」

ロゲンハイドはオキシに思いとどませようと試みるが、オキシはお構いなしだ。

「本当に行くの？」

ロゲンハイドは、何度目になるかわからない言葉を発する。

「もう魔物がいないのなら、なんら問題はない」

「そうなんだけれどさ」

先ほどまで魔物がいた場所である。ロゲンハイドはあまり気が進まなかった。

「行きたくないのであれば、来なくてもいいのに」

ロゲンハイドが魔物嫌いであるのは知っているので、強制はしていないつもりである。

「だって、オキシシはけっこう危なっかしいんだもの。この前だって、危険なキノコに触ろうとしてさ」

特に湿った日陰に生えているようなキノコは、触るだけで危険だと言うことは子供でも知っている。

いつの間にかそこに現れて、一晩で消えてしまうキノコは「動かない魔物」という別名を持っているほど危険な存在、それなのに見るからに危険な香りしかないキノコに何の警戒もなくオキシシは近づくのだ。

「危険なキノコがあることは知ってはいたよ」

オキシシにしてみれば、道端や公園などでよく見かける普通の茶けたキノコが生えていたので、よく見てみようと思っただけである。

日本で見かける危険なキノコは、たいてい食べた時に危険なものが多く、触って危険なものは数えるほどしかなかった。そして、ここが地球とは異なる世界でキノコ事情も異なっている可能性があることをすっかり忘れ、ついつい地球にいるときの感覚で接してしまっただけなのだ。

「今度からは、いろいろと気をつけるから大丈夫、大丈夫」

オキシシの体質上、猛毒やかぶれるような物質に触れたとしても、すぐに治るので平気なのだが、痛みや痒みといった嫌な思いをしてまで手に入れたとは思わないので、ロゲンハイドの「近づいちゃいけない」という忠告には従うことにした。

しかし、その忠告をよそに思考の中では、「素手で対応するには危険なものを安全に採取するために必要な道具を準備しておかないといけない」と、実はその時ひそかに考えていたオキシシであった。

「気をつけるって言っても……キノコもそうだけれど、なんだか認識のずれを感じるんだよなあ。だから、心配なんだよ」

こと、危険生物に関しては、まるで何も知らない子供のようなのだ。

オキシのあんまり反省していない様子に、ロゲンハイドはがつくりと肩を落とすしかなかった。

「そんな憂いた顔してないで。今日はこんなに天気が良くて、出歩くにはとてもいい日なのに」

高く澄んだ空には太陽が輝いて、果てしない草原を駈ける風も心地いい。気温も湿度も適度で晴れやかな絶好の調査日和だ。

「向かっている先が、ね……」

この心地いい天候とは正反対で、目的地はあまりすがすがしいと言える場所ではないことだけは確かだった。

草花に覆われた道なき道を、大体の方角以外は勘を頼りに歩いていく。

オキシは町の方を振り返っては、方角がずれていないか確かめた。町はずいぶん小さい。この世界に来て、こんなに遠出したのは初めてかもしれない。

地平線はどこまでも変わりばえのしない草原だ。まるで海にも見える風景である。風が吹き波打つ草原には、木々の集まった雑木の小島がまばらに浮かんでいる。風を受けて草原を帆走^{はしる}る船が存在しそうなほどに、草原は風を受けやわらかな波を作り出していた。

濃緑の草で覆われた絨毯をしばらく歩き続けていくと、くすんだ色がシミのように広がっている場所を発見した。変色したその場所は、不自然に植物たちが踏み荒らされ、焼け焦げ、枯れている。何とか原型をとどめている草花も、触れば崩れてしまいそうなほど、乾燥しおれている。風が吹くたびに葉々がすれ、カサリと干からびた音を立てる。

「ああ、とうとう来ちゃったよ。焦げているのは魔法で焼けちゃった痕だけれど、こっちの枯れているのは魔物のせいだ。仕方ないこととはいえ、やっぱりかわいそうだね」

ロゲンハイドは、死んでしまった植物たちを悼む。

「結構、枯らすんだね」

強アルカリの性質を持つであろう魔物の体液が、植物や土壤に及ぼす影響は大きいだろう。ある程度の予想はしていたことだが、ここまで植物を枯らすとなると、かなり強い毒性を持っていることがうかがえる。

「そう、だから畑なんかにこういう毒の強い魔物が出ると、農作物なんかダメになっちゃうんだ」

ひと月も経てば大地に染み込んだ物質も自然に浄化され、また以前のように植物も生えるようになるが、枯れてしまったものは元には戻らない。収穫前に現れると、実った作物たちが枯れ、被害は甚大になってしまう。

「魔物は立派な害獣なんだねえ」

オキシは気楽なことを言っている。

魔物の通った後は草木も生えないという表現が似合う。枯れた植物が小さな野道をつくり、ずっと続いている。

「魔物は向うから来たんだ。これをたどっていくと、どこへ行くんだろう？」

「どこかの森が林に続いていると思うな。魔物はたいていそういうところで生まれるから。でもあんな大きな群れは、この草原にある小さな森じゃそうそう生まれにくいから、ウエンウエンウエム地方の森から迷いこんできた可能性もあるよ。たまにそういうことがあるんだ」

危険な魔物はあまり森のくらがりから出てこないとはいえ、時々今回のようなことも起こるので、油断できないのである。

「そのウエンウエンウエム地方って、歩くとどれくらい？」

たまに話題に出てくるその名前の土地に、オキシは興味を持ちはじめていた。

「まさか、行くの？」

「いや、行かないよ。ただ、どれくらいの距離にあるのかなと、思っただけ」

「ここから一番近い休憩地点までで、休憩を取りながらで徒歩1日つてところかな。乗り物に乗っていけば、その半分ですむけれど」

「あんがい、近いところにあるんだな」

オキシは、によりと頬がゆるむ。

「やっぱり、行く気でしょ？」

オキシの笑みを見てそう確信する。

「興味はあるけれど、今すぐに行こうとは思わない」

魔物の生まれる土地という、そのような面白そうな場所に何の準備もなく飛び込むようなまねはしたくない。様々な情報を調べ、しっかりと事前調査してからでないと、得られるものも得られなくなってしまう。

「……興味はあるんだね」

「もちろん」

即答のオキシに、ロゲンハイドはもはや呆れるしかなかった。

「今日の目的地はここなんだし。今は魔物の出所をあんまり深追いはしないよ」

そう言いながら、オキシは枯れ方が一番ひどい付近の地面を探し始める。

「やっぱり、ここはまだちょっと嫌な感じが残っているよ……」

それは魔物が嫌いという心理からくる嫌悪感ではなく、環境の状態に敏感な精霊だから感じる、魔物の残滓なのだ。

「それは、むしろ好都合」

ということは、魔物の何かが残っていると言うことである。オキシは不気味に笑み、瞳にはあやしげな光が宿りはじめる。

見た目がちょっと変わった動物にしか見えないのに、なぜあのような現象が起きるのか。オキシの専門分野は微生物であるが、不可思議な生態の生物を見つけて、少し調査してみたくなったのだ。

それに何か気になるのだ。これは勘であるが魔物の生態には、『彼ら』が少なからず関わっているのではないかと、そう思うのだ。

「何か見つけられればいいんだけど」

植物は枯れ広がっているが、魔物の死骸はすっかり片づけられているように見える。大量に放出された魔物の塵に関しては風に飛ばされ、大気中に漂う数多の塵と区別がつかないだろう。今回は諦めるしかないにしても、回収し忘れた死骸の一部か何か、ほんの切れ端でもいいので見つけられれば幸いであると、オキシは思っていた。

最悪、魔物の体液が染み込んだ汚染された土壌や、枯れた植物を持って帰ってもいい。とにかく少しでも魔物に関連するものを手に入れて、魔物という生物が持つ性質の一端をこの目で確かめてみた

かったのだ。

「ここにあんまり長居しない方がいいよ。汚染された空気や大地は、体によくない影響を与えるから」

ロゲンハイドは、体調を崩す可能性を示唆する。

「僕はそんなの平気だから、心配しないで」

「もう、そんなことばかりして……いつか魔物中毒症にかかって倒れても知らないよ」

それは、おもに魔物によって汚染されたものを体内に取り込んだ時に現れる。発症してしまった場合、死にこそしないが4・5日寝込むことになるのだ。

精霊の身体は血肉の存在する生物とは異なっているので、肉体の機能に直接働きかけるような中毒にはかからない。しかし、その毒素に苦しむ人々を見てきたので、その恐ろしさは知っていた。

「大丈夫、大丈夫。僕はそんなのにはかからないから」

まるで恐れを知らぬような笑顔でオキシは語る。現に体を蝕むはずの魔物の毒素は、しっかりと無害なものに分解されていたので、オキシはこの汚染地帯にいても体調の異変は起きないのだ。

「あれはとても辛いものに……」

（1回患って苦しさを味わえば、少しはおとなしくなるだろうか）
オキシのその言葉はまぎれもない事実であることを知らない、ロゲンハイドは密かにそう思ってしまう。

「万が一それで倒れても軽い中毒症くらいなら、魔法で手当くらいは、おいらにもできるけれど」

ロゲンハイドができるのは、症状を軽減することくらいである。一流の治療師の元で診てもらうならばとにかく、一般の治療所での

魔法や薬草での処置では、すぐに全快することは少ないのが現状である。

「キノコといい、魔物といい……オキシは時々、避けられるような小さな危険に自ら飛び込むよね。おいら本当に心配だよ」

しかし、ロゲンハイドの心配が現実となり治療の魔法を使う、そんな日が来ることは決していないのだが、それを知るはずもないので呆れるしかなかった。

「何かないかなあ」

灰色に染まった草原を踏みしめて、オキシは探しまわる。色を失った草々は、踏むたびに乾いた音をたて細かく地に崩れ落ちていく。

「しつつかし、だいぶ死んでいるな」

巻き込まれ命を失ったのは植物だけではない。透明な翅を持つ細身の虫や、鮮やかな光沢の甲虫、短い毛が生えた丸い動物の死骸もいくつか見つけた。その小さな虫や小動物たちは、腹を空に向けじつと固く動かない。

環境の急激な変化に対応できなかったものたちは弱り、体力尽きたものから死を迎え、最悪の場合その場所の個体群は全滅する。そこに繁栄していたものたちがあつという間に消えてしまった。

しかし、多くの生物が死に絶えたとしても、すべてが消え去ることはないと言っている。生命は案外しぶとく生き残り、その時その場に適している別の種が台頭し、新たな生態系が形成されていくものなのだ。

それに、この程度の損害ならば生態系は汚染される前と変わらぬ姿まですぐに回復するだろう。

「なんだろう、これ」

ほとんど原型のとどめていない草の陰で、太陽に反射して光るものがあつたのだ。一見すると瓶がガラスが割れたガラス片にも見える、薄紫で半透明の小さな何かが光っていた。

「うわ。魔物の一部、見つけちゃったの？ ああ！ 危ないから、触っちゃだめだよ」

露骨に嫌そうな顔をしてロゲンハイドは念を押す。

「大丈夫、こんな時のための準備はしてきたから」

こういう、ちょっとしたものを採集するための準備は万端。キノコの時の失敗を踏まえて、素手で触れないようなものを採取する時に使えるそうな道具は、そろえてあるのだ。もちろん、この世界に専用の器具はあるわけがないので、代用品を用意したわけだが。

「これがあれば、仮に肉を溶かす液体まみれだったとしても、安全に採取できる」

オキシは得意げな顔で鞘からトングを取り出す。これは、本来ならばパンなどの食品を挟むための道具であるが、物を挟んで取るという用途は似たようなもので、これを使うことにしたのだ。

「それに保管用の容器もちやんと準備してきた」

さらにガラスの瓶を取り出した。これは仕事先でおばちゃんからいただいた物で、もともとは果実の砂糖煮が入っていた瓶である。密封できるような蓋もついており、何かと使えるそうだから取っておいたのだ。

「うへえ……やっぱり、本当に持って帰るの？ 本気？」

まだ色濃く残る魔物の気配にロゲンハイドは思わず、目を背ける。

「本気、本気。もちろん、持って帰る」

オキシは、カケラの採取に着手する。

「ううゝ気持ち悪い。そんなの持っていていっても、何も役に立たないと思うけれどなあ」

魔物の使える部位、たとえばこの魔物の場合、肉を溶かす液袋を採取することはある。肉だけを溶かす性質を持っているので、骨の加工製品などを作るときに、骨にしっかりとこびりついて取れない肉や筋をきれいに溶かすための処理に使うのだ。

けれども、そのオキシが見つけた部分は使い道のない、本当に残骸なのだ。

「世間一般における魔物の価値なんて、僕には関係のないことだよ。僕にとっては観察に値するかどうかだけが重要だ」

オキシはそう言って、魔物の残骸が入った瓶に蓋をした。

「この中に、魔物の秘密を握るものはあるのだろうか」

少し時間も経っており、見つけた量もほんの少しのため、魔物の消滅の秘密につながる手掛かりを見つけれない可能性は非常に高い。

しかし、魔物の消滅の秘密など解明できなくとも良かった。もしもそこに微生物の存在が確認できれば、普段見ているものとは異なる環境に生きる微生物の姿形を観察することができるのだ。それだけで満足が得られるのである。

「なんだかわくわくしてきた」

「うれしそうなのは何よりだけれど……でもそれ、このまま放っておくと、そのうち腐ってくるよ？」

「わかってるよ。（……むしろ、それが目的なんだけれど）でも、この魔物の死臭が部屋に染みついたらいやだし、部屋では蓋は開け

ないようにするよ」

少量とはいえ死骸であることは変わらない。性質上、腐敗が進めば独特の臭いを発するようになるだろう。

本当は皿の上に放置してどんな風になるのか、ありのままを観察したいところではあるが、人の出入りの多いあの場所で解放的に観察するには少し不都合が多い。

時々、人っ気のない風通しのいい場所で、蓋を開けて軽く換気するくらいならば問題なくできるかもしれないが、普段は密閉しておかない。

それに嫌気状態でも、何かしらの活動を見ることができると思うので、大した問題ではなかった。

「ああ、今すぐにでもこれを見たいところだけど、そろそろ戻り始めないといけない時間か」

オキシは地平線に見えはじめた大きな月を恨めしそうに見やる。

「夜遅くまで草原にいたことがばれると、うるさく言う大人たちがいるからね」

多少、皮肉めいた発言をする。そして、しっかりと標本を^{サンプル}鞆へとしまつと、大満足のオキシは町へと帰路につくのだった。

32・魔物の痕跡（後書き）

触って危険！ カエントケ

棒状・手の平状に生えて炎のような形をした、赤いキノコ。

汁液に触れると、「皮膚がく、皮膚がく（涙）」な危険なキノコ。

日本でもけっこう普通に生えているので、見かけても素手で触っちゃだめですよ

33・好奇心が満たされれば、それだけでいい。(1)

「たまには、外に行こうよ」

ロゲンハイドはオキシを外へ誘っている。

「いつてらっしゃい」

しかし、オキシは観察に忙しいので、外に行く気など毛頭なかった。顔も上げずに断る返答をする。

「……そうじゃなくて」

ロゲンハイドは頬をかいて、机の前から動こうとしないオキシをどうしたものかと考えた

基本的に食を必要としないオキシは他の人よりも食費分だけ、金銭的に余裕がしやすい。観察したいものも増え、しばらく休み取っても宿代を問題なく支払える程度に蓄えがあるので、数日の休日をとることにした。

休日を手に入れたオキシは部屋に閉じこもり、有意義な時間を満喫していた。

採取してきた例の魔物の破片は、もうだいぶどろりとした液体になっっている。

魔物は毒素を大地に振りまき、動植物を死に至らしめる。顕微の世界でも同じように死の気配が漂う地となっていた。しかしそれでも、その中で活発な動きを見せる微生物はいたのである。

「これは魔物の死骸を好む子たちなのかなあ」

死骸を分解し、しかも魔物の吐く液体に耐性を持つであろう生物が存在しているのだ。思惑通り微生物の存在を確認でき、オキシの

目の色が変わった。熱を帯びたような揚々とした表情を見せ始める。微生物はどこにでもいて、この星の環境循環の一端を担っている。肉を溶かすほどの毒おも分解する微生物があり、魔物に汚染された大地は再生することができる。世界には無駄なものなどないのである。

「すばらしい」

オキシは何か新しい動きがあるたびに、賛嘆の声をあげていた。いつまでも飽きることなく、瓶の中の世界を眺めているのである。

休日をとって以来、ずっとこうなのだ。観察にばかり忙しいと、しばらく部屋からでない日が続いていた。草原にいるときのように、夜だの何だの言わなくてもすむが、こんなにも部屋に閉じこもっているのは、体に悪いだろう。

「たまには、外に出ないと」

本当に部屋からでないので、心配して様子を見に来たロゲンハイドはそう提案する。

「外にいたらそろそろ帰ろう、部屋にいたらいたで今度は外に出ようって、わけがわからないよ」

「オキシの方が、わけがわからないよ」

極端すぎる生活はもちろんのこと、ロゲンハイドにとって気味が悪くて仕方がない魔物の残骸の一部を、オキシは夢中になって見ているのだ。おかしいことこの上ない。

「それに虎狼亭の人もきつと心配しているよ」

基本的に部屋の住人には干渉しないとはいえ、部屋にこもって何日も姿を見せないというのは、病気が何かで寝込んでいるのではないかと思われる可能性もある。

「少しは出歩かないと、誰かが心配して様子を見に来て……オキシの邪魔しに来るかもよ？」

オキシの扱いにすっかり慣れてきたロゲンハイドは、そう諭す。

「もう、わかったよ……」

ロゲンハイドがどうこう言っている事自体が邪魔であつたが、ロゲンハイドの言うことも一理ある。確かにそれはそれで今よりも面倒くさいことになりそうだと思い、オキシはのっそりと立ち上がる。

「外に出る……そうだな、たまには青空の下で野生の微生物の生態観察するのも、いいかもね」

部屋の中で飼っているだけではわからない、自然の状態でこそ見ることが出来る発見も多いのだ。

「……外に出てもやることは変わらないんだね」

ロゲンハイドは、あきれるしかなかった。

33・好奇心が満たされれば、それだけでいい。(1)(後書き)

ちよつとした報告

『その雛は、鳥時々獣』の章と『魔物は害獣です』の章の間に、『それはカビであり、そして酵母菌です』の章を割り込みの投稿しました。(11月 11日に)

興味があれば、ぜひ。

読まなくとも、特に問題はありません。

(今、オキシの手元にはパンの酵母菌がいると言っただけ押さえておけば)

34・好奇心が満たされれば、それだけでいい。(2)

「ああ、外出ついでに麦の類も買ってきたほうがいいな」

オキシは小麦粉の入った袋を手にとり、重さを確かめた。袋はいぶん軽くなっていた。そろそろ酵母菌のための餌を補充する必要がある。

「……あのカビの粉。パンが膨らむ魔法の粉として、市場で売ったり、どこかの店に売り込んだりすればいいのに」

オキシのやっていることは、まったく魔力の感じない現象ではあったが、もたらず結果は摩訶不思議でまるで魔法を生み出しているようなのだ。

材料はとにかく、保存がきくことやパン生地を寝かせる時間が短くて済むあの粉は画期的だった。

「あれはあんまり本腰を入れて作ってないし、商売なんて面倒なだけだよ……」

ただ単に培養がしかなかったのであって、乾燥酵母菌はその副産物に過ぎない。それに今の自分の技術力では、できあがる量も質もばらばらで、何よりまとまった量を作るのが面倒くさかった。

「……商い事に無関心なそういうところで、ますます魔術師っぽいなだね」

「真理を求める者なんて、得てしてそういう傾向をもっていると思う」

効率のいい大量生産や生活に役立つような技術の研究をしている者もいるだろうが、そう言う者たちでさえ、その技術を売り込むという行為はむしろ他人に任せ、己は研究に没頭したい者が多いのではないかと、オキシは思っている。

魔法の研究を行っている魔術師という人種も、科学者と同じような性質を持ってもおかしくはないだろう。研究や探求と名のつくものを行うものにとって、時間はいくらあっても充分ということはないのだから。

「それにパンをふっくらと膨らますだけだったら、ベーキングパウダーを使った方が楽なことを、僕は知っているよ」

ベーキングパウダーは、パンやケーキスポンジを膨らませるために考えられた、重曹を主成分とした粉である。その主成分である重曹は、それが含まれている鉱石を精製することによって手に入れることができるが、確か食塩水から科学的に合成する方法もあったはずだ。

「ベーキングパウダー？」

「……どう説明しようかな。塩水から作り出せるから……塩の親戚、とはちよつと違うけれど、親戚のようなものを使うんだよ」

食塩水の電気分解だ、二酸化炭素との反応だ、どうのこうのと科学的な反応について説明するのは正直しんどい。塩化ナトリウムしよくえんと炭酸水素ナトリウムじゅうすう、どちらもナトリウムがつくのだから親戚でいいやと、かなり乱暴ではあるがそう説明する。

「おいら、カビなんかよりも、そっちのベーキングパウダーってほうがいい」

食塩から作り出せるものならば、危険なカビよりも抵抗がない。ロゲンハイドはそう思った。

「でも、残念ながら僕はベーキングパウダーなんて代物には興味はないんだ。僕は微生物がいないと嫌だからね。頼むならばパンが大好きなどこかのだれかに頼めばいいよ。数年も研究すれば、きっといい具合のベーキングパウダーが作れるよ」

オキシの目的は、パンを楽にふっくら膨らませることではない。

今は特に必要性を感じないので、作り出す気など起きないのだ。

「オキシが作る気がないなら、そんなものがあるって言わなきゃいいのに」

少し期待してしまったロゲンハイドは、肩をすくめる。

「人間は、知っていることを披露したくなる生き物なんだよ」
実行するのが難しくとも、言うだけならば簡単なのだから。

「……。それにしてもだよ、もったいないなあ。色々なこと知っているのに」

「知ってはいても、それだけじゃ実践で何の役に立たないことも多いよ？」

たとえ知識があっても、使うことのない知識は時が経つうちに簡略化されていき、どこかうろ覚えになることが多い。ある時に突然必要になっても、実際にやってみると思い通りにいかないこともあるのだ。

たとえば味噌や納豆、酒やチーズといった発酵食品の作り方は知識としては知っているが、今この場で作るとすると妙なカビをはやして失敗する自信がオキシにはあった。

それに、この世界の菌同士の係わり合いは地球とも異なるだろう。豆から味噌や納豆のあの形状、あの風味に醗酵してくれる微生物を手探りで探すのは途方もない時間がかかるに違いない。わざわざ、そんな面倒なことをしてまで作りたいとは思わなかった。

「豆から味噌作ろうと思って、別の菌が発生して納豆っぽいものができたらなんだか悲しいもの……それはそれで面白そうだけれど」

地球にいた時と同じような感覚で作ったとしても、その方法で発生する微生物が地球と同じ働きをするとは限らないのだ。味噌も納豆も原料が同じなだけに、そのようなことがまったく起こらないとは言いきれない。

この世界にも同じような醗酵食品があるのならばとにかく、一からそれらを作るとなると大変な作業である。

しかも知識通りに材料を放り込んで世話をすれば、それだけで店で買うような安定したおいしさのものが毎回できるとは限らないことも、素人の手作りによくあることだ。

「みそ？ なつとー？」

「豆から作る僕の故郷のちよつと変わった食べ物かな。見た目はあれだけれど、わりとおいしいものだよ。この町の市場では見かけないし、この辺では作られていないかもしれないけれどね」

もしかしたら、この世界にもどこかの地方にはそういうものが存在しているのかもしれないが、少なくともオキシは見たことがなかった。

（そういえば、この世界には何かを醗酵させたおもしろい食品はあるのだろうか）

市場でどんな醗酵食品が売られているのか探してみるだけでも楽しいかもしれないと、オキシは思う。

「故郷の味ってやつ？ 恋しいの？」

めずらしくオキシの口から食べ物の話題が出てきた。しかも、故郷の食べ物についてである。そのことに、ロゲンハイドは少し意外性を感じていた。

「でも、なければないで別にかまわないよ。恋しいのは味というよりも、それに住んでいる子たちかな」

正直、味噌や納豆はどうでもいい。オキシの興味は常に微生物のみなのだ。

「そ、そうなの？」

なんだかまともな食べ物ではないような印象をひしひしと感ずるロゲンハイドだった。

「それに食事なんて活動できる程度に栄養補給できれば充分だったし」

オキシは、むしろ食事なんて面倒くさいと思うような人間だった。もしも「これ1本で1日の栄養が取れる！」的な食べ物があれば、毎日それだけ摂取して生活できるだろう。

そんな性格であつたので、この世界に来たときに手に入れた食べ物なくとも良いという体質は非常に気に入っていた。

「……そんな義務的な食事で楽しい？」

「食事に娯楽的なことは求めてないし」

「そんな食べることに消極的だから、子供みたいで小さいままなんだよ」

「そんなこと言われてもな……前にも言った通り、子供みたいな外見なのは種族として仕方のないことなんだよ」

成長期はとうの昔に終わっている。どう頑張ってもこれ以上の成長など見込めないのだ。

そもその話、地球人類はこの世界の人々とは、間違いなく別の進化をしている。地球人類は幼形成熟ネオテニの方向で進化してきた結果、生まれてきたようなものだ。食べている、食べていないにかかわらず、成体になっても幼い形質が強く残っているのは仕方ないことなのである。

「本当なのかな？」

大人になっても子供のような外見の種族は、オキシがそう言っているだけなので、ロゲンハイドはやや懐疑的であつた。

「こればかりは証明のしようもないし、信じる信じないはまかせるしかないな」

地球産の人間は、この世界にはオキシしか存在しない。異世界に迷いこんだたった一人しかない種について述べるのは、なかなか難しい。

「……まっ、そんなことはどうでもいいでしょ。さ、そろそろ出ようか」

不都合な話題は早めに切り上げる。

外出の準備も終えて、オキシとロゲンハイドは部屋から出た。

廊下は人っ気もなく、静まり返っていた。真昼から部屋に閉じこもっているのは、引きこもり体質のオキシか、長旅の疲れを癒している旅の者くらいだ。

オキシはところどころきしむ木の廊下を踏みしめ、虎狛亭の外へ出る。

空はまぶしく、大気は緑に薫っている。

それはしばらくぶりの外の空気だった。

35・竜の息吹は、ため息です。(1)

風が揺らす草はさざめく波になり、空を漂う雲とともに地平線の向うへと流れていく。ざわざわと揺れる地平線から月が顔をのぞかせはじめている。昼下がりの気配もだいぶ深まっている。

キセノンは依頼された魔物退治も終えて、フェルミの町へ向かっていた。帰りは特に急ぎではないので、節約と体力作りを兼ねて徒歩でいく。何事もなく順調だった。

町へ続く道を歩いていると、見覚えのある人影が街壁の前にいるのが目についた。白い服が緑色の草原に映えている。

「あれは、まさか」

キセノンは嫌な予感がして、それに近づいた。

「おまえは、またか。いつからここにいるんだ？」

ため息とともに疑問が口から漏れた。

オキシは壁で作られた日影のなんだか湿っぽい場所をじっと見ていた。常に日が当たらない場所なのだろう、壁には苔が青々と生えている。その苔をオキシは興味深そうに眺めていた。

「……いつからって、まださっき来たばかり」

少し遅れていつか聞いたような言葉が返ってくる。

そのオキシの発言はあてにならないことは百も承知、かなり泥だらけなので、おそらく朝からいるに違いない。

ずっとこの壁の苔を見ていたのだろうか。オキシの手元にある本には、苔の詳細な絵やいつもの不気味な造形のもの描かれていた。単なる粒の集まりのように見える緑色の苔も、じっくり観察してみるとやはり植物の一種であることが分かる。キセノンは細やかな世界に関心した。しかし相変わらず、不気味なものは何を表しているのか、わからなかった。

「……ああ、キセノンだったのか。そういえば、虎狛亭に部屋借りた」

オキシは、声の主がキセノンということに気がつき、近況を伝えた。

「そうか。夜になる前には戻るんだぞ」

「うん、わかってる。ロゲンハイドもいるし、大丈夫だよ。だから、邪魔しないで」

本当に分かっているのだろうか。少し心配になるが、しかし、これ以上の邪魔をしてしまうのもアレだ。今は精霊もいるだろうからあまり無茶はしないだろうと思い、キセノンは町へ帰還することにした。

36・竜の息吹は、ため息です。(2)

キセノンは、旅の疲れを癒すために、いつものように虎狒亭で休むことにした。ひと眠りののち頃よい時間になったので、飯を食べるために1階の食堂に降りた。

「オキシが帰ってきたか分かるか？」

まだ太陽が隠れ始めたばかりで、まだ明るい時間だ。まだ帰っていない可能性が高いが、キセノンはタンタルに問う。

「オキシなら、まだ帰ってないよ」

「そうか。やはりまだか」

もう少し暮れたら、帰ってくるだろうか。キセノンはそう思ったが、しかし、そのキセノンの予想は次のタンタルの言葉で裏切られた。

「……というよりも、宵の口にはまず帰ってこないと言った方がいいかな」

「どういうことだ？」

なんとなく予想はしながらも、キセノンは尋ねた。

「一応、夜中あたりにふらっと帰ってきているみたいんだけど、早朝すぐに出て行っちゃうんだよね。もう3日くらいそんな感じだよ。まったく、そんな遅くまでどこで遊んでいるのかなあ？」

「なにやっているんだ、あいつは」

「本当に、そう思うよ。ぶっそうなんだから、暗くなる前には帰ってきて欲しいんだけど……夜になっても遊びたい年ごろだとは思うけどさ、変な人たちとつるんでなきゃいいなあ」

タンタルはかなり心配しているようだ。

「……心当たりはある。もうすぐ夜だ、連れ戻してくる」

変な奴らとはつるんでいないことはわかっているが、夜に町の外にいるのは、あまりほめられるようなことではない。

「どこにいるかわかるなんて、さすがキセノンだね」

「最初にここに連れてきた時も、同じような場所にいたからな」

キセノンは遠くを見るように目を細める。朝から晩までひとりで草原にいて、一体何が楽しいのだろうか。キセノンはそう疑問に思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7609p/>

微生物を愛でたいのだよ！

2011年12月17日19時10分発行